

学際白書2016 : 学際研究・教育コーディネータによる取組

学際研究・教育コーディネータ委員会

<https://hdl.handle.net/2324/1650602>

出版情報 : 学際白書. 2016, pp. 1-, 2016-02-19. 九州大学大学院人間環境学府
バージョン :
権利関係 :



学際白書 2016

学際研究・教育コーディネータによる取組



2016年2月

はじめに

学際研究・教育コーディネータ委員会

九州大学大学院人間環境学府は、高度な専門性と既存の学問分野を超えた学際性を身につけた人材を育成するべく、2000年に設置されました。そして、学際的な教育研究のいっそうの充実をはかるため、2009年度から学際研究・教育コーディネータ委員会が設置されました。その最初期の取組については『学際白書 2009』にまとめられています。本報告書『学際白書 2016』は『学際白書 2009』に掲載された取組の成果をいわば基礎として、その上に行われていった2014年度までの実践の記録を主としてまとめております。

最初に「多分野連携プログラム」についての資料を掲載しております。これはある一つの領域横断的テーマについて異なる専攻の複数の教員が集まって研究会や講演会などのイベントを開催し、知見を持ち寄り意見交換を行うというものです。

次に「マンスリー学際サロン」についての資料を掲載しております。これは当初は原則として月に一度、今(2015)年度は2カ月に一度、教員が自らの研究について紹介を行い、それについてざっくばらんな意見交換を行うという催しです。

その次に「ファカルティ・カップリング」についての資料を掲載しております。これは2014年度に行われた比較的新しい取組で、異なる専門分野の教員が二人一組でペアとなり、合同でゼミや授業を行うというものです。

最後に、学府全体の行事として三度行われたシンポジウムの資料を掲載しております。

これらの資料が、人間環境学府の学際的な取組に対する理解を深めるのみならず、今後の学際性の発展にも寄与することができればと考え、ここに刊行する次第です。

多分野連携プログラムおよびシンポジウムにおいては、学府外の多くの方々のご参加ご尽力を賜りました。この場を借りて心よりお礼申し上げます。

目次

1. 多分野連携プログラム

1-1 人間環境学府多分野連携プログラムコーディネートに向けての研究内容アンケートおよびインタビュー

1-1-1 2010年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

1-1-2 2011年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

1-2 各年度多分野連携プログラム

1-2-1 2010年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

1-2-2 2011年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

1-2-3 2012年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

1-2-4 2013年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51

1-2-5 2014年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70

2. マンスリー学際サロン

2-1 実施概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79

2-2 議事録（コーディネータ会議記事録から抜粋）・・・・・・・・・・ 81

2-3 発表概要

2-3-1 2010年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83

2-3-2 2011年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90

2-3-3 2012年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 98

2-3-4 2013年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 106

2-3-5 2014年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 114

3. ファカルティ・カップリング 2014

3-1 実施概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 123

3-2 実施報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 125

4. シンポジウム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 153

1. 多分野連携プログラム

1-1. 多分野連携プログラムコーディネートに向けての研究内容アンケートおよびインタビュー

1-1-1. 2010年度

アンケート用紙

研究内容アンケート：多分野連携プログラムのコーディネートに向けて

学際教育・研究コーディネータ

このワードファイルに直接記入される場合、回答欄の行数は自由に増やしていただいて結構です。

送付先&問い合わせ先：coordinator@hes.kyushu-u.ac.jp 回答締切：2010年11月24日(水)

専攻・コース _____ 氏名 _____

| | |
|----------|---|
| ① | いまだどんな研究に取り組んでいるのか教えてください(特に学際的研究である必要はありません)。素人にもわかりやすいようにくわしく教えていただけると助かります。複数あげていただいてもかまいません。 回答： |
| ② | なぜ①の研究に取り組むことになったのでしょうか。きっかけ、いきさつ、エピソードなど教えてください。 回答： |
| ③ | 今後の研究の予定、あるいはこんな研究がしたいという希望について、さしさわりのない範囲で教えてください(学際的发展についても触れていただけると幸いです)。 回答： |
| ④ | 今年度「多分野連携プログラム」として五つのテーマで複数の授業の連携が行われています。この取組に対してのご意見、ご感想をお聞かせください。 回答： |

アンケート回答①～③まとめ

*都市共生デザイン専攻：アーバンデザイン学コース

| 氏名 | ①現在の研究 | ②現在の研究のきっかけ | ③今後の予定・希望 |
|------|-------------|--|---|
| 南 博文 | 都市の精神分析／原風景 | 自身の原風景としてのヒロシマの歴史を考えたこと、ニューヨークのワールドトレードセンター崩壊後の都市復興に関する活動に関与したこと、研究室のとなりが精神分析の北山先生の部屋であったこと、などの錯綜。 | 今後も都市の精神分析に取り組んでいきたい。その一環として夢のフィールドワークを行なっているが、その中間まとめをやりたい。それがフィールドワークと呼べるのか、どのような方法であるか、見なされるのか、心理学、人類学、言語学などが交差する領域であると思います（言語化されることによって夢はこの世界に公的に現前する）。 |

*都市共生デザイン専攻：都市災害管理学コース

| 氏名 | ①現在の研究 | ②現在の研究のきっかけ | ③今後の予定・希望 |
|----|--------|-------------|-----------|
|----|--------|-------------|-----------|

*人間共生システム専攻：臨床心理学指導・研究コース

| 氏名 | ①現在の研究 | ②現在の研究のきっかけ | ③今後の予定・希望 |
|----|--------|-------------|-----------|
|----|--------|-------------|-----------|

*人間共生システム専攻：共生社会学コース

| 氏名 | ①現在の研究 | ②現在の研究のきっかけ | ③今後の予定・希望 |
|------|---|---|---|
| 鈴木 謙 | 別々の回帰分析の回帰係数をどのように比較できるかについてです。 | 別々の回帰分析で回帰係数の比較をすることについて、学生からの質問を受けたのがきっかけです。 | 計量的手法で、これまで余り疑問視されずに扱われてきたものを、再吟味したいと思います。 |
| 飯嶋秀治 | 共生社会システム論の構築に取り組んでいます。これには、4つの要素が必要と考えていて、①フィールドワーク、②世界システム論、③危機介入の技法習得、④共生理念の位置づけとしています。具体的なフィールドとしては、栃木・茨城・宮崎の農村社会（1992年～）、福岡の都市社会（1997年～）、オーストラリア先住民アラント民族（1999年～）、児童養護施設（2005年～）、水俣市茂道（2009年～）を行き来しつつ、各フィールドでの苦しみ（共苦）を、世界システム論的な背景の下で理解し、その共苦への介入をしつつ、共生化の過程を学問にする、という作業です。 | 1999年に人間環境学研究科に進学した際、私の指導教官も含め、まだ誰もこの学問の名前しか共有しておらず、実態がないという現状がありました。年上の人間は自らのディシプリンを引きずっていますから、自らそれを引き受けた次第です。なので博士論文の主題がこれになりました。 | 研究については上述の4つのフィールドをそれぞれ作品にしてゆきながら、共生社会システム論という学問の輪郭をはっきりさせてゆけば良いと考えております。すでに児童養護施設のフィールドワークでは、臨床心理家（田嶋誠一）と発達心理学者（當眞千賀子）、共生社会システム論者（私）の間で、学際的な研究を（目的としてではなく）方法として進めております。また水俣でのフィールドワークでも、学外の社会学者、宗教学者、文化人類学者との学際実践・研究をしています。なので、数年後くらいには全体像が明らかになるでしょう また、私の主な研究領域ではありませんが、将来的にはシリーズ人間環境学と人間環境学コロキウムの担当者を通年化した方がいいと思っていますし、フィールド人間環境学というものを創ってみたいと考えております。 |

| | | | |
|-------------|---|--|--|
| <p>浜本 満</p> | <p>東アフリカの諸社会における妖術信仰について研究しています。東アフリカの社会の多くでは、人に知られることなく他人に危害を及ぼす(殺すことさえできる)特別な手段があると信じられています。そうした手段がここで言う「妖術」であり、妖術を使うことのできる者が、自分たちの近隣や身内のなかに何食わぬ顔をして潜んでいるというのです。人がちょっと成功したり幸運に恵まれたりすると、たちまち妖術使いたちの嫉妬を買い、こうした邪悪な不可視の隣人による攻撃によってすべてを失ったり、命を落としたりすることになる危険があると。実際、人々の身にふりかかる多くの災難や、病気、事故が、こうした嫉妬深い隣人によって引き起こされたものとされます。妖術使いの正体を突き止めたり、妖術に掛けられないよう備えたり、妖術に掛けられた場合にそれに対抗したり、妖術使いを告発したりするさまざまな実践が、こうした観念を取り巻いています。数年に一度は地域をあげての妖術使い狩り運動が盛り上がり、多くの人々が共同体の敵である妖術使いとして告発され、追放されています。こうしたことの全体を「妖術信仰」として研究しています。</p> <p>極度に浮世離れた研究テーマに見えるかもしれませんが、私の問いは、このような観念がなぜ社会の多くの人にとっての信念たりえているのか、こうした信念がどのようにして人々の社会的実践の中で支えられ再生産されていっているのか、を明らかにすることです。こうした信念を支える社会的、歴史的、政治的、経済的要因を明らかにしつつ、実践の内部に埋め込まれた信念の「真理化」(これ</p> | <p>私は1982年より30年近くケニア海岸部(といっても海岸にそって走る山脈の内陸側のサバンナ地帯ですが)のドゥルマの人々の社会でフィールドワークを行ってきました。この地方の人々は経済的・政治的なさまざまな問題をかかえています。しかし人々にとって最も厄介な問題は何かと問うと、疑いもなくそれは妖術使いの問題でした。私はこの間3回、地域ぐるみの妖術使い狩り運動に遭遇しており、多くの人(その中には私の友人も含まれていました)がこの運動の中で妖術使いとして告発され、リンチまがいの仕打ちを受け、地域から追放されてしまうのを目にしました。けっして邪悪な人々が行っているのではなく、善良な、正義を愛する一般のドゥルマの隣人(私の友人や知人の多くもそこに含まれています)たちがこうしたことをしているのです。教育もかなり普及し、都市での出稼ぎの経験も多く、近代化しつつあるドゥルマの社会でなぜこのような信念が多くの人々によって共有され、活力を保ち続けているのかは、私がドゥルマの人々を理解する上でどうしても避けて通れない大きな問題群の一つとなってきました。</p> <p>妖術信仰は、近代化したアフリカ社会の多く(南アフリカ、ザンビア、タンザニア、ケニア、カメルーン、ナイジェリア等)で1990年代から再び盛り上がり、大きな社会問題となっています。そうした多くのアフリカ社会がかかえる共通の問題の解明にも通じるのではないかと考えています。</p> | <p>妖術信仰についてはそろそろまとめの段階にはいりつつあります。その後は、私のフィールドワークのメインテーマである「憑依霊信仰」、自己と他者とトランスという問題に取り組みたいと考えています。妖術研究以上に、心理学・生理学側の知見が必要となる領域ではないかと思っています。</p> |
|-------------|---|--|--|

| | | | |
|------|---|---|---|
| | <p>は William James の用語ですが) のプロセスを明らかにするために、膨大な資料と取り組んでいます。</p> <p>さらに一般化すると、この研究は、特定の社会空間において特定の信念が広がるための条件とそれを支えているプロセスは何か、という問いにつながっています。妖術は、我々にとってはとても信じることが出来そうにない特異な観念であるがゆえに、こうした一般的な問題を考える上で、実に適しているのです。</p> | | |
| 高野和良 | <p>高齢化する地域社会（主として過疎地域）の現状分析と、そうした状況のなかで必要とされる社会システムのあり方を、高齢者の社会参加活動に注目して調査研究しています。</p> | <p>人口減少、家族の極小化が進行する日本社会のひとつの縮図が、過疎地域に認められると考えたからです。</p> | <p>人口減少社会における高齢期の生活モデルについて総合的に検討してみたいと思っています。</p> |

*行動システム専攻：心理学コース

| 氏名 | ①現在の研究 | ②現在の研究のきっかけ | ③今後の予定・希望 |
|------|--|--|--|
| 山口裕幸 | <p>a) 優れたチームワークを育むチーム・マネジメント方略の研究</p> <p>b) 集団間葛藤の緩和・解決方略の研究</p> | <p>a) 職場での事故やミスが、チーム内のコミュニケーション不全やチームワーク不足に原因があって、対応に苦慮しているという現場の声を聞いたこと</p> <p>b) 国家間の紛争解決が遅々として進まないばかりか、エスカレートすることが多いのに危惧を覚えて</p> | <p>a) チームワークや集団規範など、集団全体の特性は目に見えにくく、取り扱いが難しいので、なんとか可視化して科学的に的確なチーム・マネジメントを考えたい</p> <p>b) どうすれば紛争の相手を「赦す」気持ちになれるのか、検討したい。</p> |
| 光藤宏行 | <p>人間の視覚、見ることでどのような仕組みによって実現されているのかを明らかにしたいと思っています。視覚に関わる錯覚現象を見つけて、それを実験室環境で再現できるかを調べて、どのような仕組みがうまく働かないので錯視が生じるのかを考察しています。</p> | <p>(a) 人間の主観的な感覚が曖昧で、意外と頼りないことに高校生の時に気がつき、(b) 大学生になって、それが心理学で研究されていることを知って、それに本気で取り組みたいと思ったという経緯です。</p> | <p>実験室以外の場面で、人間のもつ種々の視覚能力を簡便にかつ正確に測ることができれば、さまざまな場面で役に立つような気がしています。</p> |
| 中村知靖 | <p>1. 表情判断を用いたコミュニケーション能力テストの開発</p> <p>2. コミュニケーション行動チェックリストを用いた乳幼児向けコミュニケーション能力テストの開発と発達の変化をとらえるための縦断調査</p> <p>3. 学童期の言語能力テスト</p> | <p>全て科研のプロジェクトです。1についてはテスト開発で利用される項目反応理論の応用研究として院生さんが行った研究をベースにしています。2については項目反応理論を利用したテスト開発の経験があるということなので分担者として参加しています。2と4については、潜在成長モデ</p> | <p>現在のプロジェクトで手一杯なのですが、学習関わる面以外で心理学が初等中等教育の現場に貢献できるような研究を進めることができたらと思っています。</p> |

| | | | |
|------|---|---|--|
| | トの開発 4. アイデンティティの縦断データを用いた量的質的研究の融合 | ルを用いて縦断データを解析するために分担者として参加しています。2については上司から誘われました。3と4の代表者の方は院生時代に助手だった方で共同研究をしないかと声をかけられました。 | |
| 三浦佳世 | 下記に関する実験心理学からの実証研究 1) 時間知覚・時間印象・時間表現・速度感 (motion line やオノマトペも含めて) 2) 広がり感・奥行き感 (特に、写真・庭園などにおける対象の配置や画枠の影響) 3) よさ (特に庭石配置、煉瓦配置、ランダムドットによる Pattern goodness) 4) 錯視 (分割線錯視、明るさの錯視) 5) リアリティ (写真のミニチュア効果、リアリティ表現、表現媒体の影響) 6) 視線 (注意と気づき、感情の読み取り、文化と表現、視聴覚相互作用) なお、知覚や認知における「恒常性」にも関心をもっています。 | 上の各テーマに対応しています。 1) 科研費取得ならびに以前からの研究テーマ 2) 企業 (清水建設、富士フィルム) との共同研究ならびに以前からの関心 3) COE での課題の展開 4) 以前からの関心 5) 個人的関心、COE での課題の展開 6) 科研での共同研究 | 1) 知覚と印象 (感性) あるいは知覚と表現 (制作) から多層的に接近できるテーマ。あるいは生理学と文化など多方面から検討できるテーマ。内容としては、時間や空間、よさ、質感 (視覚的触覚感)、特に、無自覚性、関係性、文脈性などの関わるテーマ。(基礎的・抽象的で申し訳ありません。多様な学際的展開は可能かと思っています。) 2) リアリティの知覚・認知的基盤、あるいは表現と文化・時代などの関わり 3) ことの恒常性 (たとえば、お祭りに出くわした場合、それをはじめて見ても、お祭りと分かるような、あるいは、フェルメールやシンディ・シャーマンの作品のように、この景色どこかで見たという既視感のようなことの知覚・認知的基盤) |

*行動システム専攻：健康行動学コース

| 氏名 | ①現在の研究 | ②現在の研究のきっかけ | ③今後の予定・希望 |
|------|--|---|---|
| 林 直亨 | 運動生理学, 応用生理学 運動, 食事, ストレスなどに対して人がどのような応答を示すのか, そのメカニズムとともに解明する. 主に自律神経, 循環系の応答 (例えば, 心拍数, 血圧, 発汗, 唾液, 内臓・皮膚・脳の血流) を焦点に研究している. | 自律神経や循環系は非常に早い応答を示し, これらの応答がないと人の行動がうまくいかないことが多いことから. | 生理的な応答を利用して, ストレスの評価をしたり, 評価指標を作るような研究は学際研究としては行いやすいと思う (一方メカニズムの研究は学際というのは難しいと感じる). |
| 杉山佳生 | 体育授業やスポーツを通して, 心理社会的スキル (コミュニケーションスキルやストレス対処スキルなど) を高める取組み | これまでに関心を持って勉強してきた, スポーツ心理学, 社会心理学, 環境心理学, ヒューマンエソロジーなどの領域で共通して取り上げられているトピックに, 「コミュニケーション」と「スキル」があり, いつの間にか, これらが結びついている現在のテーマに取り組むようになっていた. | 心理社会的スキルは, 学習をするものですが, 「知らぬ間に学習していた」となるためには, どのような場を設定すればよいかという, 生態学的な視点でのアプローチ (あるいは, ダイナミカル・システムズ・アプローチ) の可能性を考えています. |

| | | | |
|------|--|---|----------------------|
| 大柿哲朗 | 1) 運動中および運動後の代謝の応答 2) ネパールにおける健康科学的研究 | 1) については、代謝の生理学的解明に興味があったから 2) については、工業先進国で問題になっている生活習慣病の要因を検討するためには、生活習慣病が認められない国や地域での情報が必要であったから | 1) 狩猟採集民や遊牧民を含めた調査研究 |
|------|--|---|----------------------|

*教育システム専攻：現代教育実践システムコース

| 氏名 | ①現在の研究 | ②現在の研究のきっかけ | ③今後の予定・希望 |
|------|---|---|--|
| 元兼正浩 | スクールリーダーの研修プログラム開発 | 国際的にも教育改革のキー・パーソンとして校長らスクールリーダーに関心が注がれています。もともと九州大学教育学部は校長等の資格免許状を付与するために学部創設されたわけですので、その設立趣旨に立ち返り、社会還元できるような研究をすすめたいと願っています。 | スクールリーダーの研修プログラムのデジタルコンテンツを開発し、受講生はipadを使用したり、ネットで配信したりするようなことを模索したいと思います。コンテンツ内容においては多分野の協力が不可欠ですし、ツール開発においても連携やご支援をいただけるとありがたいです。 |
| 田上 哲 | 授業研究・授業分析・教育実践研究 教師と子ども、子ども同士、どのように関わり合い、一人ひとりが何をどのように学んでいるか、観察や記録を通して追究している 授業記録・教育実践記録の研究 保存されている記録の意味・意義をとくに記録の当事者の語りから追究している | 大学院に進学してから、小中の学校現場にお邪魔するようになった。最初に就職したのが保育者養成の短大で、幼稚園や保育所の現場にもかかわるようになった。 記録については、私の恩師の恩師が2万数千点にのぼる授業記録を収集しているが、それが十分に活用されていないため | 糸島市教育委員会と九州大学教育学部の連携・協力に関わって、拠点校・拠点地域が設定されたこともあり、そこを主なフィールドとして、教員、院生や学生の研究と現場（子ども）のニーズをマッチングさせた連携の取り組みを推進したい。教育学部だけでなく、人環の先生方や院生で興味がある方にも是非参加いただきたい。 |

*教育システム専攻：総合人間形成システムコース

| 氏名 | ①現在の研究 | ②現在の研究のきっかけ | ③今後の予定・希望 |
|-------|---|---|---|
| 竹熊尚夫 | 多民族社会における民族教育（学校）の組織化と教育の国際化 関心のある国は：日本、マレーシア、中国、イギリス、オーストラリア、フィジーなどです。 | マレーシア、日本などの華僑、華人学校、インド人学校、朝鮮学校等を調べ始めたことから。広く、世界のエスニックマイノリティの学校教育と共存・共生のための教育を考え始めた。 | 留学生などの学際的研究課題への学際的支援や学生（修士・博士）の学際研究を支援してもらえれば良いことだと思います。 人環内でのダブルディグリー （メジャーを教育学でマイナーを環境工学とか文化人類学とか学際分野に） |
| 野々村淑子 | 養育する家族、ひいては産み育てる女性という認識体系が、いつどのような経緯で注目され、自然化されることとなったのかを問い続けています。子どもの養育をめぐる社会関係の変容、その変容にまつわる social policy、そして学知（医学や心理学など） | ある人間の一生について家族、とりわけて乳幼児期の母親との関係が何よりも重視されるということに疑問を抱いたからです。そしてそのような認識を支える母役割を中心とした女性像が、男女の生き方（特に女性の教育や人生）を左右し | 紆余曲折しながら今の研究対象にたどりついたので、子どもを含めた家族への救済や福祉の制度や実践、その理念などに関する歴史学的、社会学的考察とともに、医学、心理学における家族、親子関係、母子関係についての理論形成の推移（学説 |

| | | | |
|--|--|--|--------------------------------|
| | がそれにどのように関与したのか。今現在は16世紀ロンドンに設立された英国初の孤児院(後に私立進学校となる)の歴史にはまって、そのあたりの経緯を見出そうとしているところです。 | ているばかりではなく、現代社会のなかで一定の機能を果たしていることに対して、その歴史的構造を明らかにしなければならない(先に進めない)と考えました。 | 史)などに研究の幅を広げつつ、問うていきたいと考えています。 |
|--|--|--|--------------------------------|

*教育システム専攻：国際社会開発プログラム

| 氏名 | ①現在の研究 | ②現在の研究のきっかけ | ③今後の予定・希望 |
|------|---|-------------|---|
| 谷口秀子 | ・文化(特に児童文学・マンガ・アニメ・文学作品など)におけるジェンダーの研究 ・おとぎ話、feminist fairy tales、ジェンダーの視点から語り直されたおとぎ話などの研究 ・異性装の研究 | (回答なし) | ・児童文学・マンガ・アニメなどが子どもに与える影響(ジェンダーの視点から)の研究 ・児童文学・マンガ・アニメなどに反映された社会状況およびそれらの持つメッセージ性についての研究 |

*空間システム専攻：建築計画学コース

| 氏名 | ①現在の研究 | ②現在の研究のきっかけ | ③今後の予定・希望 |
|------|---|--|---|
| 堀 賀貴 | 古代ローマの都市、建築に関する研究。レーザー実測技術を応用して、建築だけではなく土木、美術など多様な都市遺跡全体のドキュメンテーションに取り組んでいます。 | 博士後期課程在学中より、イタリア・ボンペイの調査、発掘に参加し、2008年からフィールドをオスティアに移して調査を開始しました。 | 古代ローマの都市史、美術史、建築史の再構築(とくに、ヨーロッパのキリスト教的な価値観に左右されない歴史観) |

*空間システム専攻：建築環境学コース

| 氏名 | ①現在の研究 | ②現在の研究のきっかけ | ③今後の予定・希望 |
|------|--|--|---|
| 藤本一壽 | (a) 沿道に立地する建物群による道路交通騒音減衰量の予測法 (b) ポリエステル不織布とそのリサイクル材による建築用吸音構造の開発 (c) コンサートホールのステージ音響に関する研究 | (a) 10年来の研究、当分野では最先端の研究 (b) 地元の企業との共同開発研究 (c) 興味があったから | 上記の研究を継続しながら、今後やってみようと考えているのは「住宅のリスニングルームの音響設計法」です。 |

*空間システム専攻：建築構造学コース

| 氏名 | ①現在の研究 | ②現在の研究のきっかけ | ③今後の予定・希望 |
|------|--|--|---|
| 河野昭彦 | ・鉄とコンクリートの組み合わせで耐震性を高めた様々な合成構造の開発。 ・木と鉄を組み合わせ、人との親和性を保ちながら災害に強い建物の開発。 ・建物が強い地震を受けるときの揺れ方のシミュレーション解析法の開発。 ・オイルダンパーを使用して建物の揺れを抑える制振技術の開発。 | ・日本は地震国であり高層建物を建設するのは困難と考えられていましたが、1968年に霞が関ビル(36階建て)が建設されました。高校生の私は感動し、1970年に建築学科に入学しました。地震の性質と建物の性質をしっかりと掴めば、地震国でも多様な建物が建てられるというのが私の信念で、①の研究はこの信念に基づいています。 | ・技術開発や異種材料の適切な組み合わせで、地震が来ても、台風が来ても、安心して暮らせる建物は実現に向かっていますが、これをさらに進める研究が希望です。 ・また、安心はもちろんとし、木と鉄の組み合わせによって、住む人にやさしく、自然のサイクルとも調和する建物を研究したいと考えています。 |

*実践臨床心理学専攻

| 氏名 | ①現在の研究 | ②現在の研究のきっかけ | ③今後の予定・希望 |
|----|--------|-------------|-----------|
| | | | |

| | | | |
|-------|---|--|---|
| 増田健太郎 | 教員のストレスです。特に初任者のストレスについて研究をしています。職務・職場・職業適応の観点から分析しています。心理教育プログラムの開発、心理内容の研修会のプログラムの開発とその効果についての研究をしています。 | 教師の仕事がストレスが多いことはよく知られていますが、特に初任者の先生は授業スキル等も身につけておらず、早期退職者が増えています。初任者の先生の個別のカウンセリングやグループアプローチを行ってみると、そこから現在の学校状況がよく見えてきます。教師のストレスを低減させる方策を考えることが、よりよい教育状況を考える一つの視点になる思い、研究を始めました。 | 教員のストレスとキャリア発達の連関性を調査し、臨床心理学・教育心理学・教育経営学・社会心理学など学際的な視点に立ったコンサルテーションシステムの構築を目指した研究をしたいと考えています。 |
| 松崎佳子 | ①里親・里子への心理的ケアと実親支援 ②社会的養護、児童虐待問題 | 長年児童相談所において児童福祉問題に携わってきました。現在週に1人以上虐待死が起こっている児童虐待の問題は大きな課題です。危機介入の問題もありますが、その後の子どものケア、親への支援システムはさらに遅れています。虐待を起こさずにすむ社会的なしくみづくりが必要と考えています。 | 子ども・親にとって住みやすい環境づくり、地域ネットワークなど |

アンケート回答④まとめ

| |
|---|
| 2つのプログラムに関与していますが、均等にコミットすることはむずかしく、1つの方に重点をあてることになりました。もう一方のメンバーに対してすまないという気持ちがあり、同一の人間の参加は1つにした方が良くかとも思います。この活動によって、人環内の人のやりとりが活発になり、教授会での比較的「若手」の方の発言の機会も多くなり、とてもいい試みだと思えます。 |
| 面白い試みとは思いますが、日々の雑務に追われていて、正直なところ余り中身を良く知るまでに至っていません。申しわけありません。 |
| 結構なことです。理念を掲げながらそれをやってこなかった皆さんには頑張ってほしいと思います。それが学生たちとの契約だったのですから。 |
| 私は「人間諸科学における進化心理学の位置」という取組に参加しています。これまでに4回の研究会が開催され、実に刺激的でした。ただ授業と連携させるという点に関しては、学生の興味と合わない場合もあるなど問題も感じました。 |
| 多分野連携プログラムとして実施した研究会などから得られた知見を、通常の講義のなかでも取り上げるよう心がけましたが、一体的に展開することの面白さと難しさを感じました。 |
| 中心になって懸命に推進の中核を担ってくださっている先生方・学生さんに感謝申し上げます。各自、核となるディシプリンがある中で、多くの方々が関心を持つテーマを異なる専門性からアプローチすることが学際ですから、多少、ぎこちないのかもしれませんが、現在の取り組みを根気よく続けることが基盤作りになるし、大事だという気がしています。 |
| 研究寄りの取組に、比較的積極的に関与しているつもりです。学生を巻き込んで、教育にも積極的に役立てるためにはどのような仕組みが必要なのかを考えています。 |
| 5つとも魅力あるテーマだと思っています。プログラムに参加した学生さんにプログラム認定書みたいなものが修了時に渡されるとよいのではないかと考えています。 |
| テーマはいずれも現代社会の要求している実践的あるいは基盤的研究であり、人間環境学研究院の姿勢を示すものとしてふさわしいと思います。学生の意見は直接、聞いていませんが、授業を通してさまざまな分野に接し、異なる視点や方法論を学ぶことができるのがメリットだと思います。人環コロキウムなどの企画・運営の際にも役立つのではな |

| |
|--|
| <p>いでしょうか？</p> <p>なお、人間環境学研究院の HP では「特色ある教育・研究」から、「多分野連携プログラム」を知ることが出来ますが、授業連携なので、シラバスのところに何らかの表示があってもよいのかもしれませんが。</p> |
| <p>好ましいことだと思う。ただ、健康行動学は筑紫にあるので、学生が取るのは難しいだろう。集中講義などがあればよいかと思う（すでにあるのかもしれませんが、私は知らないので書いています）。</p> <p>アンケート以外の意見として、以下を追記します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プログラムに参加したところ、共同研究や科研の申請につながるなど、研究上のメリットがあり、参加して得ることが多々あった。他の先生の研究内容をじかに聞くチャンスは得がたいものであった。 |
| <p>現在、そのうちの1つ（異分野交流・学際教育研究の促進される大学キャンパス）に関わっていますが、大変自分の勉強になっています。十分な貢献をしているかどうかについては、何とも言えませんが。</p> |
| <p>コーディネイトが大変だと思います。ご苦労様です。</p> |
| <p>本日、『人環の叡智で学校の危機を管理する』の報告書が完成しました。後日、皆様にもお届けします。今回のプログラムのお陰で他部門の先生方とお話する機会もできましたし、また異なる角度からの複眼的な授業を展開することもできました。記して感謝申し上げます。この成果を次なるプロジェクトに繋げることができればと祈念しております。</p> |
| <p>細かい内容までは十分承知していないが、それぞれ重要な取り組みだと思う。</p> |
| <p>実はまだよくわかっていません</p> |
| <p>自らの研究分野、テーマの意義についての反省や再確認という意味でも、学際的な議論は意味があったのではないかと思います。はじめは緩やかな議論の場、ネットワーク形成から、ゆくゆくはスペシフィックな研究についての議論の場へと繋げていくことができなければと願ってはいますが。大学院の授業としては、大学院生も研究者の1人としてそれぞれの研究を広い視野でみていく練習になったのではないのでしょうか。（プログラム運営自体については、細かな点については改善すべき点もあったかもしれません）</p> |
| <p>「人間諸科学における『進化心理学』の位置」に参加させていただいておりますが、私にとっては大変刺激的で、自分の研究にも新しい視点が加わったような気がします。</p> |
| <p>研究ではないが、伊都キャンパスの新しい校舎について、早急に企画案（学際的見地から）の作成に着手すべきです。学際研究にはまず、人的な交流からだと思いますし、より優秀な学生を集めるためにも、箱である建築はとても重要な要素だと思います。建築の教員、学生とその他の教員、学生が一体となって、夢のある人間環境学棟の設計案を提案すべきだと思います。</p> |
| <p>特にありません</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> ・大変面白い取り組みであり、是非成功させていただきたいと考えています。 ・それぞれ成果が上がっていると思いますが、個人的には、「人環の叡智で学校の危機を管理する」では、六本松キャンパス跡地で既設校舎の実在実験がどういうインパクトを与えるか楽しみにしています。 |
| <p>元兼先生のプログラムに参加しましたが、いろいろな分野の専門家が、教育を見ていくプログラムは、非常に魅力的であり、受講者にとっても満足度が高いものではないかと思われま。コーディネーターの先生方は大変かと思いますが、過度の負担にならないよう進めてもらえたらと思います。</p> |

学際研究・教育コーディネータによるインタビュー調査報告（2010年度実施）

※調査日時順

20110126 飯嶋秀治

概要

2011年01月13日、10:00-10:45 鈴木讓研究室にて、有馬隆文准教授と聞き取りを行った。事前に鈴木教授が EEP アンケートに答えていた内容は以下の通り。

| 氏名 | 現在の研究 | 現在の研究のきっかけ | 今後の予定・希望 |
|------|----------------------------|--|---|
| 鈴木 讓 | 別々の回帰係数をどのように比較できるかについてです。 | 別々の回帰係数の比較をすることについて、学生からの質問を受けたのがきっかけです。 | 計量的手法で、これまで余り疑問視されずに扱われてきたものを、再吟味したいとおもっています。 |

聞き取り

(1) まず鈴木先生も有馬先生も EEP には深く関与してこなかったもので、今年の現状がどのようなものであるのかを飯嶋が説明することに時間を費やすことになった。

(2) 鈴木先生は自身がアンケートで提出したものは「研究」についてだが、EEP であれば「授業」(教育)の話がメインになるだろうので、研究内容のアンケートが、EEP のコーディネータに寄与するかどうかを気にされていた。「授業」で言うと、前期「社会調査論」は人間環境学府の科目だが、ロー・スクールと絡めて授業を編んでいるので、(多分野連携用への)融通が利かない、とのこと(ちなみに人環の学生は1~2人、ロー・スクールの学生は25~6人)。後期は「計量社会学」(演習)で、具体的な分析手法(回帰分析と分散分析の話)を教えている。今回「②現在の研究のきっかけ」の質問は、この後期にでたとのこと(後半は人環の学生のみ)。

(3) まず「①現在の研究」の「回帰分析」は「研究」でやっていることで、「授業」ではやっていない、とのこと。鈴木先生自身は変動係数を使えば比較できるのではないかと考えており、また分散分析と回帰係数の対応も本に書いてないと思って行列計算をやっているという。例えば、「二元配置分散分析で、繰り返しがあって、ベクトル間に相関があって、で、交互作用がないときだけ今ちょっと計算できない」とのこと。

「②現在の研究のきっかけ」では、1~2年前の方法論の授業の中で、ある学生が、1つの回帰分析の中の回帰係数が比較できるが、別々の回帰分析の中の回帰係数は比較できないということになっている。しかしやりようはありそうだし、できないならできないで、なぜできないのか、は分かっているないので、やり始めた。研究はこればかりやっている訳ではなく、断続的にやっているので、「『何年やっている』とは言えない」とのこと。

「③今後の予定・希望」研究成果は西日本社会学会(5月)や日本社会学会(秋)で発表している。

多分野連携の可能性

(1) 有馬先生は、この話を聞きながら、①研究であれば、学際研究で資金を取りに行けば面白いのではないかと、という話が建築部門で出ているとのことであった。また、②都市・建築部門でも回帰分析を使い、分布の相関性を指摘するが、なぜそう言えるのかという話は考えずにやっているところがあるので、そういう話をしてくれるのは素晴らしいとのことであった。③都市・建築部門では趙先生が近い分野の先生とのこと。

(2) 鈴木先生自身に依れば、これが分かると、①分散分析と回帰分析を見たときに違いがパッと分かること。それは、②心理学は分散分析、社会学はどちらかといえば回帰分析の傾きの方が問題になっていてその違いがよく分かる、とか(大雑把に言えば、心理は相関係数の方に興味があるが、社会学はその傾きに興味がある)。ちなみに、計算や分析につ

いては、具体例に基づいたものではなく、計算問題の方法論に習熟させる目的なので、単純化された問題しか扱わないとのこと。例えば以下のような問題。数学を知ってないといけないのと、フィールドの現象から立ち上がるような話題ではない、とのこと。もしなにかと連携するなら後期の方がしやすいとのこと。あるいはシリーズの1回出張も OK とのこと(1回のダイジェストも可能だが、数学などの前提を共有していることが必要とのこと)。

4人の学生 A1, A2, A3, A4それぞれが、3つの会社 B1, B2, B3 に二日間聞き取り調査に行き、一日に聞き取りをした件数をまとめたところ下表のようになったとする。

| | B1 | B2 | B3 |
|----|----|----|----|
| A1 | 8 | 9 | 10 |
| | 10 | 9 | 9 |
| A2 | 4 | 7 | 5 |
| | 6 | 10 | 2 |
| A3 | 4 | 9 | 7 |
| | 5 | 10 | 8 |
| A4 | 12 | 9 | 10 |
| | 10 | 13 | 11 |

要因 A が 4つの水準、要因 B が 3つの水準を持つと考え、繰り返しのある二元配置分散分析を行うとする。回帰分析においてダミー変数を用いる場合には、要因 A に関しては A4 を、要因 B に関しては B3 をレファレンスカテゴリーとする。この設定のもとで、以下の間に答えよ。

1. 要因 A のみを用いた一元配置分散分析と、対応する線型回帰分析を行え。
(以下、8問あったが割愛)

インタビュー対象 中村知靖先生 (行動システム専攻)

日時 2011年1月19日(水) 13:00-13:30

場所 心理学研究室 3007号室

コーディネータ 清家・光藤

中村先生のアンケート回答をもとに、その内容の詳細について伺い、意見交換を行った。アンケート回答は以下の通りである。その下にコーディネータによる質問と中村先生の回答を示す。

アンケート回答

1. 表情判断を用いたコミュニケーション能力テストの開発
2. コミュニケーション行動チェックリストを用いた乳幼児向けコミュニケーション能力

テストの開発と発達的变化をとらえるための縦断調査

3. 学童期の言語能力テストの開発

4. アイデンティティの縦断データを用いた量的質的研究の融合

全て科研のプロジェクトです。1についてはテスト開発で利用される項目反応理論の応用研究として院生さんが行った研究をベースにしています。2については項目反応理論を利用したテスト開発の経験があると言うことで分担者として参加しています。2と4については、潜在成長モデルを用いて縦断データを解析するために分担者として参加しています。2については上司から誘われました。3と4の代表者の方は院生時代に助手だった方で共同研究をしないかと声をかけられました。

現在のプロジェクトで手一杯なのですが、学習に関わる面以外で心理学が初等中等教育の現場に貢献できるような研究を進めることができると考えています。

質問と回答の要約

1. 潜在成長モデルとは同一標本からの時系列データを解析する手法でしょうか？

そうです。発達心理学の研究で近年使われる方法です。例えば特定の人のかの成績を、数ヶ月おきに測定して、曲線や直線を当てはめてその性質を調べます。

2. 研究スタイルのこだわりがあれば、教えてください。

統計学を色々な分野に利用することです。

3. 先生は統計モデル自体の研究にもご関心をお持ちなのでしょうか？

持っていますが、具体的なプロジェクトに取り組んでいると、数学的なことにじっくりと取り組む時間を作るのが難しいです。

4. 学習面以外というのは、児童にとっての学習以外という面でしょうか？それとも教育制度内での学習以外（例えば課外活動・校舎・教員のサポートなど）を指すのでしょうか？他のキーワード等があれば教えてください。

それぞれの児童自身が持つ能力などを調べる研究という意味です。学校現場は、「どうしたら効果的に学習を行うことができるか」という教授法の研究を歓迎します。しかし、小学生ぐらいの児童のもつ認知的な能力はどの程度なのか、その個人差はどの程度なのかは実はあまり解明されていません。現場では、教授法以外の研究協力について積極的に取り組んでもらえる学校は多くないという実情はありますが、調べてみたい事柄です。後は質的研究と量的研究を組み合わせる研究にも興味があります。

以上

お話： 河野先生

(インタビュー担当者：小山、浜本)

日時： 13:30-14:15, Jan. 20, 2011

場所： 研究院長室 (貝塚キャンパス)

インタビューの梗概

現在の研究テーマの一つにしておられる「木と鉄を組み合わせ、人との親和性を保ちながら災害に強い建物の開発」を中心にお話をうかがいました。

日本鉄鋼連盟は重点課題として（１）鉄骨とコンクリートの複合構造、（２）木と鉄の複合構造、の二つをあげており、その第二のものに対応しているそうです。

木と鉄の組み合わせを開発することのメリットの一つは、木をたくさん使うことによって、現在荒廃しつつある日本の森林の再生がはかれるという、政府が提唱しているグリーンイノベーションに貢献するという社会的メリットがあげられます。

木を住宅に利用することのメリットとしては、心の安らぎ、あたたかさといったメンタルなものも含まれますが、この問題は、(小山先生によると) マウスによる実験はあるものの、まだきちんとは研究されてはいないということです。

一般住宅のような二階建までの構造だと、木造で問題はないのですが、三階建以上になると耐震性の点から木だけの構造はきびしいそうです。木は継ぎ目が難しく、また曲がってくるという欠点を持っています。この木造のもつ欠点を鉄で補うことができるのではないかと期待されています。

国交省の総合プロジェクトで、木と鉄とコンクリートの組み合わせを考える「木質複合構造の技術開発」プロジェクトがすでに行われています。河野先生は、また日本鉄鋼連盟やJSCAと九大のジョイントプロジェクトにかかわってこられました。3月には岡山理科大学で木と鉄との組み合わせについてのシンポジウムがあり、それにも参加なさるそうです。

木と鉄の組み合わせの実例として詳しいお話をお聞かせいただいたのは、鉄材の周りを木で覆うという方法です。木は燃えるというイメージがありますが、ある程度の厚さがあると熱伝導率が低いので中まではなかなか燃えにくいという性質があるので、むしろ耐火性の観点で木を使用することにメリットがあるのだそうです。一方、鉄材は耐震性はあるのですが、熱によってすぐにやわらかくなってしまいうという欠点があります。鉄材を5センチ程度の厚さの木で囲むと、熱伝導率が低い木が鉄材の耐火被覆となり、耐震性と耐火性をあわせもつ構造材料になるのだそうです。実際この構造材に火をつけて圧力をかけても、もちこたえているという映像もお見せいただきました。

このようにきわめて有望な研究領域なのですが、残念なことに、木造建築を専門としている人々と、鉄・コンクリート系の専門家のあいだでのコミュニケーションは不足しており、また両方で考え方も違うために、十分な協働が得られていないそうです。

感想

その他にもいろいろ興味深いお話をお伺いできたのですが、木と鉄の組み合わせの問題は、単に建築学上の新しい試みであるというにとどまらず、日本の森林再生や林業・地方経済の問題、さらには建築物の材質とそ中で生を営む人間にとっての各建築材料のもつ影響や意味の問題など、多くの研究領域につながる問題であると感じました。社会学や地域経済学（農業経済等）、心理学などとのコラボレーションが可能な領域との印象を受けました。最後のお話は、同じ建築学の分野内部でも異なるテーマの研究者同士の協働は自然発生的には確立しないという点で、考えさせられました。異なる研究者同士のコミュニケーションを媒介し、実り多い研究協働を実現するためには、両分野に通じたコーディネータのような存在がやはり不可欠なのかもしれません。

(文責：浜本 満)

お話： 大柿先生

(インタビュー担当者：山本、浜本)

日時： 10:05-10:55, Jan. 21, 2011

場所： 健康科学センター（筑紫キャンパス）

インタビューの梗概

大柿先生は、現在二つの研究課題に取り組んでおられます。(1) 運動中および運動後の代謝の応答は、学生時代から取り組んでこられた人間の体が運動にどのように反応するのかの研究、および(2) ネパールにおける健康科学的な研究です。今回のインタビューでは主としてネパールでのご研究についてお話をおうかがいしました。ネパールの研究は1981年から着手されており、生活習慣病の問題をきっかけにネパールへ関心をお持ちになられたそうです。生活習慣病は工業先進国特有の病気です。問題解決には対症療法では十分ではない。そうしたことから生活習慣病が起こる前の社会に注目しようとお考えになったそうです。

狩猟採集民のあいだでは高血圧がないことが知られていました。では農耕民ではどうだろうと。当時は、血圧は加齢とともに上昇するのが日本では常識とされており、収縮血圧が年齢プラス90という値が日本の常識だったそうです。ネパールでは調査した800名ほどのうちで、高血圧のこの基準にあう人はわずか2名しかおらず、たしかに高血圧が稀であることが示されました。高血圧だけでなく、肥満も糖尿病もいなかったそうです。栄養失調などは見られたそうですが、栄養失調でも自分の体重かそれ以上のものを平気で運んでいるのを見て驚かれたとのこと。

高血圧に関しては、食塩感受性などの遺伝的差によるものではないこともわかっており、違いは、食事、運動、ストレス、家族とともに暮らす生活様式などによるものだろうということです。この関係で、ネパールの山地の人々の生活習慣についての興味深いお話をいろいろ伺いすることができました。煮込んだお茶にバターと塩を加える「塩茶」というのがあり、たいへんしょっぱい飲み物ですが、人々にとっては貴重な栄養源だそうです。高血圧の原因は食塩、動物性脂肪などと言われてはいるが、不足してもよくない。多要因、つまり一つではなく多くの要因が複雑に絡み合っているのであり、同じ食品でも、ある社会では良くない結果につながるかもしれないし、別の社会ではそうではないかもしれない、生活全般の中で見ていかねばならないということに気づかれたそうです。

基本的にはヒトはまだまだ狩猟採集民の体をしており、当時の食事、運動、家族とのつきあいなどが体にインプットされている。それは1万年程度では変わらないので、むしろ今の社会のほうがよくないのだろうとおっしゃいます。

ネパールは農耕民で、高度によって低地では米、中間で麦、高地ではジャガイモという具合に、どうしても単一の食物に偏るのは仕方がない。それでも動物性脂肪が少なく、生活習慣病も少ない。続いて、ネパールの食生活、水牛と牛の役割の違いなどについて、いろいろ興味深い話をお聞きしました。(インタビューの一人の専門(文化人類学)と重なる領域ですので、ついその方面の話題に深入りしてしまいました。)

生活習慣病との関係では先生は、専門の関係から運動との関係に注目しておられ、現地の人々に歩数計をつけてもらって、運動量を調べておられます。日常生活での活動がそのまま十分な運動量となっており、一日1万歩から2万歩は歩いているとのこと。6箇所、別の場所の定点で計測しておられ、同じネパールでも場所によってはかなりの違いがあるそうです。48の部族がありその違いもある。都市部では糖尿病、肥満、高血圧なども増えてきているとのこと。

子供でいうと、山地の子供は平均して一日2万歩であるのに対して、カトマンズの子供たちの場合、寄宿舎生活していたり、あるいは通学はすべて送迎バスでということもあり、一日2000歩(先生はこの数字についてはまだ十分に信頼できるものではないとおっしゃっています)などという数字も出ているとのこと。

こうした地域差だけでなく、この30年での変化にも注目なさっています。食事、運動量、ストレス、すべての点で変化があったそうで、日本が30年で経験したことを10年でやっているような変化だとおっしゃいます。都市部に限らず、山地でも近年高血圧が見られるようになってきているとのこと。

感想

そのほか、ネパールの人々の暮らしや、都市の食生活などについて興味深い話をいっぱいお聞きすることができ、楽しい時間でした。

浜本（文化人類学）は自身の研究関心からも、先生がお話になった社会変化の話にとりわけ興味を感じました。社会変化を、食生活、生活習慣病、運動量などの観点から見るという視点は、目から鱗が落ちるような気がしました。先生もおっしゃっていましたが、社会学、人類学などとの共同調査チームができれば、とても面白い研究ができるという思いを強くもちました。私の調査地のアフリカ東海岸部にも、先生に一度ごいっしょにいて、運動学、栄養学などの見地から調査していただきたいと感じました。

（文責：浜本 満）

報告者：佐々木玲仁

対象者：松崎佳子教授（実践臨床心理学専攻）

調査日時：2011年1月21日

研究内容アンケート結果

①現在の研究

1. 里親・里子への心理的ケアと実親支援
2. 社会的養護、児童虐待問題

②現在の研究のきっかけ

長年児童相談所において児童福祉問題に携わってきました。現在週に1人以上虐待死が起こっている児童虐待の問題は大きな課題です。危機介入の問題もありますが、その後の子どものケア、親への支援システムはさらに遅れています。虐待を起こさずにすむ社会的なしくみづくりが必要と考えています。

③今後の予定・希望

子ども・親にとって住みやすい環境づくり、地域ネットワークなど

インタビューの主な内容

- ・児童相談所勤務時に児童虐待問題と直面。従来の「福祉問題」の枠には収まらないがやはり「福祉問題」でもある、という対処困難な問題である。
- ・これまでの福祉問題は、福祉の文脈の中でのみ扱われる傾向が強く、一般社会とは切り話されてきたという傾向がある。これを、特殊な問題としてでなく、子ども一般の問題あるいは子育て支援の延長上の問題として扱い社会化していく必要があると感じている。
- ・国連のガイドラインでは、虐待児童でも基本的には実親が育てるべきであり、それが不可能である場合は里親等の家庭的なケアができる状況に置くのが望ましいとされているが、現在の日本においては9割が施設入所となり、家庭的ケアを受けられる子どもは1割に止まっている。この状況を変化させる必要があると考えている。各校区に1家庭でも里親がいると、保護児童はそれまでの生活を大きく変えることなく一時保護を受けることができる。
- ・虐待児童は愛着に問題を抱えているため、里親にも相当の理解・知識・訓練が必要である。また、里親、里子ともに心理的ケアを行う必要があり、そのためのシステム作りが急務である。
- ・これらの問題について先進的なオーストリア、ベトナムなどの状況についての視察を行ってきた。
- ・今後の展開として

総合的な地域支援のできるセンターを作る

里親の抱える困難についての実態を把握する

事後のケアの問題から予防へとシフトしていく
等を考えている。

報告者より

具体的なフィールドを持っておられ、実践的な活動を行っている。内容は限定されるが、基礎研究が実践者のそれまで気づかなかった可能性を発見するという形のコラボレーションが有効だと考えられる。報告者としては人類学との相性が良いように感じた。

報告者：佐々木玲仁

対象者：三浦佳世教授（行動システム専攻）

調査日時：2011年1月24日

研究内容アンケート結果

①現在の研究

下記に関する実験心理学からの実証研究

- 1) 時間知覚・時間印象・時間表現・速度感 (motion line やオノマトペも含めて)
- 2) 広がり感・奥行き感 (特に、写真・庭園などにおける対象の配置や画枠の影響)
- 3) よさ (特に庭石配置、煉瓦配置、ランダムドットによる Pattern goodness)
- 4) 錯視 (分割線錯視、明るさの錯視)
- 5) リアリティ (写真のミニチュア効果、リアリティ表現、表現媒体の影響)
- 6) 視線 (注意と気づき、感情の読み取り、文化と表現、視聴覚相互作用)

なお、知覚や認知における「恒常性」にも関心をもっています。

②現在の研究のきっかけ

上の各テーマに対応しています。

- 1) 科研費取得ならびに以前からの研究テーマ
- 2) 企業 (清水建設、富士フィルム) との共同研究ならびに以前からの関心
- 3) COE での課題の展開
- 4) 以前からの関心
- 5) 個人的関心、COE での課題の展開
- 6) 科研での共同研究

③今後の予定・希望

1) 知覚と印象 (感性) あるいは知覚と表現 (制作) から多層的に接近できるテーマ。あるいは生理学と文化など多方面から検討できるテーマ。内容としては、時間や空間、よさ、質感 (視覚的触覚感)、特に、無自覚性、関係性、文脈性などの関わるテーマ。(基礎的・抽象的で申し訳ありません。多様な学際的展開は可能かと思えます。)

2) リアリティの知覚・認知的基盤、あるいは表現と文化・時代などの関わり

3) ことの恒常性 (たとえば、お祭りに出くわした場合、それを始めて見ても、お祭りと分かるような、あるいは、フェルメールやシンディ・シャーマンの作品のように、この景色どこかで見たという既視感のようなことの知覚・認知的基盤)

インタビューの主な内容

・心理学を専攻したのは、現象にじかに触れて研究できること、もともとは理系にも関心があったことから

・最近では、哲学等の文系の分野との連携の可能性を模索している。基礎研究を行っているので、例えばものづくりなどの応用とは別の、より自由度の高い研究にも関心がある。

・現在は、「こと」の恒常性 (内容はアンケートの回答参照) について、行動を理解する上での基礎になるのではないかということに関心を抱いている。知覚から文化に至るまで幅広い分野との連携が可能だと考えられる。その反面、具体的に方法を考えていくとなると

非常に困難があると考えている。

・「リアリティ」（本物らしさ...報告者注）についても同様で、様々なレベルでの連携により新しいアイデアが生まれることを期待している。

報告者より

既に様々な学際的研究を行っており、今後についても連携に意欲を持っておられるとのこと。基礎研究ということで、さまざまな応用分野、実践分野との連携には相性が良いと思われる。しかし、アイデアを基礎研究の具体的な方法のレベルに落とすのはそれほど簡単ではないため、連携を行うにはまずテーマを限らないインフォーマルな情報交換が特に重要だと考えられる。

お話： 竹熊先生

（インタビュー担当者：野々村、小山）

09:30-10:15, Jan. 25, 2011

現在研究テーマの一つにしておられる「多民族社会における教育の国際化、マイノリティ教育」を中心にお話をおうかがいしました。広範にわたりお話しいただき、それらは相互に関連しているものと思われませんが、文責者の理解力と表現力の問題で箇条書きとさせていただきます。

現在の研究について

・研究のフィールドの一つであるマレーシアは、多くの先住民を含むマレー系、中華系、インド系などにより構成される多民族社会であり、それぞれが独自に言語と文化を有している。居住地も緩やかにではあるが分かれていることが多い。教育に関しては、初等教育段階ではマレー語による国民教育制度が敷かれ、それ以外に民族毎の母語小学校を有し、中学校からは同じ国民学校で学ぶことになる。以後、高等学校、大学、企業へと進むごとに民族間の壁は低くなっていくが、なくなるわけではない。なお企業採用時には、マレー系をある割合で採用することが企業に義務づけられている。

・いずれの学校でもマレーシア語と英語が必修になっており、民族によってはさらに多くの言語を学ぶことになる。

・このような多民族社会において、教育をどのように行い国際的な人材を育てていくのか、それにより多民族の融合をどのように図っていくのかに関心を持っている。一方で、それぞれの文化を社会的に強制することにより単一化・画一化してはならないと考えている。

・日本もある意味では多民族国家であり、マレーシアの状況は、将来日本を始め多民族社会における教育の制度化などへフィードバックできると考えている。

学際の可能性について

・教室空間や家の間取り、そのなかでの教育関係や家族関係、それを成り立たせている風土はそれぞれが関連している。また、ナショナルリズムとも関連もある。そういった意味で、学校や教室、住まいの構造や配置などにも興味がある。

・他民族国家における多言語状況、それを支えるコミュニティ、居住地域への視点は、学校もふくめたまちづくりにも関連する。

・現在、環境教育について興味を持っている学生がいる。学生指導の場面で学際的な協力は得られないか。そのためのマッチングがあるといい。

感想

多民族の融合と多分野の連携は、共通点が多いように思いました。それぞれの独自の文化（分野）をしっかりと持つことが大事であること、強制的なシャッフルは逆効果となりう

ること、など。マンスリーサロンを始め、草の根的な交流から勧めていくのも大事と感じました。

(文責：小山智幸)

お話： 田上先生

(インタビュー担当者：光藤、野々村)

14:00-14:30, Jan. 25, 2011

修論からのテーマである授業研究、授業分析についてのお話しとともに、現在糸島市教育委員会と教育学部との間で進みつつある連携・協力事業についての人環内での学際的連携への期待を語られた。

1. ご自身の研究について

授業分析は戦後の社会科の創設者の一人である重松鷹泰が、教育においては一人ひとりの教師の主体性が重要であるとして、行政や海外からも含めて既存の理論に振り回される、教育実践、教育研究を教師たちのものにするという思想のもとに創始したものである。

授業分析の基礎的開発的研究を行っている。まず、1950年代末より蓄積されてきた2万数千点におよぶ貴重な授業記録が保存されており、それらの記録の価値や意味を探っている。これまで記録されている（している本人の場合もある）当事者である教師への聞き取りを重ね、今後は元児童生徒への聞き取りを実施しながら研究を進めていく。

もう一つは、研究アプローチについての開発的研究である。授業分析は従来から定性的（質的）研究と位置づけられてきたが、一人ひとりの変化（育ち）を促す教育を研究するために、また、教師の実践への手がかりとなる研究のためには、これまでの質的処理や量的処理、あるいはそれを混合したアプローチだけでは十分でないと考え、授業分析とその展開を基礎にした新しいパースペクティブによるアプローチについての開発を試みている。

2. 人環の学際に期待するもの

糸島市との連携については、来年度の学際連携授業「シリーズ人間環境学」の計画とともに、それを契機とした人環内の学際性、リソースの助けを借りながら、糸島市教育委員会、拠点地域、拠点校との連携を進めていきたい。当事業は、教育学部と糸島市との連携ではあるが、地域の期待に応えつつ大学の教育・研究活動を推進していくためには、人環内での協力が必要である。

学校と大学を繋ぐ、というのがこの連携の目的であるが、学校のみならず、子どもを中心に、保護者、地域へとその関係性を広げ、スクール・ソーシャルワークの方法に依拠しながら子どもの課題に応じていく、そのコーディネータの役割を大学が担っていくというのが趣旨である。

まちづくり、地域や家族の関係性、学校とそれら学校外の空間との関係性、そうしたなかで子どもたちは生活している。子どもの問題を受け止め、対応していくには、学校を開かれたものにしていく必要がある。大学は子どもの問題を様々な視点、観点から捉えつつ、そのための方法や知恵、場を提供していく、そうした互惠関係をめざしている。

人環内における連携として、臨床心理学や学校教育、授業や制度、社会教育などの専門家のみではなく、まちづくり、学校建築と学び、授業者の視線や板書方法と学習効果、等々、また他にもさまざまな可能性があると思う。

3. 感想

前任校である香川大学においても手がけられていた地域と大学との連携について、非常に熱く語られ、実践の学である教育学の最前線だと思いました。

糸島市との連携においては、志摩町との連携の時代から、九大のあちこちの部局毎との連携をもう少し連動してほしいという先方からの要望も聞いたことがあります。「子ども」という存在を鍵にしつつ人環の学際性を結集できたら社会のニーズに答えるという、学際性のひとつの目的を達成する契機になるのではないかと考えました。

以上
(文責：野々村)

藤本一壽先生インタビュー

■研究内容について

- ・道路からの騒音が建物などによってどのように減衰するかの予測
- ・ポリエステル不織布による多孔質吸音材を建築仕上げ材として応用するための研究：既開発した吸音材料を建築仕上げ材として商品化することを目指している。
- ・アジアの発展途上国における道路騒音の研究：近年発展の著しい途上国において、騒音が大きな問題となってきている。インドネシアのマカサル市において騒音調査を行い、GISを用いて騒音推計を行い、自動車騒音の対策法を検討する。

■他に関心のあること

- ・騒音の分析やデータ収集システムの開発
- ・建築物の音響性能の測定

■他分野との連携の可能性

- ・研究分野はかなり専門的なので他分野との共同研究は難しいと思う。
- ・建築音響、騒音を専門分野としており、その知見が役立つ場面があれば協力できる。
- ・具体的プロジェクトについて、それぞれの専門分野が参画できる形が好ましい。

■インタビューを通じての感想

- ・藤本先生のように技術系の研究を専門としている場合には、社会科学分野と同じ研究目標を掲げて一緒に共同研究をするのは難しいのではないかと。一方でプロジェクトベースで、それに参加する協力する形で、何らかの問題解決をする方が可能性は高そう。

文責：末廣

1-1-2. 2011 年度

学際研究・教育コーディネータによるインタビュー調査報告（2011 年度実施）

※調査日時順

関一敏先生へのインタビュー

インタビュワー 志賀・光藤

日時 2011年7月5日（火）11:00-11:30

場所 文学部比較宗教学演習室

学際的連携についての率直な意見交換が中心であった。関先生が考える学際の形態の一つは、松下竜一による豊前発電所の反対運動である。現在は環境権として確立している概念は、当時は反社会的であった。大学ではこのような「わがごと」としての取組は難しい場合があり、容易には真似できない。文系の学問が関わる場合、プロジェクトとしての学際は無理をはらみ、知識を広げるための学際として意味があると考えているとのことであった。具体的には、サロンとしての、息抜きとしての学際という位置づけがあり得る。

人環十周年記念誌に、シキホール島民族誌について書かれているが、現在も執筆中であるとのことである。魔術を使うということだが、アジアは犯人探しをしないという点の特徴があるということであった。ここでは薬草の分類をしたという点で学際的ではあった。

文系の人間が学際を出すことを考えると、心理学や社会学は人間の理解を目指すというテーマで可能であるとの考えである。建築系はクライアントがいるため社会貢献について特に考える必要はないが、文系では人間の理解を目指すため、目的としての（建前としての）学際を考えるメリットはあると思われる。人環の出発点は竹沢先生と竹下先生が山笠で知り合ったことがきっかけとなっている。学生は素直である場合があるため、メタ・メッセージが必要になる場合もあると思われる。

以上

遠矢先生へのインタビュー

7月13日（水）12時25分～50分

本来ならば、行動システム専攻の林直亨先生と荒牧の2名でインタビューを行う予定であったが、日程調整が上手く行かず、昼休みに荒牧が1人で実施することとなった。貴重なお時間を割き、快く応じて下さった遠矢先生に感謝いたします。

1. 研究活動内容について

専門は、自閉症や広汎性発達障害などといった発達障害を持つ子どもたちの対人関係スキルの形成を支援することである。発達障害を持つ子どもは、対人関係の認知に偏りがあり、人の感情や雰囲気を感じたり、暗黙の前提を察したりすることが困難である。したがって、友だちを作りたいのに上手く作れないといった問題を抱えている。そこで、発達障害児の居場所作りを積極的に行っており、自然な遊びの文脈の中で友人関係を作れるように、また、心理的・精神的に健康になれるように支援している。発達障害の原因を追究する基礎的研究よりも、子どもたちの実践的支援に重きを置いていると言える。

具体的な取り組みとしては、平成8年から、毎週木曜日に「もくもくグループ」という活動を行っている。そこには、通常の学校に通っている発達障害児（小学生から高校生）

が40～50名ほど集まってくる。彼らが遊びながら交流することを通じて、対人関係スキルを身につけられるよう支援を行っている。こうした子どもたちは、いじめや不登校といった経験のために、他者から侵される恐怖心を持っている場合が多いが、同じような子どもたちと交わることで非常に生き生きとする。そうした姿を見ると、この活動の意義を感じる。

また、最近では、障害児のきょうだいを中心とした家族支援にも力を入れている。彼らは、健康であるが故に、障害児の世話役などにまわり、我慢を強いられている場合も多い。親の注意がどうしても障害を持つ子どもへ集中してしまうため、発達が本人に任されてしまうという面もある。どういうわけか、日本では、そうした活動が行われてこなかったが、彼らのケアも重要であると考えている。

研究活動のもう1つの柱となるのが、「臨床動作法」という支援方法の拠点として総合臨床心理センターを継承・発展させていくことである。「臨床動作法」とは、昭和30年代に、九大教授であった成瀬悟策先生が開発されたもので、アジアを中心に現在では世界に広まっている。自分自身も、かつて九大でこの療法を学び、現在は、子どもへの支援や後進の指導を行いつつ、世界へ向けて発信していくという立場を担っている。

2.学際的研究について

発達障害児にしても、その家族にしても、当事者を相手にしていることなので、調査研究には多くの倫理的配慮が必要という難しさがある。自分自身の研究を進める上でも、そうした倫理的な難しさを日々感じ、葛藤しているところである。したがって、学際的な研究ということになると、なおさら難しいように感じている。ただ、強いて言うならば、発達障害をもった子どもたちの生活しやすい環境づくり、バリアフリーの生活空間づくりといった形で協働がありうるかもしれない。

八尾坂修先生へのインタビュー

日時：2011年10月24日（月曜） 14時5分～14時35分

場所：八尾坂先生の研究室

（山口謙太郎先生と共にインタビューを行う予定であったが、八尾坂先生のご都合に合わせてインタビューは高野のみで実施した。貴重なお時間をいただいた八尾坂先生に感謝申し上げます。）

人間環境学における学際的研究・教育に関して意見交換を行った。

八尾坂先生は、学校（教育）経営、教育評価が専門であるが、学際研究のテーマとしては、学校と地域社会との関係などをもとに考えられるのではないかとのことであった。生徒数の減少によって福岡市においても学校統廃合が行われているが、とりわけ離島の小規模校では、こうした統廃合によって学校施設の地域住民による利用や学校開放の意味合いが変化せざるを得なくなっている。少子化と高齢化によって地域社会の人口構造が変化する中で、例えば高齢者の社会参加活動の拠点として学校施設が利用されるような場合も増えてきたが、これまでの学校は高齢者にとって必ずしも利用しやすい施設設計はされていない。こうした状況に対応するための改築のあり方や、カリキュラムに高齢者の生活や地域社会の実態を加え学校側の受け入れを促すことも、その必要性は指摘されているがなかなか進んでいないとのことであった。こうした点などは、学際的に検討することによって、解決への糸口がつかめていくのかもしれないとお話しであった。

人間環境学としての学際的研究・教育の現状については、残念ながら、まだ十分に基礎が作られていないような印象を持っている。教育学系では、院生の多くは「教育学」での学位取得を希望する実態にある。これは、方法論として人間環境学がどのようなものかはっきりせず、論文をまとめることが難しいという側面に加えて、研究職としての就職や対外的なイメージを考えた場合に、依然として人間環境学の存在感が薄いことの現れではないかと思われる。人間環境学としての、学際研究・教育の実質化を図るためには、例えば人間環境学関連の学会設立などを行い、研究会開催や学術誌刊行などの研究報告を通じて社会的に人間環境学の評価（存在感）を高めていくことが、やはり必要ではないかとのことであった。多分野連携プログラムについても、これをベースとした科研費の申請もあらためて考えてはどうかとのご示唆を得た。

各教員の専門領域を活かしつつ、「無理のない」研究の枠組みを検討することが必要ではないかとのことであった。

白土 悟先生へのインタビュー

インタビュワー：趙 世晨

日時：2月17日(金) 13:00～14:00

場所：留学生センター分室2階白土研究室

(古賀靖子先生と共にインタビューを行う予定であったが、古賀先生のご都合によりインタビューは趙のみで実施した。貴重なお時間を頂いた白土先生に感謝申し上げます。)

1. 研究活動内容について

私の専門は国際教育交流研究・中国現代教育研究である。長年、留学生アドバイザー研究と現代中国の留学政策研究を行ってきた。2011年に学位論文に加筆して、「現代中国の留学政策—国家発展戦略モデルの分析」(単行本、九州大学出版社)を出版した。本書では、1949年建国以降、激動の歴史を経てきた中国において、海外の知識や技術を導入する際に重要な役割を果たしてきた留学政策について、国際的政治・経済情勢、知識人政策、高等教育政策、民族教育政策との関連に着目して、その変遷と時代背景を分析した。

また、近年トヨタ財団の研究助成を受けて国際的拠点都市形成に関する研究を行った。本研究では、留学生・海外高度人材を集積して国際的拠点都市を目指している日本、韓国、中国の諸都市の国際化政策、人材政策等の現状と課題を明らかにし、福岡市における国際的拠点都市形成の課題と可能性について考察した。

さらに現在、科研費の助成を受けて、中国の地方都市における留学人材政策の研究を行っている。中国遼寧省の地方都市の発展と人材発展計画や留学人材政策との関連性に重点を置いて調査研究を行っている。

2. 学際連携について

以前、九州大学シルクロード調査隊に参加した。教育学、考古学、言語学、歯学、農学、医学、歴史学の7つの分野の研究者で組織された20数人の調査隊が、新疆ウイグル自治区で共同調査を行った。数年の準備・交渉段階を経て、1988年度は3カ月に及ぶ本格的現地調査だった。現地調査の企画立案・段取りや予算確保の方面が特に難しかったと思う。学際連携という意味で、1つの研究テーマではなかったが、1つの地域を対象に同時に調査研究を行うことで、各分野の知見やデータ・情報の共有ができ、異分野の研究に対する理解を深めることができた。学際研究・学際連携の推進と言え、工学部と歯学部の連携による医療器具や医療材料の共同開発等もあるが、私が経験したのは、異分野研究者による共同地域研究だった。これも1つの方法ではないかと考える。シルクロード調査隊に参加して、特に感じたのは全体を組織するリーダーの素質と力量と人望が重要であり、加えて

リーダーの時間的犠牲も必要だということである。そういう意味で、コーディネーターではなく、オーガナイザーになれる人物が必要であると思われる。

1-2 各年度多分野連携プログラム

1-2-1. 2010年度多分野連携プログラム

人環の叡智で学校の危機を管理する

前期実施（毎週月曜7限）

第1回：オリエンテーション

第2-3回：学校における危機ーリスクとクライシスー

第4-5回：教師のストレスと危機管理

第6-7回：都市における犯罪と環境の関係

第8-9回：学校文化史の検討ー生活習慣病としての学校の危機ー

第10-11回：学校の社会的責任とリスクマネジメントー組織心理学の視点からー

第12-13回：施設計画から考える学校の危機管理

第14-15回：文教施設の耐震診断と補強

※別途冊子にて報告書刊行

建築災害と生理・心理

2010年4月15日（木）

「建築災害と生理・心理」第1回ワークショップ

当プログラムのキックオフミーティングとして、担当教員各自の研究テーマの紹介と討論を行いました。

日時：2010年4月15日（木）12:30～14:30

会場：工学部建築学科2番講義室

司会：小山智幸

参加者：教員8名，3名

1. 開会

2. 担当教員の研究テーマ紹介（五十音順，*はコーディネータ）

| | |
|---------------------|--------|
| 空間システム専攻（建築施工学） | 小山田 英弘 |
| 都市共生デザイン専攻（強風防災） | 友清 衣利子 |
| 空間システム専攻（建築生産学） | 蜷川 利彦 |
| 行動システム専攻（身体適応学） | 林 直亨 |
| 都市共生デザイン専攻（強風防災） | 前田 潤滋 |
| 行動システム専攻（知覚心理学） | 光藤 宏行 |
| 行動システム専攻（集団力学） | 山口 裕幸 |
| 都市共生デザイン専攻（災害情報管理学） | 清家 規* |
| 空間システム専攻（建築材料学） | 小山 智幸* |

3. ディスカッション

4. 閉会



人間諸科学における『進化心理学』の位置

2010年4月24日(土)

以下の通り第一回目の合同研究会を実施した。

日時： 4月24日(土) 13:00-15:30

場所： 教育心理棟2F 「心理学演習室」

話題提供： 橋彌 和秀先生

タイトル：「進化心理学前夜 -ダーウィンの自然淘汰理論と20世紀におけるその展開-」

参加者 教員6名

学生他19名 計25名

ダーウィン以降の進化理論の展開、とりわけハミルトンの包括適応度の概念、血縁淘汰の理論、その後のメイナード・スミスらによるゲーム理論の導入などによる、一大革新について分かりやすい説明がなされ、その後、進化心理学の主張と、他の人間諸科学の主張との関係をめぐって学生からの質問も交えて、予定していた時間を超えて活発な議論が交わされた。

研究会終了後、教員のみで集まって、今後の研究会の日程や進め方について意見交換があった。

人間環境実践知の構築

2010年5月30日(日)

「人間環境実践知の構築」研究会：福祉社会学会のシンポジウムに参加しました。

日時：5月30日(日) 13:30~16:30

会場：101教室(九州大学 箱崎文系キャンパス)

司会：杉岡直人先生(北星学園大学)

報告者：

1. 過疎高齢者の生活構造と社会参加活動 高野和良(九州大学)
2. 小規模・高齢集落の高齢者と地域福祉ー長野県泰阜村の高齢者生活調査からー
小磯明(日本文化厚生農業協同組合連合会)
3. 『生活農業論』と『T型集落点検』 徳野貞雄(熊本大学)

討論者：永井彰(東北大学)

シンポジウムの趣旨は、人口減少社会、縮小型社会の「縮図」としての小規模・高齢化集落(限界集落)の現状と課題を確認した上で、「限界」「消滅」といった一面的な見方で

はなく、農業経済的な視点では見落とされてきた生活の場としての集落を維持するために必要な方法論を検討するものとして企画されたものです。上記の三人のシンポジストによる報告をもとに、集落の維持を可能にする条件と、それらを支える具体的な方法論について検討がなされました。

シンポジウム開始前に、多分野連携プロジェクトの趣旨を説明させていただきました。シンポジストの先生方の熱意あふれるご発表に、参加者一同感謝いたします。

受講生は、この議論をふまえたレポートを6月9日締め切りで提出、合同研究会に備えました。



人間諸科学における『進化心理学』の位置

2010年6月5日(土)

以下の通り第二回目の合同研究会を実施した。

日時： 6月5日(土) 15:00-17:30

場所： 教育心理棟2F 「心理学演習室」

話題提供： 坂口菊恵 先生

(東京大学教養学部附属・教養教育高度化機構・助教)

タイトル： 「男女関係を進化心理学で考える」

参加者 教員5名(取組教員4名、他1名)

学生他21名 計26名

概要：ヒトの性行動や男女間の葛藤について進化心理学・内分泌行動学のパラダイムで検討を行ってきた。なぜそういった研究を志すに至ったのか自己紹介をかねて述べ、進化心理学的アプローチのユニークさについて論じる。次に、発表者がこれまで行ってきた研究内容の概要と、関連する著名な先行研究を紹介し、こうした研究成果を一般社会に伝える際に生じる問題点について述べる。さらに、昨年著書「ナンパを科学する」を出版した際の経緯と、出版社・マスコミ・一般読者の反応を紹介する。最後に、進化心理学はこれからどこに向かうのか、展望と懸念について論じたい。

著書「ナンパを科学する」(東京書籍)の内容を中心に、遺伝的にコードされた、ヒトにおける二つの異なる配偶戦略について、最先端の進化心理学・内分泌行動学の見地から説明がなされた。

これについて参加者から文化的制度との関係、ジェンダー・アイデンティティ、意識などとの関係などについて突っ込んだ質問がなされ、予定時間を超えて活発な討論が行われた。

また、研究会後、講師の坂口先生を囲んで懇親会が開かれた（参加者 8 名）



人間環境実践知の構築

2010年6月19日（土）

「人間環境実践知の構築」合同研究会（19日）：福祉社会学会のシンポジウムをふまえた合同研究会を開催しました。

日時：6月19日（土） 13:00～16:00

会場：教育システム専攻 社会人演習室

参加人数：40名（教員含む）

受講生によるレポート（予め全員に配布済み）を中心に、シンポジウムテーマである「小規模・高齢化集落（「限界集落」）の現状と課題」を軸に、研究の前提、現状や課題のとらえ方、研究者の集落への関与の仕方、さらに、学際的な視野とは何か、社会と大学との関係はいかにあるべきか、等々の問題について、主に受講生を中心とした活発な議論がなされました。

さらに、後期の『動的』指導體制（昨年から続く）、およびインターネットを利用した議論の案内をし、引き続き、学際的なネットワークの重要性を確認しました。それは、専門分野を超えた自由な語らいの場をつくり、他の研究者、他の専門分野の意見に触れ、触発され、自分の思考の枠組を揺さぶられ、自らの課題に向かい直すエネルギーに転換するという、いわば「知の共同体」を楽しむ空間です。

実践知の構築もまた、そうした自由な発想と動的な関係を大学のなかにつくりだしてこそ可能になるのではないか。このようなことを確認してひとまず散会した次第です。



建築災害と生理・心理

2010年7月13日（火）

「建築災害と生理・心理」建築現場見学会（博多駅）

学部と合同で、現在建設中の博多駅建築現場の見学を行いました。品質や安全に関して討論を行いました。

日時：2010年7月13日（火）、20日（火）13:30～16:30

場所：博多駅工事現場

参加者：教職員9名 学生：（修士）15名、（学部生）67名、他大学2名



人間諸科学における『進化心理学』の位置

2010年7月17日（土）

以下の通り第三回目の合同研究会を実施した。

日時：2010年7月17日（土）15:00～17:00

場所：文学部棟2F・比較宗教学演習室

テーマ：「文化人類学からの理解と疑問

—進化と文化のインターフェイスを考える—

発表者：（1）後藤晴子（文化人類学・博士課程）

「家族の作られ方」

（2）清原一行（宗教人類学・博士課程）

「宗教を生み出す心／宗教を生きる心」

（3）浜本 満（文化人類学）

「進化のアルゴリズムと目的論的語り口」

発表は各 15 分（個別質疑応答 5 分）で、3 人の発表終了後自由にディスカッションしたいと思います。

進化心理学の外側から、進化心理学についての理解と疑問を提示する試みとして、今回は文化人類学の 3 名による話題提供がなされた。(1) では 1976 年にアメリカの人類学者サーリンズによってなされた「社会生物学」批判を紹介し、家族、血縁制度の領域で、進化心理学がカバーできる領域と文化人類学の議論との境界が考察された。(2) では、近年の文化人類学における進化心理学再評価のさきがけとなったボイヤーの研究を取り上げ、宗教的諸概念を人間が進化の過程で獲得した脳の情報処理系（推論システム群）の産物と見る見方を評価しつつも、そうした説明だけでは実際の生活や人生のなかでそれらの概念が生きられ、生活や人生を意味づけていく仕方の理解には不十分であることが論じられた。(3) では、進化理論の強みである非目的論的アルゴリズムが、一種の比喩的な目的論的語り口と並存していることの問題点について、進化心理学が文化的制度の説明においてしばしば陥る議論を例にとって論じられた。

その後の質疑応答では、生態学的説明の性格についての確認や、目的概念について、哲学的な立場からの進化理論の理解についてなど活発な議論が展開された。

参加者 19 名（教員 5 名、学生その他 14 名）



人間諸科学における『進化心理学』の位置

2010 年 9 月 8 日（火）

「人間諸科学における『進化心理学』の位置」第 4 回研究会報告

概要：

文学部の集中講義に来られた、東京大学・総合文化研究科・教授の長谷川寿一氏にお願いして、本研究会で研究を紹介していただいた。

タイトル：「こころの進化 ―人間はどのように特別なチンパンジーか―」

日時：9 月 8 日（火）

場所：文学部 2 F・心理学演習室

内容：

遡って見ることのできない「こころの進化」をどのようにとらえるのか。霊長類との比較研究、発達・障害研究、文化比較を通じての普遍性の発見、進化理論に基づく仮説検証研究などの方法論について紹介された後、特に第一の比較研究を中心に、チンパンジーとヒトに共通し他の類人猿には見られない特徴、ヒトには見られるがチンパンジーには見られない特徴を手掛かりにすることによって、ヒトのこころの特徴が共同繁殖社会における適応の産物であることが説得的に提示された。
その後 30 分にわたって活発な質疑応答が行われた。

出席者：

教員（本取組メンバーの箱田教授、土戸教授、谷口教授、坂元教授、橋彌准教授、浜本の 6 名に加えて、三浦教授、中村准教授、光藤講師ら多数。）および学生、合計 33 名。



建築災害と生理・心理

2010 年 9 月 28 日（火）

九州大学大学院人間環境学府多分野連携プログラム「建築災害と生理・心理」
＋（社）日本建築学会九州支部災害委員会
合同研究シンポジウム「建築分野における災害研究」

日本建築学会災害委員会と合同で研究シンポジウムを開催しました。

日時：2010 年 9 月 28 日（火）14:30～17:00

場所：文・教育・人環研究棟 2 階会議室

対象：九州大学人間環境学研究院教員、（社）日本建築学会会員、災害研究を行う学生等

司会：九州大学 助教 友清衣利子

1.開会挨拶 九州大学 教授 前田 潤滋

2.研究報告

1)自然災害時の避難と復興

防災とヒューマンファクター

九州大学 准教授 山口 裕幸

豪雨による浸水被害からの復興

九州工業大学 准教授 徳田 光弘

玄界島の震災復興計画のあり方

佐賀大学 准教授 後藤隆太郎

- 第一部 意見交換
2)労働災害と現場環境、生理
建設労働災害について
九州大学 助 教 小山田英弘
コンクリート品質に及ぼす建設作業環境の影響
九州大学 准教授 小山 智幸
高所作業における視覚情報処理について
九州大学 講 師 光藤 宏行
第二部 意見交換
3.総括 九州大学 教授 浜本 満

人間諸科学における『進化心理学』の位置 2010年12月22日(水)

以下の通り第五回目の合同研究会を実施した。

日時： 12月22日(水) 15:00-17:00
場所： 教育システム「社会人演習室」
話題提供： 土戸 敏彦 (人間環境学研究院・教授・教育哲学)
宮川 幸奈 (教育システム・M1)

タイトル：「ダニエル・デネットの哲学的進化論」

参加者 教員4名
学生他13名 計17名

概要：ダニエル・デネット著『ダーウィンの危険な思想』をめぐって、デネットの進化論的アルゴリズムの考え方を紹介し、彼の議論の中で人間主体の超越性がどのような位置を与えられているかを中心に、批判的な検討が行われた。

発表後のディスカッションでは、議論を最終的には遺伝子のレベルに落として考える進化心理学の傾向について、さまざまな立場から意見が交換された。

終了後、人環学際サロンで発表者を囲んでの懇親会が開催された。



異分野交流・学際教育研究の促進される大学キャンパス
2011年3月2日(水)

ざっくばらんな交流から、学際的なつながりへ。

2011年3月2日(水)
17時より
箱崎文系キャンパス中庭

新しい研究のアイデア、
行き詰まった研究の打開策、
思いがけない出会いは
中庭にころがっているのです。
たぶん。

チケット制(当日有り)
教員 1000円 大学院生 300円

持ち寄り大歓迎

本気で歓迎します!

学際 コネクト ミーティング



お問い合わせ
人間環境学府学際企画室
(ゲーマン/大沼)

TEL & FAX: 092-642-4329

E-mail: coordinator@hes.kyushu-u.ac.jp

1-2-2. 2011年度多分野連携プログラム

子どもの育ちを支える協同関係の構築にむけて

2011年4月6日（水）

第1回研究会 2011年4月6日14時～18時 於：「子どもの村福岡」たまごホール

松崎佳子先生（九州大学）

「地域における子どもへの支援 子どもの村福岡の試み」

<報告>

第1回は、松崎佳子先生にご自身が関わってこられた「子どもの村福岡」が設立されるまでの背景や経緯、そして現在までの取組についてお話しを伺った。

まずは、社会的養護のなかで里親制度が着目される背景、制度的推移、養護形態の現状として、諸外国に比べて里親委託への関心と児童数が少ない日本の状況を説明された。国連子どもの権利条約（1989）、国連「子どものためのオルタナティブ・ケア（代替的養育）ガイドライン」（2010）等の国際動向により、日本においても関心が向けられつつある。

児童福祉相談所勤務時代より関わっておられる、「子ども NPO センター福岡」の「新しい絆プロジェクト“ファミリーシップふくおか”」のご経験をもとに、NPO 法人「子どもの村福岡を設立する会」を設立、「子どもの村」（SOS キンダードルフ：1949年オーストリアチロル地方のインスブルグに設立）日本支部としての動きとともに、「子どもの村」設立にむけた後援会等の組織、人材養成研修、地域住民の方への公開フォーラムやチャリティコンサートなどを重ね、2010年4月の開村に至った。専門家（小児科医、精神科医、臨床心理士、社会福祉士、幼児教育家、保健師など）、企業（賛助、協力）、建築家（村の家の建築設計）などによる企画、支援のための組織化はもとより、「子どもの村」を支える児童相談所、児童養護施設、医療機関等とともに、今津という地域に子どもと養親が生活をしていくためには地域住民との共存は欠かせない。これまで徐々に時間をかけて築いてきた地域の自治組織や委員、住民の人々、福祉村とのネットワークを引き続きあたため、今後につないでいく活動に取り組んでいる。地域の行事への参加等も重要である。現在、設立経緯を冊子にまとめている最中である。

オーストリアの本部、またベトナム等の組織や取組の紹介もあり、今後の課題、方向性についての展望も示された。

育親（里親）になるために必要とされること、そのための研修、マッチング問題、実親とのつなぎ方の問題、行政機能との関係性等について、活発な質疑応答が行われた。なかでも、学校との関係は非常に重要なポイントとなることは明らかである。「子どもの村」がどのように学校と連携していくかという方向のみならず、むしろ学校が、地域の子どもの多様な生活をふまえた学校・学級づくり、カリキュラム開発をはかっていく契機ととらえる方向性が示された。次回（5月）はそのテーマで田上哲先生にお話しをいただく。

以上

（文責：野々村）



<感想>

松崎先生のご報告&「子どもの村」を訪問して

予想以上に、壮大な実験なのだ、と実感した半日でした。「子どもの村」は、生活の場・新しい家族形態か、それとも施設か。「育親」の営みは、生活か、仕事か。子どもの村における支援は、生活に対する福祉的ケアか教育的環境づくりか。同じくそれは、親支援か子ども支援か。ゆらぎながら育つことの子どもにとってのリスクを、どう回避できるのか。...そんな、たくさんの問いを内包しているように思いました。それでも現実をひきうけて歩みだしている「村」。その受容と実験的模索へのパワーに、圧倒されます。たくさんの問いをひきうける意味でも、私たちの議論が、ここから出発できたのはとても幸運なことだと思いました。あたたかく受け入れてくださった松崎先生やスタッフのみなさま、ありがとうございました。

岡 幸江

多分野連携 第1回感想

私自身にとっては、子どもが地域で成長するという事について考えるいい機会になりました。考えたことを少しだけ書かせてもらいます。

子どもにとって、まずもって親が重要な他者であり、家庭が最初の重要な環境です。福岡子どもの村で、親となることを引き受ける大人が存在し、子どもにその環境を与えようとしていることに大変強く感銘を受けました。と同時に、実際にそこで育つ子どもはどのようにこの事態を認識しながら成長していくのか、大変興味深だけでなく、それをとらえながら支えていく努力が必要ではないかと考えました。

協議の中で一番年長のお子さんがこの春小学校に入学されたということで、子どもの村も新しいステージに入ったのではと申し上げました。これからは学校がその子にとって、もう一つの社会的環境として大きな比重を占めることになっていきます。学校で新しく出会う子どもたちと大人たち（教師や友達の保護者、地域の人々）との交流の中で、互いに何をどう学び、何をどう表現（発信）していくのか。その際、その子にとって自分が福岡子どもの村の子どもであることは避けて通ることはできません。周りの人間もその子自身も福岡子どもの村と自分たちの住んでいる地域・社会への理解を深め、それが同時に周りの人間もその子自身も自分自身への理解を深めることになるような、そしてお互いにとってより良い合意を形成できるコミュニケーションと学びが展開されることが重要ではないでしょうか。

そして、このことは本当は福岡子どもの村の子どもだけを取り立てて考えることではなく、すべての子どもがそれぞれ少なからず独特な特別な状況におかれているのですから、

そういった考え方を基盤にして学校教育が展開されることが、子どもたちが暮らし成長していく地域全体に大切なことではないかと思います。 田上哲

松崎先生、「子どもの村福岡」にて研究会を開催していただきましてありがとうございました。実際の現場を見ることができて多くの情報を得ることができました。特に印象に残った点は、1) 地域住民への理解と意見や情報交換のために小グループ（組単位）の説明会が26回開催され、「地域住民」への情報提供、意見交換やコンフリクトの調整などを行う準備期のプロセスを重視、3) 子どもの生活を支えるマルチ専門家チームの取り組み、4) 地域の人々とのさまざまな活動の「場」づくりに取り組んでおられることでした。コミュニティワークには、人、時間、エネルギー（情熱）、ネットワークが不可欠であることを再度確認できました。今後、今津地域の高齢者と「こども村」の子ども達との世代間交流事業へつながっていくのも楽しみです。また、認定特定NPO「子どもの村」が自主資金源を獲得するために、どのような工夫や戦略を実施されているのでしょうか。この点からも、福祉系NPOにとって大変参考になる事例だと思いました。最後に、実親への支援（メンタル、就労、生活、経済）不足の現状も報告され、多課題を抱えた世帯への包括的支援（サービスありきから人中心）の必要性を強く実感するとともに、縦割り行政と新たなニーズに対応しきれない社会福祉の課題が山積みしていることがわかりました。

稲葉美由紀

第一回研究会（4月6日） 感想

私はこれまで主に高齢者の社会参加活動に関する調査研究を行う中で、そうした社会参加活動が展開される場としての地域社会の変化を捉えてきましたが、今回、「子どもの村福岡」にて松崎先生からのお話しをお聞きする中で、子どもの問題を含めて多世代の視点から地域社会を捉えていくことの必要性をあらためて教えていただきました。

子どもの育ちを支える協同関係の形成といった場合、私自身の関心は、施設と地域社会との関係形成の過程がどのように展開されていったのかという事実関係の把握と、そうした関係形成過程には施設や地域社会の置かれている状況によって、何か共通するパターンはあるのかといった類型化と比較分析などにあります。

今回の例でいえば、地区（組）ごとに二十数回にわたって開催された説明会に参加されたのはどのような組織の代表か、個人であればいかなる関心を持って参加されたのか、どのような質疑が行われ、それらを通じてどのように合意形成が図られていったのか、といった点にありますし、その過程に、今津地区の持つ近郊農村としての地域特性や、福祉関係施設が集中してきた経緯も重ねて考える必要もあるのではないかと考えています。

施設が身近にあり、敷居が低いことが（多くの施設は反対の状況にあるのですが）、施設利用者と地域社会の人々にとって良い影響を与えることは経験的に知られています。空間的、認知的なアクセシビリティの問題をあらためて考える必要性を感じました。

高野 和良

人間諸科学における『進化心理学』の位置

2011年5月10日（火）

2011年度第一回研究会

日時： 5月10日（火） 18:30～20:00

場所： 文学部・心理学演習室

話題提供： 箱田裕司 先生
「進化心理学と領域固有性・一般性」

出席者：教員 6 名、学生他 15 名

認知心理学の立場から、認知心理学と進化心理学は、同じ頂（解明すべき問題）を目指してそれぞれ山の反対側から登ってきて、出会ったのだという見解が示されました。人間の心（脳）は、特定の領域を対象とした作業に特化した複数のモジュールからなるスイスアーミーナイフに喩えられ、こうした領域固有性の存在について、いくつかの事例をあげて説明がなされました。それぞれの領域固有な心の働き方には、独特の癖（制約）があり、それらがダーウィンの進化の産物であることが指摘され、最後に先生自身の研究が紹介されました。ある画像を変化させたとき、何かを元の画像に付け加えた変化と、何かを元の画像から削除した変化のどちらが気づかれやすいかという問題をめぐり、一般的に見られる付け加え変化の方が気づかれやすいという傾向性が進化から説明できることが明らかにされた後、ネコと鳥の画像についてのみ、削除の方が注意を引きやすいという先生の研究の結果が報告され、そこに感情的要因（哀れみ）が大きく関係していることが示唆されました。

その後の質疑応答では、最後の点についてとりわけ突っ込んだ議論が交わされました。

子どもの育ちを支える協同関係の構築にむけて 2011 年 6 月 15 日（水）

第 2 回研究会 2011 年 6 月 15 日 17 時～20 時

於：教育学系会議室

田上哲先生（九州大学）

「授業・教育実践と子ども—小中連携や家庭・地域との連携を見据えて」

< 報告 >

第 2 回めは、個を育てる授業分析、授業研究に取り組んでこられた田上哲先生に、ご自身が関わってこられた学級づくり、授業づくりに取り組む多くの実践事例をもとに、その研究の軌跡をお話いただき、子どもの育ちを支える協同関係の有り様を探った。

まず、田上先生の授業研究の背景である、重松鷹泰と上田薫の研究の視座と、その意志を受け継ぐ「社会科の初志をつらぬく会（個を育てる教師のつどい）」の活動経緯について紹介があった。田上先生は、当会西部地区代表でもある。この会は「問題解決学習」によって「個を育てる教育」をめざすという志のもとで、53 年間の活動を継続させてきた。

「問題解決学習」とは、それぞれの子どもの切実な問題、課題を、学級のメンバー皆で考えていくという方法である。教師は、個々の子どものくらしの深いところまで理解し、その子どもの課題探究と解決へのプロセスを助けていく。例として、休日の朝食というテーマの実践が紹介された。子ども達のこのような表現が可能とするには、教師がとにかく子どもの話を聞くことが何よりも重要だということだった。個々の切実な問題を学級の皆で考えていくというプロセスは、ときに子ども同士の厳しい対話を生まれさせることも多い。信頼関係がなければ成り立たない、このような「聴く」場、集団づくりについて議論があり、朝の会での聞きあいの活動等についての紹介があった。


この、個々の子どもの問題に深く関わる授業実践は、重松鷹泰の授業分析の手法にその源流があるとのことである。重松の授業記録は、生徒の個人名が明記されている。その子どもがどこでどのような発言をし、授業に参加したのか、ということが分析の対象となるわけである。子どもの学級での役割は偏りがあり、それこそが学級運営の主要な要素とな

るが、その様子を明らかにするような授業データの提示方法が摸索されている。

子どもは、学校、家庭、またその他の場所で、いろいろな顔を持ち、生活をしている。子どものそうした多面性の尊重、また、そのための、教師（権力関係から逃れることが困難）や親（宿命に支配される）との二者関係だけではないナナメの関係の重視、子どもが自立し大人になっていくことを支える関係性の構築、ネットワーク化などについての議論が出された。地域という言葉は、このような関係構築においてよく用いられる。しかし、地域とは何を指すのか、地域との連携とは誰と繋がることなのか。

今回は、この地域を考える手がかりを、まちづくりに関わってきた田北先生に伺う予定である。
(文責：野々村)

子どもや地域を犯罪から守るための異分野連携研究
2011年7月6日(水)



九州大学大学院人間環境学府
平成23年度

多分野連携 プログラム

子供や地域を
犯罪から守るための
異分野連携研究

研究会の次回日程:
2011年7月6日(水)
15:30 ~ 17:30

会場:
箱崎キャンパス
建築棟4階会議室

内容:
研究発表及び、そ
れ
に準じた議論など

次回発表者:
有馬 隆文(都市・建築学部門 准教授)
□ 犯罪と都市環境
—福岡市の機会犯罪を対象として—

杉野 弘明(都市共生デザイン専攻博士課程1年)
□ 環境心理学的視点から見た防犯研究

子供や地域の安全や安心、防犯などに関する研究は、時代と共にそれぞれの分野で大きな変遷を遂げてきました。しかし、異分野間の相互連携による学際的研究の蓄積は未だ十分ではなく、以降の取り組みが期待されている状況です。本プログラムでは、各分野における研究の到達点や課題を相互に理解するために、定期的に研究会を開催し、担当教員や所属学生による話題提供、ゲストスピーカーによる講演を通して、これまでの分野の枠組みを越えた議論を行い、子供や地域を犯罪から守るための新たな視座や方法を探求します。

10月、12月、3月と定期的に研究会を予定しております。
定期的な研究会参加希望者の方は下記までご連絡下さい。
日程等が決定次第、連絡をさせていただきます。

窓口 : hiruandon.pmobile@gmail.com (担当:杉野)

Multi-disciplinary Cooperative
Research Program
Graduate School of
Human-Environment Studies
Kyushu University

子供や地域を犯罪から守るための
異分野連携研究

研究会参加者募集中

子どもの育ちを支える協同関係の構築にむけて
2011年7月25日(月)

第3回研究会 2011年7月25日18時～21時

於：感性学府会議室

田北雅裕先生(九州大学)
「まちづくりと子ども」

<報告>

今回は、まちづくり、人が住む風景のデザインに取り組んでこられた田北雅裕先生のお話を伺った。

まず、建築・土木、ランドスケープなどの専門領域を学びつつ、ご自身の原体験である故郷の「橋の下」のデザインという目的を追求すべく、活動を続けてこられた軌跡から紹介された。そのなかで、田北先生が強調されたのは、トリビア(trivia)、他人(自分)からみるとちっぽけだが、自分(他人)にとっては大切な風景に目を向け、専門性にとらわれずにその風景をつくっていくということである。

まちづくりという概念は、1960年代からの急激な都市化の中で、トップダウンのハード整備ではなく「住民自治」「住民参加」の社会運動の推進において使われるようになり、浸透してきたという。そのコンセプトは、①まちの住民となり、「自然(環境・人・風土)」に生かされている諒解の下に、次の世代に希望をつなげる協同の実践、③適正規模、住民の「幸せ」を育て、見守り、共有し続けることを目的として、目指すべき状況と他者の在り方から手段と協働主体を決定する、②特に小さき側の立場に立つこと、そして全ての価値判断が人間の感情に基づく以上、コミュニケーションの在り方に重きを置く。杖立温泉や、南阿蘇えほんのくに等、沢山の田北先生によるデザインの数々の魅力の原点は、このような住民、なかでも声の小さな住民の声を聞き取り、それに応える手法や人間力(まなざし、共感、コミュニケーション...)とデザインの創造にある。

熊本慈恵病院「こうのとりのゆりかご」の相談窓口ウェブサイトデザインも、このコンセプトによって取組まれているところである。新生児相談という本来の業務を重視し、複雑な援助の仕組みを把握したうえで、一次接触メディアとしてのウェブサイトの強みをいかに活かせるかということに留意されている。相談者の感情、交流や共感への誘いも含め、理解しやすかつ精確な情報伝達のデザインは、福祉とデザインを繋ぐ可能性として大きな意義をもっているといえよう。相談に関わるウェブサイトのデザインによる、相談窓口の組織や業務体制のデザイン自体への提案、行政の福祉体制とのコラボレーション、インターネットであれば悩みを打ちあけられるというニーズへの応答の重要性、また、田北先生の活動の次世代伝達の方法や、まちづくりのなかでの専門領域化の問題などについて、活発な意見交換が行われた。

(文責：野々村)

人間諸科学における『進化心理学』の位置
2011年7月26日(火)

以下の通り第二回目の合同研究会を実施した。

日時： 7月26日(火) 17:30-19:30
場所： 教育心理棟2F 「心理学演習室」
話題提供： 平石界 先生
(京都大学・こころの未来研究センター)

タイトル： 「進化心理学における遺伝と個人差」

参加者 教員 4 名（取組教員 3 名、他 1 名）
学生他 14 名 計 18 名

概要：ヒト以外の動物を主たる対象に、進化的視点から研究する行動生態学（Behavioral Ecology）の発展は、いわば必然的に人間行動研究へと拡張され「進化心理学」と「人間行動生態学」という二つの流れを生みだした。この二つのアプローチのうち、特に前者においては「人間の心の仕組みの普遍性」が強調される傾向が強かった。しかし近年、進化心理学においても個人差への注目が高まりつつある。こうした動きは、人間行動の個人差に生物学的アプローチをする行動遺伝学との連携にも繋がりがつつある。本報告では、進化心理学と人間行動生態学について簡単なイントロダクションを行った上で、報告者が「進化」「遺伝」「個人差」の境界で進めている研究を紹介し、聴衆の皆さんと議論したい。

最初に進化心理学についての簡潔な紹介の後、平石先生自身の研究が紹介された。「知能や性格が遺伝する」という言い方があるが、それは正確に言えば、知能や性格（開放的、協調的、外交的 etc.）における個人差の何パーセントが遺伝的差異にもとづくという意味であることであり、ダーウィン型の進化が淘汰によってむしろ遺伝的な個人差を縮減するアルゴリズムであることを踏まえると、こうした遺伝的な個人差が消えずに残り続けていることの方がむしろ説明されるべき問いなのだと思われる。こうした遺伝的な個人差が残りつづけることを説明するさまざまな仮説が紹介され、検討された。

また一般的信頼度の個人差が、性格の個人差と関係がある（後者が前者の原因）という可能性が示された。

発表に対しては会場から活発な質問が出され、個人差と文化差の関係などをめぐって突っ込んだ議論がなされた。

研究会後、講師の平石先生を囲んで懇親会が開かれた（参加者 8 名）

子どもの育ちを支える協同関係の構築にむけて

2011 年 9 月 27 日（火）

第 4 回研究会 2011 年 9 月 27 日（火）13 時～16 時

於：子どもの村会議室

木村康三さん（福岡市里親会会長・たんぼぼホーム代表理事）

「子どもと共に育つ」

< 報告 >

今回は、福岡市小学校、養護学校の教員を退職後、2006 年里親登録以降 6 名を受託、2010 年小規模住居型児童養育事業たんぼぼホームを設立された木村康三さんにお話を伺った。

たんぼぼホームは、養育者 3 名、補助者 7 名、ボランティア数名のもと、児童相談所、里親会、関連 NPO との連携のなかで活動されている。最も大切とご自身が強調されたのが、ホームを擁する自然そのものである。のどかな里山、そこに生きる動植物や昆虫。子どもも大人も、里山の命と触れあい、命を育む。のどかな風景ではあるが、山の木々は手を入れずに野放しで保全はできない。里山に住むとは、そうした自然への関わりが必要なのである。ネグレクト（耕作放棄）された里山は、荒れてしまう。子どもも同じなのである。

それぞれが深刻な問題（過去）を抱えている子どもたちにとって、里親を始め周りの人々との関係を新たにつくることが重要である。『つながり』の再構築」として提示されたのが、たんぼぼホームを囲む様々な人々や関係機関のネットワークである。まずはホームの

ある地域に住む人々。高齢化が進む地域ではあるが、またそれ故にそこで生活する子どもが増えることをとても喜び、地域の子どものとして共に育ててくれる大切な存在である。また、近隣の児童養護施設との連携、合同行事、要保護児童対策地域協議会、児童相談所、民生委員、木村さんご自身が会長をつとめられている「福岡市里親会（つくしんぼ会）」の「すだちの基金」やサロンなどの活動、「子どもの村福岡」、「青少年の自立を支える福岡の会」による自立援助ホーム「かんらん舎」、青少年自立支援室「いっしょふくおか」子どもシェルター「そだちの樹」、など、社会的養護の下にある子どもたちとその自立を支える様々な団体や機関との連携、協同は、福岡の特筆すべき特徴であるとのことである。

子どもたちとの日常は、綱渡りのような凄まじさを孕んでいる。それを素晴らしいものにしていかなければならない。文化や自然に触れさせ、学習支援をし、対人関係等様々な能力を身につけさせる。実親の抱える問題をも丸ごと受け止め、その子どもに最も望ましい関係のあり様を模索しつつ、関わる。里親になるとは、自分の度量、器の大きさ、懐の深さが問われることだという言葉からは、その厳しさと共に、改めて木村さん、そして木村さんと共に養育に携る奥様やご子息、関係の方々の人間力の大きさを感じた次第である。

実親との関係、子どもの気持ちやその現れの実際など様々な具体について、また関係諸機関との連携などについて質疑が行われた。学校の教師の「君は輝いているよ！」という言葉によって救われたA君の話は、非常に深く私の心に刻まれている。

(文責：野々村)



子どもの育ちを支える協同関係の構築にむけて

2011年10月15日（土）

日置真世氏をお招きして ー公開講演会&研究会ー

「子どもの育ちを支える協同関係の構築とは ー地域の声から始まる“場づくり”の
実践からー」（2011.10.15@九州大学人環会議室／教育系会議室）

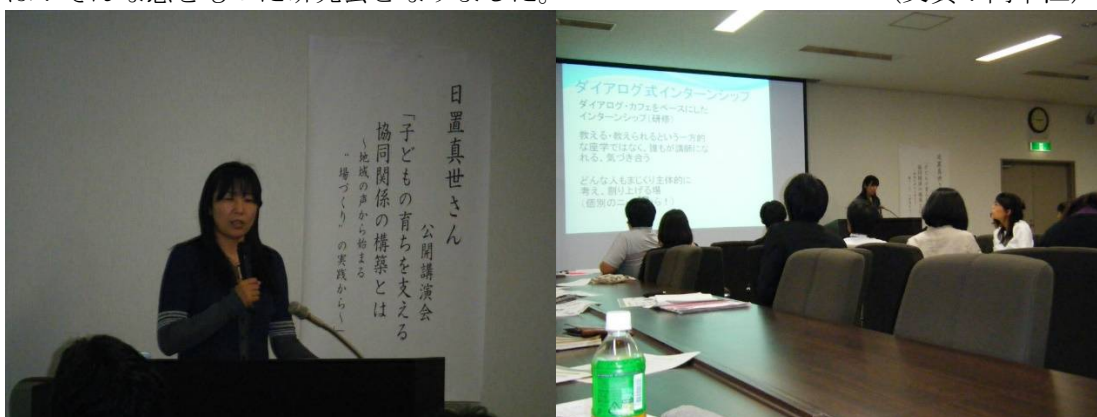
10月15日、初の県外講師として日置真世さんをおまねきし、第一部：公開講座、第二部：研究会、第三部交流会と終日にわたる研究協議の場をもたせていただきました。日置さんは北海道釧路市で、長女の障がいをきっかけに親の会活動にかかわり、その延長上で2000年NPO法人地域生活支援ネットワークサロンをたちあげ、数々の市民活動や事業に携わってきた方です。本NPOは現在20拠点・年間予算規模5億まで拡大しています。

彼女の活動の特徴を一言で言うなら「場づくり」そして「まぜこぜ」。属性や役割による縦割りを排除し、人々の多様な想いをつなぎながら市民活動からビジネスモデルまで多様な実践をおこしていく「場づくり」をあらゆる場面で実践してこられました。また平成23年3月まで3年間、北海道大学の助教としての活動では、研究の世界と活動の世界をつなぐ役割にも踏み出されています。

既に各方面から注目されている日置さんの話を聞こうと熊本や北九州からも一般参加者が集まった当日、彼女の冒頭の一言は「子どもをというより、人を育てる場を」でした。彼女いわく自分の地域づくり実践のポイントは<①あきらめざるをえない状況からの、ニーズの顕在化><②たまり場（異なる文化の対話・協働の機会づくり）><③実験事業><④人・制度・お金・つながりを活かす>とのこと。とりわけ「たまり場」（≒共有の場）について、それは場所ではなく人が育つ「しかけ」または「機会」であるとして、対等な対話を重んじた人と事業を育てるメカニズムが明快に語られました。また私たちの研究会に関わり深い実践として「コミュニティハウス冬月荘」、特に中3生支援の「みんなで高校行こう会」が紹介され、ビデオの向こうの中学生たちが自分の変化を語る声が印象的に伝えられました。

彼女の実践や発想は「球」のような多面性をもつだけに、まさに「多分野連携」の議論にふさわしく、講演後の質疑応答も、またその後の研究会も、組織への基本的な考え方、マニュアル化の問題、スタッフの働き方、ビジネスとの接点、果ては日置さんの生活背景まで非常に多様な論点や質問が出されました。福祉から教育まで、実践から研究まで、立場を問わずそれぞれが現在足元でかかえる課題や関心が日置実践を通して透かしだされて、思わず聴かずにいられない、といったタイプの発言が多かったのが個人的には非常に印象的でした。さらに今回同行されたNPOスタッフの高橋さんはまったくの異分野から参加し短期間で第一線スタッフへ成長したリアルモデルであり、その声は今回の会に貴重なものとなりました。

当日議論の中で何か集約的な論点が浮かび上がったわけではありませんでしたが、それぞれの生活・研究実践の深いところに迫ってくるものがあり、いったんそれぞれが時間をかけて自分の頭と手足をくぐらせてから再度議論すると新たなものが生まれていくのでは？そんな感をもった研究会となりました。（文責：岡幸江）



子どもや地域を犯罪から守るための異分野連携研究

2011年12月12日(月)

九州大学大学院人間環境学府
平成23年度

多分野連携プログラム

子供や地域を犯罪から守るための 異分野連携研究

研究会日程:
2011年12月12日(月)
13:00 ~ 15:00

会場:
九州大学箱崎キャンパス
21世紀交流プラザ I
多目的ホール

内容:
研究発表及び、議論

発表者:

両宮 護 (東京大学 空間情報科学研究センター 助教)
□ 子どもの安全と健全の両立した都市環境に向けて
—防犯まちづくりからのアプローチ—

発表者略歴:

| | | | |
|----------|---|----------|-----------------------------------|
| 2004年9月 | ~ | 2006年3月 | 独立行政法人国立環境研究所 研究補助員 |
| 2006年4月 | ~ | 2007年3月 | (独)日本学術振興会特別研究員(DC) |
| 2007年4月 | ~ | 2007年11月 | (独)日本学術振興会特別研究員(PD)((独)森林総合研究所所属) |
| 2007年12月 | ~ | 2010年10月 | 科学警察研究所 犯罪行動科学部 犯罪予防研究室 研究員 |
| 2010年4月 | ~ | 2010年10月 | 東京大学空間情報科学研究センター 客員研究員(兼務) |
| 2010年11月 | ~ | 現在 | 東京大学空間情報科学研究センター 助教 |

いくつかの凶悪事件をきっかけに、犯罪からの子どもの安全は、社会的イシューとなった。都市計画分野もその例外ではなく、「防犯まちづくり」の名の下で様々な取り組みが各地で行われている。その一方で、子どもの被害防止を目的に行われる取り組みが、逆に子どもの自由を奪い、健全な育ちを阻害しているとの指摘もなされている。本発表では、発表者がこれまで取り組んできた研究や実践の例を紹介しつつ、「安全」と「健全」の両立したまちづくりの方向性を参加者らと議論することを目的とする。

2012年も定期的に研究会を予定しております。定期的な研究会参加希望者の方は下記までご連絡下さい。日程等が決定次第、連絡をさせていただきます。

窓口 : hiruandon.pmobile@gmail.com (担当: 杉野)

Multi-disciplinary Cooperative
Research Program
Graduate School of
Human-Environment Studies
Kyushu University

子供や地域を犯罪から守るための
異分野連携研究

研究会参加者募集



人間諸科学における『進化心理学』の位置

2012年1月21日(土)

「人間諸科学における『進化心理学』の位置」第三回研究会

2012年1月21日(土)15:00-17:00

教育心理棟 2F 心理演習室

要求に応えるチンパンジー、自発的に助けるヒト
～進化の隣人にみる利他行動の進化的基盤～

講演者：山本真也先生

(京都大学霊長類研究所・京都大学野生動物研究センター熊本サンクチュアリ)

出席者は15名であった。

協力や利他行動の進化的起源はヒトの本性を理解する上で重要なトピックであり、比較研究・発達研究の進展によって近年特に注目を集めている。話題提供いただいた山本先生は、チンパンジーの自発的な利他行動を実験的に示し、同時に、その特徴を分析することでヒトとの相違をあきらかにするモデルを提案している。講演では、その内容や経緯について紹介いただくとともに、最近展開している、コンゴ民主共和国での野生ボノボの研究や、ヒト・チンパンジーの比較にボノボを挿入することの意味についてもご紹介いただいた。山本氏の講演を受けて、協力行動、利他性、向社会性の起源について、参加者らがもつヒトでの発達研究の知見とも絡めて、突っ込んだ議論がなされた。

山本氏には、講演後も、参加学生らの研究紹介や、データに関する議論にもご参加いただき、長時間にわたって有意義な機会となった。

建築災害と生理・心理

2012年3月5日(月)

ワークショップ

「温暖化環境下におけるコンクリート品質の確保」

2012年3月5日(月)

都市・建築学部門大学院 GP2 階会議室

| | |
|-------------|-----------------------|
| 9:00~9:45 | 大川裕 (大川技術士事務所) 講演 |
| 9:45~10:30 | 神代泰道 (大林組技術研究所) 講演 |
| 10:30~11:15 | 林直亨 (九州大学健康科学センター) 講演 |
| 11:15~12:00 | 湯浅昇 (日本大学生産工学部) 講演 |

子どもや地域を犯罪から守るための異分野連携研究
2012年3月19日(月)

九州大学大学院人間環境学府
平成二十三年年度

多分野連携プログラム

子供や地域を犯罪から守るための
異分野連携研究

□ ゲストスピーカー □

荒井 崇史 (筑波大学人間系 特任助教)

□ 演題 □

犯罪情報と犯罪不安

何が不安をもたらし、不安は何をもたらすのか?



犯罪が社会問題として重要な位置にあり、犯罪不安に関する研究も多く見られる欧米とは違い、日本では、犯罪不安に関して十分な検討がなされていない。こうした背景のもと、本発表では、犯罪情報への接触がもたらす犯罪不安の形成に焦点を当てた研究の例を紹介しながら、子供や地域を犯罪から守るために、犯罪不安に対して我々がどのようにアプローチ出来るかを議論することを目的とする。

日程: 2012年3月19日(月)
15:00 ~ 17:00

会場: 九大箱崎キャンパス
建築学科
建築1番教室

内容: 研究発表及び、議論

窓口: 杉野弘明(御連絡は
下記までお願いします)

今後の定期的な研究会参加希望者の方は下記までご連絡下さい。
日程等が決定次第、連絡をさせていただきます。

窓口 : hiruandon.pmobile@gmail.com (担当: 杉野)

Multi-disciplinary Cooperative
Research Program
Graduate School of
Human-Environment Studies
Kyushu University

子供や地域を犯罪から守るための
異分野連携研究

講演会参加者募集



1-2-3. 2012年度多分野連携プログラム

子どもや地域を犯罪から守るための異分野連携研究
2012年7月21日(土)

九州大学大学院人間環境学府
平成二十四年度
多分野連携プログラム

Multi-disciplinary Cooperative
Research Program
Graduate School of
Human-Environment Studies
Kyushu University

子供や地域を犯罪から守るための
異分野連携研究

子どもや地域を犯罪から守るための異分野連携研究 子どもと犯罪を考える心理学



□ ゲストスピーカー □

小泉 令三(福岡教育大学 教授)

□ 演題 □

加害と被害防止のための対人関係能力育成プログラム
— SEL-8S学習プログラムの開発と実践 —

□ ゲストスピーカー □

大上 渉(福岡大学 准教授)

□ 演題 □

児童自立支援施設における再犯防止プログラムSEL-8Dの実践

子どもの犯罪被害や問題行動の予防と健全育成、再犯防止のために、欧米を中心に周囲の人との人間関係づくりと感情・情動の制御に着目した教育プログラムが注目されている。それらのプログラムは総称として「社会性と情動の学習」(SEL)と呼ばれるが、本研究会では、そのSELの概念を活かした、一般の小中学生を対象とした対人関係能力向上と自尊感情の育成に重点を置いた学習プログラムである「SEL-8S」と、非行少年の情動的知性を育成・向上させるトレーニング法(心理教育プログラム)「SEL-8D」について、それぞれ実践と研究を行われている先生をお招きし、その成果や課題についてご紹介頂いた上で、議論を行っていく。

日程: 2012年7月21日(土) 15:00~17:00

会場: 九州大学箱崎キャンパス
国際ホール(留学生センター1F)

窓口: 杉野弘明

申込み: 配布資料準備のために参加者数の事前把握が必要です。氏名、所属、連絡先を下記アドレスまでお知らせください。
bouhan2012@gmail.com (杉野)



講演会参加者募集

今後の定期的な研究会参加希望者の方は下記までご連絡下さい。
日程等が決定次第、連絡をさせていただきます。窓口: bouhan2012@gmail.com (担当: 杉野)

学校トイレで多分野連携アプローチの可能性をさぐる
2012年11月8日(木)



九州大学大学院人間環境学府 平成24年度
多分野連携プログラム
(通称：九大人環「学校トイレ研究会」)

学校トイレの環境学

会場：箱崎文系キャンパス 講義棟204教室
研究会の日程：2012年11月8日[木]
講演会 13:00～14:30
協議会 14:50～16:00
ゲストスピーカー：古川 浩代 講師 (TOTO 株式会社 パブリックリモデル営業推進グループ)

本研究テーマは学校トイレという施設の問題に留まらず、子どもの教育や心理、健康面に
関わる学際的な課題です。しかし、異分野相互の連携による学際的研究の蓄積は未だ十分で
はなく、これからの取り組みが期待されている状況です。

そこで本プログラムでは、各分野における研究の到達点や課題を相互に理解するために、
定期的に研究会を開催し、担当教員や所属院生・学生による話題提供、場合によってはゲス
トスピーカーによる講演を通して、これまでの分野の枠組みを越えた議論を行い、今後の学
校トイレのあり方を考えるための新たな視座や方法を探求します。

今回は、豊富な研究蓄積を有している学校のトイレ研究会事務局より、講師の先生をお招
きしました。活発な意見交換の場となることを願っております。是非ご参加ください。



参加者募集中!

窓口：motokane.masahiro.720@m.kyushu-u.ac.jp (担当：元兼)

多
分
野
連
携
ア
プ
ロ
ー
チ
の
可
能
性
を
さ
ぐ
る

Multi-disciplinary Cooperative
Research Program
Graduate School of
Human-Environment Studies,
Kyushu University

子どもの育ちを支える協同関係の構築にむけて 2012年12月15日（土）

公開講演会&研究会

2012年12月15日 於：教育システム専攻 社会人演習室
「地域包括支援ネットワークの現状と課題 大牟田市の事例から」
特別養護老人ホーム鐘ヶ丘ホーム 岡山隆二氏
(元大牟田市役所中央地域包括支援センター)

今回は、公開研究会として、元大牟田市役所中央地域包括支援センターの岡山隆二氏をお招きし、大牟田市での活動事例をもとに、高齢者を中心とした地域包括支援ネットワークの成果についてお話しをうかがいました。

本研究会では、子どもの育ちを社会的に支えるために必要な環境、その存立、維持条件などについて検討を重ねてきました。子どもは、異世代の多様な人々が暮らす地域のなかで生活し、成長し、その地域を支える一員となっていきます。しかし、このいわば当然のことが、なかなか実現できず、子どもは家族や学校のなかに、いわば閉じ込められている事態となっているようです。子どもだけに限らずそれぞれの世代が、ごく小さな範囲のなかで閉塞し、個人化状況が進む中で、大牟田市では、これまで高齢者だけの問題として捉えられがちであった認知症の方々を、多世代の交流を図りながら地域全体で支える取り組みを進めています。岡山氏は、絵本を使った子どもたちの認知症理解を深める取り組み、小中学生も参加する高齢者等 SOS ネットワークによる徘徊模擬訓練といった取り組みを紹介されつつ、認知症コーディネータという独自資格制度、小規模多機能型施設と地域交流施設の併設など、認知症に対する理解を深める取り組みを構造的に支える体制づくりが展開されてきたことを強調されました。

こうした取り組みは、地域包括ケアのモデルとも考えられています。地域包括ケアは、個別のニーズに対応した生活を支えるサービスが提供されること、保健医療と福祉サービスの福祉専門機関の連携はいうまでもなく、町内会自治会、老人クラブ、婦人会などの地域組織、学校、企業、ボランティア、NPO といった中間集団が関係を深めていくこと、そして、地域に暮らす人々が地域の福祉課題に気づき、自らの問題として考えていくこと、などによって実現されると考えられています。岡山氏は、これらの点をふまえて、認知症問題はあくまでもきっかけであり、地域社会の再構築を図ること、いわば、認知症を柱にしたまちづくりが求められていると指摘され、大牟田市の地域包括ケアの方向性を提示されました。報告後の質疑応答でも、実に様々な論点が提示されました。

大牟田市は、石炭産業の衰退に伴う急激な人口流出によって、いわば強いられたいええる高齢社会状態にあるといえますが、こうした社会的な背景のなかで、子どもを含め様々な世代の参加と協働をキーワードとした地域包括ケアの現状と課題が浮き彫りとなる貴重な機会となりました。





建築災害と生理・心理
2013年2月27日(水)

平成24年度九州大学大学院人間環境学府

多分野連携プログラム「建築災害と生理・心理」関連事業

村上正浩氏公開講演会 参加者募集

本学人間環境学研究科OBで、現在は工学院大学准教授として御活躍中の村上正浩氏をお招きし、お話をうかがいます。

2013年2月27日(水)

13:00～16:00

九大箱崎キャンパス建築学科建築1番教室(1F)にて

演題「地域防災拠点としての大学」

工学院大学はいま、新宿キャンパスを都心型地域防災拠点、八王子を郊外型地域防災拠点として、学生・教職員を災害ボランティア勢力とすべく、防災士育成をはじめ、防災・減災をテーマとした社会貢献教育に乗り出しています。

また、東北福祉大学、工学院大学、神戸学院大学のTKK連携プロジェクト「防災・減災・ボランティアを中心とした社会貢献教育の展開」が2009年度から文科省に採択されており、村上氏は、これらの防災プロジェクトの中心的人物として指導に当たられています。

防災は本来、学際分野であり、文系の人と理系の人の連携が重要な分野ですので、まさにそうした活動を実践している村上氏のお話は、本学の人間環境学府にも大いに参考になるものと思われます。

ご講演終了後に時間を取って、ディスカッションを行う予定としています。

関心のある方々、学生さんにもお声がけをいただいで、積極的にご参加くだされば幸いです。

問い合わせ先 seike@arch.kyushu-u.ac.jp
(担当窓口・清家 規 / 都市・建築学部門)

1-2-4. 2013年度多分野連携プログラム

水俣を通じて人間と環境の関係を考える

2013年5月実施

飯嶋秀治・岡幸恵・眞千賀子

文脈

1956年の水俣病の公式確認から2013年で57年にもなる。熊本県内では小学校時代に訪問し、しばしば報道もされる水俣も、熊本県外では「過去の事件」のように考えられていることが多い。ところが「工場の環境汚染によって食物連鎖を通じて起こったこと」「胎盤を通じて胎児性水俣病が発生したこと」で「人類史上初の事件」[原田 2004: 12、13]と言われる水俣市には、57年生き続けてきた胎児性水俣病患者の人びとが暮らしてきている。

問題は一面的ではない。

水俣市には山間部もあり、この事件に「水俣」という地名がつけられたことに迷惑感を持つ市民もいる。実際に水俣は山林や温泉も豊かな土地である。他方で加害企業とされる現JNC (Japan New Chisso) の主要生産品である液晶は、時計やコンピューター、ディスプレイの形で日本中の人々が恩恵に預かっているとよく、私たちは身の周りの製品を通じて、この問題に連なっているのである。

こうした問題の一つ一つをどのように扱ってゆけばいいのか。

パウロが書いた「コリントスにある神の教会へ、第一」の手紙には、「あなた方をおそった試練で人間的でないものはない。神は信実であって、あなた方が耐えられないような試練をあなた方に容認することはない。試練とともに、それを耐えることができるような出口を用意して下さるであろう」[田川 2007: 44-45] (第10章13節)という言葉があるが、試練が人間的なものである限り、出口は自動的に実現されるのではなく、人間が関わり続けることなかで姿を顕わすのであろう。実際、これまで水俣病をめぐって多数多様な関わりがあった。写真、文学、研究、映像、絵画、芝居、能、彫像などは、そうした関わりなかで生まれてきた多様な表象の群れである。

この多分野連携では、水俣病を核としてそこから生じた様々な余波 (illness experience of Minamata disease) の断片を、人間 (科学)、教育 (学)、建築 (学) それぞれの立場で人間環境の未来に向けて考えてゆきたいと思う。

実施プログラム実績

- ① 5/7 (火) 6時間目、Cafe Haco: 事前ディスカッション (学内参加者5名)
- ② 5/12 (日) 午後、九大箱崎キャンパス中講義室: 「水俣・福岡展協賛企画映像セミナー 水俣から人間環境の未来を学ぶ」 (学内外参加者102名)
- ③ 5/15 (水) 6限目、Cafe Haco: ②を受けてのディスカッション (学内参加者8名)
- ④ 5/15 (水) -27 (月)、JR博多シティ: 水俣福岡展 (チケット240枚配布)
- ⑤ 5/24 (金)、6時間目、Cafe Haco: ④を受けてのディスカッション (学内参加者10名)



ハイライト「水俣・福岡展協賛企画映像セミナー 水俣から人間環境の未来を学ぶ」

すべてのプログラムについて詳細に書くことはできないので、5回のうち最も大きなイベントとなった第2回目のイベントについて書くことにしよう。

本映像セミナーは福岡西部地区五大学連携講座の一環として、また九州大学 P&P に採用された「フィールド人間環境学プログラムへの基礎的研究」(代表：飯嶋秀治)の公開会議として、さらに人間環境学府多分野連携プログラムの一部として、NHK 福岡放送局と九州大学の共催という形をとって行われた。プログラム及び参加者は下記のとおりである。

①10時30分～12時00分

「市民たちの水俣病」上映(1997年・RKK・47分) (民放連最優秀賞、ギャラクシー選奨)

②トーク「水俣病と市民」

村上雅通(元RKK熊本放送、長崎県立大学)

萬野利恵(原田正純医師の長女)

永野三智(水俣病センター相思社)

司会進行：飯嶋秀治(九州大学)

③13時30分～14時45分

九州スペシャル「写真の中の水俣～胎児性患者・6000枚の軌跡～」上映(1991年・NHK・45分) (地方の時代映像祭優秀賞)

④トーク「胎児性患者は今」

半永一光(胎児性水俣病患者・「写真の中の水俣」出演)

吉崎 健(NHKプラネット九州支社)

司会進行：飯嶋秀治(九州大学)

⑤15時00分～16時45分

E TV特集「原田正純 水俣 未来への遺産」上映(2012年・NHK・59分)

⑥トーク「“水俣病は鏡”～原田正純が問いかけるもの」

村上雅通(元RKK熊本放送、長崎県立大学)

吉崎 健(NHKプラネット九州支社)

萬野利恵(原田正純医師の長女)

永野三智(水俣病センター相思社)

司会進行：飯嶋秀治(九州大学)

このイベントに関してはその5月10日『毎日新聞』、5月11日 RKB 毎日放送ニュース、5月12日『毎日新聞』、5月13日『朝日新聞』で紹介された。なので、本プログラムは、対外的にはまずまずの成功を収めたと言ってよからう。

また、以下には当日のアンケートでの回答15件、SNSメディアでのコメント3件、イベント後に岡幸恵の授業履修者から寄せられたコメント18件、最後に飯嶋秀治に個人的に寄せられたコメント4件で延べ40件を掲載する。

1) アンケートでの回答

| | |
|---|---|
| 1 | 水俣は日本の中でいろいろな意味で希な条例を備えた地域であると感じる。 我々にとっては2つの集落を壊滅状態に追いやった大水害の発生した地域であり、この時の土砂流災害は私の目から見ても発生したのは自然現象そのもので、立地に制約がある以上、被害ゼロというのはありえないという気がした。 災害の際に被害にあいやすいのは、いろいろな意味での弱者であるが、我々は罹災者のステレオタイプ化を厳に慎まなければならないと思う。 人間は世界に意味を見つけようとする動物であり、自分の見たいようにしか世界を見ようとしていない存在でもある。 今日、半永さんを拝見する機会を頂いたのは非常に得がたい体験をさせていただいた。人間と |
|---|---|

| | |
|----|---|
| | <p>いうのはよくできたもので、半永さんなどは毒物のせいで、通常の間が持つ能力を持ち合わせていない部分もあるが、逆に平常の間が持ち合わせない鋭い感覚等を備えているのでは、と感じさせられるところがあった。</p> <p>講師紹介の中の永野さんの紹介で、「迷惑をかけない」「自立する」が美徳かどうかということ「安心して迷惑をかけあえる社会」ということに共感を覚えた。</p> |
| 2 | <p>「市民たちの水俣病」の内容から見られる個々の感情の複雑さは、誰にでも内包していることであり「きっかけ」があれば、吹き出すものでしょう。</p> <p>一番大切な所が複雑さの中でぼやけてすり替っていく流れは、まさに福島の問題と同じですね。永野さんの「もだいかせ(?)」非常に共感を覚えます。</p> |
| 3 | <p>2011年飯嶋先生の授業や社会調査を通して、水俣病は海の汚染によって引き起こされた有機水銀中毒ということがわかりました。その後、集中講義で、水俣病のことをもっと深く理解しました。患者たちの苦しさや努力などを感動する時に、たくさんの方の関心者や支援者の私心のない援助も深く心を打たれました。きょうの映像セミナーで、吉崎健様、萬野理恵様、石牟礼道子様などを、水俣病に、特に患者たちにずっと支援する人達を伺いました心から感謝いたします。</p> <p>水俣病事件は、深い苦難ですが、そこには、さまざまな困難を乗り越え信念を貫く生き方、特に半永一光様、金子雄二様、坂本しのぶ様などの患者たちと支援者、原田正純様の友情は、人を思いやる心や人と人との美しい関係も、日本の国民の間に、確かに存在していると思います。</p> <p>水俣病事件の真実と意味を明らかに解決することは、日本だけではなく、人類の未来にとって重要な意味もあると思います。きょうの映像セミナー、大変勉強になりました。ありがとうございました。</p> |
| 4 | <p>飯嶋先生の今期の文化人類学講義を受講している縁で参加させていたがきました。名称は耳にしたことのある「人間環境学」が何を狙っているのかを体験するというのも主目的です。</p> <p>今回受講してみて、水俣地域の問題だけでなく、地方と中央との間の意識的断絶が浮き彫りになりました。水俣病の原因をめぐっての学会における熊大説への圧力や、水俣をなかなか特集しようとしなかったマスコミ上層部が典型例です。ここで、地方中核都市である福岡が、九州代表として東京と地方を橋渡しするのに適任ではないかと思われまます。東北の場合、仙台からの発信が重要になってくるのかもしれませんが。</p> <p>結びに、人間環境学への期待・要請として、水俣や福島などの国内外諸地域の問題を学際的に研究することで、教訓を成果物として一般に公表すると共に、風評被害などの社会病・二次災害を社会科学の観点から「防災」できないかを模索することを提言致します。</p> |
| 5 | <p>良くも悪くも影響を与えるのがメディアです。客観的な事実を伝え続けて下さい。</p> |
| 6 | <p>自分が水俣病について何も知らなかったことを知らされました。カルテの裏側を知る。見てきた方々の生の声を聴くことができたのは大変貴重な時間でした。</p> <p>そして力をもらえました。</p> |
| 7 | <p>今まで私は水俣病事件に向き合うことを避けてきたというのがあります。苦しんでいる人がいることは何となく知っていましたが、今の状況を知ろうと行動したこともなく、「終わったことであるとは保障の問題」と考えていたと思います。今日この場にいられて本当に良かったです。(個人的なことですが、「中立」ということへの原田正純先生のお考えに、心救われる思いがしました。社会的な力を考えることなしに形式的な中立をとることがどれほど強者の味方になることになるかということに改めて気づかされました。)</p> |
| 8 | <p>映像トークしっかり見させてください聞かせていただきました。</p> <p>半永君の「生きていること」を知ってほしい思い、原田先生の「出会った者の責任」私も出会った者としての責任を私にできるだけの思いで果たしたいと思います。</p> <p>ありがとうございました。</p> |
| 9 | <p>水俣地域の農業振興計画を考えた時期があります。</p> <p>問題の所在は知りながら何もしようとしなかった1960年代の私たちの学び方について、今大いに反省しています。</p> <p>「専門バカ」になろうとして、なりえない人生を送り続けていますが、いい勉強をこの二日間させていただきました。</p> <p>箱崎だからこれだけしか集まらなかったのか、伊都や堅粕・大橋キャンパスならどうだったんだろうか。</p> |
| 10 | <p>午後からの参加でしたが、充実した時間でした。</p> <p>私自身何が出来るかと問われれば、おそらく何も出来ずに終わるでしょう。村上さんや吉崎さん、飯嶋さんに期待するところ大です。</p> <p>私は水俣病事件について少し詳しく知り得ただけですが、とても必要なことだと思います。いつ</p> |

| | |
|----|---|
| | かどこかで種がまけるかも... |
| 11 | <p>熊本県内の水俣市外の人の、水俣病への向き合い方はどういったものだったのだろうと思いました。熊本市出身の萬野さんのお話の中で、水俣市民にもチツソにも良い印象がなかったという話が心に残りました。その一方で、他県民から見たとき、水俣市民とそれ以外の熊本県民との間に、印象の違いがあったのだろうかと思いました。熊本県民との間に、印象の違いがあったのだろうかと思いました。また、水俣市外の熊本県民の中で、自身も水俣病にかかる（もしくは、かかっている）かもしれないという不安があったのだろうかとも、思いました。</p> |
| 12 | <p>とても衝撃的な講演会でした。 水俣病というのは自分にとって教科書に載っている公害の1つという認識でした。本当に自分には関係のない話だと思っていました。 しかし、今日話を聞いていて感じたことは、水俣病というのはとても複雑な問題だということでした。患者の方々が病気だけでなく、家族、親せき、市民から敬遠されることに苦しめられている話を聞いたときに胸がしめつけられるような思いがしました。 自分の居場所がないつらさ、自分をいつわって生きていくつらさというのは自分も経験したことがあります。同じ悩みをもっているということを知って、とても近くに感じることができました。今までは何の知識もなく外見で避けていましたが、その壁を今日の講演でつぶしていただけた気がしました。</p> |
| 13 | <p>・胎児性水俣病患者のことをよく知らなかった。全部話し内容が聞けて、新聞も読め、字も書けるという事実を知らなかったのは恥ずかしかった。半永一光さんの姿を見て認識を新たにできた。 ・水俣病のことをジャーナリストが伝えてくれているが、私はよく知っていなかった。一般人にもこれから、追跡したニュースを作って伝えていって欲しい。</p> |
| 14 | <p>「水俣病」の歴史についての映像であると同時に、それに関わった方々の人生をも見せていただいて自分の人生や生き方をふりかえらざるをえない場でした。 登壇者の方々も、弱い部分をさらけだして、ゆれながら、今の場に出てこられているところに共感でき、考えさせられました。 大変感じ、ゆさぶられることがあるセミナーでした。 ありがとうございます。</p> |
| 15 | <p>水俣病患者に対する認識を大きく変えなければならないと感じた。今まで水俣病と言えば教科書などでしか目にせず、どこか昔の話のように思っていた。 しかし、今でも水俣病の患者達は自分達の存在を訴え続けており、それは現代の人たちに、水俣病から学ばなければならない、そしてそれを今後の人生に生かして欲しいというメッセージが込められているように感じた。今日実際に半永さんとお会いして、上手く表現は出来ないにしても、考え方や意志は人並以上にしっかりしていて驚きだった。そこから自分の認識が間違っていたことを反省した。これから私が考えなければならないことは、水俣病患者の存在、水俣病患者とはどういう人達か、そこから何を学びどう生かしていくのかの3つではないかと思う。</p> |

2) SNS メディアでのコメント

| | |
|---|---|
| 1 | <p>水俣・福岡展協賛企画 映像セミナー「水俣から人間環境の未来を学ぶ」 in 九州大学に来ています。出足が遅くなりましたが、素晴らしいセミナーに心洗われています。まだまだ 16 時 45 分まで開催されていますので、是非箱崎九大前より文系キャンパス中講堂にお越し下さい。</p> |
| 2 | <p>昨日、水俣・福岡展の協賛企画としての九大での映像セミナーに一部参加しました。 何にも知らないことだらけでした。 水俣病事件終わったことではなく、未だに苦しんでいる人ももちろんいるし、被害者と周囲との関係が時間の経過とともに悪化したり、理解しあっていたり、単純にチツソの流した有機水銀で患者が苦しんでいるということではありませんでした。 とても簡単に説明できませんが、水俣で起こった様々な悲劇を検証していくことで今後起こりうるこのようなことの対応の指針になるのではないかと受け止めています。</p> |
| 3 | <p>水俣 福岡展企画 映像セミナー「水俣病を撮る」すばらしすぎる内容でした。 あああ、ここまでの講演内容はなかなかないのでは。 ドキュメンタリー作家の、村上雅道さん、吉崎健さんがそれぞれ原田正純先生にまつわる話の中で、「医学においても、ジャーナリズムにおいても、中立ということはありません。」そのことを深く教えられた、と仰っていたことが胸に響きました。 ほんとに。今、そのことが市民の一人ひとりに問われているのだと思います。 永野三智さんの渾身のお話も、体をつらぬく。 人生をかけて伝えてくれる、一人ひとりの方に、本当に感謝します。</p> |

飯島先生、お疲れさまでした！ありがとうございます！

3) 岡幸恵の授業履修者から寄せられたコメント

| | |
|---|--|
| 1 | <p>「水俣から人間環境の未来を学ぶ」を通して</p> <p><u>水俣病の問題</u></p> <p>原田正純先生は「痛み苦しみを聞いてくれる相手を水俣病患者は求めている」とおっしゃった。原田先生を含めた水俣病の対策チームは当初、一軒一軒水俣病患者の自宅を回り、その際には差別を恐れて断られることも多かったそうだ。この「差別」は水俣病の大きな問題のひとつであろう。ゲストの水俣病センター相思社の永野さん体験として語られていたことが印象的だった。永野さんは水俣病患者（名前は失念）がおり、幼いころよく自宅に来訪し遊んでもらっていたそうだ。家に水俣病患者がよく来ている、このことを小学校にあがると友人らからバカにされるようになったという。友人と下校中にこの水俣病患者とすれ違った場面である。友人がこの患者の歩き方を面白がるようにまねていて、永野さんはこの時友人に合わせて真似をするか、もしくは友人を注意するのかという大きな選択を迫られたそうだ。永野さんは、友人に合わせて真似をする選択をして、それを見た患者さんはその場で泣き崩れてしまい、その光景が永野さんは忘れられないそうである。この「水俣病の差別」は水俣病が発生した 1950 年代からおよそ 40 年経ってもなお（永野さんは 20 代後半ということ）色濃く残っていることがこの話から伺える。水俣病患者が苦しんでいるのは病気の症状だけではない、生きていくそれだけで周囲からの様々な圧力に苦しめられているのかもしれない。そのような多くの苦しみを抱えた患者さんにとって、痛み苦しみを聞いてくれる原田先生の存在の大きさを感じた。</p> <p><u>“病気”という位置づけ</u></p> <p>映像の中で、原田先生は「水俣“病”として、“病気”と位置付けているのには抵抗があった」とおっしゃっていた。これは、チツソの垂れ流した有機水銀が魚などの食物を通して人間の体内に入って引き起こされた症状なのだから、病気というよりもむしろ、傷害や殺人と同じだということである。この言葉には、私自身強いショックを受けた。“病気”というのは身体に“異常”が生じた状態であるが、原因がヒトが生み出したものだと明らかにわかっており、病になったというよりはむしろ他人から傷つけられた状態であるという表現の方が適切である水俣で被害を受けた方々を“異常”であると認めていることになるからだ。このような“異常”な認知を当たり前のものとしている自分自身の認識のなさにショックを受けたのである。先述した内容と重なってくるが、差別的なラベリングはこうした無意識下にも行われているのだということを感じた経験となった。</p> |
| 2 | <p>水俣だけではなく、福島だけでもない—映像セミナー「水俣から人間環境の未来を学ぶ」に参加して—</p> <p>2011 年 3 月に起こった福島原発事故は今でも多くの日本人が記憶している事だろう。多くの人が住まいを追いやられ、仮設住宅での生活や他県での生活を今でも強いられている。そこに対して決して少ないとはいえない日本人が行動を起こしてきた。反原発を訴えるデモ、避難者への支援、反原発映画などなど。数を挙げればきりが無い。賛否両論ある活動だが、意味がない・影響がないとは言いが切れない。実際にその事故を受けて人々が動いている様子はその事故の影響力を物語っていると言えるだろうから。</p> <p>水俣病という「事故」はどうだろうか。その「事故」はもう終わったものだと感じている人が意外と多いのではないだろうか。水俣病患者はもう生きていないかのような、遠い昔のような印象を受けていたのは私だけだろうか。映像の中にいらした原田医師の話を受けて言葉を選ぶのなら、「水俣病事故」なのだと私は感じた。自然環境で患うことのない病を生み出したという事故なのではないかと。この「事故」が起こったのは戦後のことであるのに、私には原爆投下よりも薄い記憶であった。原爆による被爆者も少なくなっているが、まだ最近のことだと感じているのに、「水俣病事故」はもっと昔のような気がしてしまう。それは単なる興味関心の問題だろうか。個人の関心の有無だろうか。</p> <p>原爆による被害に関しては、毎年夏になるとまるで儀式かのように特別番組が制作され、メディアでは式典を取り上げ、国内のトップニュースとして扱われる。数は少なくなっているが、季節報道として残っている。しかし「水俣病事故」についての報道はどうだろうか。</p> <p>原爆での被爆者の扱われ方はどこを見ても一様である。『戦争による犠牲者だ—』アメリカによって落とされた原子爆弾が一般市民を苦しめているという大きな構造の中で成り立っている。その中に、被害者と加害者を明確に区分し、扱っているのではないだろうか。国内にいるのは被害者のみ。それが報道を容易にしていると感じる。それでは「水俣病事故」はどうだろう。日本人が豊かになるための高度経済成長においてチツソが排出した水銀まじりの水。それが結果的に</p> |

| | |
|---|---|
| | <p>水俣病という病気を生み出す「事故」につながった。国内に加害者と被害者が混在している状況。ここで中立を図ろうとしたマスコミは報道に慎重になっていないだろうか。原田医師は語った。「真の中立とは圧倒的弱者の味方になることだ」と。</p> <p>福島だけではない。水俣だけではない。広島、長崎だけではない。四日市も、新潟も、富山もまだまだあるはずだ。平和に見える日本だからこそ、このような問題が山積みになっているように見えるのではないだろうか。この山積みになっている問題を私たちがどう見つめ、どう介入していくのかという事がこれから期待される事項なのではないだろうか。</p> <p>学生はなぜ無関心なのか。学生こそもっとも興味を持つべきではないのだろうか。私たち学生という特殊なモノについても考える機会であった。</p> |
| 3 | <p>水俣フォーラムの感想</p> <p>5月12日に箱崎キャンパスにて水俣フォーラムが行われた。私は午前中の第一部に参加したので、その簡単な感想をまとめていく。</p> <p>本フォーラムの中では、水俣病に苦しんだ水俣病市民について、ただ病気の一面ではなく、水俣社会における様々な構成要素から話がなされた。私の中で最も衝撃的だったのは、水俣病に対する市民の意見が一様ではなかったという事だ。私達の世代において、水俣病というものは、四代公害病として教科書の中でのみお目にかかるものだ。ゆえに、その問題について説明を求められると、「工場排水によって海が水銀に汚染された、そこで取れる魚を食した人々が水俣病にかかり、その認定患者問題が現在も続いている。」という程度の説明にとどまる。そして、私たちはその説明が不十分であるという事をほとんど認識していない。</p> <p>しかし、水俣病に対する認識や理解度は、本フォーラムを通して大きく進展したように感じる。これまで、水俣病において「水俣病にかかっていない市民」に着目したことはなかったが、その着眼点がこの問題に対する理解を生むということを実感した。私のこれまでの認識では、水俣の市民はみな水俣病の恐怖におびえながらも、この問題を起こしたチッソと戦ったのだらうと思っていた。それはおそらく私だけではなく、私と同年代の若者の認識はほとんど私と同じなのではないだろうか。しかし、現実には水俣病にかかってしまうことを訴えるのではなく、逆に家族から患者が出ればそれを隠し、時として、その患者をも恨むという現状があった。それには、チッソという会社が水俣の誇りであったこと、家族から患者を出すことで差別の対象となることなど、様々な要因が折り重なった結果であった。</p> <p>今日、それらの内容が私たちの下に広く伝えられる機会は少ない。先にも述べたとおり、私たちが知るのには認定患者の問題くらいだ。しかし、発生から約50年たった今でも、その時市民の間にできた溝が完全に埋まったわけではなく、また自分、また家族が水俣病であることを打ち明けられずにいる現状というのは、その解決に向かう難しさと、またその解決はどのような形で行われることが最もよいという理想像が描き切れない現状だ。様々な対立があったように、この解決がどのような方向に進むことが望ましいのかを決めてしまうことはできないのだ。</p> <p>しかし、私たち若者世代にこのような現状を正しく伝えていくということを絶やしてはならない。ある意味、人間の根源的な部分が変わらなくなった事件だからこそ、一見平和に見える社会に生きる私たちは知っておく必要があるのではないだろうか。</p> |
| 4 | <p>市民と水俣病</p> <p>水俣病、と聞いたときに私たちは教科書で習った過去の出来事であるという認識を覚える。既に過ぎ去った出来事であり、それがどのような影響をもたらしたとて、まるで今現在の人々には影響がないのではないかという甘い認識だ。私は今回、この水俣病のお話を聞いたことでこの自らの認識が大変恥ずかしいものであると実感したと同時に、改めねばならないと強く感じた。</p> <p>例えば私が水俣病で感じていた勘違いのひとつに、公害の原因となっていた化学工業会社『チッソ』は私は水俣では当時からまるで悪党かのごとく扱われているものであると思っていたのだが、それは全くの間違いであり、水俣を大きく支える会社であった『チッソ』はそこに入ることがステータスであり、登壇者の言葉を引用して説明するならば「合コンするならチッソの男の人としたかった」と言われる存在であったという。だからこそ当時、問題が発覚した後もその羨望のイメージからには信じられないと思われていたというのだ。そして現在も『チッソ』は経営を続けており、静かに賠償金を払いながらも経営を続けている。調べてみれば、この『チッソ』を母体会社として、私たちの知っている有名な会社『旭化成』、『積水ハウス』などは存在しているという。どれだけ権威があり、大きな会社であったかを物語るひとつのエピソードともいえる。</p> <p>そのことを思えば、水俣病を引き起こした会社がそのような居るのだから水俣病は終焉したと信じられるかもしれない。しかしそれは全くの間違いであり、水俣病は終焉していない。むしろ、終焉しないものであると私は感じた。</p> <p>水俣病の後遺症で現在も苦しんでいる人々は多く存在する。またそれはただ症状が出るだけで</p> |

| | |
|---|--|
| | <p>なく、自らが認定患者であることを子供にまで隠し通し、その最後に自殺してしまう患者もいることを知った。水俣病は、その風評被害から他地域との溝を作るだけでなく、家族のなかにまで大きな溝を生み出すものであった、そして今もあるのだ。水俣病は『ミナマタ』という名で、広く世界にも知らしめられた。被害者はひたすら早くその風評被害が終わることを願ったが、裁判が 2000 年代になってからも行われていたことを鑑みれば、それだけに遅い結論を待たされてきたかがうかがえる。</p> <p>当時の政府、行政の発表でなんの異常もないという見解から始まった水俣病は、どれだけの罪なき人々が深く傷つけられたかをもっと報道されてしかるべきである。現在、患者の血を引いた方々、当時から住んでいた方々が今も行政、会社の姿勢を問いながら日々を見つめている。もう終わったのでしょうか、と決めつけながら危機を何も感じていない私たちにその認識の間違いを今も問うてくれている。私たちはそれでもなお、何も考えずに水俣の市民をみつめられるだろうか。</p> |
| 5 | <p style="text-align: center;">水俣フォーラムの感想</p> <p>私は、今回の水俣フォーラムで原田正純先生の映像をその後のトークを聴講しました。私自身が北九州市出身ということもあり、公害問題についてはこれまで学校でも詳しく学んできたので、水俣病に関する知識もある程度は持っている方だと思っていました。しかし、今回 ETV 特集の映像を見て、まだまだ水俣病について知らないことが沢山あるのだと気がつかされました。今回のフォーラムに参加したことで、水俣病の患者に寄り添い続けてきた原田先生のドキュメンタリーはもちろん、原田先生のご家族、親しい方々のお話から水俣病について新たな視点で考えることができました。水俣病を患った方々、そしてその家族、また原田先生のように水俣病と向き合い続けてきた人達。そこには、それぞれの視点から見た様々な想いと苦悩があるのだと感じた。</p> <p>今回のフォーラムに参加して、せっかく水俣病についてよく考える機会を与えてもらったのだから、この経験が無駄にしたいと強く感じました。私に今できることは何なのだろうかと考えた時に、私が思いついたのは石牟礼道子さんの水俣病に関する本を読んだり、水俣・福岡展に行ったりしてより深く水俣病について考える時間を持つということでした。そして、その後自分が感じたこと、知ったことを家族や身近な友達に共有することができたらいいなと考えています。</p> <p>フォーラムで見せていただいた原田正純先生の映像の中には、深く考えさせられる言葉が多く出てきました。私は、中でも『被害があるところに差別があるのではない。差別があるところに被害があるのだ。』という原田先生の言葉が非常に印象に残りました。差別され、まるで人間ではないかのような扱いを受けてきた水俣病患者の方々はどうなにかに辛く、やるせない思いを抱いてきたことか。私は想像するだけでも、本当にぞっとします。水俣病は、病気というよりも殺人であるのだということを原田先生はおっしゃっていましたが、本当にその通りだと感じました。水俣病は患者達の身体に重い障害を残しただけでなく、彼らが人間らしく生きていくためのあたりまえの権利までも奪ってしまったのだと思います。そのような社会の中で、患者自身も水俣病が治らないということはよくわかっている。ただその苦しみを誰かに聞いて欲しいのと言って、原田先生が水俣病の方の話に耳を傾けていた場面は本当に胸が痛くなりました。最近のニュースで、新たに水俣病に認定された患者さんの話が報道されています。水俣病に認定されたのはつい最近の話だとしても、その方が水俣病と闘ってきた歴史はとてつもなく長く苦しいものであったのだという事実を我々は忘れてはならないのだと思います。また、胎児性水俣病の問題等、まだまだ水俣病の認定されることもなく、うもれている被害者の方々が多くいるのだということはこれから先も早急に変化することではありません。今回フォーラムに参加して、水俣病は永遠に完結することのない問題であり、いつまでも忘れてはならない問題なのだ改めて感じました。水俣病問題のような大きな問題で、私一人が出来ることはあまりないかもしれませんが、せめて今回のフォーラムに参加して抱いた感情を忘れずに、何か少しでも出来ることを探して行動に移していきたいと思えます。</p> |
| 6 | <p style="text-align: center;">水俣フォーラムの感想</p> <p>5月12日、私は水俣フォーラムに参加をさせていただいた。ビデオ鑑賞とトークを含む非常に密度の濃い1時間半のフォーラムを通して、私が心に思い浮かべたのは、「責任」という言葉である。</p> <p>水俣病という名の通り、熊本県の水俣で発生したこの病は、発生が確認されてから50年以上が経過している。言い訳に過ぎないが、そうした時間的な距離があり、私は水俣病を遠い存在としていた。しかし、水俣病はここ九州で発生したものであり、今もなお苦しんでいる人々がいる。私にとって、水俣病は決して遠い存在ではなく、目を背けていいものではない。このフォーラムで、私はそのようなことを考えた。九州の最高学府で学ぶ者、いや、国からお金をもらってこの大学で学ばせてもらっている者としての責任を感じずにはいられなかった。聞くこと</p> |

| | |
|---|--|
| | <p>るによると、今回のフォーラム開催に尽力された飯嶋先生も、九州大学で教鞭をとる者としての「責任」から、水俣病に関わることになった、という一面もあるそうだ。水俣病患者にだれよりも寄り添い続けた原田先生も自らの「責任」を自覚できるか否か、なのだと思う。そのことに気づき、責任を多少なりとも自覚できるようになったという意味で、今回のフォーラムに参加させていただけたことは、私にとって非常に有意義であったと思う。</p> <p>さて、もう一つ大切なのは、この「責任」を自覚したうえで、どのような行動を起こしていくか、ということだ。まずなにより大切なのは、月並みではあるが、「知ること」であろう。水俣病についてきちんと知ること。理解すること。これが大切だろう。今回のようなフォーラム参加も然りである。そしてその上で、「伝えていくこと」は一つの使命だと思う。</p> <p>「水俣病についてきちんとした知識を身に付ける。そして、それを他に伝えていく。」へつい表明をして、このレポートを締めくくりたい。</p> |
| 7 | <p style="text-align: center;">水俣フォーラムに参加しての感想</p> <p>私は第一部の「市民たちの水俣病」に参加しました。私の知らなかった事実が次々と出てきて、非常に驚いたというのが率直な感想です。登壇される方々は水俣病患者を支援してきた方々ばかりだと思っていたので、みなさんのお話の中で水俣病患者に対するマイナスなイメージを持っていたことなどが明かされて、とても衝撃を受けました。私は今まで水俣市の市民の方々は全員一丸となって水俣病患者の方を救うために、チッソや国とたたかってきたというイメージを持っていました。中学校や高校で公害について学ぶことは少しありましたが、ふかいところまで学ぶことはなく、四大公害のそれぞれの名前と地域ぐらいしか覚えていなかったもので、今日聞いたことのほとんどは今まで知らなかったことばかりでした。</p> <p>一番驚いたのは、水俣病をめぐる水俣市の市民の間でさまざまな対立や差別、争い、さらには家庭の関係の崩壊があったということです。水俣病にかかってしまった人は、不可抗力で水俣病にかかってしまったのに、なぜ同じ市民からひどい仕打ちを受けなければならないのか最初は疑問でした。しかし、ビデオを見進め、村上さんのお話を聞いていくうちに、水俣病の患者に対立する市民の気持ちも少しわかってきました。村上さんは、水俣病の患者がチッソから補償金をむしり取っているようなイメージを持っていたとおっしゃっていました。それを聞いて、水俣にとってチッソという会社は必要不可欠な存在で、「チッソの崩壊＝水俣の崩壊」というような危機感が市民の中に常にあったのだらうなと思いました。またそれと同時に、市民とチッソの間に依存関係が生じているようにも感じ、もし水俣にチッソ以外にも大きな会社や団体などの何らかの存在があれば、水俣事件は違った過程で結末を生んでいたのかなと思いました。チッソという存在に依存しすぎたがために、市民の間で価値観の違いや亀裂が生じてしまったのだと思います。地域における依存関係をもう一度問い直す必要があると思いました。</p> <p>そして永野さんが「安心して迷惑を掛け合える」社会づくりを目指しているとおっしゃっていましたが、これには非常に共感しました。今の社会では「自立すること」が重んじられているし、私もそのような考えを持っていた部分があると思います、自分の今までの考え方を少し省みしました。「安心して迷惑を掛け合える」社会は心から信頼できる人が近くにいる社会だと思います。ただ迷惑をかけられるだけの関係ではなく、自己解決できる部分は自分で頑張るけど、失敗してもだれかがフォローしてくれたり助けてくれたりするという社会は理想的だなと思いました。これは水俣に限らず、どこの地域でも開催されていくべきだと思います。</p> |
| 8 | <p style="text-align: center;">水俣フォーラム 感想レポート</p> <p>水俣フォーラムで最も感じたこと。それは、「水俣病はまだ終わっていない」ということだ。もう工場からは水俣病の原因であるメチル水銀は使っていないし、水俣病に関するニュースも毎日取り上げられているという状況ではない。しかし、私は常に水俣病についての出来事の加害者とは誰なのか。水俣病の患者を社会の外に追い出したのは日本社会全体にあると思った。社会を構成しているすべての人々に責任がある。私は九州出身ではなく、熊本にはもちろん、水俣病の実情にあまりなじみがなかった。中学校の社会科の授業で少しだけ学んだだけであるが、今後はもっと関心をもたなければならぬと改めて感じた。水俣フォーラムのなかでのキーワードは「人権」であったと思う。水俣病の裁判は簡単なものではなかった。裁判にはとても時間がかかる。何十年もの期間がかかるため、裁判と戦っていた人は亡くなってしまい、自分の思いを伝えきれぬままになってしまっている。水俣病患者は他者から差別を受け、また、水俣市に住んでいるというだけで偏見をもたれる。そして、水俣住民は自分が水俣市の一員であることを他者に伝えることを隠してしまう。「社会に生きる」ということで最も大切なことは、自分の住んでいる町に適応し、誇りをもつことであると思う。そのようなことができるのが「人権」でもあると思うし、そうでなければならない。</p> <p>現在は、今回のような「水俣フォーラム」が開かれ、裁判も積極的に進められ、学校の授業で取り扱われるほど、水俣病に関して熱い動きがある。しかし、なぜ今のようなことが水俣病の当時</p> |

| | |
|----|--|
| | にはできなかったのか。私はまだその答えを見つけることができていない。当時の社会をどのように説明することができるのか。当時の社会を乗り越えてくれた人がいるからこそ、今の自分自身の「人権」が尊重されていることを忘れることなく、考えていきたいと思っている。 |
| 9 | <p>水俣・福岡展協賛企画映像セミナー「水俣から人間環境の未来を学ぶ」in 九州大学</p> <p>私は今回のセミナーの午後のプログラムから参加させていただきました。水俣の問題について歴史的な事実としては知っていましたが水俣病患者がどのような差別を受けてきたのか、またどのようにその差別と闘ってきたかなど具体的な実情については恥ずかしながらまったくと言っていいほど何も知りませんでした。世間では水俣の問題は過去の終わった出来事だと認識されがちですが、上映されたビデオのなかや登壇者のトークのなかに何度も「水俣の問題は終わっていない」とおっしゃっていました。私のように世間にはまだ水俣について事実としては知っているが実情を詳しく知らない人は多く存在すると思います。このような人たちにまだ水俣の問題は終わっていないということを知らせていくことが大切なのではないだろうかと考えました。</p> <p>「写真の中の水俣～胎児性水俣病患者・6000 枚の軌跡～」や半永さんの話から、尊重されるべきは水俣病患者の意思であるのに世間の目や社会的または政治的事情によって彼らの意思が尊重されていないということを知りました。半永さんを含めた水俣病患者の方はみんなと同じようにしっかりと自分の意思をもっているにもかかわらず他人に伝えるのが困難なだけで、強い立場のものが彼らの意思を排除して自分たちの都合のいいようにしてしまうというのに強い抵抗感を感じました。特に上映された映像の中で水俣国際会議の日本語翻訳の中に“in harmonious”の訳である「協調」が入っていないという指摘があったように、一番強調されるべきものが主催者の意思によって排除されてしまっていました。このように強い立場のものが弱い立場のものの意思を排除することについて強い違和感を感じました。</p> <p>そのことを踏まえたとき、「原田正純 水俣 未来への遺産」のなかで原田正純さんが「中立はありえない」とおっしゃっていたのが非常に印象に残りました。私はその言葉を「強い立場のものにとって中立はありえないものであるから何か問題が生じた際、強い立場のものが弱い立場のものの味方にならなければならない」と解釈しました。そのように解釈した場合、強い立場のものこそ弱い立場のものの意思を尊重し、両者の立場のものが共同していくことが大切なのではないかと感じました。</p> <p>今回セミナーに参加して、水俣病患者や同じような立場の方々に渡しは何かできるのだろうかと考えました。そのことを考えたときに私にはまだまだ知らないことが多くあるため、もっと学びを深める必要があると感じました。今後の学生生活や社会人生活を通して、もっと学びを深め、彼らのために自分には何かできるのかを考えていきたいと思います。今回のセミナーが参加していなかったら、私は水俣について詳しく知ることはなく、水俣の問題は終わったものだとして認識していたままだったかもしれません。そんな私に自分には彼らのために何かできるのかについて考える機会を与えてくれた今回のセミナーはとても有意義なもので、このセミナーに参加してよかったです。</p> |
| 10 | <p>水俣フォーラムで感じたこと</p> <p>今回、私は5月12日に行われた水俣フォーラムのうち、第一部の講演に参加した。水俣病については学校の現代社会の授業で公害問題の一つとして教わった程度で、詳しい知識を持っていなかったため、フォーラムの内容についていけるかどうか不安であった。しかし、RKK が作成した「市民たちの水俣病」は水俣病について市民の側からあまり水俣病について知らない私たちも理解しやすい形で描かれていたので、この作品を見ただけでも水俣病について多くの知識を得ることができた。この作品を見ていて驚いたのは、水俣病やチッソをめぐる市民の人々が対立していたという事実である。私はてっきり水俣の人々は水俣病の被害を受けてチッソを憎んでいると考えていたので、水俣病の発生当時にチッソを擁護する市民がいたということには大変驚いた。さらに、今なおチッソは営業を続けていて、今でも「水俣の誇りである」という表現をトークゲストの永野さんからお聞きした時には、水俣病の問題の構造が思っていた以上に複雑であったことに気がついた。</p> <p>ビデオの視聴とトークを終えて、水俣病が発生してから今に至るまで水俣病市民の人々は水俣病に対して様々な思いを抱えて生きていることが分かった。そして水俣病という病が自分たちの生活に影響しはじめてから、それぞれ自分なりの方法で水俣病と向き合うことしてきたのだと感じた。今回のフォーラムを通して私は問題と向き合うことはこれからの日本に求められていることなのではないかと思った。原発の問題も東日本大震災が起きてから大きく取り上げられるようになったし、人々も原発に対して意識し始め、学習するようになったが、このようになにか生活をおびやかす事態が発生してからでないと私たちは行動を起こそうとしないのではないかと考えた。しかし今の日本人は行動を起こすまでに、事の重大さを知るまでに、時間がかかりすぎているのではないかと思う。権利の問題も同じであるが、身の周りで起こっていることを身近に</p> |

| | |
|----|--|
| | <p>感じることができず、自分の生活が脅かされていることさえも気づかずに生活しているのではないだろうかと思はる。水俣病について学習していくなかで私たちは日々今に起きている、起ころうとしている問題を意識しつづけることを身につけていかなければならないと感じた。</p> <p>このフォーラムを通して水俣病をこれまでとは異なる角度から見ることで新たな発見がたくさんあった。特に水俣病の問題が起こってもチツソを擁護し続けた市民の思いやその背景についてもっと詳しく知りたいと思った。また、今回のフォーラムに参加していた一般の方々それぞれの水俣病に対する思いや、フォーラム参加の動機も知りたいと思った。</p> |
| 11 | <p>「水俣から人間環境の未来を学ぶ」感想</p> <p>私は、午前の「市民たちの水俣病」上映とトーク「水俣病と市民」に参加しました。以下がその感想です。</p> <p>このイベントに参加して心に残ったことは、水俣病の捉え方が水俣市民とそれ以外の熊本県民で大きく違うことでした。特に熊本市出身の萬野さんが「水俣市民にもチツソにも良い印象がなかった」という言葉が印象に残りました。そこで、私は次の2つのことを思いました。まず、1つ目は、水俣市外の熊本県民のもつ水俣（病）への印象と、熊本県外の人がもつ水俣（病）への印象は異なっていたのだろうかということです。前者に関しては、県内では水俣市民を非難の対象として見ている、県外では「水俣市を含む熊本県民」として一緒にたに捉えられ、非難される側になることはなかったのだろうかと思いました。また、同じ県民というということで自身も水俣病になることへの危惧はどの程度あったのだろうかと思いました。それから、2つ目は、この感染の話に関係するのですが、鹿児島や宮崎の一部地域（水俣市周辺）の人がもつ水俣（病）への印象はどうだったのだろうかということです。地図（*）で見ると、水俣市は、熊本市よりも鹿児島や宮崎の一部地域に近いことがわかります。こうした人たちにとって、自身も水俣病になることへの危惧はどの程度だったのか、またそれを危惧する人にとって、県境の存在はどのように捉えられていたのか気になりました。</p> <p>*ウェブサイト「熊本県 地図：マピオン [アドレス]http://www.mapion.co.jp/map/admi43.html（2013年5月14日閲覧）</p> |
| 12 | <p>講演会を聞いて</p> <p>私は2部目の講演を聞いた。講演内容は20年ほど前にNHKで特集された水俣病患者のドキュメンタリーの視聴と、その番組のディレクターだった方、出演者の方のコメントという形だった。まず、水俣病に関してだが、患者の症状やそれを取りまく環境など知らないことばかりで驚いた。そして、ハンセン病の問題と重なった。ハンセン病については私の出身である鹿児島にハンセン病患者のための療養所があるため知っていた。</p> <p>水俣病の問題は、日本人が人々の命、健康より経済発展を優先させていた問題と置き換えることができると思う。水銀を海へ放出したチツソは国の大事な化学会社だった。被害が確認されてからも国やチツソはなかなか動かなかった。国には、日本の一部で起きていることをいいことに被害者の健康をないがしろにした責任を問えると考ええる。国の利益を優先して一部の人間が苦しい思いをしていいはずはない。また、水俣病は被害を受けた人だけでなくその家族やコミュニティ全体を壊した。憲法第25条では「すべての国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」と記してある。水俣の人々が当時、この権利を保証されていたとは思えない。また国民の中には「水俣病じゃない人がお金ほしさに水俣病と言っている」と考える人もいた。このような世間の目は水俣病の実態が世間に知られていなかったことを示している。</p> <p>私たちは水俣病の教訓として産業と人々との協調を考えなければならない。そもそも産業の発展は人々の暮らしをより快適にすることにある。一部の人間の健康を害してまで産業を進展させることは望ましくない。産業と人は常に産業<人間の関係を保たなければならないのだ。</p> <p>授業で「権利」について考えたコマがあった。今回、水俣病について学んで考えた事は、権利を意識するのは権利を侵されている時であり、権利が意識されない時が社会はよい状態なのではないかということだ。日頃あたりまえの権利を侵されたときに人々はその存在に気づき、権利を主張する。近頃、学ぶ権利や選挙権などの放棄が問題になっているが権利を意識しない状態がそれほど問題なことなのだろうか。それより、教育や選挙におもしろみがない方が問題だと考える。</p> |
| 13 | <p>水俣・福岡展協賛企画映像セミナー「水俣から人間環境の未来を学ぶ」in九州大学</p> <p>今回のセミナーで一番強く思ったことは、水俣病がまだ解決した問題ではないこと、私たちがしらなければならないことがまだまだたくさんあるということです。私は公害病という言葉から、高度経済成長期の病気というイメージしか持っておらず、過去のことであり、あとは保障をどうするかの問題だと思っていました。今も苦しんでいる人がいつということは何となく知りながらも、それ以上のことを知ることを放棄して避けてきたと思います。映像の中で、半永さんたちが「知ってほしい」と言われている姿を見て、自分が知らないでいること・知ろうとしないでいることが、どれほど患者さんの苦しみと向き合わないことになるか、放置することに荷担している</p> |

| | |
|----|---|
| | <p>か、改めて気付かされました。</p> <p>このように基礎的なことを学んでいないまま参加したため、セミナーでは知らなかったことが多々ありました。患者と患者でない市民の間の溝、チッソに対して水俣の人たちが抱いている複雑な感情、患者とその家族の葛藤や社会的な苦しみ、チッソだけでなく行政がいかに水俣病に蓋をして隠そうとしてきたか。そして、前回の授業で先生がおっしゃっていた、同じようなことが今、福島で起きているということ思い出しました。原発も地方の経済的な発展に寄与した面があるとされ、いろいろな人の利害関係が絡んでいます。国はまた徐々に脱原発から方向転換をしています。経済的な発展が大事でないと言うつもりはありませんが、映像やセミナーで多くの方が言われていたように、経済発展ばかりを重視した結果起こった事件で、一番の被害を受けるのは責任のない弱い立場の人です。もうそれは嫌というほど分かっているはずなのに、自分を含めて多くの方はすぐにそのことを忘れて見落とししてしまいがちです。忘れて見落とししたりして同じ過ちを繰り返さないために、人は歴史を学ぶのだと改めて思いました。過去に起こった出来事も、それをなぜ今学ぶのか、今の社会や自分の生活にどうつながっていることなのかを考えながら学ぶことが歴史を学ぶことの大きな意義なのではないかと思えます。</p> <p>「中立」に対する原田正純さんの考え方も、とても印象深いお話でした。個人的なことになりますが、私が公務員を目指そうと思ったのは、社会的に弱い立場にある人の生活基盤を制度の面から直接的に支えられる仕事に就きたいと考えたからです。行政の仕事は中立である必要があります。でも「形式的な中立がいつも本当の意味での中立であるとは限らない」ということも、同時に気をつけておく必要があることだと思いました。</p> <p>今回のセミナーでは、ずっと向き合うことを避けてきた水俣病に出会うきっかけ、また自分自身を見つめる大切な時間をいただきました。まだ知らないたくさんのことについても見ないふりをせず知って考えていかねばならないと思えます。参加できて本当に良かったです。ありがとうございました。</p> |
| 14 | <p style="text-align: center;">水俣フォーラムを通して</p> <p>今回の水俣フォーラムに参加する前に、「水俣病って知っていますか？」と聞かれたら、私は絶対知らないと答えてしまうだろう。もちろん今もよく知っているわけではないが、しかし、もう少し関心を持ち、知りたくなった。水俣病とは、よく知られているように、日本の化学工業会社であるチッソが海に流した廃液により引き起こされた公害病である。今回の水俣フォーラムをきっかけに、水俣病について、もう少し調べてみた。</p> <p>水俣病は、チッソ工場の排水にあったメチル水銀が、海にいる魚や貝などに入って、それを人が食べることによって起こる。空気を通じてうつることも、触ってうつることはない。体の中に入ったメチル水銀は、主に脳や神経を侵し、手足のしびれ、ふるえ、脱力、耳鳴り、見える範囲が狭くなる、耳が聞こえにくい、言葉がはっきりしない、動きがぎこちなくなる、などの症状が起こる。汚染された魚を食べた母親の胎内でメチル水銀が体に入って、魚を食べていないのに水俣病になった赤ちゃんもいる。水俣病で苦しんでいる人は今もたくさんいるが、今は海がきれいになったので、新たに水俣病になる人はいない。今回、私が参加したのは、二番目のプログラムだった。「写真の中の水俣」という番組を放映した後、番組の制作者と半永さんの話を聞く「トーク」の時間があつた。半永一光さんは、生まれたときから、水俣病になって、言わば、胎児性患者でした。自由に動けないばかりではなく、話すこともできないので、コミュニケーションが難しい状態だった。しかし、意識ははっきりされているので、相手が質問をすると、簡単な「うん」とか「あ」とかの声を出して答えることはできた。なので、このように、質問を誘導する風なコミュニケーションは取っていた。半永さんは写真撮るのが好きで、写真展をするのが夢だった。しかし、写真展を開催することまで、いろいろな難しさがあった。それは、行政的な難しさもあり、親族からの反対もあった。親族からの反対がとても印象に残った。というのは、単純になんで半永さんの家族さえも、半永さんの心を分かろうとしないのかの非難ではなく、ではなく、ご家族方の心も何か理解できたからである。社会からの偏見が半永さんだけではなく、ご家族の方々にも影響を及ぼしたからだろう。正直に言うと、この前まで、自分も少し偏見を持っていた。私が言っていることをたぶん分かってくれないだろう。自分が水俣について知るとしても、できるのは何もないだろう。という偏見だった。そういう偏見を崩してくれたのは、写真展を開催しようという半永さんたちの目的だった。「自分たちのことをしてほしい」という坂本さんの話が印象的だった。伝えられないので、はっきり自分の存在を知らせないが、写真展という形で知らせたかった。</p> <p>20年後の半永さんの姿を見て、思い出したのは人の強さだった。社会からの偏見のなかで、また長い時間一番近い親族から隠されたが、相変わらず人と交流したい、自分たちのことを伝えたいということに感心した。外の目から見るときに、半永さんは世話をしなければならぬ存在であるかもしれないが、今回を通して、逆に健全の私たちに貴重な学びを与えてくれたと感じた。</p> |

| | |
|----|--|
| 15 | <p style="text-align: center;">水俣フォーラムに参加して</p> <p>私は今回、第一部の「市民たちの水俣病」上映とトークに参加しました。その中で最も印象深かったことは、私自身が水俣病やその経過について、いかに一面的な視点をもってしか見ていなかったか、ということです。漠然としたイメージとして、被害者である水俣市民が、チツソと国に対して一丸となって戦ってきたというものを抱いていました。けれどチツソで働いている人々もまた水俣市民であるし、また被害者の家族であっても、その事実を隠してしまうといったように、本当に様々な立場、そして感情や思いが混じり合ったものであったということを知りました。また、チツソは水俣病の悪者のように考えてしまうところに私にはあるのですが、そんなチツソという会社も、水俣市民の方々の誇りであり、目標である存在であったことを初めて知りました。そんな、市民にとって偉大な存在であるチツソが起こしてしまった問題だったからこそ、その会社を擁護しようとする立場が多くあったり、人々の中で葛藤が生まれたりしたのだらうと感じました。私を含めきっと多くの人は、水俣病を市民、チツソ、行政というざっくりとしたくりにしか見ていなかったと思います。けれども今回のビデオやトークを通して、その水俣病という歴史の中には、もっと細かい一人ひとりの立場や考えが存在していて、蠢き合っていて、それがまた歴史の流れをつくっているのだと思いました。永野さんのおっしゃった「マイクを向けた人だけでなく、それぞれの人に水俣病がある。」という言葉に、そのことが象徴されているように感じました。</p> <p>もう一つ印象的だったものがあります。それは、番組の中に出てきた方がおっしゃっていた「被害者意識はなかった」という言葉です。水俣に住む人でさえ、自分自身に何も変化がなければ被害者意識はなく、自分の生活にふりかかってくる時に初めて自分の問題として意識したといえます。この話を聞いていて、いつかの授業でディスカッションをした権利の話に通ずるものを感じました。当事者意識というのは、感じる必要の有無は別にして、自分自身になにか問題や支障が振りかかってやっと感じられるものなのだと感じました。人間というのはきっとそういうものなのだろうなと思いました。それから、水俣の人は水俣病のことに無関心を装ったり、過去のことにしてしまったりしていたそうです。それだけ葛藤があったり苦しみがあったりしたことなのだと思いますが、人として、どうすればわからない最終手段として、そのような無関心や目を背けるという行動があるのだらうということを感じました。</p> <p>今回のフォーラムでは以上に述べたように、水俣病という一つの歴史の中に存在するひとつひとつの小さな動き、また「人」というものを強く感じたように思います。</p> |
| 16 | <p>「水俣から人間環境の未来を学ぶ」 in 九州大学</p> <p>第一部「市民たちの水俣病」上映、トーク「水俣病と市民」を聴講して</p> <p>水俣病患者、それ以外の水俣市民、それぞれの葛藤に触れることのできる講演会内容でした。恥ずかしな私が私は、これまで水俣病について原因が有機水銀であるということ、つまり教科書レベルの知識しか持ち合わせていませんでした。今回の講演会を受けて、水俣病が今なお患者を苦しめ続けていることに最も驚きました。水俣病は過去のもの、この認識を持っているのは決して私だけではないと思います。東日本大震災における原発事故からもわかるように、突然自分たちの生活が奪われるというのは、いつ誰に降り掛かるか分かりません。他人事に思っているままではいけない、またあらゆる立場から全体を検討しなければその出来事の意味を理解できないとも思いました。今回のレポートでは特に印象深かったことを3つ取り上げ、考察したいと思います。</p> <p>まず、当初水俣市では、ほとんどの市民が水俣病について無関心だった事実について。水俣病激発地を除き、ほとんどの市民は漁業の不振が顕在化して初めて水俣病発に対する危機感を覚えたと田上美孝さんは語っていました。これは単に水俣病発症者の住居が集中していたことだけが原因ではなく、漁業協会の固い口止めから惨状が知られていなかったことに大きく起因すると感じました。当初に植え付けられていた周囲のために口をつむる心理、水俣病であることや家族に患者を抱えていることに対するコンプレックスというのは後々まで影響したと思います。認定されると家族や周囲に迷惑がかかる、そんな気持ちが申請やその他行動に影響したとすると、その患者の葛藤というのは計り知れないなと感じました。学校での水俣病教育についても、永野さんが学生だった時代は「よそからの差別に耐える強い心を持つ」という消極的な対応しか行っておらず、根本的な生徒の不安やコンプレックスを解消するものではなかった点も問題だとも思います。そこに住んでいながら水俣病から逃げていた、そんな市民の歴史を垣間見た気がしました。市民が一体となって国を相手取り訴訟を起こしたという印象が強かった私には、とても驚くべきことでした。</p> <p>そこから発展して、2点目の水俣市民の中で対立が起こったことについても驚きでした。被害者側・加害者側と単純に定義することはできませんが、市民それぞれがさまざまな立場で対立や葛藤を抱えていたことが資料の中で挙げられていました。患者たちの座り込みに対する嫌がらせ</p> |

| | |
|----|---|
| | <p>があったという事実にはとても衝撃を受けました。市民同士だけでなく家族の不和も生じていたことから、水俣病についてどう捉えるかがとても重要な問題になっていたことが伺えます。市民間に生まれた隔たりを解消すべく、もやい取り戻し運動がおこったこともその重大さを示すひとつの指標だと思います。水俣病についての心の決着を付けないままずっと引きずってきた様子が伝わりました。もっと早い段階から市民が水俣病に真剣に目を向け、考える機会を充実させてくるべきだったのではないかと思います。経済効果ばかりを追い、水俣病を封印しようとしてきた歴史には反省すべき点があると思いますし、またこれを繰り返してはならないと認識しておく必要もあると思います。</p> <p>最後に、水俣病の解決とは何かと考えました。現時点で、水俣病は終わっていないと思います。未だ水俣病センターが存在し、相談業務を行っているのです。このことをまず私たちは知る必要があります。前述のように他人事ではないこと、繰り返してはならないことを学ぶべきです。この悲しい出来事から反省点を見だし、予防につなげることまでが私たちの義務だと思います。特に行政の立場にあれば尚更のことだと思います。経済面での決着は終焉を迎えていると思います。残りは当時を生きた世代、今を生きる世代が水俣病という事実に向き合うかだと思います。おそらく近年はそういった機会も多く設けられていると思います。最も問題なのは水俣病発生時の混乱期またはその直後に生き、そのとき植え付けられたコンプレックスを未だに抱えている市民がいるということです。これを解消するためには水俣病センターの役割も重要になってきますし、周囲の水俣病に対する理解というものも必要条件となります。本当に今も苦しんでいる人というのは、講演会やセミナーを開いても家から出てこないと思います。そうした市民をどうフォローしていくか、ここに対応策が求められると考えます。</p> <p>今回の講演会では予定のため第一部しか参加できずとても残念でした。私自身、水俣病に対してまだまだ無知であり、これを機会に今後見識を深めていきたいと思います。貴重な機会をいただいて、どうもありがとうございました。</p> |
| 17 | <p>5月12日水俣フォーラムに参加して</p> <p>半永一光さんの手にはいつもカメラがある。子どもの頃は、撮られてばかりだったという半永さんが初めてカメラを手にしたのは17才の頃だそう。半永さんは胎児性水俣病患者の一人で、言葉を発することができない。しかし、理解しているのだ。わかっているのに、わかっているということを伝えられないだけなのだ。伝えたいことが思うように伝えられないという半永さんにとって、カメラを手にして写真を撮るという行為は、おそらくかけがいのない表現方法の一つになっていったのだと思う。半永さんがファインダーを通して映し出した水俣の風景の数々は、どれもとても力強い。しかし、数々の写真が映しているのは、それだけではない。番組の制作を手がけた吉崎さんがおっしゃっていたように「半永さんは生きている証として、自分の存在の証として、写真を撮っている」のだ。</p> <p>「存在の証」として写真を撮る意味。涙をこらえながら、吉崎さんが言葉にしてくださったその事実はとてもつらいものだった。水俣病の患者さんたちは、地域からも、さらには親族からもその存在を隠そうとされてきたのだ。半永さんが40年以上暮らしてきている明水園も少し離れた土地にある。番組の中で出てきた「水俣国際会議」で、患者さんが登壇して発言する機会がなかったことが指摘されている場面もあった。その対応は「水俣国際会議」と言いながら、都合の悪いところは見せずに、あるいは現実に向き合うことすらせずに、水俣病がさも解決したかのように対外的なアピールだけが先走ってしまっていたことをよくあらわしていた。当事者たちの苦しみも、想いも全て置いてけぼりだ。そこにも、半永さんたちをはじめとする患者さんたちの存在に対する「態度」の問題が見えてくる。</p> <p>一方で、半永さんを慕う人たちと半永さんとの絆や信頼も感じることができた。番組制作を手がけた吉崎さんも、その一人で、きっと半永さんの喜びも悲しみも不安も期待も、自分のことのように背負うことができる彼だったからこそ、このようなドキュメントができたのだろうなと思った。途中で登壇された、半永さんの少年時代を知る女性がおっしゃっていた「半永くんは話す言葉は持っていないけれど、他の人が持っていない言葉をたくさん持っている」という言葉も印象的だった。補助の小田さんの愛情あふれる言葉も、それに反応した半永さんの笑顔も見ていてなんだかうれしくなった。互いに尊敬し合う気持ち、認め合う気持ちがそこにはある。このように、半永さんを取りまく人たちの、それぞれの距離感（近いものも遠いものも含めて）を、映像の中からも感じ取れた気がした。</p> <p>たしかに、正直にいうと私も半永さんを前にして、はじめはどう振る舞うのが正しいのかと少し悩んでしまった。でもよくよく考えてみれば、人と人との関わり方においてははじめから正解などないわけで、ともに過ごす時間の中で互いを少しずつすり合わせていくものだ。そしてこの世界に同じ人間などいないのだから、本来人間はきっと完全には分かり合えないだろう。だからこそ、分かり合えないところをいかに理解し合おうかと互いに試行錯誤していき、そして互いの存</p> |

| | |
|----|---|
| | <p>在に敬意を抱く。それが人と人とが関わりあうことの本質ではないだろうか。何を迷っていたのだろうと思う。半永さんが登壇された短い間にも、言葉ではない半永さんの喜び、悲しみの表現がだんだんと分かるようになっていった気がした。写真をこちらに向けて、ファインダー越しにみた私たちは半永さんの目にどのように映っただろう。不思議と半永さんにカメラを向けられていても、嫌な感じがしなかった。うまく説明できないが、それが半永さんと会場の参加者たちとの間で、一種のキャッチボールのように成立していたからかもしれないと思った。</p> <p>この一連のプログラムを通して、私の中では水俣病の胎児性患者さんにお会いしたということよりも、半永一光さんという方に会えたことのほうが大きな印象として残っている。しかし、同時に水俣病という人間の手で引き起こされた病、それによって生じた苦しみについて考えることは決してやめてはならない。きちんと知らねばならない。当時何が起り、今何が続いているのかを。勝手に終わりにすることなどは決して許されないのだ。その意味で、自分はまだまだ無知であるし、実際に起こった現実を知ること、水俣で今生きている人、とくに患者さんに向き合うことのどちらも大切だと思った。だとすると、歴史的事象としてはこれまでも学校で習ってきたが、その学びと同時に、「本当に歴史なのか、過去のものなのか」と考えることがまず必要であるだろうし、そのうえで、過去のことで決してないのだということ認識し実感することが欠けているのだと思う。幸いにして、私はそれを考える機会を得られたのでさらに知る努力をしたいし、同時に水俣病以外にも同じような状況にあるものがあるのではないかと考えると、「過去の出来事」として勝手に終わったことにされてしまったものがあるのかもしれないという視点そのものを、大切にしたいと思った。</p> |
| 18 | <p style="text-align: center;">原田正純さんの一生から感じたこと</p> <p>今回私は人権学習で名前だけ知っていた原田正純さんについて興味を持ち、映像セミナーに参加した。水俣病と向き合い続けて医学的にも功績を残したお医者さん、というような知識しかなかったが、今回のセミナーでは原田さんの一生からだけでなく登壇者の方からも想像以上の刺激を受けた。ここではその中から3つ取り上げて、原田さんの生き方から感じたこと、水俣病と差別について考えたこと、熊本県民として感じたことについて話したいと思う。</p> <p>まず、原田正純さんの生き方、考え方からどのような刺激をうけたのかについて述べたい。私は医者としての原田さんの言動はいまでもなく、人との向き合い方や原田さん自身の生き方に刺激を受けた。原田さんは、お互い同じ力関係なら中立はありえるが、差があれば大きい方に合わせることになることを指摘し、患者に寄り添う姿勢を見せていた。患者さんと接している様子からは、医者と患者の関係以上の信頼関係や親密さが伝わってきた。私にとって新しい考え方であった。中立というのは妥当であるように思えるが、背景には弱者の犠牲や妥協があるかもしれないことを考える必要があると思った。</p> <p>そして原田さんは様々に考え方が異なる人たちと人と人として向き合っていて、萬野さんによると、どんな価値観や宗教、イデオロギーであっても同じ人体として見ている点ではどこまでも医者であったということである。原田さんのもとに人が集まってくる理由がわかったような気がした。常に一対一の関係で偏見にあてはめたりせず受け入れ向き合ってくれる原田さんの周りの空気はとても居心地がいいものであっただろう。</p> <p>もう一つ印象に残っているのはジャーナリストとしての原田さんの一面である。原田さんは水俣病の症状だけをみるのではなく、その家族、地域で何がおこっているのかを何十年もかけて見続けた。水俣病を医学だけの問題に終わらせようとしなかった。水俣だけでなくブラジルやベトナムでも医療活動を行っている。水俣で起きた事件だけでなく世界で起きている都市化・工業化の弊害にも目を向けていたのだ。簡単なことではないと思う。多面的な見方とはこういうことを言うのではないかと思った。私はこのことを知って、どんな職業でも、誰でもみんなジャーナリストになりえるのではないかと思った。</p> <p>次に水俣病と差別について考えたことを述べたい。私は熊本県出身なので小学校では水俣病についての人権教育があった。しかし恥ずかしながらあまり記憶がない。今回の上映会、登壇者のお話でその差別の実態を生々しく感じた。今までは水俣病は解決されたもののように感じていたが、認定を受けてない人の多さや、差別を恐れて水俣病であることを隠してきた人々の話、水俣病第一次訴訟で認定された患者の後に水俣病認定を受けた人々への怒り、永野さんが話してくれた自身の経験から、私はまだまだ続いていて解決されるべきことが残っていると感じた。特に永野さんの加賀田清子さんとのエピソードは印象的だった。私はそのような話をしてくれる人を初めて見た。自分が後悔している過去をさらけ出してくれた感じがした。その分永野さんのように後悔している自分のしてしまった過ちを人に伝えることはとても勇気がいるし、いままでの人権教育の中で一番ずっしりと心にのしかかった。いまだに水俣病に関する日本人の認識は浅く、差別に苦しむ人も多だろう。「水俣病学」ではなくあえて「水俣学」という学問を立ち上げた意味には差別に苦しむ患者さんについて学ぶ意味もあるだろうと思った。「水俣学」にこめられた</p> |

| | |
|--|---|
| | <p>水俣病被害に携わる人々の考えの深さを感じる。</p> <p>最後に熊本県民である私自身がかんじたことについて書きたい。私は熊本県民ではあるが、実は水俣にいったことがない。小学校でも水俣病について少ししか勉強していない。近くで起こっていることなのに今まで何のアクションも起こしたことがなかった。今回の上映会への参加が自ら水俣病に関わった最初の行動といえるかもしれない。そして、今回の経験は私に大きな影響を与えた。実際に水俣病と真剣に向き合ってきた人から話を聞いたのだが、熊本県民であるためかより身近に、よりリアルに感じた。映像で話される熊本弁がより私の問題なのだ、と感じさせた。私も水俣病に出会ったからには水俣のことを考え、学び、私と水俣とのつき合い方を考える責任がある。今回の上映会が終わって最初に思ったことは、「水俣・福岡展」にいかなきゃ、ということである。</p> |
|--|---|

4) 飯嶋秀治に個人的に寄せられたコメント

| | |
|---|---|
| 1 | <p>午後は仕事がありましたが、午前中のみ参加させていただきました。</p> <p>・「市民たちの水俣病」を観て、水俣病の全体的な経緯の一片に触れることができたように思います。</p> <p>「問題」というものが起こり、社会経済への影響から人々の間が変化してゆく立場・関係性の複雑さが生み出す混頓になんとも言えない思いがわいてきます。</p> <p>あらゆる「問題」のたどる経緯は、本質的に共通しているのではないかと思います。</p> <p>何ができるのか、どうすればいいのか、まったくわかりませんが、ひとつずつ向き合っていればと思います。</p> |
| 2 | <p style="text-align: center;">130512 水俣学セミナー感想</p> <p>飯嶋さん、今日はお誘いありがとうございました。</p> <p>すっごく良かったです。</p> <p>今までに参加したセミナーで№1 だったような気がします。(終わってすぐの感動のせいでしょうけど...)</p> <p>ざっくばらんに思ったことをお伝えしますが、「参加者アンケート」の扱いでも「私信」の扱いでも、どちらでも構いません。</p> <p>豪華な登壇者の方たちでしたね。</p> <p>映像の選択もとても良かったです。</p> <p>あれ？でも、感じたことを言葉にしようとする、あまりいい言葉が浮かんで来ない感じです。それだけ感じたことが大きく、「言葉」が小さく感じるのかもしれない。</p> <p>水俣の現実を学べたというのはもちろんのことですが、今の自分の関心に引きつけて感じたことを述べると、次のあたりです。</p> <p>「原田先生は医者なのか、ジャーナリストなのか」という問いが出されたとき、僕の答えは「『人』なのでしょう」というものでした。</p> <p>でも、萬野さんのお答えは「どこまでも医者だった」というものでした。</p> <p>「人」が「人」に出会う、ということが、今日お話を聞きながらの僕のテーマでした。</p> <p>医者の専門性とは？ 臨床心理士の専門性とは？</p> <p>クライアントの分からない専門家の言葉を上から振りかざして分かったような顔をするのが臨床心理士の専門性なのか？</p> <p>いや、僕は精神医学的な見立てが弱いので、「医学の知識が臨床じゃない」と思いたいだけだ...</p> <p>僕は普段からそんな葛藤を抱えていますし、今日の話聞きながらもそんなことを考えていました。</p> <p>原田先生は、お名前を地で行く「正」で「純」な方ですね。</p> <p>愚直に患者さんに向き合い、自身の信じる道を進む。「患者さんに伝わる言葉で」語る。</p> <p>僕も、性格的にはそういうタイプです。(原田先生がどうかは分かりませんが、加えて僕は不器用です)</p> <p>一人一人のクライアントさんに誠実に向き合い、お互いに分かる言語で対話し、その人が健康に生活できることを第一に考える。</p> <p>それは、僕が心がけてやっていることです。</p> <p>何だか、言葉にすると貧相。</p> <p>だけど、現場でその生活人である対象者に「出会い」「接する」ことは、言葉(=理論)を超えるように思います。</p> <p>つまり、「臨床」がもつ力は、それほど大きい。</p> |

| | |
|---|--|
| | <p>だから、今日の登壇者の方たちの語りや映像は聴衆の胸を打つのだと思いました。</p> <p>下記はちょっとつまらない話ですが、今日の登壇者の方たちは（僕ら臨床心理士や精神科医が言うところの）いわゆる臨床の専門家ではないでしょう。</p> <p>でも、水俣の人たちにとってどれだけの力になっているか。</p> <p>逆に、臨床心理学はそこまで役に立っているのか？</p> <p>（もちろん、仕事をするフィールドが違うので、臨床心理士の仕事はこれでいいのでしょうか）</p> <p>「人」が「人」に出会う、というテーマでもう一つ見ていたのは、飯嶋さんを含む登壇者の方たちのつながりについてです。これも素敵でした。</p> <p>それこそ仕事上のつながりじゃなく、むしろ個人的な（生活者としての）つながりで今日のセミナーが実現したのでしょうか。</p> <p>これは、臨床心理士が下手くそ、あるいは逆に理論的に避けているようなことです。</p> <p>映像にあった、水俣で開かれた国際学会の翻訳されなかった副題の話かもしれません。</p> <p>私たちの社会で、「人」と「人」は本当に出会っているのか？</p> <p>医者は患者と、臨床心理士はクライアントと、文化人類学者は対象者と、本当に出会っているのか？</p> <p>今日の登壇者の方たちや原田先生は、お互いに、そして患者さんたちとしっかり「出会って」いたのだと思います。</p> <p>飯嶋さんの適当な（すみません！）服装での司会ぶりも、語り口も、そのままの飯嶋さんと出会えた感が満載でした。その雰囲気も良く出ていて、司会も素敵でした。</p> <p>もう一つ頭にあったのは「当事者」という言葉です。</p> <p>これは宣伝ですが、6月1・2日に添付のセミナーが開かれます。</p> <p>高松里先生主催、『「当事者性」を臨床／研究に生かす』というテーマです。</p> <p>冬に行った同テーマのセミナーは相当面白かったです。</p> <p>飯嶋さんにもご関心とお暇があれば、ぜひご参加ください（多分、飲み会だけでもOK!）。</p> <p>飯嶋さんにとっては学問的に物足りないかもしれませんが、臨床家の集まりなので、臨床的な視点は十分かと思えます。</p> <p>このセミナーでは、「当事者って誰？」というのも一つのテーマです。</p> <p>今日の映像セミナーを聴いていて、この点も頭に浮かんできました。</p> <p>水俣病であることを周囲には隠したい。</p> <p>でも、信頼できる人にそれを言えたとき、胸のつかえがスッと下りる。</p> <p>これは自助グループでよく起こる現象です。</p> <p>地域社会やマスコミでは、集団力学も大いに作用していますね。</p> <p>高松里さんがされているテーマですし、ベテルの家や発達障害の領域で「当事者研究」が最近話題になっています。</p> <p>自分で自分のことを「研究」として語ることで、自身の理解が進み、他者にも自身のことを伝えられ、自身の癒しにもつながるといようなテーマです。</p> <p>水俣の人たちのことは「当事者性」ということも考えさせられます。</p> <p>飯嶋さんもこのテーマに関心おありかなと思い、「当事者セミナー」の宣伝をしました。</p> <p>...だらだらと、きりがいいですね。すみません。</p> <p>まとまりがないですが、ご容赦ください。</p> <p>こういうときは、急いで言葉にしない方がいいと思うので、まとまりませんがここでやめます。</p> <p>それくらい、心に響くセミナーでした。</p> <p>今日の経験を温めておくことで、また何か気づきが出てくると思います。</p> <p>飯嶋さんが企画する集中講義や授業にも聴講生としてお邪魔したい気になってきました。</p> <p>また何か、僕の関心を引きそうなテーマのものがあれば、お声かけください。</p> <p>今日はありがとうございました。</p> <p>感謝します。</p> <p>板東充彦</p> |
| 3 | <p>教育学部門の岡です。</p> <p>日曜、本当にいい会でしたね。</p> <p>学ばせていただくことが本当に多かったです。</p> <p>簡単にその一言におえてはいけませんが、充実感いっぱい、帰途につきました。</p> <p>私はどうしても社会教育の人間として「水俣にどう学ぶか」「どうシェアし次世代につなぐか」ということにも関心がいくのですが、その意味であの場はすごいと思いました。</p> <p>みなさん懺悔録的に、自分を問う発言に終始しておいででした。</p> <p>それが呼応しあってどんどん深みのある発言に向かっていくような。</p> |

| | |
|----|---|
| | <p>あれは若い世代にかならず響く質のものだったと思います。 私と共に終日あの場にいた、社会人大学院生でフリーライター・地元学指導者の森千鶴子さんと一緒に、参加の予定です。</p> |
| 22 | <p>飯嶋先生へ</p> <p>この4月に、人間環境学府教育システム専攻で、社会教育研究室の岡幸江先生のところに、社会人枠で入学しました。森千鶴子と申します。以下、水俣シンポジウムの感想です。</p> <p>日曜日のシンポジウムは、水俣のいま、を知る上でとても有意義でした。私自身、水俣は、患者の保障の問題などまだまだあるけれど（その内容は知らず）再生へ向かって成功し、事態は収束しつつあると感じていたからです。</p> <p>今回3本のフィルムを見せていただき、パネラーの方々そして、飯嶋先生のお話を聞いて、私が、水俣に通い、学んでいた2004年～2006年頃は、水俣が環境都市としての再生の道を模索していた時代だったのかもしれないと感じました。それ以前の経過も、改めて再確認することができました。</p> <p>私は水俣で、元市役所職員、水俣病資料館長の吉本哲郎さんに、地元学のフィールドワークを学び実践してきました。（もう一人の師匠は東北の民俗研究家、結城登美雄さん）。自分が吉本さんと学んだ地元学が、地域再生へと踏み出す過程で生まれてはいたけれど、それらは、必ずしも水俣市内全域で活かされていたわけではないことも感じました。特に患者さんを多く出した地域よりも、地元学による地域の見つめ直しは、山間部において活発だったように思われます。しかし、その事実も重要なことで、患者のいない地域にとっても水俣病は大きな課題を残していたということも言えるかもしれません。</p> <p>私は、吉本哲郎さんとともに、相思社を訪れたり、唯一患者さんから話を聞いたのはいりこ漁をしておられた故杉本栄子さん（当時はまだまだお元気でした）で、一緒に会食をさせてもらったことがあります。しかしながら重度の患者の方の声や、また対立と自己のあり方に悩む市民の方の声を聞くのははじめてのことでした。</p> <p>吉本さん自身が、市役所の職員としては、水俣の負の部分ではなく、再生へと向かう部分を私たちに見せたかったのではないかと、そして他の地域の参考にしてもらうことで、水俣の希望としたいという願いがあったのかもしれないと感じました。</p> <p>「本当につらいときにはな、笑うしかないんだ」</p> <p>吉本さんは、よく、そういっておられました。そして、講演等で必ず紹介される言葉は、杉本さんの「いじめられても、いじめがえしはしない」と言う言葉や、「生きているうちに助けてくれ」という言葉でした。</p> <p>水俣病の政治解決をした吉井正澄元水俣市長にもインタビューをしたことがあるのですが首長としての吉井さんのお話も示唆にとんでおりました。吉本哲郎さんの地元学を応援してくれた市長です。飯嶋先生は、お会いになったことがありますか？まだまだお元気なので、（水俣市久木野、愛林館の近くに在住）機会があればお話を聞きに行きましょう。教育行政についての独自の見解をお持ちの方だと思います。</p> <p>半永さんの写真はすごかった。</p> <p>私が一番泣いたのは、国際シンポジウムに来ていた学者さんたちが、半永さんに出会う場面。一部を除き、半永さんに哀れみの目を向けていたように思ったことそれから、あの写真を撮られた環境大臣の顔…。彼らが悪いと言うことではなくて、人の心の中にはそういう気持ちがみんなある。それが辛く悲しくなりました。</p> <p>水俣事件はその縮図ですね。そして、それらは、いじめとか形を変えて私たちのすぐそばにもある。</p> <p>自分の心の中にも。</p> <p>ともあれ、私が盛んに水俣に通っていたのは2年ほどの間。そしてその後、飯嶋先生らが、水俣に関わられて、そしてその活動の中で、もう一度水俣に出会い直せたことを、意味のあることと受け止めました。</p> <p>私は、水俣で学んだ地元学の手法を、これからも各地の人々のために、そして学生たちのために役立てたいと考えています。</p> <p>そして、今、水俣で生まれた地元学は、水俣でどのようになっているのだろうと思いをめぐらせるようになりました。福岡・水俣展にも足を運びたいと思います。</p> <p>飯嶋先生が、現在水俣でされている活動にも大変興味を持っております。</p> <p>今後ともどうぞよろしくお願いたします。（飯嶋研究室の越智くんとも仲良しです）</p> <p>人間環境学府教育システム専攻（社会教育学研究室所属）修士課程1年（1968年生）森千鶴子</p> |

内省 - 人間環境学の視点から

「人間環境」という言葉が国際的に広く認知され始めたのは 1972 年国連の人間環境会議がストックホルムで開催され、その直前にローマ・クラブの『成長の限界』が報告され、日本からは水俣病患者が出かけていった時からであったであろう。その意味で、「人間環境」という言葉の核の一つに、水俣病はあった。

こうした人間環境問題が持ち上がった時、厳しい批判に晒されたのは、近代科学の核にあった「還元論」であり、当時はその対極として個々の要素に還元できない「全体論」が称揚され、その個々の要素に還元できない全体としての性質を齎すプロセスとして「相互作用」が注目されたのであった。こうした経緯から振り返った時、人間環境学はその重みをしっかりと受け止めていると言えるかどうか。

本イベントの評価は複数の視点からなされねばなるまい。まず福岡西部地区五大学連携講座の一環として、西南学院大学や福岡大学からの履修者が出たくらいであったので、殆ど評価はし難いと言えよう。次に、九州大学 P&P に採用された「フィールド人間環境学プログラムへの基礎的研究」(代表：飯嶋秀治)の公開会議としては、対外的には評価されたように思われるので、まずまずの評価がされよう。しかし、人間環境学府多分野連携プログラムの一部としては、その前後のイベント参加者が、10 名以下であり数的にはあまり評価はし難い。ただし、そこに教育学部門、人間科学部門、都市・建築学部門のみならず、ユーザー感性サイエンスの学生などが集ったので、質的な相互作用には一定の評価がされよう。

水俣では確かに、人間と環境の相互作用の累積が、水俣病を生み、地域の断絶を生み、地域を超えた連携を生み、新たな環境と人間との相互作用の芽を生んだ。けれども、学問としての人間環境学は、いまだにそこには追い付いていないように思われる。フィールドから頂いた「大きな宿題」(眞)を果たすにはどのように、そしてどこから私たちの学問をやり直すべきなのか。それがこれからの人間環境学の課題となるであろう。

学校トイレで多分野連携アプローチの可能性を探る
2014年3月7日(金)

多
分
野
連
携
の
可
能
性
を
さ
ぐ
る

学校トイレ 環境に関する 現状と課題

“学校トイレ”というテーマは、単に施設の問題にとどまらない、こどもの教育や心理、健康面に関わる学際的な課題です。本プログラムは、各分野のメンバーで構成された研究会を開催し、分野を越えた議論を行うものです。活発な意見交換の場となることを願っております。みなさまのご参加をお待ちしております。

第一部 一話題提供 10:30～12:00

学校トイレに関する現状と課題

(講師)特定非営利活動法人

日本トイレ研究所 代表理事 加藤 篤 氏

第二部 一ディスカッション 12:00～

今後の研究方向性と可能性

日時：2014年3月7日(金)
10:30～

会場：九州大学箱崎地区 教育学部棟 1F 教育学部会議室

窓口：motokane.masahiro.720@m.kyushu-u.ac.jp



九州大学大学院人間環境学府 平成25年度多分野連携プログラム「学校トイレ研究会」
なお、この講演会は大学院人間環境学府開講科目「学際連携研究法」の対象講義です。

1-2-5. 2014年度多分野連携プログラム

共生社会のための心理学

2014年4月18日（金）

特別セミナー“*Oh great!*”: You don't have to be British to understand sarcasm?”

日時：2014年4月18日（金）15:00～16:00

場所：文学部心理学演習室

講師：Maki Rooksby (Lancaster University)

概要：

イギリス・ランカスター大学の Maki Rooksby 先生に、本研究会で研究を紹介していただいた。子どもの皮肉の理解において、文化の異なるイギリスと日本では違いが見られるのか。Maki Rooksby 先生はぬいぐるみのキャラクターを用いたストーリーを子どもたちの前で演じることによって実験を行った。その結果、以下のようなことが示された。イギリスの子どもも日本の子どもも同じように皮肉が理解できる。しかしその一方でいわゆる「心の理論」（キャラクターの勘違いを理解できるか）については理解が不十分であり、また、その点についてはイギリスの子どもたちより日本の子どもたちの方が若干理解が遅い傾向がある。加えて、皮肉の理解と「心の理論」との間にはリンクが見られなかった。発表後、15分程度にわたって活発な質疑応答が行われた。

出席者：實藤准教授、光藤准教授、テクニカルスタッフ（大沼）および学生、合計15名。

子どもの育ちを支える協同関係の構築に向けて

2014年9月16日（火）

2014年第1回研究会「発達障害児の母親の生活実態に関する社会学的研究」

概要：

人間環境学府人間共生システム専攻の山下亜紀子先生にお願いして、本研究会で研究を紹介していただいた。

日時：2014年9月16日

場所：教育学系会議室

内容：

発達障害児の母親の生活実態はどのようなものかについて、山下先生が宮崎県都城市にある発達障害児の親の会における茶話会の会話を録音し、分析した内容が発表された。分析の結果、母親の生活困難として「障害児の言動による生活の困難」「子育てモデルがなく、日々模索し、試行錯誤している状況」「支援環境との物理的・心理的距離感」「良好ではない周囲との関係性」「日常的に生じる心理的負担感や葛藤」の5カテゴリーが導き出された。これらのカテゴリーの詳細な内容も一部紹介された。また、同じく茶話会でのデータをもとにソーシャル・サポートについて質的分析を行った結果、「家族」「インフォーマルな関係性」「専門機関」「その他」の4つに分類される計13のサポート源があることが判明したが、これらは数としても少なく、サポート内容にも限定性があるということである。総括として、母親自身の抱えている困難さは、子どもの問題を前に潜在化してしまいケアが行き届きにくいこと、母親へのサポートが少なく非常に孤立しやすいたことが述べられた。最後に、録音された音声の一部も紹介された。

発表後は、親の会の存在の意義やあり方、研究者としての現場への関わり方、この研究では直接見えてきにくいサポート源の存在の可能性、父親の側の悩みへのサポートの方法、育児の負荷が母親に偏るようになっている社会構造の問題など、多様な話題について活発な討論がなされた。

出席者：教員（野々村教授、田上教授、岡准教授、藤田准教授、田北講師、柴田助教）、テクニカルスタッフ（大沼、董）および院生等、合計 12 名。

人間諸科学における進化心理学の位置

2014 年 9 月 29 日（月）

2014 年 第 1 回研究会 “Ready to Teach or Ready to Learn: A Critique of the Natural Pedagogy Theory”

概要：

総合研究大学院大学先導科学研究科の中尾央先生をお招きし、研究を紹介していただいた。

日時：2014 年 9 月 29 日

場所：教育心理学棟 2F 心理演習室

内容：

本研究会では、中尾先生が今年 *Rev.Phil.Psyc* 誌に発表されたタイトル論文についてお話を頂きました。出席者には事前にこの論文をメール配布し、各自で読んだ上で開催された研究会であったため、アットホームな雰囲気の研究会となりました。

中尾先生は、近年 Csibra と Gergely が提唱し、進化心理学、発達心理学分野を中心に活発な議論が繰り返されている「ナチュラル・ペダゴジー説」に対して批判的な立場から、ナチュラル・ペダゴジー説を支持すると考えられている実験の解釈についても、様々な問題点を指摘しました。

ナチュラル・ペダゴジー説によると、ヒトはヒト以外の動物には見られない、教育に特化した認知的適応形質（ナチュラル・ペダゴジー）を進化させてきたとされます。さらに、この適応形質の進化なしには、数百万年前からその使用が拡大し始めたと考えられている複雑な道具が、忠実に次世代へ受け継がれていくようなことがありえなかつたろうとも考えられています。中尾先生は、このようなナチュラル・ペダゴジー説が主張する明示的なシグナル *ostensive signals* が子どもの模倣学習を喚起するという図式に対して、そのシグナルが誰から発せられたかということ、さらにはどのような振る舞いとともに発せられたかによって、模倣学習の度合いが異なるということを述べられました。

発表後は、18 ヶ月の子どもと 3-5 才の子どもを対象とした実験をとりあげつつ、新生児模倣のような *mimic* と *imitation* による模倣学習との間に違いがみられるかどうか、あるいは模倣学習における教える側と受け方側の「ずれ」などにナチュラル・ペダゴジー説は応えることができるかという問題など、多様な話題について活発な討論がなされました。

出席者：教員（浜本教授、橋弥准教授、藤田准教授）、学術協力研究員、テクニカルスタッフ（董）および院生等、合計 14 名。

学校トイレで多分野連携アプローチの可能性をさぐる

2014 年 10 月 24 日（金）

講演会「凡事徹底 -トイレ掃除は心磨き-

概要：

NPO 法人日本を美しくする会の相談役で、イエローハットの創業者でもある鍵山秀三郎先生を招聘して、ご自身の生き方を通じて、これまで取り組んでこられた掃除の活動やその意義等についてご講演いただいた。

日時：2014年10月24日

場所：人環研究棟2階会議室

内容：

まず、ホワイトボードを用いて、鍵山先生ご自身の生い立ちや職業経験を背景に「凡事徹底」の意義についてお話しいただいた。「何もないこと」を武器に、つらい経験もプラスにとらえて乗り越えてきたことをディズレーリの言葉「如何なる教育も逆境から学んだものには敵わない」等を引用されながら紹介され、「大きな努力で小さな成果」という信条や「誰にでもできる簡単なことを誰にでもできないほど続けてきた」というご自身の実体験に基づいた説得力のあるお話しをいただいた。

次に、豊富な画像のパワーポイントを用いて、先生が実践なさってきた「掃除道」の実際を詳しくご紹介していただいた。掃除道具を事前にきちんと整えておくこと、グレイチングやごみ置き場の掃除の実際、落ち葉を集めて堆肥にすること、トイレ掃除の方法、日本各地に加えて海外でも始まっている「便教会」の活動、基地周辺や河川敷の清掃活動等々、具体的で多様な活動内容が紹介された。それらに交えて「凡事徹底」の意味（特に大事なものは言動一致ということ）、「割れた窓」理論（大きな問題解決の前に、目の前の小さな問題解決を図る方が先決）を意識すること等、人生における大切な心構えについてもお話しいただいた。

最後に「三つの幸せ」についてお話しいただいた。もらう幸せ、できる幸せ、あげる幸せの中で最上のはあげる幸せとのことである。

掃除の範疇を越え、世の中をよくするのは一人一人の心がけが大事というのが全体に通底したメッセージであったと思われる。講演後は、トイレ掃除に素手を推奨する理由、反対運動やいやがらせをする人を変えることはできるのか、学生をうまく掃除に集めるには、掃除はどのくらいの時期から意識的に始められたのか、等の活発な質疑応答が行われた。

昼食をとりながらの座談会では、参加者の方々と大学側のスタッフが自己紹介し、その後、それぞれ自身の経験（研究、仕事、生き方など）と実感的に結びつけた感想を述べ、それについて鍵山先生がコメントをされた。

出席者：約80名（福岡市教育センター、小中学校教員、他大学関係者、福岡便教会会員および一般参加者を含む）なお、学内の学生・院生は他学部も含めて40名が参加し、座席を追加するほどの盛会で、それぞれに意義が大きかったことが感想文等からもうかがえた。
※座談会は14名（学外3名）の参加。



建築災害と生理・心理

2014年10月30日（木）

第1回研究会「東日本大震災で発生した災害廃棄物の処理と利活用の推進」

概要：

東北大学大学院工学研究科の久田真先生にお願いして、東日本大震災で発生した災害廃棄物の処理と有効活用の実例ならびに今後の展望について講演いただいた。

日時：2014年10月30日

場所：箱崎理系キャンパス 建築1番教室

内容：

久田先生は、東日本大震災で発生した災害廃棄物処理を「がれき処理コンソーシアム」代表として実際に指揮する立場の方であり、本講演会では、その立場から実態と実例、問題点、今後の課題と展望について話していただいた。

講演の概要は以下の通りである。

- ◇新聞記事等でみる発災からの変遷
- ◇災害廃棄物処理の経過と実態
- ◇新たに開発された技術
- ◇再生利用推進のための課題
- ◇骨材・コンクリート需要への対応
- ◇学協会の取組みについて
- ◇震災廃棄物の処理計画の有り方

新聞記事等による発災からの変遷については、主に地方新聞紙『河北新報』にこの三年間記載されたがれき処理関係、資材調達関係、その他（復興まちづくり、仮設住宅、最終処分）に関する記事から数字を挙げて紹介した。また、がれきの処理が3年間を要すること、がれき処理にかけた金額の問題、資材不足による調達の難しさ、仮設住宅の老朽化などの記事から読み取れるこれらの課題を指摘した。

前例の関東大震災と阪神大震災のがれきは埋立ての処理をとったが、東日本大震災のがれき処理に関しては、環境省が資源性廃棄物を徹底利用することで最先端の循環ビジネス拠点として東北地方を再生することを方針とした。近年の建設業界の流れからも、東日本大震災の震災がれきを有効利用することの可能性が十分にあった。ゆえに資金と時間をかけてでも再利用を選択したという。

がれきは自治体が自ら処理することになるので、地域の状況によって処理の違いが大きい。久田先生が紹介したように、岩手県は太平洋セメント(株)が大船渡市に、三菱マテリアル(株)が一関市にセメント工場を稼働させていたが、宮城県にはセメント工場がなかったた

め専用の焼却設備を多数建設する必要があった。がれきの分別は、手作業で丁寧に行われ、また、写真や個人所有物は出来るだけ所有者に戻るよう配慮がなされた。一方で、こうした取組みの中で、新たに開発された技術もいくつかあった。例えば、現地処理が必要な震災がれき—コンクリートがれき、がれき焼却残渣、津波堆積土砂の有効利用に関する技術開発である。また、久田先生は、震災がれきの有効活用技術の例もいくつか画像で紹介された。さらに、再生利用推進のための課題には、ニーズとシーズのマッチング<時間> (利用時のために資材化がれきの保管が必要)、ニーズとシーズのマッチング<場所>(運搬費用の発生による天然資材との拮抗)、ニーズとシーズのマッチング<組織> (ニーズとシーズの出会い)をあげられた。がれき処理コンソーシアムの体制については web で公開されている。

骨材・コンクリート需要への対応に関しては、以下のような知見が示された。良質な天然資源等をいかに効率よく利用するか、生コン、プレキャスト製品など、事業規模拡大を最小限にしていかに需要に応えていくか、環境基準等の制度を順守しながら、いかに品質を確保していくかなどである。また、「学」のシナジー効果については各々学協会の取組みを紹介した。

がれき処理・利活用を通じて得られた教訓とは、東日本の 2000 万トンのがれき処理が、3 年の時間と 1 兆円の費用を費やしたことである。南海トラフに関しては、最大 2 億トンのがれきが予想され、同じ規模で処理すれば 30 年が必要、10 倍の規模で処理すれば 10 兆円が必要とされる。取組みによって得られた山積する課題のなかで、震災廃棄物処理計画の有り方が課題であると指摘された。また、日本での処理技術を輸出する方法も考えるべきとの見方が示された。

発表後は、セメント工場が西日本は福岡に 6 工場、大分に 1 工場あるが、その可能性について、廃棄物処理業者にとってメリットがあるのかなど、多様な話題について活発な討論がなされた。

出席者：教員（久田教授、清家准教授、小山准教授、光藤准教授）、テクニカルスタッフ（董）および院生、学生等、合計 17 名。



子どもの育ちを支える協同関係の構築に向けて

2014 年 11 月 7 日（金）

2014 年第 2 回研究会「元非行少年！ 言魂トークバトル「福岡市西区における非行少年の立ち直り支援について」

概要：SFD21JAPAN 代表の小野本道治氏およびメンバーの宇薄拓海氏を招聘して、SFD21JAPAN の活動について紹介していただき、またその活動の中での経験や思いについてトークバトルをしていただいた。

日時：2014 年 11 月 7 日

場所：教育学系会議室

内容：

まず小野本氏がパワーポイントを用いて、SFD21JAPAN の経歴、活動内容について講演された。最初は体力増進を目的とした任意団体として始まったが、ある母親から息子をみてほしいと頼まれたことがきっかけとなり非行少年との関わりが始まったとのことである。非行少年の居場所作りということに携わるようになり、平成 16 年に NPO 法人 SFD21JAPAN となった。非行少年にははっきりとした組織作りが必要なこと、いろいろなことに参加してもらい役割を与えることが大事なこと等が説明された。また活動の実際として、他団体との交流、農園、ボランティア活動、ジムなどが紹介された。とりわけアームレスリングに関しては好成績をおさめているということである。そのような話の中で、非行少年は人どうしとしての関わりを求めていること、かかわってくれた人のためにはがんばることなどがポイントとして示された。少年たちからのメッセージや活動の様子を示したビデオも紹介された。

次に、小野本氏と宇薄氏のトークバトルが展開された。主として宇薄氏自身の非行少年としての経歴および SFD に関わるようになってからの経験にからめて、小野本氏がそのときどきの気持ち等を尋ねてゆくという形である。老人ホームでのボランティアや、学校との関わり方、警察との関わりの中である人ととてもよい交流ができたこと、少年院から出てきた少年が再犯するのはなぜか、糸島地区での九大生とのバイトの口をめぐる競争関係、地域との交流のあり方等、話題は多岐にわたった。その中でもやはり重要なポイントは、きちんと人として関わる人の存在、居場所があるということが大切になるということだと思われる。

トークバトル終了後は、宇薄氏が SFD に参加してから人との関わりがどう変化したか、宇薄氏の将来の夢はどのようなものか、非行少年の親の交流会はどんな場か、学校の先生と小野本氏との関わり方、アームレスリングが得意でない子はどうするのか、兄弟の関係性と非行との関連、SFD の運営上の課題、他世代との交流、他、多様な話題について活発な質疑応答、討論がなされた。

出席者：教員（野々村教授、松崎教授、岡准教授、稲葉准教授、田北講師、柴田助教）、テクニカルスタッフ（大沼）および院生等、合計 13 名。



共生社会のための心理学

2015 年 3 月 23 日（月）

2014 年度ミニシンポジウム「共生社会のための心理学」

日時：2015年3月23日

場所：講義棟103教室

出席者：教員（古賀准教授、光藤准教授、内田講師）、テクニカルスタッフ（董、大沼）および院生等、合計38名。

趣旨説明（行動システム専攻・光藤宏行）

人環では5つのコースで心理学が扱われていることが紹介され、学問の細分化は悪い意味での伝統芸能化、社会からの遊離を招くという見解が述べられた。そういったことを回避し、心理学の広がりを楽しむことが今回の企画趣旨であるとの説明が行われた。

自閉症スペクトラム障碍児の対人認知の特異性とその支援（人間共生システム専攻・五位塚和也）

自閉症スペクトラム障碍（ASD）の、人との関わりに困難をきたす特徴等が紹介された。会話場面の吹き出しにせりふを記入させ、発話の意図を問うという手法を用いた実証的研究により、ASDは他者の心を理解する際に、他者と共有されにくい主観を手がかりとし、関係性を手がかりとしないことなどが示された。また、象徴遊び（見立てを用いた遊び、ごっこ遊びなど）を用いた事例研究により、象徴遊びをうまく展開してゆくことによって対人関係も発展してゆくことが示された。

脳性マヒ者の生涯発達支援としての心理リハビリテーション（総合臨床心理センター子ども発達相談部門主任・細野康文）

脳性マヒは脳の病変による運動や姿勢の異常であることが説明された。九州大学で開発された、言葉ではなく動作を行うことにより心理的に働きかけを行う動作法、またそれを用いたキャンプなどの活動が紹介された。次いで、脳性マヒ者の加齢に伴う問題（身体的な不自由度が増す、心理的に将来への不安が増すなど）が説明された。加えて、二件の比較的年長のクライアントについての事例研究が報告された。いずれも、動作法を行うことによって、過緊張や緊張の慢性化に気づき、身体を感じを明確化できたという良い効果が得られたものであった。

大脳半球の左右差が空間性注意機能に与える影響（行動システム専攻・古川香）

リハビリテーション療法士の仕事の中で空間性注意機能の障害の患者さんを対象としているとのことである。その中で半側空間無視は、右脳損傷者に多く見られ、左側を全く無視してしまうという症状が出る。その症状はBITというテストにより診断されるが、有効視野課題により、より細かく左右大脳の機能を検討したいという目的で実施した研究が紹介された。画面の四隅に提示された数字を検出、同定できるかという課題を用いて検討した結果、空間性注意機能障害には右脳の影響が大きいという従来の説が支持された。有効視野課題が空間性注意機能障害の評価方法として使える可能性も示唆された。

凶器注目効果と有効視野の関係（行動システム専攻・原田佑規）

事件などの目撃場面で凶器が存在すると犯人の顔などの記憶成績が低下するという凶器注目効果の概念が紹介された。この効果は有効視野の狭窄が原因となっているという仮説があるが実証的研究は少ないとのことである。凶器を含んだ画像または含まない画像を見た直後、注視点から一定の角度離れた位置に出現する数字を検出、同定できるかという課題を用いて行った研究の結果、凶器がある条件ではない条件より有効視野が狭窄していることが示唆され、仮説が支持されたことが示された。

運動・スポーツ場面での主体的な学習者—自己調整学習の視点から—（行動システム専攻・須崎康臣）

報告者は、学習方略と動機づけを統合した理論である自己調整学習について説明をした。そして、この自己調整学習を用いて、先行研究で指摘されていた大学生における留年、休学、退学の増加問題に対する方策について説明をした。その方策は、大学生の学校不適応問題は学校適応感の低さが関連しており、この学校適応感と関連する対人関係面と学習面の2つの側面を含む体育授業を用いたものであった。そして、学校適応感を促すための体

育授業の在り方として自己調整学習の視点から説明を行った。具体的な内容としては、体育授業における自己調整学習方略の使用と体育適応感との関連についての調査と分析であった。分析の結果から、自己調整学習方略の獲得を促すための学習支援が重要であることを指摘し、さらに大学への不適応に対する改善アプローチとして、体育授業が有効である可能性を提示した。

学校臨床における臨床心理学的コンサルテーション（人間共生システム専攻・中村美穂）
コンサルテーションの必要性または有用性を強く感じたことが、一度学校現場で働いた報告者が再び大学に戻って勉強する契機となった。それは報告者が臨床心理士として現場をよく分かったからこそその志であったとのことである。報告者が目指す臨床心理学的コンサルテーション過程とは、児童生徒・学生保護者と教師、臨床心理士による協議、試行、点検というサイクル化（円環的かつ統合的なコンサルテーション過程へと発展する）であった。

福祉実習による心理変化～福祉学部大学生へのインタビュー調査を通して～（行動システム専攻・小松智子）

報告者は、「福祉実習におけるどのような体験が、どのような心理変化をもたらすかを、インタビュー調査により質的に整理」し、「また心理変化に影響を及ぼす他の要因、福祉実習で測定可能な自己効力感を探索的に検討する」ことを研究の目的としている。そのために、N大学社会福祉学科に在籍し、社会福祉士養成にかかわる相談援助実習を終了した男女学生12名を調査の対象とした。調査の結果は、先行研究と類似する指摘も得られたが、学生らが実体験や観察することを通して、福祉職に求められる資質やスキルを学んでいたことが明らかとなった。一方、進学動機が受動的で気遣いしやすい者は、福祉職に対する自信が低くなったり、不安が高まったりしていたという結果も得られた。また、実習で体験する学びに対する自己効力感を測定する尺度を作成し、進学動機や進路意志との関連性について、データ数を増やして明らかにしていくことにより、学生の個別性に応じた福祉実習教育に貢献する資料が得られる可能性がある」と指摘した。

総合討論（司会：古賀聡・内田若希）

- ・半側空間無視者は、誰かの促しによって自覚できるのか。
- ・自覚がない患者と医者の間で支援策は難しいのでは。
- ・ASDに対する支援の困難さとは。
- ・大学適応感を促すには、対人関係面と学習面の2つの側面からの支援が重要と主張しているが、この報告にはあまり対人関係面について説明されていないと思うが。
- ・大学に体育授業は必要だと思う。では、「大学の体育授業とは何か」を考えられているのか。例えば障がいがある人等、大学では様々な学生さんがいる。今後どのように体育授業を考えられているか。またどのように進んでいくか。
- ・最後は報告者全員が今回のミニシンポに参加した感想を一言ずつ話した。





2. マンスリー学際サロン

2-1. 実施概要

趣旨

人間環境学府教員の学際的交流を促進するため、学際研究・教育コーディネータ委員会での議論を経て2010年度より実施している。学期中、原則として月1回のペースで行っている。

開催日時

2010年度は教授会翌日の木曜日の昼休み（12:00-13:00）

2011年度から人環教授会の日（12:00-13:00）

発表担当者

2010年度

・人間科学部門、教育部門、建築・都市デザイン部門とする発表順番で、3部門のコーディネータが交代で話題提供者を務める。また、話題提供者は原則コーディネータだが、コーディネータ以外でも可。話題提供者になった人が自部門の次回の話題提供者を人選、依頼する。

選出された担当者が告知の手配などを担当する。告知は教授会一週間前に人環メーリングリスト、掲示板で行う。

・発表日付及び担当者は以下の通り。

| | | |
|--------|----------|---------------------|
| 5月27日 | 人間科学部門 | 飯嶋秀治先生（共生システムコース専攻） |
| 6月24日 | 教育学部門 | 元兼正浩先生（教育システム専攻） |
| 7月22日 | 都市・建築学部門 | 小山智幸先生（空間システム専攻） |
| 9月23日 | 人間科学部門 | 高野和良先生（人間共生システム専攻） |
| 10月28日 | 教育学部門 | 野々村淑子先生（教育システム専攻） |
| 11月25日 | 都市・建築学部門 | 清家規先生（都市共生デザイン専攻） |
| 12月16日 | 人間科学部門 | 佐々木玲仁先生（実践臨床心理学専攻） |

2011年度

・部門ごとにコーディネータが話し合っ話題提供者を決定する。人環メーリングリストおよび掲示板にて毎回事前に広報を行う。そのため、話題提供者名と話題提供のタイトルを可能であれば開催一か月前までに、遅くとも二週間前までに光藤まで連絡する。

・発表日付及び担当者は以下の通り。

| | | |
|-----------|----------|----------------------|
| 4月27日(水) | 都市・建築学部門 | 河野昭彦先生（空間システム専攻） |
| 5月25日(水) | 教育学部門 | ジェフ・ゲーマンさん（教育システム専攻） |
| 6月22日(水) | 教育学部門 | 浜本満先生（人間共生システム専攻） |
| 7月27日(水) | 人間科学部門 | 林直亨先生（行動システム専攻） |
| 10月26日(水) | 都市・建築学部門 | 有馬隆文先生（都市共生デザイン専攻） |
| 11月24日(水) | 教育学部門 | 荒牧草平先生（教育システム専攻） |
| 12月21日(水) | 人間科学部門 | 光藤宏行先生（行動システム専攻） |
| 1月25日(水) | 都市・建築学部門 | 鶴崎直樹先生（都市共生デザイン専攻） |

2012年度

・学際企画室の大沼(事務補佐員)が予定月と担当部門をコーディネータ委員にメールで知らせる。それをもとに各部門で担当者を決定する。担当者は事前に、発表者とタイトルを学際企画室に連絡する。

・発表日付及び担当者は以下の通り。

| | | |
|-----------|----------|------------------------------|
| 5月23日(水) | 教育学部門 | 荒牧草平先生(教育システム専攻) |
| 6月27日(水) | 人間科学部門 | 橋彌和秀先生(行動システム専攻) |
| 7月25日(水) | 都市・建築学部門 | 志賀勉先生(空間システム専攻) |
| 10月24日(水) | 教育学部門 | エドワード・ヴィッカーズ先生 (教育システム専攻) |
| 11月28日(水) | 人間科学部門 | 鈴木讓先生(人間共生システム専攻) |
| 12月19日(水) | 都市・建築学部門 | 趙世晨先生(都市共生デザイン専攻) |

2013年度

・発表日付及び担当者は以下の通り。

| | | |
|-----------|----------|--------------------|
| 5月22日(水) | 教育学部門 | 藤田雄飛先生(教育システム専攻) |
| 6月26日(水) | 人間科学部門 | 古賀聡先生(人間共生システム専攻) |
| 7月24日(水) | 都市・建築学部門 | 山口謙太郎先生(空間システム専攻) |
| 10月23日(水) | 教育学部門 | 坂元一光先生(教育システム専攻) |
| 11月27日(水) | 人間科学部門 | 安立清史先生(人間共生システム専攻) |
| 12月18日(水) | 都市・建築学部門 | 末廣香織先生(空間システム専攻) |
| 1月22日(水) | 教育学部門 | 浜本満先生(人間共生システム専攻) |
| 2月19日(水) | 人間科学部門 | 南博文先生(都市共生デザイン専攻) |

2014年度

・発表日付及び担当者は以下の通り。

| | | |
|-----------|----------|-------------------------|
| 4月23日(水) | 学際企画室 | 大沼夏子・董秋艶 |
| 5月28日(水) | 教育学部門 | 田上哲先生(教育システム専攻) |
| 6月25日(水) | 人間科学部門 | 内田若希先生(行動システム専攻) |
| 7月23日(水) | 都市・建築学部門 | 住吉大輔先生(空間システム専攻) |
| 11月26日(水) | 教育学部門 | 岡幸江先生(教育システム専攻) |
| 12月17日(水) | 人間科学部門 | 山下亜紀子先生 (人間共生システム専攻) |
| 1月28日(水) | 都市・建築学部門 | 尾崎明仁先生(空間システム専攻) |

開催場所

学際サロン(文・教・人間環境学研究院会議室2F)

2-2. 議事録（コーディネータ会議記事録から抜粋）

（2010年、4月13日）

それぞれのコーディネータが自分の研究を他のコーディネータに紹介する、ざっくばらんな集まりを月一のペースで学際サロンで行う。

- ・二人組で取り組み、発表が終わった人は次回の発表者の差し入れ等を用意するというやり方で進めるとある。
- ・くじ引きの結果、第一回目は人間科学部門、第二回は教育、第三回は都市・建築学部門という発表順番が決まった（部門内発表者は未決定）。

（2010年7月6日）

2. マンスリー学際サロン

- ・原則として教授会の翌日木曜。3部門のコーディネータが交代で話題提供者を務める。今後の予定は 7/22(建：小山先生)、9/23(人：高野先生)、10/28(教)、11/25(建)、12/16(人)、1/27(教)、2/17(建)、3/4(人、金曜)。
- ・話題提供者は原則コーディネータだが、コーディネータ以外でも可。話題提供者になった人が自部門の次回の話題提供者を人選、依頼する。
- ・場所は学際サロン、時間は 12:00-13:00。
- ・告知は教授会一週間前に人環メーリングリスト、掲示板で行う。
- ・マンスリー学際サロンの担当者をコーディネータの中から一名選出し、告知の手配などを担当していただく。すでに学際サロンの話題提供者を経験している飯嶋先生ではどうか(小山が依頼する)。

（2011年3月15日）

今後のマンスリー学際サロンについて

- ・次回の4月27日は河野研究院長（都市・建築学部門）にお願いする。サロンに人が入りきれなかった場合のため、隣に大会議室も予約しておいた方が無難では。
- ・5月25日は学際企画室の事務補佐員（現在）のゲーマンが海外調査の報告を行う。
- ・6月のスピーカーは浜本先生（教育学部門）となる。

（2011年4月27日）

3. マンスリー学際サロン

- ・人環の学際的交流を促進するために今年度もマンスリー学際サロンを継続する。原則として当該月の人環教授会の日の昼休み開催とする。
- ・今年度の開催実績および予定は以下の通り(敬称略)。7月以降については部門ごとにコーディネータが話し合っ話題提供者を決定する。

| | | |
|-----------|----------|------------|
| 4月27日(水) | 都市・建築学部門 | 河野昭彦 ※実施済み |
| 5月25日(水) | 教育学部門 | ジェフ・ゲーマン |
| 6月22日(水) | 教育学部門 | 浜本 満 |
| 7月27日(水) | 人間科学部門 | |
| 10月26日(水) | 都市・建築学部門 | |
| 11月24日(水) | 教育学部門 | |
| 12月21日(水) | 人間科学部門 | |
| 1月25日(水) | 都市・建築学部門 | |

- ・人環メーリングリストおよび掲示板にて毎回事前に広報を行う。そのため、話題提供者名と話題提供のタイトルを可能であれば開催一か月前までに、遅くとも二週間前までに光藤まで連絡する。

(2012年4月25日)

3. マンスリー学際サロン

・昨年度までと同様、教授会のある日の昼休みに、学際サロンにて、部門を基本単位としてローテーションで実施する。大沼が予定月と担当部門をコーディネータ委員にメールで知らせる。それをもとに各部門で担当者を決定する。

・担当者は事前に、発表者とタイトルを学際企画室に連絡する。

(2013年4月24日)

5. マンスリー学際サロン

・今年度の開催予定は以下の通り。

| | |
|--------|---------------------------|
| 5月22日 | 教育学部門（藤田先生に担当していただけるか確認中） |
| 6月26日 | 人間科学部門 |
| 7月24日 | 都市・建築学部門 |
| 10月23日 | 教育学部門 |
| 11月27日 | 人間科学部門 |
| 12月18日 | 都市・建築学部門 |
| 1月22日 | 教育学部門 |

(2014年4月23日)

3. マンスリー学際サロン

・4月23日（水）12:00-13:00 学際サロンにて、大沼（学際企画室）が「これまでの学際企画室 ー学際研究・教育コーディネータ支援の歩みー」、董さん（学際企画室）が「近代女子教育の成立をめぐる日中関係史研究」というタイトルで発表を行った。参加者は3名であった。

・今年度のマンスリー学際サロンの予定は以下の通り。10月以降については各部門で話し合って担当者を決めていただくようお願いしたい。

| | | |
|-----------|----------|------------------|
| 5月28日（水） | 教育学部門 | 董さんが岡先生に担当者選出を依頼 |
| 6月25日（水） | 人間科学部門 | 内田先生 |
| 7月23日（水） | 都市・建築学部門 | 住吉先生 |
| 10月22日（水） | 教育学部門 | |
| 11月26日（水） | 人間科学部門 | |
| 12月17日（水） | 都市・建築学部門 | |
| 1月21日（水） | 教育学部門 | |

2-3. 発表概要

平成 22 年度マンスリー学際サロン (開催数 計 7 回)

第 1 回

日時：2010 年 5 月 27 日 12:00-13:00

会場：学際サロン (人間環境学研究院会議室 2 階準備室)

発表題目：「共生社会システム論」

発表者：飯嶋秀治先生 (共生システムコース専攻)

参加者：飯嶋・河野・南・柴田・浜本・小山・元兼・野々村・佐々木・光藤・ゲーマン (計 11 名)

発表の内容：学部時代から現在までの研究内容や興味関心の経緯、最近取り組んでいる研究の概要や目指している研究像の説明、また現在組んでいる実習の様子や抱いている人環の理想像、更にそれに向けての具体的な提案。

感想：飯嶋先生が使っている研究手法は文化人類学の手法だけではなく、臨床心理学の手法もベースとしており、更に農学等の研究手法まで幅広い調査方法を取り入れていることや、かなり実践的なフィールドワークの志向性があること、国内外を研究の対象としていることから、話は全体的にパワーが伝わるものであった。発表中の聴き手の集中した表情や顔さから判断すれば、本題の話はかなり参考になったと思われる。

質疑応答・ディスカッション

・Q. 浜本：飯嶋みたいなパワーと体力を持っていなければなかなかこのような研究ぶりは続かない。

⇒A. 飯嶋：返事関心があることや気になっていることばかりを対象としてやっているから、疲れは感じない。

・コメント. 河野：フィールドワークの提案は前からあり、人環の中期計画・長期計画の中に含まれているが、なかなか実現できず、うやむや状態にある。(浜本：友枝先生は「フィールド・サイエンスの確立」を提案した)。

⇒A. 飯嶋：農学部の先生方ともパイプができていし、できるような気がする。

↓話を受けて

河野：それぞれの部門では見学は行われており、浜本：持続都市 (プログラム) では学生たちを連れて海外に一週間ぐらいも行っている。

([飯嶋]：実現されなかった福岡市内の青年の安全確保プロジェクトの逸話)。

↓話を受けて

浜本：実社会のある問題に大学が介入するということになるのなら、その問題はかなりの程度コントロールされているような状況でなければ・・・

(浜本註) <問題がコントロールされている>とは、何が問題であるかがある程度明確に定義され、社会的に認知されていて、それらの問題に取り組む社会的エージェント (国家機関、ジャーナリスト、活動家、NPO など) がすでに存在しており、そうしたエージェントと問題領域を構成する人々とのあいだに、折衝の回路が開かれている状態を指している。飯嶋：フィールドワークをするのなら、最初の一年間ぐらいは関係づくりに費やしたい。ただし、分野によっては関係づくりをしながら実習を進めていくということもある。

↓話を受けて

南、柴田：分野によってはタイムラインが全然違う。その関係で共同研究をやると驚かれることもある。建築の研究者は一週間で調査を済ませ、いきなり人の寝室に入らせていただいたりすることもある（プライバシーは逆に考えなくてもよい）。

↓話を受けて

飯嶋：建築部門の人と一緒に研究をやって「コンパクトさ」に感心した。論文のまとめ方、図の作り方。文化人類学の研究室の学生には学ぶべきものがあると考えている。互いの分野から学べるものが色々あると思われる。文化人類学の学生たちに臨床心理の手法を覚えていただきたい（水俣関係の研究等に高齢化問題というところで接点があるから）。

↓話を受けて

・Q. 佐々木：逆に、臨床の人々は（飯嶋先生と研究を共同にやることによって）飯嶋先生から学ぶことはあったか？

⇒A. 飯嶋：田嶋研の学生たちに結構聞かれることがある。お互いがお互いの手法をフォーマルで学んでいるが調査に取り組んでいるとそれが変換されているということに気づかないことがある。例えば、臨床では、話を聞きながらノートをとってはならないという決まりがあるが、それは実は外の社会では気にしなくてもよい。逆に、心理学では社会学のKJ法は使われているが、かなり誤解を招いている点があるようだ。資料のまとめ方とか分析の仕方ですぐアドバイスができていくという感じだ。

・Q. 小山：このあいだの人環コロキウムに行って、同じ「開発」と言っても、解釈の仕方が全然違うということが話題になっていた。

⇒A. 飯嶋：いろんな（学際的）シンポジウムに行って常に感じるのは、それぞれが発表をして研究紹介の段階で終わってしまっている。

⇒コメント. 飯嶋、浜本：それぞれの分野・地域にとって、「開発」の意味の違いの事例紹介。

・Q. 光藤：30人を実習につれていくときに、準備期間はどれぐらいか？

⇒A. 飯嶋：プロジェクト全体は一年間なので、半年。水俣病に関しては、水俣病の勉強をしたり、質問を事前にデザインしたりする。実習は一週間。その後に後期に報告書作成。

⇒コメント. 浜本：このような（実社会をフィールドにした）実習はかなり綿密な計画が必要。

・Q. 柴田：フィールドワークの際、初日から家で聞き取りに入るのか？

⇒A. 飯嶋：路上調査から入って少しずつ存在を周知している。

（文責：ゲーマン）

第2回

日時：2010年6月24日（木）12:00-13:20

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

題目：「少なくとも最後まで歩かなかった」（二足のわらじで走り続けている理由）

話題提供者：元兼正浩先生（教育システム専攻）

参加者：元兼・浜本・野々村・光藤・金子（院生）・ゲーマン（計6名）

概要：学生時代から現在までの研究関心の経緯やその内容、九大教育学部の組織構成の変遷や自らの位置付け、教育行政の理論と現場のニーズとのギャップ、学校管理職向けのプログラムの最近の国際動向など。

質疑応答・ディスカッション

H = 浜本 Mo = 元兼 N = 野々村 Mi = 光藤

H 私が意識してきたのは先生の影響をいかに受けないか。N 影響を受けた先生は少しは居た。中学校一人、高校一人、大学...二人。Mo 90分の授業でさえも、90分後には学生に少しでも変わっててもらいたい。影響をいかに与えるかということ意識してやっている。

Mi 校長のシステムを変えるには、法律を変えないといけない？

Mo 管理職としての一定の水準を満たしていなくとも他により優れた候補者がいなければ校長になれる。ひしめく団塊世代が抜ける年齢構成ピラミッドからすれば今後は資質がない人でも校長になって行く。そこで重要になってくるのは、校長の資質・力量をあげること。それとともに、どのようにして校長の権限をシステムとして抑制するかだ。

Mo その糸口はコミュニティスクール論。学校のガバナンスは誰が担うかといった時に、今までどうしても内部統制だけだった。地域ボスに任せるという話ではなく、地域代表、父母代表の方に入ってもらおう。学校評議員やコミュニティスクールといった制度にも、その可能性がある。

Mi 元兼先生は学校に対してプログラムの提案をしている？

Mo 全ての学校の状況が違っているので学校の状況に合わせてコンサルテーションをしている。プログラムを実際にやってもらうというような形であれば、「研究」になるんだろうけど。現場をよくするための支援を行っている。

Mi 学校ごとに違うというのは、たとえば、地域の方がうまく入っていくようなシステムというのは、既にある？

Mo 外部が入る機会はある。だけれど、その多くはお手伝い程度。学校の運営にはほとんど関わらない。したがって、少しずつ、学校の成熟度によって入れ方を変えたりしている。

N 「小一プロブレム」とか「中一ギャップ」にはどう対処したらいいと助言する？

Mo 今の改革のうごきというのはどちらかといえば制度的にギャップをなくそうとしている。小中一貫を進めようとしている。小学校教員のまなざしと中学校教員のまなざしが全然違うのに、教科担任制を小学校にも導入するなど制度上でそのギャップを埋めようとしている。「小一プロブレム」とは何か、「中一ギャップ」とは何かなど、まずは問題の整理からいかなないと、現場はとにかく走るの、どちらかといえば「冷却措置」としてコンサルしていくことのほうが多い。

Mi 学校単位それとも県単位で動くことが多い？先ほど、地域によってやり方が違うという話だったが...

Mo 市町村立学校なので設置者である市町村単位で動くことが多い。

H 学校というのはそもそもちゃんとした能力をもった人間をつくる、効率的な手段？ 子どもの自由な反応によって学習は進むのではない？ Mo もちろんそういう類の実験もあるが、あくまで公教育ということが前提になる。たとえばヴァウチャーを入れたって、格差が生まれることが問題となる。H 格差は避けられないのでは？ Mo 教育論議の時に外せないいくつかのことがあって「全ての子どもたちのために」ならないと改革に踏み出すことはなかなか難しい。

Mi さきの、地域の力関係を調べる学問はある？地理学とか？議会とか地域とか教育組織、そういう人のシステムを比較する何か？歴史？

Mo アクター研究などのパワー研究。社会学とか... N—政治学。マイクロポリティカル研究。

Mo 我々の分野は教育現場との距離感がほんとに難しいが、今日一番理解してほしかったのは歴史的な経緯にともなう教育経営学と教育行政学との学問的スタンスの違い。名古屋大も広島大も筑波大も講座としてそれぞれ独立している。九大も昔はそうだった。そしてカウンター教育行政学を標榜した東大にはそもそも教育経営学の研究室がない。N 戦後は対立があって、権力批判が新自由主義を行かせ過ぎたという話は教育哲学の雑誌に書いてあった。H 教育という権力装置そのものはどちらも前提としたうえで、その教育という権力装置を誰がコントロールするか、国家がコントロールするか、それとも国民がするか、そこで対立しているということ？その教育制度そのものの権力性というのは問題にされない？ N それはポストモダンが言ってきたことではある。それと非常に効率的な人間形成をつくってしまった。

N そういう話は現場の先生方にはなかなか受け入れられない？

Mo 九大で行っているマネジメント研修ではそんな話もあえて入れている。教育センターでの研修では当然そういうのは入れられない。だから大学で研修をやる意味はそういうところにある。

Mo ハーバード大学やソウル大学などアカデミズムの拠点に校長職養成のセンターが附属施設として根付いている意味について、サバティカルの機会にしっかり研究して、九大に還元できればと願っている。「少なくとも最後まで歩かなかった」と墓標に刻まれるよう、これからも走り続けたい。

(記録：ゲーマン)

第3回

日時：2010年7月22日 12:00-13:30

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

話題提供：小山智幸先生（都市・建築学部門）

タイトル：「コンクリートと人間環境」

参加者：小山・野々村・光藤（計3名）

今回の学際サロンの話題提供は、建築材料学がご専門の小山先生であった。最初にコンクリートの定義から始まり、小山先生が取り組んでこられたテーマについてそれぞれの概略の説明がなされた。

小山先生によれば、コンクリートとは正確にはセメント・水・砂・砂利を混ぜたものであり、砂利等が混ざらない場合には強度が低く、硬化時に縮み、また材料費も高くなるということである。またコンクリートはアルカリ性であり、酸化が進むと鉄筋が腐食して強度が低下するという基本特徴の解説がなされた。

小山先生が関わってこられた具体的な研究課題として、建物の総合的劣化評価、耐震性を有する煉瓦造住宅の開発、弱酸性硫酸地盤におけるコンクリート性能、無機副産粉体のコンクリートへの有効利用、暑中コンクリート工事のそれぞれについて、パワーポイントを利用して、要点と主要な知見について解説がなされた。

参加者との意見交換を含めて、(a) 適材を適所に使うこと、(b) 現場における工事環境の多様性、(c) 日本社会でのコンクリートや建築物の価値評価の扱いの問題、などが小山先生の話の重要な点と思われた。

第4回

日時：2010年10月28日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

話題提供：高野和良先生（人間共生システム専攻）

タイトル：「高齢者介護サービス利用に関する意識について」

参加者：高野・浜本・野々村・光藤・ゲーマン(計5名)

今回の学際サロンの研究紹介は、人間共生システムコースの高野和良先生によるものであった。高野先生の話は、初就任した研究所の話から始まり、現在まで取り組んできた高齢者介護に対する意識の調査研究の紹介や現在取り組んでいる応用研究まで至った。いつものマンスリー学際サロンと同様に、最後に、聴き手から質問が相次ぎ、ざっくばらんな話し合いは15分ぐらい続いた。

高野先生は豊富な表や図を用いながら、日本の介護保険制度導入前後の高齢者介護、介護サービスに対する意識の変化を説明した。国際比較調査の事例を交えながら、高齢者扶養に対する家族の責任、介護サービスの利用に伴う抵抗感の変化などについて話をされた。高野先生の個人的な結論としては、日本社会の高齢化が更に進む見込みの中で、上記の抵抗感はいずれ和らがるを得ないのではないかというご意見だった。

後半に、自らが関わっている応用研究の一つを紹介するため、ケーブルテレビを通じて買い物をするを通しての山口県の過疎地の高齢者支援の試みに関するNHKの動画が紹介された。興味深いことに、大都会等の遠隔地に住む家族は山口県在住の親のために利用者負担額の月数千円を払うことにより親孝行をする絶好の機会にも関わらず、サービスを利用することに対して抵抗感を持つ人々はかなり居るといった話であった。それはさておき、動画の紹介によって前半の話にあった統計的な内容がより分かりやすくなり、また、社会学の応用研究がどのような場面で展開されるかについて、臨場感を持って理解できる分かりやすい事例のように思えた。

聴き手からは、介護サービスを利用することに対する抵抗感やサービスを受ける高齢者やその高齢者や家族だけの心構えの問題ではなく、公的な財政的な不十分さはないだろうかという質問、文化間の高齢者観の違いについてのコメント等があった。

第5回

日時：2010年11月24日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

話題提供：野々村淑子先生（教育システム専攻）

タイトル：「養育する家族」そして「産み育てる女性」はどこからきたのか？」

参加者：野々村・浜本・小山・高野・飯嶋・光藤・大沼(計7名)

野々村先生の現在探究中のテーマであるイギリスの **Christ's Hospital**(英国最初の孤児院)の成立の経緯や変遷、および修論から博論にかけてのテーマである南北戦争前のアメリカに発生した近代的母親像といった歴史的な話題を軸にパワーポイントを使用して発表が行われた。現代の我々の間では通念のようにになっている、子供は家族が養育するもの、母親が子育ての中心的役割を担うもの、という意識は昔からあったわけではなく、**Early Modern** と呼ばれる16~17世紀頃にそのような意識が発生するきっかけがあったということである。また、やはり現代では通念となっている、男女の性はそれぞれに異なっており対等である、という意識もそう古いものではなく、医学、解剖学など科学の視点で捉えられる(性差を生物学的な器官や機能の差異として捉える)より前は、男女は1つの連続した性であるが優劣があると捉えられていたということである。

発表後には

- ・「養育する家族」「産み育てる女性」といった通念は近代になって初めて成立したのではなく、古くから暗黙に了解されていたことが、近代の社会的状況の変化に伴って再帰化(reflexivity)された(言説的に構築された)ということではないか
 - ・それらの通念が成立する以前には養育の実質的な担い手は誰だったのか
 - ・イギリスの制度を考える場合、その実際、たとえば孤児院などの養育施設から植民地への労働力供給という視点が必要なのではないか
 - ・養育のあり方とそれが行われる空間としての建物は相互に影響を及ぼし合っているのではないか
- といった話題について活発な討論が行われた。

第6回

日時：2010年12月15日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

話題提供：清家規先生（都市共生デザイン専攻）

タイトル：「地震による経済被害」

参加者：清家・浜本・小山・高野・野々村・光藤・ゲーマン・大沼（計8名）

地震による経済被害に関する実情について、実際に発生した地震や将来予測される地震に関するデータなども交えて、パワーポイントを用いて発表が行われた。以下に内容の概略を記載する。

- ・被害はストックに対する直接被害と、フローに対する間接被害に分けられる。間接被害は定義の問題が煩雑なので正確な値を決めることはできない。
- ・災害が経済に及ぼす影響は必ずしもマイナスばかりではなく、復旧復興需要などでむしろプラスになることもあるが、一般的にその地域の将来変動を成長であれ衰退であれ加速させる。
- ・被害の推計額は、推計主体の意図(災害に対する補助金をどのように使いたいかなど)により左右される。行政が行う被害額の算定はその後への影響が大きいので根拠やデータを公開するようすべきである。

発表後は以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・自治体ではなく、損保会社が被害額の算定を行うと、算定結果が変わり得るか。
- ・被害額の算定は災害後の時間幅のとり方や災害地域の空間幅のとり方でどのように変わってくるか。
- ・被害額の算定基準を設けようという学術的な動きはないのか。

第7回

日時：2011年1月26日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

話題提供：佐々木玲仁先生（実践臨床心理学専攻）

タイトル：「風景構成法とその研究方法論」

参加者：佐々木・田上・岡・田北・橋彌・浜本・飯嶋・野々村・小山・光藤・ゲーマン・大沼（計12名）

風景構成法の研究に至るまでの経歴と、過去および現在の研究内容、今後について、実例の紹介なども交えてパワーポイントを用いて発表が行われた。以下に内容の概略を記載する。

- ・臨床心理学の研究に至るまで、原子物理学研究、公務員、土木コンサルタント会社とさまざまな経歴を重ねてきた。それぞれの経験から、今の研究につながることを学んできた。結果的にいわば「一人学際」状態となった。
- ・風景構成法は心理療法で用いられる技法の一つで「見守り手」が「描き手」にある決まった十個のアイテムを順番に指示して描いてもらい、そのあと付け加えたいものがあれば付け加えてもらい、最後に色を塗ってもらうというものである。描き手の治療とアセスメントの両方の側面を持っている。臨床現場では経験的有効性が認められている。
- ・研究状況としては基礎研究、事例研究共にまだ不十分な点がある。
- ・研究目標は、高い実践性と方法論の洗練。非臨床(実験的手法)で質的な検討をするという立場。
- ・これまで行ってきた研究によって、各アイテムの描画時間の分析から、アイテム呈示順が描き手にとってもつ意味合いが判明してきた。また、風景構成法によって描き手の何がわかるのかについては「人それぞれ」であり、すなわち「どのような側面があらわれるかがその人の個性」であることも判明してきた。
- ・現在進行中の研究は、認知科学分野の研究者と共同で行っている。臨床心理学者の思いつかない着眼点を得る、認知科学的データとの突き合わせで把握できることがあるなどの利点があり、一方、自分分野での現象を共同研究者に伝わるように明示するのに苦労するといった面もある。
- ・今後の目標は、臨床的現象を明確にかつ本質をそこなわずに提示、理解すること。発表後は以下のような話題について活発な討論が行われた。
- ・まず決まったものを描いてそのあと付加物を加えるという風景構成法の方法は「常識的なものでまず枠をつくる」という一つの知恵だと思われる。
- ・人類学では会話や観察などダイレクトな方法で情報などを得るが、風景構成法では通常の会話や観察で出てこないことが出てくるのか。
- ・風景構成法で得られる情報は何のインデックスになっているのか。
- ・妖術使いが行うある種の占いによる暗示と風景構成法は本質的に似通った点があるように思われる。
- ・「見守り手」という言葉を使っているが、実際の感覚として「見守っている」という言葉がふさわしい状態なのか。
- ・他の人が実施しているところの分析と自分が実際に実施していることの分析の違いとは。
- ・描き手には「見抜かれない」「見抜かれない」の相克があるのでは。
- ・描画や風景に関することを研究されている人環の他の先生方との共同研究も可能だと思われる。
- ・アイテムの呈示順は概ね「大きなものから小さなものへ」という認識でよいか。
- ・描き手の絵の上手下手、絵の専門家かどうかなどはどのように影響するか。

平成 23 年度マンスリー学際サロン（開催数 計 8 回）

第 8 回

日時：2011 年 4 月 27 日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2 階準備室）

話題提供：河野昭彦先生（空間システム専攻）

タイトル：「鉄と木の環境共生住宅と次世代型学校建築」

参加者：河野・當眞・橋彌・清家・山口・高野・浜本・古賀・野々村・小山・佐々木・光藤・大沼（計 13 名）

鉄と木を使用した建築の話題を中心に、豊富な図表や写真、さらには映像も交えて、パワーポイントを用いて発表が行われた。

1. 鉄と木の環境共生住宅

日本の共同住宅で鉄骨を用いたものは少ないが、鉄と木を用いる建築は環境問題にも貢献でき、長持ちする建物を造れるなどの利点があることが紹介された。木材でも耐火が可能であり、また熱を通さない性質があるため、鋼管を木材で囲って柱とする方法は有効とのことである。スケルトンとインフィルとの組み合わせ次第でかなりいろいろな構造の建物を造れるということも示された。鉄と木の建築を普及するための課題や鉄筋コンクリートとのコスト比較も示された。

2. 次世代型学校建築

学校建築の歴史が簡単に紹介された。次世代型学校建築では壁が移動可能な間仕切りになっているので、フレキシブルな空間の変化に対応できるとのことである。また、階下の温度を保つのに役立つ屋上プールや、耐震性のあるスリットの入った壁の構造、屋上緑化や壁面緑化といったことが紹介された。

3. 角材をパネル化した新工法

角材を並べてパネル化したものを組み合わせて造る建築の方法が紹介された。

発表後は以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・鉄と木の建築は何階建て程度まで可能なのか。
- ・角材パネル建築のコストは。
- ・鉄と木の建築は、音の響き方はどうか(たとえば福祉施設に利用したとして、車いすや車輪付きベッドなどの移動の際にどの程度音が発生するか)。
- ・鉄と木の建築は、福祉施設や病院にも向いているのではないか。
- ・伊都キャンパスの建物も鉄と木で造ったら好ましいのではないか。
- ・廃校になった校舎などの再利用にも技術が応用できるか。

第 9 回

日時：2011 年 5 月 25 日 12:00-13:00

会場：学際サロン

話題提供：ジェフ・ゲーマンさん（教育システム専攻）

タイトル：「学際的研究と教授法を再考する ―九州大学人間環境学府学際企画室における 18 ヶ月の勤務を期に―」

参加者：ゲーマン・清家・高野・浜本・野々村・小山・佐々木・光藤・金子(院生)・大沼（計 10 名）

ゲーマンさんが学際企画室に事務補佐員として 18 ヶ月間勤務した中で学際的教育・研究について調査した内容を中心に、パワーポイントを用いて発表が行われた。

まず、ゲーマンさんの履歴について簡単な紹介が行われた。アメリカで学士取得、日本でいくつかの仕事を経験、日本でふたたび学士取得、アメリカで修士取得、そして九大人環の博士課程を単位取得退学され、学際企画室に勤務されたとのことである。

本題の最初に、人環における学際性教育はどのように実施されるか、意図的な学際性教育は可能なのか、ケースバイケースでは学際が実施されてもそれが最終的に身につくかといった問題提起がなされた。

次に、ゲーマンさんが行った海外の文献研究から、学際性の定義、学際研究のプロセス、学際的学習のモデル、「学際的」の条件が紹介された。その中で学際の最終目標としての「統合」の意義が強調された。

続いて、ゲーマンさんが行ったテキサス大学での海外視察調査の内容が報告された。学際的教育のカリキュラム、および学際的教育と出口問題(就職先)との関連性が紹介された。

さらに、学際的教育が人環にどのように適用可能かということについて話題が展開された。個々の教員の、自分のディシプリンについての「自覚」が大切なのではないかと、学際的教育の中で自分の研究分野を説明することで、学際のめざす統合に向けての学生の理解が促進されるのではということであった。

最後に、今後取り組むべき課題について簡単に述べられた。

発表後は参加者からの以下のような質問およびコメントについて活発な討論が行われた。

- ・教員の自覚が大切ということに関して、自分の分野内だけではなく、それ以外の人にも通じる説明力、自分の分野に対するメタ認知的な認識が必要なのではないかと。
- ・さまざまなディシプリンを理解し説明できる能力を持った、コーディネート力のある人材が必要ではないかと。
- ・学際を誰が担うのか。ディシプリンを持っている人が兼ねるのか、学際を専門で扱う人が必要か、その両方か。
- ・テキサス大学ではどのような学生(興味、将来の目標など)が学んでいるのか。
- ・学際的となり得る問題は限られている感がある。また、すでに学際的な要素を持つディシプリンもあり、それ以上の統合を求められても難しいこともある。
- ・アメリカの学際性はイシューオリエンティッドであり、その意味で限定された学際性ではないかと。
- ・テキサス大学のカリキュラムにある「学際性概論」というのは完成された学問なのか。授業の目標として挙げられている「学際性を説明できる」とはどのようなことを指すのか。
- ・学際性に関する諸事項は、学問以外にも当てはまるのではないかと。
- ・「統合」は難しい。また、どのようにして統合が出来たか否かをはかることができるか。
- ・「学際性」は必要なのか。
- ・アメリカの国民性として「統合」が好きなのでは。
- ・適切なモチーフ、問題が存在すると自然に学際ができるのでは。
- ・日本とアメリカでは、大学と企業の関係性に違いがある

第10回

日時：2011年6月22日 12:00-13:00

会場：学際サロン

話題提供：浜本満先生（人間共生システム専攻）

タイトル：「妖術の現代アフリカ：想像の呪縛と信念の社会問題化」

参加者：浜本・野々村・小山・佐々木・光藤・大沼（計6名）

浜本先生が研究対象としてきたアフリカの妖術信仰について、豊富な事例紹介を交えながらパワーポイントを用いて発表が行われた。

アフリカでは何か不幸があると、それを隣人の誰かの妖術のせいだとする妖術信仰の存在が知られている。これは単なる古い迷信の名残のようなものではない。妖術使いを探し出して殺害する(妖術使い狩り)という事件は、むしろ現代になってかえって増大してきており、多くのアフリカ諸国において大きな社会・政治問題となっている。

タンザニアのスクマ・ディストリクトでは妖術に対する告発と裁定は王(ンテミ)や長老たちの管轄下であり、近隣の間人間関係をめぐる問題として処理され、めったに暴力的な形をとっていなかった。植民地支配を行った独や英によって、妖術信仰は植民地の発展を阻害する迷信として弾圧されたが、間接統治のもとで、実際には伝統的な王や長老は従来どおりの仕方であつて妖術問題を処理していたと思われる。しかし独立後、こうした伝統的権威者が中央政府が派遣した行政官によってとって代われ、そのもとでより厳格に植民地時代の妖術法による施術師(病の原因を占いで診断したり、妖術による病を治療したり、妖術に対抗したりする職能者)に対する取締りが行われた結果、逆に民衆による妖術使い狩り、妖術使いとされた容疑者に対する殺害が広まった。従来やり方が行政によって制限された結果、人々は妖術使い問題をより直接的な暴力によって解決する方向をとったのである。

南アフリカでは反アパルトヘイト闘争と妖術使い狩りは密接に結びついていた。闘争の主力であつた若者たちは、白人に対するテロや白人政権への密通者の処刑と並んで「コミュニティの敵である妖術使い」の検挙と処刑にも携わっていた。妖術使いとされた者に対する殺害は、アパルトヘイト撤廃後にかえって激増した。アパルトヘイト体制下では、黒人民衆の経験する不幸の多くは、アパルトヘイト体制のせいにするのができた。撤廃後は、ある意味でより深刻になった苦境と失望の原因を引き受けるのは、もっぱら隣人の悪意=妖術になったのである。妖術がらみの殺人事件の激増を問題としたANC(アフリカ国民議会)の新政権は、ラルシャイ調査委員会を組織して問題の調査にあつたが、その報告では、妖術の存在を認めた新しい妖術法の制定などの提言が含まれている。妖術使い殺害を食い止めるには、政府自身が妖術使いの存在を認め、人々に代わってそれをきちんと法的に裁くべきことなのである。しかしそれは政府自身が「迷信」に妥協してしまうということになるのではないだろうか。南アフリカ政府は、妖術を否定して妖術使い狩りを取り締まれば妖術使いの味方という非難を受けて人民の支持を失い、妖術を肯定すれば人権問題に発展し国際社会への姿勢を疑問視されるというジレンマを抱えている。その他、同様なジレンマに対する多様な解決の試みの例としてカメルーン、ザンビア、ジンバブエの例も紹介された。

妖術信仰の研究に含まれる一般的な問いは、ある観念が特定の社会に広がり、繰り返し再生産されつづけるメカニズム(信念→実践システム→効果→信念)は何かという問いである。そうした観念を再生させ続ける歴史的・社会的コンテクストがある。妖術と国家開発との呼応関係も重要な視点であるとのことである。

発表後は以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・共同体の中でどのような位置づけの人が妖術使いとされやすいか。
- ・妖術使い狩りはヨーロッパの魔女狩りとの共通点、相違点がある。
- ・現在も妖術使い狩りは存在するのか。
- ・妖術使いを指摘し、妖術の効果の治療する施術師は「不幸の落としどころ」を提供するという点で臨床心理士と共通の要素があるのでは。
- ・戦時下の日本の天皇崇拜やオウム真理教ともつながる要素がある。
- ・妖術使いやそれに類似した現象のメカニズムを実際に追うのは難しい。
- ・妖術使い狩りを認めることは不満のはけ口を提供するという点で権力によるコントロールに結びつきやすい面もあるのでは。
- ・妖術狩りが発生するところとしないところの違いを解明する必要がある。
- ・妖術や施術に使われる薬は実在するのか、どのようなものか。

- ・妖術やそれに関連する問題は非常に複雑である。
- ・イスラム原理主義やいじめといった社会問題にもつながる要素がある。歴史の中のあらゆるところで繰り返し似たようなことが起こっている

第11回

日時：2011年7月27日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

話題提供：林直亨先生（行動システム専攻）

タイトル：「循環系の応答から分かること」

参加者：林・清家・小山・高野・光藤・山口・浜本・大沼（計8名）

林先生が取り組んでこられた循環系の応答に関する研究のお話を中心に、豊富な図表なども交えてパワーポイントを用いて発表が行われた。

まず、先生ご自身の経歴について簡単に紹介された。学部ではスポーツ科学、大学院では運動生理といった分野を経て、健康科学センターで研究をされるようになったとのことである。現在は特にスポーツや運動に関するテーマに特化することなく、血流に焦点を当てて研究されているとのことである。

研究の背景として、人間にとって重要な行動(摂食、性行為、探索行動、精神活動、睡眠)と、それらの行動に重要な部位への血流不足が引き起こす様々な事態があるということが説明された。また研究手法は何らかのストレス負荷を入力として与え、それに対する生理応答を出力として観察するというものであること、そのためのさまざまな計測機器があることが紹介された。

現在の研究テーマを簡単に以下にまとめる。

- ・食事と消化管の血流の関係：食事をすると消化管の血流が増加することや、腸はまだ食物が胃にある段階でもフィードフォワード的に血流増加を起こすこと、食物の咀嚼だけでも消化管の血流増加が起こることなどを示したとのことである。
- ・恐怖に対する血流応答：恐怖を感じると前腕や皮膚の血流が低下するとのことである。
- ・味覚と顔の血流との関係：甘みとうまみはまぶたの血流を増加させ、苦みは鼻の血流を低下させることなどを示したとのことである。
- ・眼底血流：CO₂が不足すると血流が減って視力が落ち、CO₂が多いと血流が増える傾向にあり、視力が上がる傾向にあるとのことである。

最後に、今後共同研究を行える可能性のあるテーマについて簡単に触れられた。

発表後は以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・味覚と血流との関係と、日本語の慣用句(まぶたが熱い、鼻白む、など)とは関連があるのではないか。
- ・顔の血流測定は、具体的には何を測っているのか(測定原理はどうなっているか)。
- ・顔の血流変化はどのような適応上の意味があるか。
- ・進化心理学で顔を赤らめることについての研究がある。
- ・情動によって心拍数や血圧は実際に変化するのか。
- ・味覚を想像させると反応はどうなるのか。
- ・食べ物ではなく、飲み物の場合の消化管の反応は。
- ・フィードフォワード的な反応の神経回路はわかっているのか。
- ・健康科学センターでこのような研究をされている方は他にいらっしゃるのか。
- ・精神作業でも血圧や心拍など生理的反応があるか。

第12回

日時：2011年10月26日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

話題提供：有馬隆文先生（都市共生デザイン専攻）

タイトル：「持続可能なまち Walkable Neighborhood の研究」

参加者：有馬・清家・光藤・浜本・飯嶋・院生1名・大沼（計7名）

Walkable Neighborhood(歩いて暮らせる街)についてのお話を中心に、豊富な図表や写真も交えてパワーポイントを用いて発表が行われた。

まず、このテーマで研究をするきっかけとなった、先生ご自身の歩く体験について紹介された。健康上の理由や、ロンドンでの在外研究で体験した海外の街のあり方、歩くことでの娘さんとのコミュニケーションといったことが引き金となっているそうである。歩く体験を重ねるうちに、歩き方の流儀が形成され、それに適した条件をそなえた街のあり方が見えてきたということであった。

さらに、歩くという趣味が転じて、いし島のウォーキングマップ作成、さるく博もどき(長崎の街歩き)、かすやのウォーキングガイド作成といったことにたずさわられたとのことである。

さらにそれらのことが研究へと転じ「日本型 Walkable Neighborhood の要件と評価」がテーマとなったとのことであった。ハード面に焦点を当て、福岡市の中で Walkable な地域はどこかという PT(Personal Trip)調査を行ったことが紹介された。徒歩が優位な場所は、道路が横断しやすい、都市密度が高い、施設がいろいろ混合していて充実している、歩道が整備されている、公共交通の利便性が高い、といった特徴があるとのことである。

またもう一つの研究テーマとして「賑わいの商店街」が紹介された。歩くという行為は商店街にさまざまな影響をもたらすことが示された。たとえば建物などのスケールが小さくなり、道に向かって開かれた建築デザインになるなどである。

最後に「都市のデザインから『人間が歩く街』を考えるよりも、人間の『歩く』という観点から都市のデザインを考えるスタンスが大事」というお話でしめくくられた。

発表後は以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・ PT 調査では「自転車」についてはどのような結果が出たのか。
- ・ 車が多いというのは歩くのを妨げる要素になる。
- ・ 海外では、場所によっては Walkable というより must walk などもある。
- ・ 都市の中の Walkable な街区は交通機関との組み合わせが必要。ただ、駅の周りが必ずしもよく歩かれているというわけではない。
- ・ 郊外型店舗のあり方も考えなければならない。木の葉モールは車だけでなく地下鉄からの利用者も多い。
- ・ パークアンドライドのしやすい街のあり方を工夫するべき。
- ・ 用途地域という制度をなくした方がよいのではないか。
- ・ 福岡で特に Walkable な街はどこか。
- ・ よそから来た人の歩きやすさと住んでいる人の歩きやすさは同じではないのではないか。
- ・ コンビニなどが発達し、なじみの店とやりとりするといったことが失われてきている。
- ・ 人口が減ってゆくと街のあり方は将来どうなってゆくか。
- ・ 歩くこと自体で街をよくすることができる。歩くことならではの気づき、街への愛着がある。

第13回

日時：2011年11月24日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

話題提供：荒牧草平先生（教育システム専攻）

タイトル：「教育達成と親族：全国家族調査 NFRJ データの分析」

参加者：荒牧・高野・野々村・光藤・浜本・元兼・大沼（計7名）

教育達成(学歴)に親族がどのような影響をもたらしているかについて、パワーポイントを用いて発表が行われた。

まず、研究の背景や先行研究の紹介が行われた。以前の研究関心は核家族に閉じられており、祖父母以外の親族の効果についての研究もなかったとのことである。課題として、核家族化によって親族効果は弱まったか、関係が親密と言われる母系親族の方が相関が強いのか、強い結びつきがあると言われる同性系列(母方祖母-孫娘、父方祖父-孫息子)で相関が強いのか、といったことが提示された。

次に、祖父母、父母、オジオバ、キョウダイの学歴がわかる NFRJ08 という調査のデータ分析結果が紹介された。核家族化が進んだことでは祖父母やオジオバの学歴との相関は弱まっておらず、むしろ強まっているとのことである。また、祖父母に関しては、祖父母-父母と高学歴が蓄積した場合のみ影響があるとのことである。オジオバに関しては、父母が低学歴でもオジオバに高学歴がいると子どもの学歴が高くなる傾向があり、逆に親が高学歴でもオジオバが低学歴であると子どもの学歴が低くなる傾向がみられたとのことである。また、母系や同性系列で相関が強いのではという仮説は否定された。

祖父母やオジオバの効果は直接効果である可能性と共に、データ上にはあらわれていない他の変数が介在した疑似効果である可能性を指摘して発表がしめくくられた。

発表後は以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・時代による進学率の上昇はどのように関係しているか。
- ・歴史的な背景の影響はどうか。現世代、父の代、祖父の代ではそれぞれ高学歴の意味合い(社会的、経済的)が異なる。
- ・兄弟の中での順位(長男、長女など)との関係は。
- ・ガンマ係数の統計的意味は。
- ・日本や欧米以外ではこういった調査はなされているのか。
- ・長男であるとか、女性であるとかの位置づけの影響も以前はあったのが、学歴のみに収斂してきたのではないか。
- ・アフリカでは独立後、女子の方が教育を受けている時期があった。
- ・疑似効果とは。
- ・何故このテーマを選択したのか。
- ・オジオバの有無については影響の違いがあるか。
- ・社会で経済力と教育への意識のありかたが相関していない時代があった。
- ・このような研究を支える文化は何か。
- ・遺伝の可能性はどうか。
- ・相関が再生産されてゆくことに怖さがある。
- ・地域による違いはないのか。
- ・能力と機会、能力主義と平等のあり方についての考え方は。

第14回

日時：2011年12月21日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

話題提供：光藤宏行先生（行動システム専攻）

タイトル：「3Dの科学 だまし絵を超真面目に考える」

参加者：光藤・三浦・橋彌・浜本・清家・小山・大沼（計7名）

光藤先生が発見したオリジナルのだまし絵について、実験装置などさまざまな図表を交えながらパワーポイントを用いて発表が行われた。

まず、簡単な履歴の紹介が行われた。以前は理系学部にも所属し、エンジニアやデザイナーを目指していたとのことである。

次に、オリジナルのだまし絵Ⅰが紹介された。平面の図形が、上目づかいで見ると(固視仰角がある状態で見ると)立体的に見えるというものである。その背景には立体視における眼球位置の補正のメカニズムがあるのではということであった。実験を行ったところ、錯視量(どのくらい立体的に見えるか)は目の動きの量(固視仰角)と関連しているとのことであった。このことから、人間の立体視のシステムは、眼球運動の補正メカニズムを持っていることが示唆された。また、こののだまし絵Ⅰについての論文が掲載された英文雑誌で、だまし絵の図が表紙に採用されたことも紹介された。

さらに、オリジナルのだまし絵Ⅱが紹介された。素早い眼球の動き(サッカード)に伴い、止まっているものが動いて見えるというものである。その背景には、サッカードが起こるときにその動いた分を補正するメカニズムの存在があるのではということである。こののだまし絵Ⅱについては、手作りの器具による実際のデモンストレーションも行われた。片目に暗い背景にやはり比較的暗い円盤が描いてある刺激を提示し、もう片方の目には全く違う明るい刺激を提示し、その状態でサッカードが起こると暗い円盤が動いて見えるとのことである。実験の結果、円盤の輝度が低いと運動がより強く感じられたということであった。この結果については①サッカード抑制の失敗から起こる②移動の補正の失敗から起こる、の二つのメカニズムが考えられたが、サッカード抑制が起こっているかどうか確認する実験を行った結果、①は否定され、②が正しいことが示唆された。こののだまし絵Ⅱについての論文が掲載された英文雑誌も紹介された。

発表中および発表後に以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・眼球運動はどのような筋肉によって行われているか。
- ・水平方向に比べて垂直方向の距離の推定が不正確なことと、だまし絵Ⅰのメカニズムは関係するか。
- ・だまし絵Ⅰの立体視の奥行きはどのように測定するのか。
- ・サルが首をかしげる動きは人間にもあるか。
- ・めまいと眼筋の動きとの関係は。
- ・視覚系は非常に複雑な計算を意識させずに行っている。
- ・錯視に個人差はあるか。
- ・錯視の個人差の要因は。
- ・サッカードによる錯視はパーシュートでは起こるのか。
- ・サッカードは無意識に起こっているのか。
- ・サッカードは何のために起こっているのか。
- ・これらの錯視発見のいきさつは。
- ・ダーウィンのいところは二つの別の顔を両眼立体視することで平均顔を作っていた。
- ・だまし絵Ⅱの錯視はなぜ片眼の刺激が暗くないといけないのか。
- ・暗い刺激の処理に時間がかかるのはなぜか。
- ・錯視研究の歴史はどのあたりから始まっているのか。

第15回

日時：2012年1月25日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

話題提供：鶴崎直樹先生（都市共生デザイン専攻）

タイトル：「大学空間の変容とキャンパスデザイン」

参加者：鶴崎・橋彌・浜本・清家・小山・光藤・大沼（計7名）

鶴崎先生が研究してこられた大学キャンパスについて、豊富な事例の写真を交えたパワーポイントを用いて発表が行われた。

まず、キャンパスは教育、研究、ディスカッション、プレゼンテーション、イベント……といったさまざまな多様な活動が行われる場であるということを説明された。

次に、大学の起源と大学空間の変遷ということに関して事例を交えつつお話された。大学の起源、大学の発生の歴史的背景(ヨーロッパ、特にパリとボローニャ)についての紹介の後、大学空間の変遷は①場／部屋②建物③領域ーキャンパス、という順序で起こったという説明をされた。まず、欧州において、①では教師と学徒の集団として都市に寄生、浮遊した状態であったものが、②では大学の制度的近代化とともに、都市内に施設（不動産）を所有することで定着し、③では米国に伝播した大学が、都市の一地区（領域）を占める存在になったということである。つまりキャンパスは、ヨーロッパにおいて誕生した大学とその空間が都市構造の異なるアメリカにおいて変容する形で発生したとのことであった。

また、当時、めざすべき将来の理想像として作成されたキャンパスマスタープランの事例とともに、このプランにより創出された海外および国内のキャンパス空間の事例が多数紹介された。キャンパスを作るということは、大学の理念を実現する空間を創出することであると、特に、生活空間とキャンパスが一体化しているベルギーの事例が重点的に紹介された。九州大学伊都キャンパスでは、教育研究活動や組織の変化とともに社会からの要請に対し、従来よりも流動性と柔軟性を有し、多様な変化に適応できる空間づくりが必要であるということであった。

発表後には以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・空間的に学際の間を作るにはどうしたらいいのか。
- ・北海道大学は大きな通りが中心にあってそこから枝分かれするような構造になっているが九大の場合はどうか。
- ・大学では、高校までとは違って教育だけでなく研究の存在が大きいということを建築で示せるとよいのでは。
- ・紹介された海外の事例では、実験室などの配置はどうなっているのか。
- ・授業がまわりから見えるように出来ると面白いが、研究はこもりたい要素もあるので、オープンとクローズのバランスがとれているとよい。
- ・滋賀県立大学の理念と特色について。
- ・大学と生活が一体化し、街とシームレスになっているのが望ましい。
- ・神戸女学院大学も古いタイプだが特色がある。
- ・街なかにある大学と、郊外にある九大とではデザインのあり方が違ってくるのでは。

平成 24 年度マンスリー学際サロン（開催数 計 6 回）

第 16 回

日時：2012 年 5 月 23 日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2 階準備室）

話題提供：荒牧草平先生（教育システム専攻）

タイトル：「高校生の生活意識はどう変わったか - 30 年の軌跡 -」

参加者：荒牧・小山・清家・光藤・佐々木・橋彌・浜本・大沼（計 8 名）

1981 年、1997 年、2011 年の三回にわたって兵庫県内の高校十数校（三回とも調査対象になったのは 10 校）を対象に集められたデータの経年変化とその解釈についてパワーポイントを用いて紹介された。対象となった高校は公立、私立、専門学科などを含む。

学習意欲や高校教育については肯定的な意識が高まっており、逸脱行動は減少し、学校外志向が強まり、自己評価（こつこつまじめに、協調的）が高まっている。

進路については大学や専門学校が増加し、短大や就職が減少している。進路の決定時期が遅く、家計を厳しく認識するようになり、また先生や親などの大人の関与を受容するようになっている。

職業については、独立志向が低下し、安定志向になっている。「早く一生の仕事を決めるべき」とする一方で「その時々によりな仕事をすべき」とも答えるなど矛盾した傾向も見られる。社会貢献志向は増加している。

社会意識については「仕事でひとかどのものになりたい」が増加し「主義、信念のよりどころになる」が減少している。権威や性別役割を肯定するなど保守化と見られる傾向もある。学歴については、実力を反映しているとする一方で、学歴と収入は比例しないと見るなど、微妙なバランス意識がある。

全体として、学校に関してはまじめ化、依存化がみられ、職業や社会については保守化と安定志向がみられる。脱学校、自己実現といった 97 年に見られた傾向は強まってはいないが維持されている。これらの結果はカリキュラムの工夫など高校生のニーズに高校が対応した結果ではないか、不安定な社会状況の反映ではないかということが示唆されてしめくくられた。

発表後には以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・今後の分析の見通しは。
- ・調査対象になった高校が 10 年間で評価が変化していることはあるのか。
- ・学校間の回答内容の差は。
- ・80 年代が特殊だったのでは。
- ・大学生の学力低下が 2000 年頃から騒がれた影響は。
- ・携帯やネットの普及などの影響は。
- ・学歴と収入が連動しなくなったことの影響は。
- ・ブレジネフ政権末期のロシアの青年と状況が似ている。
- ・自己実現傾向と依存傾向の強まりなどの矛盾があるところが面白い。
- ・80 年代と最近では自己実現の質が違っている。80 年代は反逆が自己実現のスタイルだった面がある。
- ・少子化はどのくらい進み、サンプルのとり方に影響を与えているか。
- ・通学圏の範囲は変わっていないか。
- ・質問紙の配布と回収の方法は。
- ・「いい子」になってゆく傾向は「狡猾さ」の指標にならないか。
- ・質問紙にライスケールに入れられるか、入れるとどうなるか。

- ・この高校生たちがその後なったと思われる大学生のイメージを考えるとリンクしていない面もあるのでは。
- ・大学生の経年変化を調べた研究はあるのか。
- ・高校のデータは小学校や中学校と違ってコミュニティの比較という意味は持ちにくい。
- ・農村と都市で回答傾向が違う可能性は。
- ・もし行くとすれば国際比較(たとえばアメリカと日本とフランスの比較)より国内での地域比較(たとえばニューヨークとテキサス)の方が面白いかも。
- ・調査に協力した学校へのフォローは。
- ・論文に個別の高校名は書くのか。
- ・データのまとめ方は仮説 **driven** で行うのか。
- ・計量的モノグラフでエビデンスと言えるように統計的に扱うのか。

第 17 回

日時：2012年6月27日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

話題提供：橋彌和秀先生（行動システム専攻）

タイトル：「まなごしのなりたち：視線コミュニケーションの進化と初期発達」

参加者：橋彌・南・小山・光藤・佐々木・浜本・大沼(計7名)

視線コミュニケーションの進化と発達についての、先行研究およびご自身の研究成果を、豊富な図表や動画をまじえてパワーポイントで発表された。

まず、赤ちゃんの視線についての研究の紹介が行われた。赤ちゃんは目を開けた顔や視線の合う顔を選好するなどの実験結果がある。また、他者の視線が自分を見ていないときにどちらを見ているかということに関してもある程度の月齢になると理解を示すようになることである（視線の発生）。他者が見ているのと同じものを見る「共同注意」ということもできるようになる。このことはコミュニケーションに大切な社会的参照を示していると考えられる。

次に「視線」という実際には存在しないものを心理的にどのように測量するのかという問題意識に基づき、自然界の中でヒトの特徴ということも含めての研究や考察が紹介された。ヒトの目の形態は、眼裂が横長であり、強膜の露出が多い。また強膜に色がない（すなわち白目の存在）のは霊長類の中でもヒトのみの特徴である。白目の存在で視線が意識されやすいメリット（社会的協力につながる）の方が、視線を隠蔽するメリット（集団内で目が合うことでの争いを避けるなど）よりも大きくなったということではないかという説などが紹介された。

さらに、シグナルとしての目は必ずしもヒトだけの特徴ではないという視点から、霊長類の目の形態と大脳新皮質率と集団サイズの相関について調べた研究が紹介された。それら（眼裂が横長であること、大脳新皮質率が高いこと、集団サイズが大きいこと）に正の相関が見られることである。

また、社会的関係の維持のための毛づくろいは霊長類によく見られるが、それを代替するものとして目と目のコンタクトの役割があるという考え方も紹介された。ヒト以外でも目と目のコンタクトはあるが比較的短距離でのものに限られることである。比較的遠い距離でもヒトがアイコンタクトを使えるのは白目の効用ということである。

最後に、先生ご自身が赤ちゃんについて行った研究が紹介された。他者から見られるということが行動の強化子になり得るかという実験である。実験の結果、他者が顔をまっすぐ向けて視線も向けていた場合、赤ちゃんはそれを強化子として行動を学習できることが示された。見つめる視線を手がかりとして学習できるということがヒトの社会的文化的基盤となることが示唆された。

発表後には以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・メガネザルなど、眼球運動ができないサルもいるのでは。
- ・生死にかかわることでの進化ではなく社会的な進化というのほどのように起こるのか。
- ・社会的に適応ができるかどうかが生死につながるのでは（集団の意味とは）。
- ・見つめる視線による強化は経験や文化依存の度合いが高いのか。
- ・日本とアメリカなどでは、視線の合わせ方の文化が異なる。
- ・隔離されて育った子どもなどが発達しないこととの関係は。

第 18 回

日時：2012 年 7 月 25 日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2 階準備室）

話題提供：志賀勉先生（空間システム専攻）

タイトル：「民・学協働による地域住環境点検・改善プログラムの構築 ―北九州市枝光一区におけるまちづくり実践を通じて―」

参加者：志賀・清家・高野・光藤・大沼（計 5 名）

志賀先生が学生と共に携わってこられた北九州市八幡東区枝光一区のまちづくりに関して、現地の写真等、豊富な図表を含めたパワーポイントおよび配布資料を用いて発表が行われた。

まず、簡単な自己紹介が行われた。住宅環境整備計画がご専門であり、漁村や斜面地などを対象にされてこられた。地域のコミュニティ形成といったことにも関わられるとのことである。

枝光一区には平成 12 年から関わってこられているということである。枝光は斜面地であり、空き家の増加や老朽化など、さまざまな問題があり住環境が悪化している。また、少子高齢化や人口減も顕著にあらわれているとのことである。先生は住民の方々と協力しながら現地調査を行ってこられた。

このような状況に対し、北九州市では地域づくりの担い手としてまちづくり協議会の活動促進に力を入れているとのことである。先生は学生と共にこの組織に加わり、まちづくりモデル事業に住民の方々と取り組んでこられた。学生の提案によるオーチャード・スロープ（果樹の小路）づくりや、ふれあいマップづくりなどさまざまな活動が展開されてきた。住環境点検・改善プロセスの枠組みとしての CAPD サイクル（実態把握→情報整理／分析→情報管理／計画立案→改善行動のサイクル）とそれに対応する活動の実態なども紹介された。

最後に、地域の情報についてデータベースを構築し、活用したいといった展望を示されて話をしめくくられた。

発表後には以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・枝光では町内会の加入率は高いのか。
- ・古くからの一戸建ての多い土地という特色の影響は（マンションの多い地区などとの違い）。
- ・町内会といった枠組みがないと活動は難しいのでは。
- ・活動に関わりたくない人もある程度いるのか。
- ・まちづくり協議会の位置づけは（すでにある自治会などとの関係）。
- ・世帯情報の共有は可能なのか。

第 19 回

日時：2012 年 10 月 24 日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2 階準備室）

話題提供：エドワード・ヴィッカーズ先生（教育システム専攻）

タイトル：「歴史の視点から香港の国民教育論争を論じる」

参加者：エドワード・ヴィッカーズ・鈴木・橋彌・荒牧・藤田・光藤・大沼（計 7 名）

ヴィッカーズ先生が研究してこられた香港の教育事情について、配布資料を用いて発表が行われた。発表および質疑応答はすべて英語で行われた。

以下はヴィッカーズ先生が事前に用意されたアブストラクトを転載したものである。また、発表中になされた質問の一部をその後に掲載する。

Hong Kong's 'National Education' Controversy in Historical Perspective

Edward Vickers

Kyushu University, Japan

The summer of 2012 witnessed the emergence – or re-emergence – of two popular protest movements in Hong Kong: a patriotic campaign to assert Chinese sovereignty over the Diaoyu/Senkaku Islands, and a drive to resist Beijing-backed efforts to introduce a new, compulsory programme of patriotic education in local schools. Superficially, these movements appear to send contradictory messages concerning the attachment of local people to their 'Chinese' identity – the former reflecting vehement Chinese nationalism, and the latter resistance to attempts by the government to promote national pride through the local school curriculum.

However, from the point of view of most Hong Kong people, many of whom supported both campaigns, there was no contradiction. The protests over the Diaoyu Islands reflect a long tradition of patriotic agitation in Hong Kong that has often been designed to emphasise differentiation from, rather than identification with, the Communist authorities on the mainland. For many participants, agitation over these islands has in part been aimed at underlining their superior patriotic credentials relative to a Communist regime seen as insufficiently defiant vis-à-vis the Japanese. Similarly, opposition to crude attempts to impose a pro-Communist vision of national identity on Hong Kong students does not necessarily betoken any rejection of 'Chineseness' as such, but the assertion of distinctively 'Hongkongese' ways of being Chinese.

In contemporary China, the assertion of local distinctiveness, and a critical or cynical attitude towards the Party's attempts to identify itself with a historical narrative of patriotic struggle against foreign aggression, are phenomena by no means confined to Hong Kong. However, by comparison with regions on the Chinese mainland (Taiwan is an entirely different matter), Hong Kong represents a particular challenge to official attempts to impose orthodox interpretations of Chinese history, traditions and values. Its long political separation from the mainland has shaped a sense of local identity that is profoundly non- (or anti-)Communist; the relative freedom of the press limits the extent to which the government can control public discourse; and the extent of civil liberties – largely maintained following the 1997 transition to Chinese rule – leaves the local authorities particularly vulnerable to public expressions of dissent.

In this context, the school curriculum presents itself as the tool for identity formation most directly susceptible to official control or manipulation. This was already the case

under the former British colonial regime, when the authorities sought to depoliticise schooling – thus isolating Hong Kong from the ongoing Communist-Kuomintang stand-off – while encouraging identification with timeless, essentialised notions of cultural ‘Chineseness’. At the same time, Cantonese identity was allowed to flourish, with ‘Chinese’ defined in practice as ‘Cantonese’, the latter used as the dominant medium of instruction in local schools (even where textbooks were in English), and Cantonese ‘Hongkongeseness’ further underpinned by a thriving popular culture – encompassing television, film and print media.

After analysing the historical context out of which ideas concerning ‘Chinese’ and ‘Hongkongese’ identities emerged prior to the 1980s, this paper focuses on the way in which successive Hong Kong governments since that time have sought to manage or shape popular identity during the transition to Chinese rule – with particular reference to the school curriculum for history and civics. It traces the stages through which the curriculum has taken on progressively more explicit ‘political’ orientations, in contrast to the studied ‘depoliticisation’ that prevailed prior to the 1980s, and relates this transformation both to changes in local politics and society, and in the dynamics of Hong Kong’s relationship with the Chinese mainland.

Following the 1984 Anglo-Chinese Joint Declaration, which set out the terms of Hong Kong’s 1997 transition to Chinese rule, there were some early efforts to revise the school curriculum to reflect the new political realities. However, measures such as the issuing of cross-curricular ‘civic education guidelines’ were of a largely tokenistic or symbolic nature. There was as yet little anticipation on the Hong Kong side of any need for sweeping curricular reform, and – apparently – relatively little pressure for such reform from Beijing. This was a period of relatively harmonious collaboration between the British authorities in Hong Kong and their Chinese counterparts, and also one in which some signs pointed to a gradual (or not-so-gradual) liberalisation of the mainland political order.

The prospect of such a liberalisation on the mainland, on which many Hongkongers had pinned their hopes for a smooth transition to Chinese rule, were dashed in June 1989, with the crushing of the Student Movement. Not only did this prompt heightened public disquiet in Hong Kong at the prospect of the Communist takeover; the massive local demonstrations it provoked also alarmed the mainland authorities, previously encouraged (not least by the British) to see Hong Kong’s population as pragmatically apolitical. The shadow cast by the 1989 crackdown over Sino-British collaboration with respect to Hong Kong was further extended by Governor Patten’s unilateral 1992 announcement of democratising political reforms. Curricular reforms during this period – which included moves to introduce the teaching of local history and other changes to the curricula for History and Chinese History – thus proceeded against a backdrop of intense political sensitivity. On the one hand, a number of curriculum developers – reflecting the strengthening of local identity in society more broadly – wanted to relate the teaching of history more closely to the local context; but they and their superiors were also increasingly fearful of criticism from the pro-Beijing press or from local Beijing-affiliated elements. Self-censorship was often the result.

The years immediately after 1997 witnessed a gradual ratcheting up of official rhetoric regarding the importance of patriotic education – but it was not always clear where the initiative for such pronouncements came. Was the push for greater emphasis on ‘patriotic’ messages primarily the product of local initiative (on the part of officials eager to curry favour with their mainland overlords), or was it mandated from the very top, in

Beijing? The reality seems to have involved a mixture of both, but with increasingly direct intervention from Beijing, particularly following large public demonstrations in 2003 that forced the local authorities to withdraw proposals for enacting 'anti-subversion' legislation. Under increasing pressure to demonstrate that schooling was being used to reconcile Hong Kong people with the Communist regime in Beijing, from 2010 onwards local educational officials radically broke with previous practice by moving to compel schools to inculcate a sense of Chinese identity explicitly oriented towards the Party-State. The resulting curriculum for 'Moral and National Education' prompted mass public demonstrations in September 2012, forcing the government to back down and abandon its proposals – at least for the moment.

The recent history of attempts to reform the way in which Chinese identity is portrayed through Hong Kong's school curriculum demonstrates, on the one hand, an intense (and perhaps growing) official nervousness regarding 'heterodox' or localised expressions of Chinese identity, and on the other, the virtual impossibility of imposing Communist Party orthodoxy on a relatively well-educated population with whose lived experience that orthodoxy is in fundamental conflict. In this sense, the Hong Kong case perhaps invites comparison with that of Taiwan during the Martial Law period, where a far more determined and sweeping campaign of re-education in Chinese patriotism if anything contributed further to the alienation of local Taiwanese from a political identification with 'China'. More broadly, however, the divergence between the identity messages contained in local school curricula – which generally posit a homogenous and totalising vision of 'Chineseness' – and a much more complex reality of different levels and kinds of identity (local, linguistic, international, transnational, class-based, religious as well as national) points to a disconnect between official discourse and public experience that, while not unique to China, is particularly acute there, and nowhere more so than in Hong Kong.

- ・ 香港における学校教育で、北京官話ではなく広東語が使われているのはなぜか。
- ・ 文化大革命の時代には、香港の返還についての見通しはどのようなものだったのか。
- ・ 香港の独立性に関して、独自の軍事力の裏付けはあるのか。
- ・ 今回問題となった道德教育には、イデオロギー的要素は含まれているのか。

第 20 回

日時：2012 年 11 月 28 日 12:15-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2 階準備室）

話題提供：鈴木讓先生（人間共生システム専攻）

タイトル：「マッチング理論」

参加者：鈴木・清家・高野・光藤・大沼（計 5 名）

マッチング理論について、パワーポイントを用いて発表が行われた。社会的マッチング理論の概要について最初に簡単な紹介が行われた。「両思いなのに結ばれないといったケースが発生しないようにする」といった安定マッチングという状態が存在するとのことである。

マッチングの例として、九州大学文学部の 2 年次進学時の専門分野決定方法を取りあげて説明が行われた。志望（第一志望～第五志望までを尋ねる）と 1 年次の成績によってどの講座に配属されるかが決められるが、現行のルールでは、成績より志望の優先順位が高い。そのため、志望の偏り具合によっては、成績が比較的よいのに低い志望の講座にしか入れないといったことが起こり得る。これは安定マッチングとは言えないのではないかと

いうことであった。しかし成績の方を優先しても、講座の側が成績のよい学生より強く志望してくれる学生の方が望ましいと考えれば安定マッチングとは言い切れない。そもそも安定マッチングとは何なのかという問題が残る。安定か否かは判定基準（この場合は志望か成績か）に依存し、そして判定基準の優劣をつけることはできない。

現行の、志望の方が優先されるルールでの最大の問題は **misrepresentation** の可能性があることだと鈴木先生は考えておられるとのことである。自分の本当の希望とは違うことを表示する、例えば本当は A 講座が第一志望なのに、A 講座は競争率が高そうだから安全策をとって B 講座を第一志望にしておこう、といった学生が出てくるということである。

発表中および発表後には以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・投票理論やゲーム理論との関係は。
- ・講座の人氣に偏りがなければ問題は発生しないのか。
- ・学生が事前に自分たちで調整するという方法はとれないのか。
- ・志望に関する個人差（ある人は第一志望に対して特に強い希望を持っているが、別の人は第一志望と第二志望はどちらでもよいと思っていたりするようなこと）を反映するのは難しいのでは。
- ・講座の側が、成績がよい学生の方が好ましいという前提を持つのは正しいか。
- ・文学部の学生は現行の制度に不満を持っているのか。
- ・学生は制度を理解しているか（学生便覧の表記がわかりづらいのでは）。
- ・全ての情報を開示して学生に調整させるという方法は無いのか。どこまで情報は開示されているのか。
- ・1年次の成績が専攻決定に関わることは、1年次の勉強を促進するインセンティブになっているのか。
- ・1年次の成績とその後の成績に相関があると教員は実感しているのか。
- ・雇用におけるマッチングの問題はさらに複雑では。

第 21 回

日時：2012 年 12 月 19 日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2 階準備室）

話題提供：趙世晨先生（都市共生デザイン専攻）

タイトル：「風景画に描かれた都市景観の解説」

参加者：趙・箱田・小山・橋彌・三浦・光藤・大沼（計 7 名）

趙先生が最近取り組まれているテーマである風景画からの都市景観の解説について、豊富な画像を交えたパワーポイントを用いて発表が行われた。

先生はベロットという画家の絵を素材として研究されているそうである。ベロットはヨーロッパ各地に足跡を残し、正確に忠実に都市景観を描いた絵を 300 点以上残しているということであった。

第二次世界大戦で壊滅的被害を受けたワルシャワはベロットの絵を利用して都市景観の修復が行われ、1980 年には世界遺産に指定されたとのことである。

景観の修復に絵画を用いるということには批判もあるが、すぐれた景観や絵画は時代を超えて鑑賞されるという共通点もあり、景観設計と絵画はつながる面もあるということであった。

ただ、実際に絵画が描かれた視点を特定することには困難が伴うそうである（アクセスが困難であったり、その後の時代に出来た遮蔽物が存在したりするなど）。そのため、趙先生は視点場の推定方法として、カメラ・キャリブレーション+3次元コンピュータ・グラフィックという手法を用いているとのことであった。ベロットが 11 点の絵を描いている

ピルナという都市を対象とし、この手法で CG による景観の画像を作成してピルナ市役所に寄贈されたそうである。

日本には浮世絵などすぐれた絵画があるにもかかわらず、ヨーロッパと比べて残されている景観遺産が大事にされていない印象があるということで話をしめくられた。

発表後には以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・ワルシャワ以外で、昔の絵画に基づいて景観について考えているのはどこがあるのか。
- ・時代的にどの時点に戻すのかというコンセンサスはどのように得るのか。
- ・復元しているところに電線はないのか。
- ・ベロットは地上から見た景観を、俯瞰に変換して描いていた可能性はあるのか。
- ・ベロットは忠実な再現ということと絵画としての価値ということの関係をどのように見ているのか。
- ・カメラ・キャリブレーションの座標データは、昔からあったところ（古い建物など）を基準にして取るのか。
- ・視点の誤差はどのくらいか。座標の数が多いと正確さが増すのか。
- ・ベロットは窓枠で切り取られた風景を描いていた可能性もあるのでは。
- ・日本の建造物は木造だという難しさがある。宿場町は比較的残っている。
- ・中国に明、清時代の景観を残しているところがある。
- ・ピルナの現地の人々の思いはどのようなものなのか。
- ・久留米の坂本繁二郎の絵画は景観修復に使えるのか。
- ・修復も行きすぎると映画のセットのようになる。
- ・保存するということと、街は変わってゆくものだという価値観の兼ね合いはどうか。
- ・日本の場合はパースペクティブが使われている絵画が明治以降しかない。

平成 25 年度マンスリー学際サロン（開催数 計 8 回）

第 22 回

日時：2013 年 5 月 22 日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2 階準備室）

話題提供：藤田雄飛先生（教育システム専攻）

タイトル：「メルロ＝ポンティのソルボンヌ講義について」

参加者：藤田・荒牧・野々村・清家・飯嶋・光藤・大沼（計 7 名）

メルロ＝ポンティのソルボンヌ講義、特にその「鏡像段階」論を中心としてパワーポイントを用いて発表が行われた。

まずメルロ＝ポンティやその著作等について簡単な紹介が行われた。ソルボンヌ講義は 1949-1952 年に行われ、講義録がメルロ＝ポンティの死後に心理学雑誌に掲載されたが、思想研究の中ではあまり取り上げられてこなかった。

次にソルボンヌ講義の意義についてお話しされた。人間にとっての「象徴」が大きなテーマであるということである。

その後、人間の幼児が鏡を見てそこに映った像を自分であると認知するに至る過程である「鏡像段階」について以下のように少し詳しくお話しされた。鏡の中の実在は幼児にとって最初のうち単なる像ではなく実在性を持ったものとして捉えられている（準－実在）。次に、自己の分身が鏡の中に自分と同時に遍在するといった感覚を持つ。やがてそれを実在ではなく「像でしかないもの」と捉えることができるようになってゆく。しかしメルロ＝ポンティは準－実在的なものは残存してゆくと考えた（人の写真を踏むことが難しかったり、自分の鏡像から見られているような感覚を持ったりするなど）。また、鏡像は「他者が見ている私」の像でもある。ラカンはその象徴への契機を見るが、メルロ＝ポンティは鏡像段階を「見る－見られる関係へと投げ入れられる経験」とし、象徴への契機とする見方には距離を置く。

最後に、藤田先生が現在考察中の「模倣」についてお話しされた。メルロ＝ポンティは模倣、中でも他者の模倣を象徴への契機として考えていたということである。

発表後には以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・ 鯨岡先生の理論との関係は。
- ・ 鏡像からのまなざしは誰もが感じるのか。
- ・ フッサールの思想との関係は。
- ・ 鏡像のまなざしについて実験的に研究できるのか。
- ・ 歴史的に水面を鏡とすることは非常に古い。
- ・ 鏡の発達と近代的な自己像とは関係している。
- ・ 量子力学的な世界観から見ると鏡像の認識はどうなるのか。
- ・ シャーマンが同時に複数の場所に遍在すると語られるような社会ではその現象はどのように説明されるのか。
- ・ 自己が分散しているというより確定した自己がない女性予言者のような存在もある。
- ・ 自己の遍在と幻肢体験には共通点があるか。
- ・ 「まなざし」と「視線」は同じか。
- ・ 鏡像の話と模倣の話はどうつながるのか。
- ・ 準－実在という概念には説得力がある。
- ・ 何もない原初的沈黙というものを考えての発達段階を仮定しているのか。
- ・ なぜ現代思想にフランス人が多いのか。
- ・ フランス的な思想とドイツ的な思想をつなぐ人がいない。
- ・ 日本では現在どういう状況か。

- ・イタリアの思想が現在流行している。
- ・ピアジェの発達心理学は歴史的偶然の産物である。
- ・ソルボンヌ講義の中で鏡像段階以外で注目していることは。

第23回

日時：2013年6月26日 12:00-13:00

会場：学際サロン

話題提供：古賀聡先生（人間共生システム専攻）

タイトル：「体験治療論について ～臨床動作法と臨床催眠法の実践から～」

参加者：古賀・藤田・清家・内田・光藤・大沼（計6名）

古賀先生が研究および実践に携わってこられた臨床動作法と臨床催眠法について、配布資料を用いて発表が行われた。

まず、先生の履歴が簡単に紹介された。大学学部、大学院卒業後、病院で臨床の実践をなさっていたとのことである。現在の関心がアクションメソッド（心理劇・臨床動作法）の臨床実践に関する研究・実践者の養成および臨床動作法と臨床催眠法を中心とした体験治療論の研究であるということもお話しされた。

次に、1960年代以降の、催眠研究から動作法へ、という歴史の流れについて説明された。臨床動作法は、催眠法による支援の限界を超えて、いろいろな領域に適用されてきているとのことである。

続いて、先生ご自身の臨床経験に基づく創作事例を三例（アルコールおよび薬物依存、転換性障害、パニック障害）用いて、動作法および催眠法の使い方、その効果のあらわれ方について、催眠におけるトランス誘導の実践例なども含めて具体的に紹介された。

最後に、臨床動作法と臨床催眠法の両方に関与してきた経験から生じた疑問、患者への明示的関わりと暗示的関わりとの関連についての考察、クライアントの特性やニーズに応じた療法を柔軟に展開することが好ましいのではといった見解などを示してしめくられた。

発表後には以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・認知療法と動作法は対立的なのか。
- ・動作法は身体に触れて援助を行うので、クライアントに対する丁寧な説明や配慮が必要である。
- ・トランスは日本語にするとどうなるのか。
- ・トランスの深さはどうやってコントロールするのか。
- ・催眠の技法は大学院生もトレーニングを受けるのか。
- ・成瀬先生は医者出身か。
- ・催眠はどの程度一般に使われる技法なのか。
- ・アナロジーをうまく使う、臨床療法中の言葉のはたらきが興味深い。
- ・催眠が使われない理由は。
- ・内観療法の創始者は誰なのか。
- ・古賀先生自身の臨床アプローチは。
- ・九州大学の臨床アプローチの主流は何か。
- ・感情研究と関係はあるのか。
- ・パニック研究との関係は。
- ・スポーツでのあがり対策など学校教育へ応用できないか。
- ・スポーツ領域における臨床動作法の適用はリラックスすればよいというわけでもないので、繊細な調整が必要なのではないか。

- ・複数の療法の切り替えは長期的視点で行うのか短期的視点で行うのか。
- ・過呼吸にはどう対応したらいいのか。

第24回

日時：2013年7月24日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

話題提供：山口謙太郎先生（空間システム専攻）

タイトル：「建築構造と持続・循環」

参加者：山口・清家・光藤・飯嶋・大沼（計5名）

先生が携わってこられたサステナブル建築に関して、豊富な図表や画像を交えたパワーポイントを用いて発表が行われた。

まず、人間環境学研究院の構造防災系講座の構成と、その中での山口研究室の位置づけについて簡単な説明が行われた。山口研究室のキーワードは「地球に優しい（sustainable）建築構造」「リユース（再利用）できる構造」とのことである。また、サステナブル建築には持続型（耐久性を高める）と循環型（使用材料を繰り返し使う）という二種類があるということも説明された。また、サステナブル建築については従来、計画や環境の分野が先導してきたが構造も大事であるということである。

以下、先生が関わってこられた乾式煉瓦建築、摩擦で滑らせて振動を逃す壁、世界遺産の耐震補強（イランのバザール）、木造建築リユースといった個々の事例について、さまざまな実験や演習や現地調査などの紹介が行われた。

発表後には以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・山口先生の研究分野は人環の核の一つである。
- ・建築分野で持続可能性が話題になり始めたのはいつ頃からか。
- ・イランの事例は向こうからの申し出だったのか。
- ・イランの建築学では持続可能性について取り扱っているのか。
- ・イランのバザールのアーチは崩れにくいのではないか。
- ・フレームだけではうまくいかなかった実験は、立体的に組めばうまくいくのではないか。
- ・摩擦で壁を滑らせた場合、熱の発生は。
- ・壁を液体の中で泳がせる構造が効果的。
- ・人類学者がこのような分野に関わると、しがらみがないため批判的な発言もできるので面白いのでは。
- ・震災の後というのは建築業界にとってどういう環境なのか。
- ・学問分野によって社会との結びつきの度合いに違いがある。
- ・土木工事と学問との関係は。
- ・アカデミックな世界と現地の間には乖離がある。

第25回

日時：2013年10月23日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

話題提供：坂元一光先生（教育システム専攻）

タイトル：「「伝統」のつくり方、つなぎ方 —日本三大吊るし飾りを訪ねて—」

参加者：坂元・ヴィッカーズ・藤田・小山・野々村・田上・清家・光藤・飯嶋・大沼（計10名）

坂元先生がたずさわってこられた「日本三大吊し飾り（酒田、稲取、柳川）」のうち、主に柳川と酒田について、豊富な実地の写真などを交えたパワーポイントを用いて発表が行われた。また、柳川の吊し飾りの実物の提示も行われた。

まず、キーワードとして「つくる」「つなぐ」という二つの言葉を挙げられた。華麗な細工物のパーツをつないで伝統の吊し飾りをつくる、地域の「伝統」を新しくつくり直し、次世代につなぐという観点である。

次に、柳川の「さげもん」について説明された。昔からひな祭りの飾りとしてあったものを、平成六年の渇水で柳川の観光名物川下りが危機に陥ったのをきっかけに観光資源として利用する（見せる、売る）ようになったとのことである。つくり手は婦人会やシルバ一人材センターなどであることが紹介された。また、伝統を踏まえて作られた吊し飾りを伝統的なものとして認定するということが行われているが、作り手や買い手からはあまり評判がよくないといったことも紹介された。伝統のサイクルを回す技法（創作活動）および作法（皆で愛でる習俗）というものがあるということでもまとめられた。

その次に、酒田の「傘福」について説明された。こちらは新たな伝統を作り出すという事例として特異であるとのことである。伝統の傘福に対して「平成傘福」というものが創造されてきた。担い手は商工会議所の「女性会」であり、またこの「女性会」は傘福について緻密な調査や勉強もしているとのことである。また古い傘福の修復、復元も行われている。最後に、地域学／地元学（住民が自分たちの地域について学び、知り、生活作りや地域づくりの実践に生かしてゆく）という観点を示してしめくられた。

発表後には以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・傘福の調査は素人のみで行われているのか。
- ・傘福の調査資金はどこから出るのか。
- ・同じひな祭りでも段飾りと違って、吊し飾りは地元の一般の人が作れるところが面白いのでは。
- ・段飾りとさげもんの関係、歴史的経緯は。
- ・伝統認定ということと新しい創意工夫との関係は、三か所とも同じか。
- ・さげもんを売ったお金はどのように配分されるのか。
- ・なぜ酒田、稲取、柳川の三か所なのか、共通点はあるのか。
- ・京都の吊し飾りとの共通点は。
- ・かつての地蔵講などにも関係があるのか。
- ・酒田は、柳川のように女の子のお祭りということではなかったのか。
- ・稲取ではどういう位置づけの祭りなのか。
- ・男の子の節句は同じようにイベント化されないのか。
- ・子どもはどのように参加しているのか。
- ・さげもんの作り手として参加している人で一番若い人の年齢はどのくらいか。

第 26 回

日時：2013年11月27日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

話題提供：安立清史先生（人間共生システム専攻）

タイトル：「介護の「ガラパゴス化」を考える」

参加者：安立・清家・高野・光藤・院生1名・大沼（計6名）

安立先生がたずさわってこられた介護に関する諸問題について、パワーポイントを用いて発表が行われた。

まず、介護に関する「3つのストーリー」が提示された。「介護保険に関する対応の問題と課題」「介護の担い手の問題と課題」「民間非営利組織（NPO など）の問題と課題」である。これらがそれぞれにガラパゴス化に関与しているということである。また、介護保険の「外部」が縮小しているというお話もされた。介護保険でまかなわれる範囲以外のところは全額自己負担になってしまっているということである。

次に、先生のこれまでの研究経歴について、著書などの紹介をされながらお話された。NPO や介護保険改正の影響等について扱ってこられ、問題提起をされてきたとのことである。

それを受けて、3つのポイントが提示された。「介護職の離職率の高さ」「福祉職の「やりがい」とは」「介護保険の先行き不安」である。つづけて、これらのポイントについての内容の分析や考察が示された。離職率は営利法人の方が高いことや、介護保険の仕組みの変動により業界や働く人の信頼が失われたこと、NPO と営利法人とでは営利法人の方が相対的に社会貢献意識が高いことなど、興味深い調査結果も示された。

また、比較的自由にもの言える組織としてのNPO に関心を持ってこられ、全国調査を行ったお話もされた。政府との協働の仕方にもいろいろあるが、現状では、介護保険におけるNPO は十分機能していないのではないかとのことである。

最後に、介護保険の内側と外側の両方からの今後の展開を調べつつあるというお話で締めくくられた。

発表後には以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・政府とNPO の関係という場合、日本では地方政府が相手か。その現状をどう見たらいいのか。
- ・社会福祉協議会はNPO との連携や要支援ニーズに、今後どのように関わるか。
- ・要支援ニーズへの対応は、社会福祉協議会や地域包括ケアシステムに投げられるという話も出てきているが、機能しないのではないか。
- ・離職率の高さにはキャリア形成のイメージがもちにくいことが関与しているのでは。
- ・介護職としてのキャリア形成ができるようにするにはどうしたらよいか。それは望ましいことなのか。
- ・全国調査の中で、うまくいっているところの共通点といったようなものはあるか。
- ・日本に寄付文化があまりないのが問題なのでは。
- ・法制度が細かすぎるのでは。

第27回

日時：2013年12月18日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

話題提供：末廣香織先生（空間システム専攻）

タイトル：「場としての「みんなの家」」

参加者：末廣・清家・光藤・飯嶋・大沼（計5名）

末廣先生がたずさわってこられた「みんなの家」について画像中心のパワーポイントを用いて発表が行われた。

「みんなの家」は東日本大震災後の仮設住宅に住む人のために寄付を募るプロジェクトで造られた集会所である。最初に仙台市宮城野区で造られた。建築家の伊東豊雄さんが関わられている。受け入れられやすいものということで、ふつうの家のような造りとした。地域の人の意見も聞き、熊本県が木材を提供したり、学生がボランティアで参加したりして、震災の年の10月に落成したとのことである。そのように多くの人に関わっているという意味でも「みんなの家」ということである。

その後、他にも寄付でみんなの家を造るという動きが広まった。その事例がいくつか紹介された。IT 企業が寄付をした岩沼市のもの、ロレックスが寄付をした東松島市宮古島のもの、東松島市のこどものみんなの家、陸前高田で流された松の再利用をして個人が土地を寄付したもの、気仙沼の漁港で作業場所として機能しているものなどである。

これらは行政ではなく寄付のお金を使うということで、縛りが無い分、小さなスペースだがいろいろな使い方をされているということである。うまくいっていない事例もあるが、全体的に見るとよく機能しているとのことである。

東日本大震災とは別に、水害のあった阿蘇にもみんなの家が二軒造られた。うち一軒は先生ご自身が設計を担当されたとのことである。

また、現在、萌芽的学際研究として香椎浜の留学生会館における「みんなの家」のワークショップを行っているということである。

発表後には以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・仮設住宅が撤去される時「みんなの家」はどうなるのか。
- ・寄付のものなので行政と関係なく期間延長はできないのか。
- ・仮設住宅（木造、プレハブ）といったカテゴリー、仮設住宅が存続する期間はどのように決まるのか。
- ・東北では暖房はどのようにしているのか。
- ・一般的な集会所のような見かけだと人を集める力が弱いので「みんなの家」の方が集まりやすい。
- ・人が集まるようにするポイントは何なのか。
- ・みんなの家の中での煮炊き等に法的規制はないのか。
- ・電気やガスの供給はどのようにになっているか。
- ・末廣先生以外に九大で関わっている先生は。
- ・このようなプロジェクトにおける設計に関わるのは、建築計の先生なら誰でもできるのか、設計を九大でされているのは誰か。
- ・伊東豊雄さんはどのようにこのプロジェクトに関わられたのか。
- ・日本には異文化の建築を扱える人はあまりいないのでは。
- ・今ある公民館などをみんなの家のようなものに置き換えていてもいいのでは。
- ・伊東さんがみんなの家のようなものを造ったことで建築界では議論がある。

第 28 回

日時：2014 年 1 月 22 日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2 階準備室）

話題提供：浜本満先生（人間共生システム専攻）

タイトル：「ドゥルマ社会におけるキリスト教の変容」

参加者：浜本・清家・光藤・南・藤田・橋彌・元兼・大沼（計 8 名）

浜本先生のサバティカル報告を兼ねて、フィールドワークの結果を中心に、豊富な画像や動画をまじえたパワーポイントを交えて発表が行われた。

最初に、サバティカル期間中にまとめられたという先生の著書『信念の呪縛』の紹介が行われた。

今回のメインのお話は、先生の主な研究テーマである妖術信仰研究からのスピノフ的な位置づけにあるとのことである。

アフリカにおけるキリスト教の展開には三つの画期があるとのことである。1960 年代までの植民地下での布教、1960 年代から 80 年代までのキリスト教のアフリカ化、80 年代後半以降のカリスマ派教会の伸張（グローバリズム）である。また、アフリカにおけるキリ

スト教化の動因というのは、教義が正しいから受け入れるといったものではなく、幸福追求のための選択可能なリソースの一つと見られており、人々が直面する問題に対する解決手段としてのその有効性とコストを踏まえて、それを受け入れるかどうかの選択がなされていたということだそうである。

先生が研究対象としておられるドゥルマでは、東アフリカ最初の教会が1851年につくられたにもかかわらず、その後布教は進まず、1980年代でもキリスト教信者は圧倒的少数者で、近所の変わり者扱いだったということである。だが、90年代以降、急速にキリスト教が普及したとのことである。

ドゥルマの妖術、憑依霊に関するキリスト教諸派の姿勢という点でみると、最初、主流派のキリスト教は迷信とみなし、他のドゥルマ風慣行と同様、縁を切るべき対象としたとのことである。80年代後半からのペンテコステ派は、妖術などはサタンの攻撃とみなし、イエスの力によって防御可能とした。2000年以降の変化として、より積極的な働きかけが行われるようになった。つまり、妖術と実際に戦い始めたということである。

キリスト教が妖術と戦っている状況について、このあと、動画も含めてさまざまな例が紹介された。牧師がトランス状態になって妖術師を告発したり、信者たちが歌っているうちにそのうち誰かが倒れて異言を行ったりといったものである。

発表後には以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・アメリカの教会の人は直接布教に来ていないのか。
- ・南米ではカソリックが強いがアフリカではどうなのか。
- ・ドゥルマ内でのキリスト教信者の率はどのくらいか。
- ・改宗の単位は家ごとではなく個人か。子どもはどうなるのか。
- ・呪術師が改宗してキリスト教徒になることはあるのか。
- ・キリスト教の歌が陽気なのはゴスペルの影響か。
- ・聖霊と憑依とは親和性が高い。
- ・呪術と、キリスト教が呪術と戦うあり方との類似性に人々は気づいているのか。
- ・ドゥルマでは、土地を管理するためのプラグマティズムとしての一夫多妻がもともとあったのか。

第29回

日時：2014年2月19日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

話題提供：南博文先生（都市共生デザイン専攻）

タイトル：「ブロードウェイの精神分析」

参加者：南・清家・光藤・志賀・元兼・大沼（計6名）

南先生のサバティカル報告を兼ねて、写真をまじえたパワーポイントを交えて発表が行われた。

まず、先生の研究テーマである「グラウンドゼロ」そしてそのような場所における「都市のトラウマ」という捉え方について説明が行われた。グラウンドゼロとしてニューヨーク（9.11）および広島を取り扱ってこられたということである。また、都市をクライアントとして捉えることで臨床心理学との共通性についてもお話しされた。

つづいて「都市の精神分析」について説明がなされた。先生がなぜ精神分析という立場をとられているのかについて、また、先生ご自身が精神分析についてはアマチュアであるが、その立場をむしろ活かして、フロイト、ユング双方の考え方を取り入れていることなどについてお話しされた。ベンヤミンのパサージュ論との関係などについてもお話しされた。

また、ブロードウェイを四人の研究者と特に目的を定めずに歩いて (stroll) 撮影した写真の紹介が行われた。そのようにして写真を撮りながら、連想したことをメモしてゆく、という手法をとられたとのことである。

また、広島についても現地に入って研究されていることが紹介された。1945.8.6.以前の広島とは、ということもあわせて見て行く必要があるとのことである。

発表後には以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・マンハッタン島の大きさは。
- ・写真はブロードウェイのどのあたりか。
- ・車は通れる道なのか。
- ・street と都市の関係についてどう捉えるか。
- ・広島にとって丹下健三さんの都市計画はどういうものだったのか。
- ・広島の平和大通の意味合いは。
- ・広島、3.11、9.11 はグラウンドゼロといっても異なると思うが「ゼロ」とは何を指すのか。
- ・都市を撮影していて足下の影などに目が行っているところが興味深い。
- ・都市と地形との関係は。

平成 26 年度マンスリー学際サロン（開催数 計 7 回）

第 30 回

日時：2014 年 4 月 23 日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2 階準備室）

話題提供：大沼夏子・董秋艶（学際企画室）

参加者：光藤・大沼・董（計 3 名）

大沼発表

タイトル「これまでの学際企画室 ―学際研究・教育コーディネータ支援の歩み」

大沼が携わってきた学際企画室の業務についてパワーポイントを用いて発表が行われた。まず、大沼の略歴が紹介された。続いて、学際企画室のこれまでの経緯が簡単に紹介された。学際企画室は EEP によって設置、運営されている学際研究・教育コーディネータ委員会を支援するためのものであり、2009 年 11 月から活動している。

続いて、学際企画室が通常行っている業務が紹介された。コーディネータ会議支援、マンスリー学際サロン支援、多分野連携プログラム支援といったものである。

また、それ以外の業績についても簡単に紹介された。「学際白書 2009」「人間環境学リファレンス 2012・2014」翻訳書「学際研究」の発行支援等である。

最後に、この四月から、大沼の身分が事務補佐員からテクニカルスタッフになり、アソシエイト・コーディネータという名称のもと活動することを受けて、より立体的に支援に携わりたい旨の展望が述べられた。

発表後には以下のような質問が出された。

・今後の学際企画室への関わりは、事務補佐員からテクニカルスタッフ（アソシエイト・コーディネータ）と名称が変わったことで、どのように変わってゆくのか。

董発表

タイトル「近代女子教育の成立をめぐる日中関係史研究」

董が自身のこれまでの研究についてパワーポイントを用いて発表が行われた。

董研究は、清末中国の女子教育制度の策定過程を分析し、近代日中関係史を解明することが課題である。問題認識の背景には、1907 年に女子教育のための「女子小学堂章程」「女子師範学堂章程」が公布されたことで、中国の近代教育制度として位置付けられている『奏定学堂章程』（1904 年）に、女子教育が含まれてなかったことが通説となっていること。また日中交流史研究においては、中国側の研究の多くは近代教育改革への日本の関与は「侵略」であると論じてきたこと、一方日本側の研究の多くは、明治日本が中国の教育の近代化にいかんにか貢献したかという問題意識のもとで行われているとのことである。

董研究は、近代教育制度の策定のために日本視察に派遣された京師大学堂（のち北京大学）総教習呉汝綸の日本教育視察に着目し、その視察における日本教育界の働きかけとそれに対する中国の態度と受容を分析することが本研究の具体的な課題と方法である。そして、以下のような研究成果をみせた。

日清戦争後、日本は「東洋主人」になろうと試みた。中国の女子教育を指導することを義務であると考え、呉に女子教育の制度化を勧めた。また、この義務を果たすためには日本の女性の働きが必要であり、彼女たちこそが中国の女子教育を指導できる立場にあることを多くの女性に共感させるように啓蒙した。さらに中国派遣女教員養成事業は行われた。呉の日本教育視察を機に、日本は中国の女子教育普及事業を「啓発誘導」できるような態勢を整えようとしたのであった。

そして、日清戦争に敗戦し義和団事件も起こり、「内憂外患」の感を募らせた清政府は、育才による救国を求めた。その際、「速成」効果を図るため、西洋化された日本の教育制度をモデルにしようとした。日本の教育界が説いた国民の家庭教育に「賢母」養成する必要である女子教育の意義を認め、同時に日本の経験を口実に女学校の設立を非とされていた。敷衍策として『奏定学堂章程』には、女子教育の意義を認められている「蒙養院章程及び家庭教育法章程」を設けた。そのゆえに多くの地方官民による女学堂成立の動きが女子教育制度の策定の日程に俎上られることとなった。

董研究は、清末の女子教育制度も日本の女子教育制度をモデルにしたことを裏づけるものとなり、近代日中関係史研究に新たな視点を広げることとなった。

発表後には以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・史料はどこへ集めにゆくのか。
- ・女子教育はいつごろから行われているのか。
- ・このテーマに興味を持ったきっかけは。
- ・日本と中国、それぞれの意図を多角的に見なければならぬ。
- ・研究の方法としては歴史学か社会学か。
- ・女学堂は誰が作るのか。
- ・中国の地方の人たちが行ったことの記録はどこにあるのか。
- ・新谷先生の分野と近いのか。

第31回

日時：2014年5月28日 12:00-13:00

会場：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

発表者：田上哲先生（教育システム専攻）

タイトル：「授業分析と独特の思考・表現をする卓越した子ども」

参加者：田上・清家・佐々木・藤田・光藤・住吉・針塚・田中・清水・大沼・董（計11名）

田上先生が研究されている「授業分析と独特の思考・表現をする卓越した子ども」についてパワーポイントと配布資料を用いて発表が行われた。

田上先生のテーマは、「子ども」を研究することであり、それを解明するために「授業」を分析の対象としている。いま取り組んでいる課題のひとつが「卓越した子ども」を「どう教育するのか」の追究である。

田上先生によれば、「授業分析」によって「授業を研究する」際のポイントは以下の通りである。

- ・既成の理論に安易に頼らない
- ・観察と記録による授業の事実の把握
- ・教育の事実とその解釈
- ・「どう教育するか」と「それは教育か」という二つの問いとともに

また、「授業分析」は「子ども」研究であり、子どもの思考の動きや思考体制などに不利な解釈はせず、一人ひとりの子どもの可能性をとらえるようにするとの考えを示した。

田上先生が用いる「卓越した」子どもとは以下のようにとらえられている。

- ・教師（保護者）より論理的・分析的に考え強い倫理観をもつ子ども
- ・教師（保護者）の意図することに応えることよりも自分の頭で考えることを大事にする子ども
- ・正しいとは思えない場合には教師（保護者）にも意見する、（定型発達の）大人にとって

ては生意気に感じる子ども

つまり、「卓越した」子どもとは独特な思考表現をする子どもたちである。アメリカなど海外では「Gifted」という概念が用いられているが、定義は定まっておらず、能力の高さだけに焦点があたり問題も生じている。

そして、田上先生が授業分析の視点から以下のことを指摘した。

- ・一人ひとりの子どもに発達・成長の課題と可能性がある。
- ・多様な個の存在する集団を活用する
- ・日本型のインクルージョン教育の深化
- ・教師、子どもが人間理解を深めること
- ・子どもの参加論から子どもへの参加論へ

発表後には以下のような話題について活発な討論が行われた。

- ・「Gifted」という言葉は日本語で何と訳すのか？意味合いは？
- ・「Gifted」以外の区分はあるのか？
- ・アメリカの私立小学校はあまりないのか？
- ・教育方法学とは、どういう学問か？区分して教育（特別教育）を行うかどうかを考えるようなことが中心か？
- ・教育とは何か、教育の成否を考えると、学生が大人になった後どのような人生を送るかまで見る必要があると思うが、そうした追跡調査はあるか？
- ・教育学からみた建築の有るべき姿、建築への要望があるか？環境（室温等）と教育の成果を関連づけるような研究はあるか？
- ・潜在能力アプローチと親和性は高いのか？
- ・道徳など授業で教えられる倫理観はどのように議論され、形成されるのか？
- ・地球温暖化に対して劇的に対策を変えられるのは教育しかない。教育によって省エネに働きかけるにはどうすればよいか？
- ・大学は「Gifted」の子を生かせる場にならないのか？
- ・公教育のなかで、定型発達である教師を用意する必要では？
- ・アメリカは国益のために「Gifted」を特別に教育するのか？
- ・日本では学力教育が優先されている。学力だけでない教育を中学校や高校ではできていないし、余裕がない。
- ・「Gifted」はもう一度我々に平等とは何か、差別とは何かを議論するきっかけとなったのでは？
- ・子どもを通じて親が関心をひきたいという欲求とのつながり、子どもが親の所有物という感が強まっているのを感じる。

第32回

日時：2014年6月25日（水）12:00-13:00

場所：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

話題提供：内田若希先生（行動システム専攻）

タイトル：『障害』があっても『生涯』Happyに —パラ・スポーツの視点から—

参加者：内田・田上・清家・住吉・山下・光藤・大沼・董（計8名）

内田先生のテーマである障害者スポーツについて、パワーポイントを用いて発表が行われた。内田先生にとっては、これを機にパラ・スポーツに関心を持っていただければとのことである。

内田先生によれば、中途身体障害を負うとその人が、身体の機能や部位を喪失し、それに

伴う生活が急激に変化し、それまでの自分の喪失だけでなく、今までと同様に続いていくと当たり前のように信じていた未来を同時に喪失する。そして、代わりに得るものが「障害者」というレッテルである。その問題は、実は人々が信じている「当たり前」と深く関わっていることだとの指摘が行われた。具体的には、以下の三つの例を挙げて論じた。

- 階上に上がるためのアクセスの手段が階段しかない駅（→人は階段を上ることができて、「当たり前」）
- 野球のピッチャーになりたい先天性両上肢形成不全の少年（→両手で投げることが「当たり前」）
- どちらの女性が健康ですか？
 - ・身体が丈夫で病気ひとつしたことのない70歳の女性（→友人がない）
 - ・脳梗塞で倒れ、片麻痺が残った70歳の女性（友人がいて家族もいる）

このように、実生活に起きているこの三つの例によって人々は「当たり前」にとらわれて、「障害」そのものを考えているのではないかということを示された。

内田先生が我々は「障害」を考える視点から「生活の能力」へと視点を転換し、「できないこと」ではなく「できること」に見つめていく、支援していくと、「障害」があっても「生涯」Happyになれるのではないかとの意見を述べられた。

また、こうした視点の転換が、自分の人生に限界を設定してしまう人々にも応用できるのではないかとの考察を示された。

最後に、パラ・スポーツについて英国で作成されたCMなどの映像の提示が行われた。

発表後には以下のような話題について討論が行われた。

- ・発達障害者あるいは知的障害者はハンディキャップが大きいですが、彼らが楽しめるスポーツがあるのか？
- ・パラ・スポーツも含めて、近代スポーツの理念（より速く、より強くなど）は、皆が楽しめるものではないように思われるが、皆が楽しめるスポーツの有り方とはどのようなのか？
- ・「当たり前」という意識の転換が必要だという指摘について、先月のマンスリー学際サロンで扱った「Gifted」と称する子どもたちは、普通の人が「当たり前」と思うことを逆に「当たり前」と思っていない子どもたちであるといえる。「当たり前」に対する「意識転換が必要」との指摘においては、今回のテーマとの共通点が見られる。
- ・支援策としてはエレベータを充実すること、人に助けを求めることが考えられるが、「建築」と「人」どちらが重要か？
- ・現在車椅子の技術も大きな進展をみせているのでは？
- ・ソフト面の充実が必要では？
- ・高齢化社会でハンディキャップの人が増えてゆくので、対応が必要
- ・日本のスポーツ文化の有り方を変えて行かねばならない

第33回

日時：2014年7月23日（水）12:00-13:00

場所：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

話題提供：住吉大輔先生（空間システム専攻）

タイトル：「都市・建築のエネルギー・環境負荷削減に関する研究」

参加者：住吉・光藤・大沼・董（計4名）

住吉先生がこれまで取り組んできた研究とこれからの興味関心について、パワーポイント

トを用いて発表が行われた。

発表の流れは以下の通りである。

1. 都市環境負荷の長期予測シミュレーターの開発
2. 空調熱源システムの設定値最適化・劣化診断ツールの開発
3. 家庭用燃料電池の省エネルギー効果の分析
4. 行動変容を促進する省エネ誘導型建築に関する研究
5. 他、取り組みたい研究課題

1. 都市環境負荷の長期予測シミュレーターの開発

近年世界的な温暖化現象を受け、日本でもエネルギー消費量やCO₂排出量削減に向けた取り組みが進んでいる。例えば原発の停止やCO₂排出量削減目標の見直しなど。しかしCO₂排出量削減に向けた見通しが立っていない。このような問題意識のもとで、本研究は都市・建築の持続化に向け、CO₂排出量を削減するための施策立案を支援する方法論を構築することを目的とする。具体的には、①都市の実態調査（人口変化、経済変化、交通手段の変化）、②都市のCO₂排出量の長期予測、③環境負荷削減対策の有効性と削減可能量の把握といった方法及び内容で研究を進めた。

2. 空調熱源システムの設定値最適化・劣化診断ツールの開発

中央熱源システムの制御に関しては、外気条件や負荷条件など周囲状況が常時変化することにもかかわらず、常に同一の設定値を与えて制御を行うことが一般的であること、また、機器の劣化が進行しているにもかかわらず見逃され、故障や急激な効率低下につながるなどといった問題がある。本研究は、時々刻々と変化する外界や負荷の状況に合わせて、最適な設定値を選択することで省エネルギーを実現させ、日常的に運転状況を監視し、機器ごとの劣化状況（性能）を診断することを目的としている。

3. 家庭用燃料電池の省エネルギー効果の分析

従来の電力供給は約59%のエネルギー（排熱）を大気や海中に放熱してしまう。しかし燃料電池によるエネルギー供給は発電の際の排熱を住宅の給湯などに利用することで総合エネルギー効率を最大85%まで高めることができる。

4. 行動変容を促進する省エネ誘導型建築に関する研究

2009年のラクイラサミットにおいて先進国は1990年比で80%以上の温室効果ガス削減を目指すことを合意した。目標達成に向けて様々な技術開発がなされているが、技術による削減には限界も見え始めている。今後はこれまでの生活を見直し、人間の行動を省エネ型に変える“行動変容”が求められる。環境教育、省エネコンペティション、インセンティブによる動機付け、ベンチマーク、専門家による省エネアドバイスなど、行動変容を喚起する様々な取り組みが各地で始まりつつある。建築分野においても、こうした行動変容を促進する建築計画や設備インターフェース等が求められる。本研究では、行動変容の取り組みについて体系的に整理し、省エネ行動を誘発するための建築や設備のあり方について検討している。本研究は始めたばかりでまだ成果は出ていないが学際的な取り組みができるのではないかと考えている。

5. 他、取り組みたい研究課題

- ・ パーソナル空調の開発 →空間を冷やす・暖めるのではなく、人を直接冷やす・暖めることにより、空調用エネルギー消費量を削減する。
- ・ 不安定空調の開発 →快適感、変化によってもたらされる。常に一定温度を保つのではなく、冷房時なら短時間の低温送風と残りの時間での中間温送風により空調を行う。

発表後には以下のような話題について討論が行われた。

- ・ 建築の構造としてエレベータと階段の配置を考慮して構築すべき
- ・ パーソナル空調は体感温度の違いを解決できる
- ・ クールビズをフォーマルに見せる方法はないのか

- ・ 現実に省エネのために、飛行機に乗らない人がいる
- ・ 物質的な豊かさと幸福感を切り分けて考える必要がある
- ・ 省エネを習慣化することの難しさ、押しつけにならないように
- ・ 教育を通して子どもが内発的に省エネするようにする必要がある
- ・ 「生きる力」という教育理念のなかで環境教育を取り入れていると思う
- ・ 省エネは国レベルで推進しないといけない
- ・ 小学校などで、環境教育の実験できるとよいのではないか

第34回

日時：2014年11月26日（水）12:00-13:00

場所：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

話題提供：岡幸江先生（教育システム専攻）

タイトル：「社会教育における“場”を考える」

参加者：岡・南・住吉・山下・光藤・大沼・董（計7名）

岡先生がこれまで取り組んできた研究について、パワーポイントを用いて発表が行われた。

岡先生は社会教育学の専門家であり、これまで、地域福祉実践及びNPO・ボランティアの営みを、学習の組織化の新たな動きとして着目してきた。しかし、近年は農山村の過疎化とそれに抗する共同実践に着目するようになり、地域の疲弊・格差貧困問題が日常化した地域における、地域づくりと地域学習をどうとらえるかを研究の課題としている。岡先生の最終の課題は、インフォーマル教育の世界を解明することを通して、ノンフォーマル教育としての社会教育の今日的可能性を再考することである。

インフォーマルな教育とは、フォーマル教育（制度化された教育）、ノンフォーマル教育（組織化された教育）と違って、人々の学びを支援する自発的なプロセスを指す。具体的には、会話を通して考えることであり、経験の探究と拡大である。その目的は、人々が活躍できるように、コミュニティや組織や関係性を耕すことにある。

岡先生によれば、戦後、社会教育行政が福祉・労働行政との分断を進め、一方、人（子どもから大人まで）の育ちや地域社会の困難に向き合う人たちが多様な場づくりに動き出す。しかしそこには、フォーマル教育が制度化の中で見失いがちな、人の存在や困難に寄り添いながらエンパワーメントしようとする視点、彼らが一步を踏み出すための環境づくりへの視点があると指摘する。それゆえに岡先生はそのような「場づくり」（地域のサークル、たまり場、共同店など）に注目し、場づくりを *informal education*（日常の中の教育的なしかけ）として読み直そうとした。

岡先生は、今回ご自身が調査のため通った沖縄本島最北端の国頭村奥集落の共同店について紹介してくださった。

共同店とは「総合コミュニティ事業体」とも言われて、明治期当時の資本主義的外圧から集落を守るため、住民全員が株主となり合議で運営するものとして登場したようである。この集落史に一貫して流れる「共同一致の奥魂」を象徴したかのような共同店は、日常の情報交流・見守りの拠点や子どもたちの重要なたまり場となっているものの、現在大規模店やコンビニの攻勢のなかでその存続は決して安泰ではないという。しかし住民のなかには周囲の森や自然と共に生きる知恵の再発見を通して共同店の新たな位置づけをはかろうとする動きも生まれている。

岡先生はまさにこのような、「場づくり」を *infomal education* として読み直すとりくみを重ねるところから、「社会教育」の再考をはかろうとしているようであった。

- 発表後には以下のような話題について討論が行われた。

- ・社会教育学は、社会にどのような貢献をしようと考えているか
- ・共同店の仕組みはどうなっているのか
- ・集まる場所としての共同店もあるのか
- ・共同店には経済性を計れない効果があるので、多少売り物の価格を高くしてもよいのでは
- ・地域ならではの困難さもあるのでは
- ・社会教育には制度的な「力」があるようで、推進側の思うとおりに実現できると思ったが、今日の話を知るとそうでもないように思わせられた
- ・キーパーソンがいると共同店が変えられるのでは、宮崎にある自然学校はキーパーソンの人がいたから変えられた。
- ・人材育成という言葉は社会教育にとっては限界性があるのでは

第 35 回

日時：2014 年 12 月 17 日（水）12:00-13:00

場所：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2 階準備室）

話題提供：山下亜紀子先生（人間共生システム専攻）

タイトル：「なぜ育児が苦しいのか—発達障害児の母親たちの語りから—」

参加者：山下・元兼・高野・光藤・大沼・董（計 6 名）

パワーポイントを用いて発表が行われた。

山下先生は、障害をめぐる認知や意識に関する先行研究に対して、生活上の困難さや問題をとらえる研究を目指している。具体的には、発達障害児の母親の生活実態に接近し、そこから発達障害児を抱えた母親の子育ての困難を見出そうとしている。

本発表で、山下先生は、宮崎県都城市にある発達障害児の親の会の会話（22 名の母親）（録音）を分析した内容を発表した。山下先生は分析の結果を概念的に 5 つのカテゴリーに分けて提示し説明した。その発達障害児を抱えた母親の生活困難の 5 つのカテゴリーとは、①「障害児の言動による生活の困難」、②「子育てモデルがなく、日々模索し、試行錯誤している状況」、③「支援環境との物理的・心理的距離感」、④「良好ではない周囲との関係性」、⑤「日常的に生じる心理的負担感や葛藤」である。本発表は主にこれらのカテゴリーの詳細な内容を紹介し、さらにその 5 つのカテゴリーは相互の関係性も有したことも指摘した。

小括として次の 3 つに分けてまとめた。①養育、療育に関わる専門的支援体制の不備、②身近な関係性におけるソーシャル・サポートの脆弱性、③母親自身の生活困難の潜在化である。つまり、養育上の支援を求めると得られないし、母親自身自身の困難さも子どもの問題を前に潜んでしまうとのことである。

また、発達障害児の母親が抱える生活の困難と社会参加について、ポン太茶話会の経験者で、かつ中学生以上の子どもをもつ母親 8 名を対象に行われたインタビュー調査を紹介した。ここでは、学校社会との関わりの困難さと共同的解決のなさが指摘された。最後に、録音された音声の一部も紹介された。

- 発表後には以下のような話題について討論が行われた
- ・発達障害児の中で問題を抱える割合についての統計はあるか
- ・発達障害と判断されない場合の方が、親子の孤立感が高まる可能性がある
- ・ポン太キッズはどういう形態で運営しているのか
- ・社会財やジェンダーなどからみても、社会的支援が遅れているのでは
- ・発達障害児の父親も母親と同様の社会環境に置かれているのでは
- ・先生の認識の問題もあり、生徒の間のいじめ問題もある。発達障害児に関しては、具体

的にいえば学校のどこが問題なのか

第36回

日時：2015年1月28日（水）12:00-13:00

場所：学際サロン（人間環境学研究院会議室 2階準備室）

話題提供：尾崎明仁先生（空間システム専攻）

タイトル：「ここまでできる建築の科学」

参加者：尾崎・住吉・光藤・大沼・董（計5名）

パワーポイントを用いて発表が行われた。

尾崎先生によれば、エコエナジー建築とは、「地球環境保全」、「周辺環境との親和性」、「居住環境の健康・快適性」である。この科学的な建築を提供するため、研究課題は「ダイナミックな建築伝熱現象（建築系）、建築設備の稼動特性（設備系）、生活行為（人体系）を反映した建築全体（空間および躯体内部）の温湿度環境の予測ツールを開発する」ことを目的としている。具体的には、「建築設備の機器特性モデル」、「人体熱収支モデル」、「熱・水分複合移動モデル」という数理モデルの構築と「建築全体の温湿度・熱負荷計算ソフト」、「建築外被の温湿度環境解析ソフト」の開発である。また、実際の建築物理現象に則り、人体の快適性も考慮した建築全体の熱環境性能の評価手法について検討し、応用・実用研究に繋がっていくことを目指している。

また、尾崎先生の指導の下に、研究室に所属している皆さんも建築環境の形成メカニズムを基に、快適性、健康性、省エネルギー性、耐久性に優れた住環境デザインおよび先進的な自然エネルギー利用や高効率設備について研究している。このような優れた住環境及び高効率な設備を提供できるよう、以下6つに分けるテーマについて研究が行われている。

1. 次世代高機能建築の提案（断熱・遮熱・気密・換気・集熱・排熱・蓄熱・調湿などの機能、および再生可能エネルギーを利用したパッシブシステム）
2. 高効率設備システムの総合解析（マイクロコージェネレーション、デシカント空調、放射暖房、ゼロ・エネルギーなど）
3. 建物温湿度・熱負荷の動的予測と住環境評価（建築系と人体系の熱・水分・空気の複合移動解析、および快適性・健康性・省エネ性・耐久性・室内空気質の評価）
4. 建築外被の温湿度変動解析（漏気・通気・熱橋を含む1～3次元伝熱解析による熱性能評価および防露技術）
5. 建築・都市の将来エネルギー消費と温暖化対策（省エネルギー、CO₂排出量削減、低炭素社会など）
6. 都市における顕熱・潜熱移動と温暖化の要因解析（地盤・植栽・建築・大気連成系の熱・水分・空気移動解析）

●発表後には以下のような話題について討論が行われた

- ・尾崎先生が作成されたソフトは住宅対象か
- ・木材の木目など、実際の建築材の細かい方向なども考慮するのか
- ・設計するモデルパラメータは実測値を使うのか
- ・材料の質を知っておかないといけないのでは
- ・省エネ建築を普及させるためのネックは何か

- ・ 建築基準法とのかかわりは
- ・ 省エネを目指している過程のなか、却ってエネルギーを消費してしまったこともあるのでは
- ・ 省エネ建築を心理学研究のなかで課題として取り上げていける可能性があるのか
- ・ 心理学で省エネ建築を宣伝することの試みは可能では
- ・ 中古住宅の価値が下落することに問題がある

3. ファカルティ・カップリング 2014

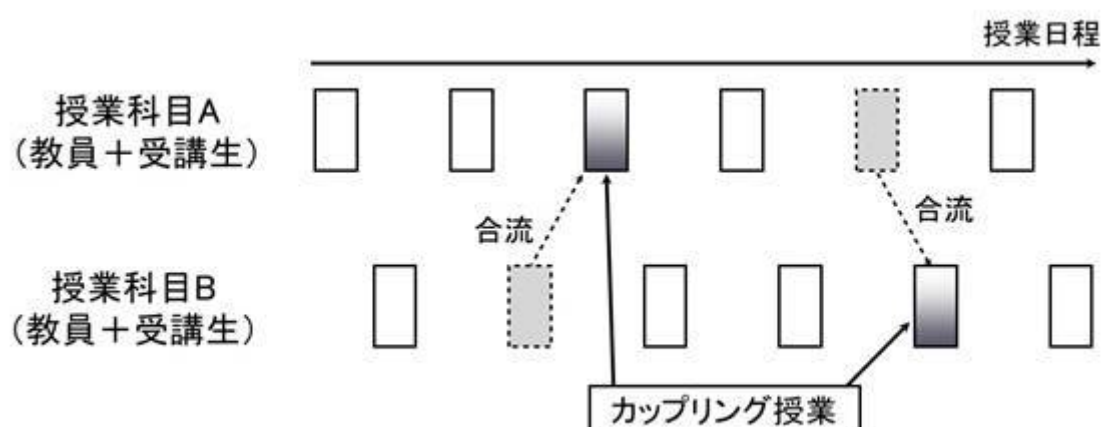
3-1. 実施概要

1. 概要

・この取組は学術的興味／関心を共有する学府担当の先生方が2人1組でペアを組んで、受講生と共に互いの授業に参加するというものです。受講生にとっては、自身の専門分野と関連分野の繋がりを知る機会となります。また先生方にとっては、学際的連携の機会となるとともに、FDの一環ともなります。コーディネータ委員会のもとで、教育の質向上支援プログラム（EEP）の支援を得て実施しています。

2. 実施方法

・ペアを組んだ先生同士で、日時を決めて、互いの授業に各1回ずつ、受講生も含めて合流します（○月○日に先生Aが先生Bの授業に受講生も含めて参加し、また別の●月●日に先生Bが先生Aの授業に受講生も含めて参加するということとなります）。



3. 経費

・年度ごとに、先生1名につき原則2.5万円の経費支援を行います（アルバイトによる記録の作成、関連図書を購入、消耗品の購入等に使用できます）。

・経費支援の方式は、経理から各先生方に「教育研究体制基盤強化経費」の形で予算措置される形になります。すなわち先生方の通常の予算執行と同じ形式となります。

・予算執行は2人合わせて合計5万の範囲で行えますが、その執行はどちらか一方の先生になります（たとえば、2人とも2.5万ずつ執行しても、1人が4万でもう1人が1万という形でもかまいません）。

・年度末には本部へ執行内訳の提出が必要となりますので（費目と金額の集計は学際企画室で行います）、ファカルティ・カップリングと関連のものとして説明が不可能なものへの予算執行はできません。

4. 報告

・実施後にカップリングペア単位で記録作成を行います。記録作成の方法には以下のようなものが想定されますが、これ以外の方法でもかまいません。

（1）配分された予算で学生アルバイトを雇用して記録作成を行う。

（2）学際企画室アソシエイト・コーディネータをファカルティ・カップリングの場に派遣して記録作成を行う（追加経費はかかりません）。

(3) ファカルティ・カップリング実施後に、実施した先生方にアソシエイト・コーディネータがインタビューを行い、記録を作成する。

※(2)(3)の場合は、アソシエイト・コーディネータの勤務日、勤務時間の都合がありますので事前に学際企画室 coordinator@hes.kyushu-u.ac.jp にご連絡ください。

・作成した記録は、コーディネータの学内専用 web ページに掲載いたします。

3-2. 実施報告書

1. 三浦佳世教授（行動システム専攻）・山田祐樹准教授（行動システム専攻）

山田祐樹准教授担当講義「実験心理学特論」「理論心理学特論」を三浦佳世教授担当講義「感性認知学」「感性測定学」の受講生と共に受講した。

講義の中では、実験デザインの発案、実行、分析、発表という研究の一連の流れを経験することで、今後の研究活動でも生かされるであろう知識を得ることが出来た。

具体的には、基礎心理学会第33回大会でポスター発表を以下の題目で行い、多くの研究者から評価をいただいた。さらに、今現在は査読論文を目指し、投稿準備を行っている最中である。

「黒子が男に見えるとき—自己の身体能力に基づいた他者判断—

岸本励季・佐々木恭史郎・郷原皓彦・小代裕子・南智然・三浦佳世・山田祐樹

※発表は主に第一発表者の岸本が行った。

二人の先生から指導を受けることで、多くの意見や考えに触れることが出来、自分の研究や思考を多角的に検討することに大いに役立ったと思う。

（文責：人間環境学府 行動システム専攻 岸本 励季）

三浦佳世教授担当講義「感性認知学」「感性測定学」を山田祐樹准教授担当講義「実験心理学特論」「理論心理学特論」の受講生と共に受講した。

講義の中では、実験デザインの発案、実行、分析、発表という研究の一連の流れを経験した。

具体的には、日本視覚学会 2015年冬季大会において以下の題目でポスター発表を行い、多くの評価をいただいた。また、第15回感性学研究会において以下の題目で発表を行い、様々な分野の研究者からアイデアをいただいた。これらを生かし、現在は査読論文を目指し、投稿準備を行っている。

日本視覚学会

「ひとりぼっちに惹かれる—集団の構成人数と構成員の魅力度—

感性学研究会

「チアリーダー効果は強固ではない？—評定者・刺激の文化差による影響—

※発表は、日本視覚学会では小代が、感性学研究会では共同研究者の郷原皓彦が行った。

二人の先生から指導を受け、また他分野の受講生とともに協力して研究を行うことで、多くの考え方や手法を学ぶことができた。これは、今後の修論執筆などにも役立つことであり、大変有意義な活動であった。

（文責：人間環境学府 行動システム専攻 小代裕子）

2. 神野達夫教授（都市共生デザイン専攻）・松尾真太郎准教授（空間システム専攻）

【概要】

実施日時：11月4日（火）3～5限

講義名：都市環境リスク学特論演習、建築耐震設計演習

担当教員：神野達夫、松尾真太郎

受講者：都市環境リスク学特論演習、建築耐震設計演習の受講者（18名）

【目的】

建築耐震設計演習では、建築基準法で定められた構造計算方法の一つであり、高さ 60m 超の超高層建築物等に用いられる「時刻歴応答解析」の演習を行う。時刻歴応答解析では、建物の固有周期（建物が最も揺れやすい周期）や減衰定数（建物の振動の収まっていく度合いを表した値）を使用する。また、都市環境リスク学特論演習では、地盤の微動を高感度の地震計（微動計）で観測し、地盤の特徴を推定する演習を行う。ここで、微動とは地表面に恒常的に存在する微小な振動の総称で、交通振動、機械振動、海の波浪、気圧の変化などによって生じる。揺れの振幅は数ミクロン程度であり、地盤の微動によって建物が揺すられる場合や建物が風を受けるあるいは建物内部の人の活動などによって建物に微動が生じ、それが地面を揺らす場合もある。

今回、都市環境リスク学特論演習で使用する微動計を用いて、建物の微動や人力加振時（人工的に振動を起こして建物を揺らす）の減衰の様子を捉える事で、建物の固有周期や減衰定数を推定する。建築耐震設計演習の立場では、計算で使用するのみではなく、観測、実験から数値を求めることで固有周期、減衰定数に関する理解を深め、耐震設計の理解度を高める事を目的とした。都市環境リスク学特論演習の立場では、地盤だけでなく建物の微動を観測する事で、観測技術の向上と微動への理解を深める事を目的とした。

【内容】

微動計（図 1）を使用し、建物の微動観測を行った。初めに、図 2、表 1 に示した建物内外の 6 点に各 1 個ずつの微動計を配置し、6 点同時に観測を行った。図 3 に示したように、600 秒間のデータを解析して得られたフーリエスペクトルから固有周期を推定した。続いて、求めた固有周期に合わせて建物を図 2 の矢印で示した建物の短辺方向に人力加振した。加振終了時からの減衰の様子を図 4 に示した波形から読み取り、減衰定数を推定した。

【成果】

- 建築耐震設計演習では、時刻歴応答解析を行う際に建物の固有周期や減衰定数を使用するが、数値を使用するだけではこれらが意味するものを実感として掴みにくい。今回のファカルティ・カップリングによる合同講義の観測・実験を通じて自ら推定する事で、固有周期・減衰定数への理解を深める事に繋がった。
- 都市環境リスク学特論演習では、主に地盤の微動観測を行う。今回の合同講義で建物の微動を観測し、単独の講義と異なる角度から微動を捉える事が出来た。それにより、観測技術の向上と微動への理解の深化が可能となった。
- 都市環境リスク学特論演習では、地盤の微動観測によって地盤の特徴を捉える事で、その場所の揺れ易さ等を予測する。その場所の特徴を知ることによって、詳細な設計が可能となり、建物の耐震性能向上を図ることを目的としている。しかし、都市環境リスク学特論演習の中では、地盤の微動観測から地盤の特徴を推定するに留まるため、建物の耐震性能向上という目標を見失いがちになってしまう。そこで、今回の合同講義を通じて建物の微動観測を行い、その観測結果から耐震設計に用いられる数値を推定する事で、最終目標は建物の耐震性能向上にある事を再認識する事が可能となった。
- 両講義ともに、建物の耐震性能を向上させるという最終目標は共通である。その為、相互の研究への理解は、各々の研究へ還元出来る部分が多分に含まれる。しかし実際に交流する場は少なく、それぞれが独立してしまっている。今回の合同講義を行うことで両者を繋ぎ、相互理解の機会を生み出すことで、共通の最終目的の達成へ歩みを進めることが出来た。



図1 微動計

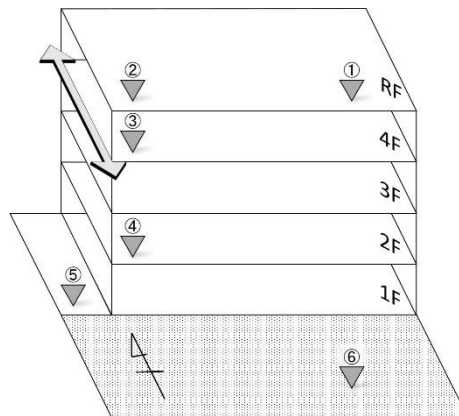


図2 観測点配置図

表1 配置場所

| 観測点番号 | 配置場所 |
|-------|-----------|
| 1 | 屋上東南側 |
| 2 | 屋上西南側 |
| 3 | 4F西南側(屋内) |
| 4 | 2F西南側(屋内) |
| 5 | 1F西南側(屋外) |
| 6 | 自由地盤上 |

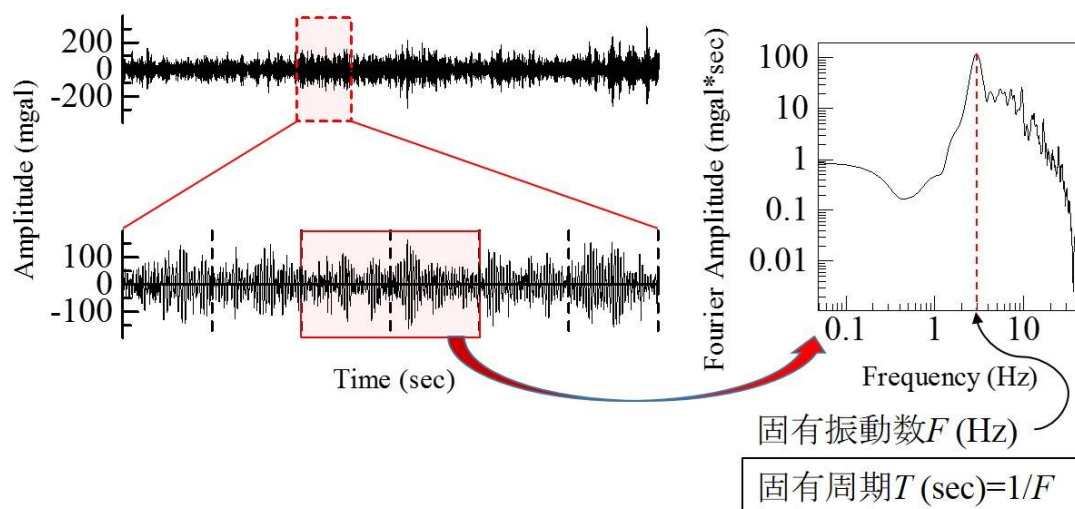


図 3 固有周期の導出例

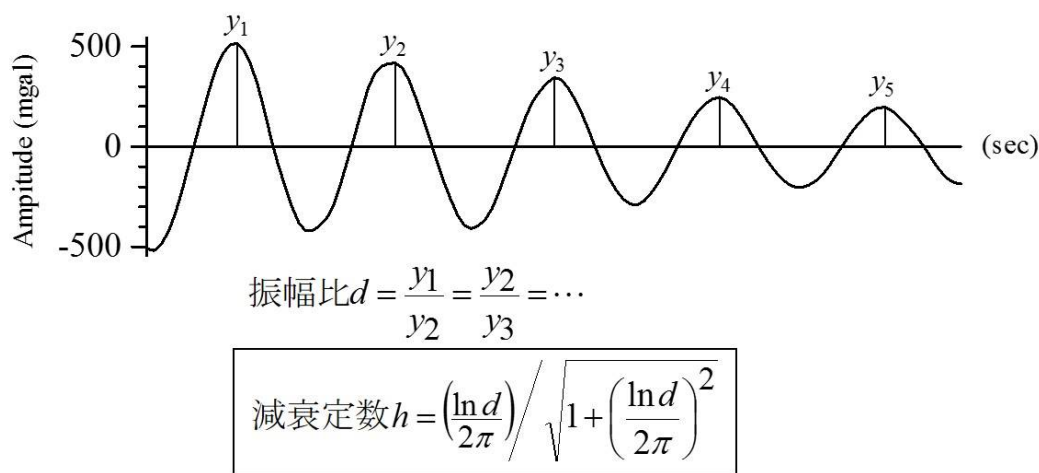


図 4 減衰定数の導出例

3. 元兼正浩教授（教育システム専攻）・志波文彦助教（空間システム専攻）

概要：

建築学部門の志波文彦先生が、教育学部門の元兼先生の研究室（教育法制・経営研究室）の院生等を対象として、京都市の小中一貫校に関する講演と意見交換が実施された。

タイトル：学際的な視点から小中一貫・連携校のありかたについて考える

日時：2014年11月27日 3限（13：00-14：30）

場所：教育学系会議室

作成者：藤原 直子（学術協力研究員）

出席者：教員（元兼教授、志波助教、金子助教）、学術協力研究員（藤原）、テクニカルスタッフ（董）および院生等、合計14名

内容：

豊富な写真や図表のパワーポイントを用いての盛り沢山な内容の講義であった。

はじめに、施設計画上の原則は、「低層」「接地」「低高分離」とされているが、小中一貫・連携校の場合は、「高層化」「地下・人口地盤活用」「施設一体化」とその原則を超えた施設要求があることが建築計画上の課題といえるとの説明があった。

さらにその他に、1) 学校への愛着や誇りをいかに継承するか、2) 校区間の学力差が与える影響は、3) それぞれの地域性とどのように向き合うべきか、の課題が考えられるが、以上の3点に関して、教育学の方々の意見を聞きたいと話が開始された。

まず、一般的に小中連携・一貫校の背景とされる小5クライシス、中1プロブレムに関して、次いで、小中連携と小中一貫の違いに関して説明がなされた。さらに、小中一貫教育の学年区分は、6・3制と4・3・2制(4・2・3制等含む)に大別されるが、京都市は5・4制とユニークな学年区分を採用していると説明された。

次に、京都市が小中一貫教育を導入した背景には、‘学力低下’、‘就学援助率の上昇’、‘問題行動の増加’があり、平成16年から特区制度の認定を受けて取り組みが開始されている。具体的には、京都市の小中一貫教育は、新校舎に加えて既存校舎も活用するため、施設一体型では4・3・2制、施設併用型では5・4制が採用され、その他に連携型がある。本講では、5・4制の御池中学校と4・3・2制の東山開晴館の2校が紹介された。

上記の課題1)～3)に関して、京都市特有の事情について説明がなされた。

まず、1) の学校への愛着や誇りに関しては、学制発布前の明治2年に、日本最初の小学校である番組小学校が設立されており、以後も町組が地域行政の核であり、地域住民の自治単位を形成して住民の力が強く、学校に対する愛着や誇りは他地域の学区とは比較できないほどに強いこと。しかしながら一方、都心部のドーナツ化現象や少子化のため、他地域に先んじて、昭和58年には学校の統廃合が開始されていることが示された。

次に、2) の校区間の学力差に関しては、従来から、御所南小学校→御池中学校→私立高校→京都大学と進学することがエリートコースと市民からは認識されていた。さらに、近年、公立の堀川高校が、大学進学率を急激に上げた実績から校区の人口が増加して御池中学校が新設されたが、御所南小学校の校名の存続と高倉小学校との軌轢回避の解決策として、2つの小学校の校舎を残し、6年生が御池中学校に移って5・4制がスタートしたこと。

続いて、3) の地域性に関しては、5小・2中の統合である東山開晴館の事例で説明された。被差別部落がある弥栄中学校区と新興住宅地にある洛東中学校区とは、児童・生徒の実態が極めて異なり、教員もその指導や対応に苦慮しており、さらに、中学校同士の統合は問題が大きいのが実態である。しかし、現実には地上3階地下2階の校舎、児童・生徒900名の学校が設置されたことを考えると、京都市では、小中一貫校の設置で地域間格差等のさまざまな問題を解消しようとする意図もあるのではないかと説明であった。その後、福岡市の小中一貫校の舞鶴小中学校の紹介がなされ、上記1)～3)を切り口として、以下の項目について活発な議論がなされた。

- 財政面はどうなっているのか
- 小中一貫・連携校は本当に必要か
- 「低層」等の原則を超えた施設が求められ、建設されていることの根拠とは何か
- 愛着とは何か
- 御池小学校の校内はどのようなになっているのか

受講者からは、統廃合は教育の社会構造の問題に大きく関わる、研究者が行政に対して適切な提言を行うべき、学年区分は校舎の活用面からではなく子どもの発達や教育効果から提案すべき、学校施設の役割・可能性を感じた等の感想に加えて、他分野の教員の講義は興味深い等、総じて、新しい試みに対する賛意が確認された。なかでも、留学生在が自らの出身小学校が統合されて落胆した経験や地域にある連携校への進学を避けるために私立中学校に進学した経験を述べていたのは印象的であった。

今後は、一方の教員が出向く出前講義から、双方の院生による意見交換や協議の場の設定も可能なのではないかと総括された。



4. 古賀聡准教授（人間共生システム専攻）・光藤宏行准教授（行動システム専攻）

日時：2014年12月8日（月）16時40分～（5時限）

場所：人間環境学府附属総合臨床心理センター1階プレイルーム

テーマ：「実験心理学と臨床心理学からみた身体感覚」

1. 実験心理学からのアプローチ～触っていない部分の触覚的認識：空間パタンの役割～ 光藤宏行（行動システム専攻）・光藤研究室大学院生・文学部生

<内容>

光藤が現在行っている、触覚による3次元物体の形状認識についての実験心理学的研究についての研究発表を行い、その後に質疑応答を行った。研究発表では実験に至る背景をまず説明し、成人が参加した心理物理学的実験を紹介し、その後補足実験を3つ行ったことを報告した。質疑応答では、実験条件の設定や、補足実験を行った背景についての質問などが古賀研究室の大学院生の方々からも積極的になされた。光藤研究室の学生も、普段とは異なる聴衆の中で発表を聞くことは有意義であるに見受けられた。授業後のアンケートでは、互いの異なる領域の学生の研究発表を聞いてみたいという意見も出され、今後のこのようなイベントの方向性についても有益な指針を得ることができた。

2. 臨床心理学からのアプローチ ～催眠法と動作法における主動感・自動感・被動感～ 古賀聡（人間共生システム専攻）・古賀研究室大学院生

<内容>

古賀から九州大学で開発された身体動作を媒介する臨床心理学的援助法である動作法について解説を行った。九州大学名誉教授の成瀬悟策による催眠研究からそれまで医学的治療の対象であった脳性麻痺者の肢体不自由に心理学的・教育的な介入の可能性が示唆され、臨床心理学的援助法としての動作法が誕生した経緯について説明を行った。さらに、現在は動作法が脳性麻痺者の肢体不自由改善のみならず、精神科領域や福祉領域、学校臨床領域において心理療法として適用されていることについて説明が行われた。また、催眠法と動作法を受ける人の体験として「主動感」「自動感」「被動感」について解説をし、学生同士がペアとなってボディワークを行った。これまで動作法の研修を受けてきた古賀研究室の大学院生とその経験のない光藤研究室の大学院生がペアとなり意見交換を行いながら実習に取り組んだ。それぞれからの新鮮な感想が提示され有意義な授業となった。授業後のアンケートからのこのような取り組みが今後も継続することが学生からの希望として示された。

5. 田上哲教授（教育システム専攻）・住吉大輔准教授（空間システム専攻）

日時 2015年1月27日(火) 19:00-20:50

場所 建築学科会議室（旧館 401 会議室）

テーマ 省エネルギーと教育

参加者 計 13 名

田上哲、田上研究室学生 6 名(井上、茂見、田原、松下、池田、竹添)

住吉大輔、住吉研究室学生 5 名(鈴木、山本、上野、仁科、平田)

小学校教諭 3 名(坂井、簗田、林)

概要

省エネルギーと CO2 排出量削減は世界共通の課題であり、日本においても今後大幅なエネルギー消費量の削減が社会的に求められてくることが予想される。そうした状況の中、従来の技術に基づくエネルギー効率の改善だけでは目標とするレベルまでエネルギー消費を削減することは困難と考えられる。今後は、生活のあり方を見直し、従来のライフスタイルから省エネルギー型のライフスタイルへの転換を図っていくことが必要である。そのためには、小学校教育など幼少期の教育に「省エネルギー」を取り入れ、子どもの頃からエネルギーの重要性を生活の中に取り込んでいくことが望ましい。

本カップリング事業では、こうした問題意識を持つ住吉が、教育の専門家であり知的なものと実践的なものを切り離さない人間形成に関心がある田上と共同して、小学校教育において「省エネルギー」をどのように取り込むかということについて公立私立の小学校教諭を交えて討論を行った。

授業でははじめに住吉よりエネルギーの現状、資源の枯渇、日本のエネルギー自給率とエネルギーセキュリティの重要性、小学校教育にエネルギー問題を取り込むためのアイデアなどを話した。これを受けて、参加者全員で議論した。



議論の内容は以下の通り。

- 小学校でのエネルギー教育の現状
- 小学校の建築計画の問題点
- タイの学校でのエネルギー教育
- 態度形成とエネルギーの関係
- 授業中にうちわで扇ぐ、お茶を飲むといったことが許されるか
- 本当に必要なエネルギーは何か。電気がなくなると何が困るのか。
- 携帯電話、食糧生産・運搬、病院
- 遊びとエネルギー教育を関連づけられないか。
- 外発的な態度形成だけでなく、内発的な動機付けが重要ではないか。
- 省エネルギーが生活を向上させる価値観と結びついて、結果として省エネルギーになるように持って行けると良い
- 大切なことは直接教えられる。うまく伝えることが重要。
- 今後も検討を続けていきたい。



6. 高野和良教授（人間共生システム専攻）・岡幸江准教授（教育システム専攻）

実施日：2015年2月10日（火）10:00～12:30

場所：文学部社会学演習室

参加者：高野、岡（以上教員）

森、小田、勝部、崔、洪、小林、郡山、大内（以上院生。うち4名は重複受講者）

本カップリング授業は、高野和良教授（地域社会学）が開講する「地域社会計画論」と、岡幸江准教授（社会教育学）が開講する「社会教育方法論」授業のカップリングとして行われた。カップリングのありかたを両教員で検討した結果（一度は事前に岡が高野先生の授業にもおじゃまし院生さんたちとも顔合わせ・やりとりを行った）、両者とも研究活動において日田市を共通のフィールドにもっていることをひとつの軸とし、それぞれの授業で日田市へのフィールドワークを行い、その合同報告・検討会を授業最後にもつかちをとることにした。なおそれぞれの授業の約半数に当たる4名の院生が両方の授業を受講しており、議論の懸け橋役として彼らが役割を果たすことへの期待もあった。

高野授業では、地域福祉計画の検討を授業で行ってきたことにかんがみ、日田市の計画づくりについて役所へのインタビュー、および少子高齢化問題のひとつの典型をなす、中津江地区における住民相互扶助のしくみ「絆くらぶ」へのフィールドワークが行われた。その結果は、当日「参加と合意からみた日田」と題して院生たちから報告された。行政および住民双方のとりくみについて調査が行われていたこと、また実際に財政難・社会構造改革のただなかにあつて公と私のせめぎあいがおきていることから、「公」と「私」の間の「共」の場をどうつくるか、「合意形成」をどう考えるか、といった投げかけが行われた。

報告ごとに議論を行ったが、両教員が相手の研究活動を一定把握していること、また今回両フィールドワークの調整に大きく寄与した日田における実践家でもある社会人院生の森さんが議論に加わっていたこともあり、高野授業報告についての議論自体がすでに総括討論に近い展開を見せた。日田市・中津江地区をみるに欠かせない「合併」インパクトをどう考えるか、暮らしがつつぬけで「ニーズ把握」がなかった津江のような地区でニーズ把握や互いの暮らしを知りあう活動が意図的に必要になっている地域社会の現在をどう考えるか、「消滅可能性都市」「コンパクトシティ化」の議論が盛んになるなかで、何を地域の未来を図る基準と考えるのか、そして「いまここにいる高齢者が幸せであること」を核に据える「絆くらぶ」の活動こそ、コンパクトシティ化議論への対抗案提示なのではないか、といった深まりあるやりとりが行われた。

一方、岡授業では、暮らしにおける主体性の根拠をどう考えるかという視点から1980年代に注目してきており、今季授業では1980年代以降のグローバル化をとらえる理論検討を行ってきた。同時に、1980年代以降の消費社会化もすすむ地域社会においては、生活者が地域現実に向き合い認識するためには、文化的共同的「基盤」が必要になっているという


仮説のもと、地元学という方法に注目し、研究室として共同で日田を含む地元学的フィールドワークを行ってきた。そこで院授業とつなぎながらも、直接的には研究室で行ってきた複数の地元学フィールドワークの経緯をふまえて、日田FWの報告を行った。

議論の中では、地元学といっても、予定されたお宅にうかがうこと／地元の方が一緒かどうかなど誰と訪問するのか／予定されない突撃訪問...など、学び手（ひいては調査者）と地域の関わり方によって、みえてくるものが違うということについて、活発に感想があった。「私は何も知らなかった」という驚きや発見が、地域を知る上でも、またそれ以上に地元の方が自ら動き出すうえでも重要な核をなしていることなど、地域を知る認識のありよう、また認識と行動の関係にかかわる、社会科学共通の問題が盛んに議論にのぼった。

総じてカップリング授業は、組合せの教員の関係においてさまざまな効果があると思われるが、今回の岡と高野先生の場合は、共通のフィールド、共通の受講生、共通の実践家との関係など共通土台が幾重にもある状況にあった。また社会学と教育学という学問領域の違いはありつつも過疎化する地域社会をどう考えるかという研究関心の共通性もあった。そのため、1度のカップリング授業ではあったが、教員自身が議論の面白さを感じながら発言し、またそれをみながら院生も発言するといった場が生まれていた。設定段階には迷いもあったが、結果的には予想以上の効果があったのではないかと思われる。



7. 坂井猛教授（都市共生システム専攻）・山口謙太郎准教授（空間システム専攻）



2014年度
人間環境学府ファカルティカップリング
合同ゼミ

木造建築の改修と有効利用に関する 現状と今後のあり方を考える

空き家の改修に関する取り組みを中心に

2015年3月12日

公共空間計画学研究室
循環建築構造学研究室
糸島空き家プロジェクト

2014年度
人間環境学府ファカルティカップリング
合同ゼミ

木造建築の改修と有効利用に関する 現状と今後のあり方を考える

空き家の改修に関する取り組みを中心に

スケジュール

2015年3月12日

- 14:00 箱崎キャンパス 建築学科玄関前 発
- 15:00 糸家・ファームシェアハウス 着 見学
- 15:30 糸家・ファームシェアハウス 発
- 16:00 学び家・がやがや門 着 見学・説明
- 17:00 学び家・がやがや門 発
- 17:15 九大ビッグオレンジ 着 レクチャー・意見交換
- 18:30 九大ビッグオレンジ 発
- 19:00 九大学研都市駅 着 解散・懇親会

公共空間計画学研究室
循環建築構造学研究室
糸島空き家プロジェクト

■糸島空き家プロジェクトとは

福岡県糸島地域は、福岡市中心部から電車で30分程の豊かな環境を残す土地である。しかし近年、少子高齢化と若年年齢層の流出により、放置されている空き家が増加している。

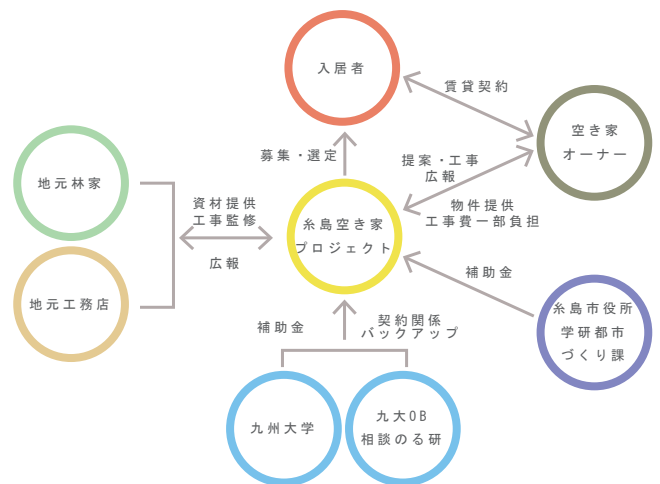
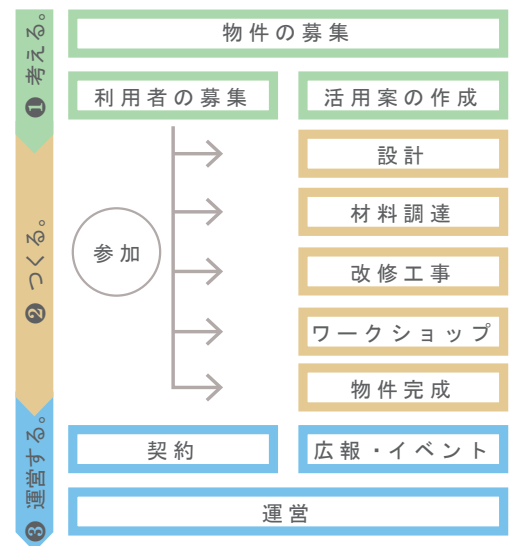
そんな中、2005年より九州大学が糸島地域へのキャンパス移転を開始した。「伊都キャンパス」への移転が完了すれば2万人の学生や大学関係者が糸島地域に移り住む。しかし、移転開始9年、学生と地域の交流は進んでいない。

そこで、私たち「糸島空き家プロジェクト」は「糸島らしいライフスタイルを考える」ことをコンセプトに、糸島地域の空き家を活用することで、地域と積極的に交流することを目的に様々な活動を行っている。

私たちの活動はまず、空き物件を募集するところから始まる。空き家オーナーの理解が得られた物件について、自分たちで物件の活用案を作成し、その後、地元の工務店さんや林家さん指導を受けながら、学生主体で利用者と共に施工を行う。

竣工後は九大OBの方々や、地元商工会などの運営のプロにご指導いただきながら、物件の運営を行っている。

特にイベント開催に力を入れ、物件の情報発信と物件を利用した地域交流活動を積極的に行っている。



■PROJECT MAP



第一弾 「まちの縁側～糸家～」

用途：シェアハウス
施工期間：2011.11～2012.3
所在地：糸島市篠原東

■概要

糸島空き家プロジェクト発足の契機となった第一弾物件。糸島市篠原にある築30年の店舗付き住宅を改装し、土間を持つ学生シェアハウスとした。

土間には地元の方々や子ども達、学生の交流の場となるよう「まちの縁側」と名付け、地域に開かれた場所として設計している。現在は子どもを対象とした寺子屋や、糸島で活動する方々を招いての講演会「えんがわサロン」、地元の方とお酒を楽しむ「おやじの会」が開催されるなど、様々な利用がなされている。



Before



After

■設計プロセス

このプロジェクトがはじまったきっかけは糸島市からの「増加する空き家を学生の住居として利用できないか」というお話をいただいたことだ。お話を受けた当時学生代表の中川を中心に空き家再生の設計に取り掛かった。築30年、もともと薬局併用住宅だったこの物件は、地元の小学生が毎日利用する通学路に面しており、地域の人もすぐにアクセスできる場所にある。私たちは道路に面した薬局部分を「まちの縁側」と位置づけ、地元の人や学生の交流の場になるよう思いを込め、また奥の住居部分は学生のシェアハウスとして設計を進めた。

設計に関しては、九大建築学科OBを中心に構成される「九大OB相談の研」の方々から指導を受け、学生に不足しがちな実務的な部分のアドバイスをいただいた。



■施工

改修工事も地元の大工さんや糸島市シルバー人材センターの指導のもと学生主体で行った。初めての改修工事です戸惑うことも多々あったが、地元の方々からたくさんのサポートを受けて、実地で学びながら施工を進めた。

施工は既存解体工事、続いて床のフローリング張り、ペイント工事と続いた。

施工中のイベントとしては、地元の方々や入居者と一緒に、木材の調達から加工までを自分たちで行う「きこりになろうプロジェクト」、『まちの縁側』の「漆喰塗りWS」等を行った。



第二弾 「元岡学び家-九大研-」

用途：学習塾
施工期間：2012.4～2012.8
所在地：福岡市元岡

■概要

福岡市西区元岡にある古民家を「九大家庭教師の会」が運営する塾に改修したプロジェクト。「糸家」と同様、①学生による企画と設計、②地域ボランティアと学生による施工、に加えて地域の子供達の学力向上を図ると共に、地域住民の文化交流の場となることを目的としている。杉材をふんだんに用いたフローリングや既存の梁を活かした吹き抜けなど、築130年の歴史を持つ古民家の特徴を生かしながら設計を行った。設計のみならず、漆喰塗りや家具作り、焼き杉など、施工にもワークショップ形式で学生や地域住民を積極的に取り込んだ。2012年7月に竣工し、同8月に塾を開講。問い合わせや体験入塾に訪れる地域の人々が絶えず、生徒数も徐々に増えている。



■設計プロセス

1, 調査・打ち合わせ 顔合わせ・実測調査

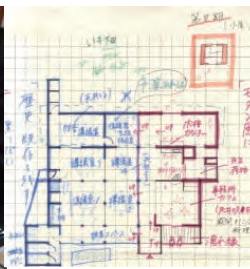
入居者・大工さんなどと

2, 設計 塾を設計する

メリハリ＝「ON/OFF案」の採用

3, 改修工事・竣工・運営 塾を作る

WS「漆喰塗り」・「家具作り」など



机と椅子が整然と並ぶだけの学習塾とは一線を画すような、アットホームな学習塾を提案した。依頼者と一緒に設計を進めながら全部で3回のワークショップを行い、様々な人と作りあげていった。

■施工



家具作りワークショップ

厚めに製材した板は塾で使う手作り机の天板に変身した。家具職人の指導を受けながら、チームで一つずつ机を作っていく。まっすぐでない板や慣れない工具に悪戦苦闘して、年齢も所属もバラバラなメンバーの仲も深まった。完成した机は子供たちの立派な学習机として活躍している。

漆喰塗りワークショップ

ぼろぼろになった土壁の上に漆喰で塗り固めるワークショップを開いた。何時間もかけて塗った壁をひとぬりできれいに仕上げる左官職人さんに感動するばかりだった。恒例の近所の方の炊き出しをいただき、素人仕上げの壁も味があって素敵だねと言いながら、参加者同士の仲もより一層深まった。



第三弾 コ・ワーキングカフェ「がやがや門」

用途：コワーキングスペース
施工期間：2012.12～2013.1
所在地：福岡市元岡



■概要

第2弾プロジェクト「学び家」に隣接する倉庫である長屋門を、学生と地域のコ・ワーキングスペースへと改修するプロジェクト。カフェのように気軽にオフィスを借りることのできる”co-working”という新しい活動方法を取り入れ、さらに地元の元岡商工会と協働しながらプロジェクトを進めることで、学生活動のみならず地域交流の拠点として機能することを目指している。これまでのプロジェクトと大きく異なるのはコ・ワーキングスペースの「運営」に地元商工会や学生団体が連携して取り組んでいる点であり、シェアオフィス経営者へのヒアリングや学生団体との連携、商工会会議への参加など、既存のネットワークと新規ネットワークを最大限に活用しながらプロジェクトを進めた。



■設計プロセス

**1, 調査・打ち合わせ
顔合わせ・実測調査**
商工会・大工さんなどと

**2, 設計
カフェを設計する**
集まり方に合わせたスペースの設計

**3, 改修工事・竣工・運営
カフェを作る**
WS「漆喰塗り」・「コンクリート打ち」など



元岡商工会の方からの依頼を受けて始まったこのプロジェクト。商工会の方々とミーティングを重ねながら設計を進めた。

「商工会の会議所が欲しい」という要望のもと、がやがや門が地域の交流の拠点となるように、一階をカフェスペース、二階をワークスペースとし、誰もが気軽に立ち寄ることができるような設計とした。

■施工



地元の職人さんに指導をしてもらいながら、学生の手でどんどん作り上げていった。

時には土壁塗りWS、漆喰塗りWSを開いて地域の方にも手伝ってもらったりすることも。

建具をはめたり、新設の壁を作ったり。3件目の物件にもなると自分たちで出来ることも増え、作業スピードも上がった。この物件で使用するカフェテーブル、ローテーブル、本棚も手作りした。

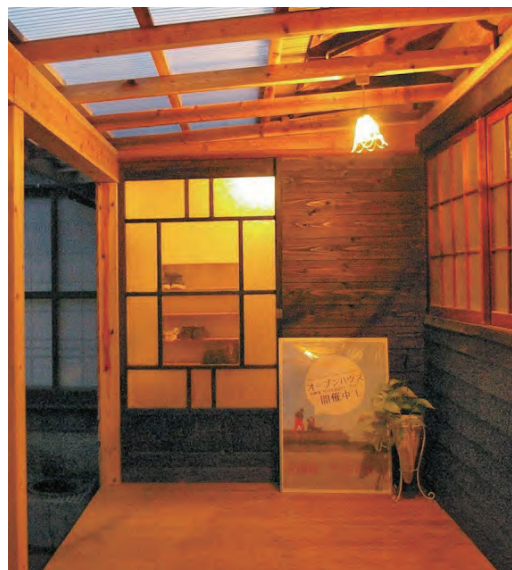
冬の寒さが厳しい時期の改修工事だったが、地域の方に助けをいただきながら、約4ヶ月で竣工を迎えることができた。

第四弾 「Farm Share House篠原」

用途：シェアハウス
施工期間：2013.9～
2013.12
所在地：糸島市篠原東

■概要

Farm Share House篠原は、築60年の古民家を改装した「菜園付きシェアハウス」で、糸島市の篠原東（しのわらひがし）に位置する。当敷地は、小中学校も近接している住宅街にある、地元住民やいろんな方々を巻き込んだの活動や情報を発信していくことに適した場所である。こうして当初の目的であった多様な学生居住環境の一つのかたちを提供し、学生を含む若年層が農業に対して関心を持てる機会を創出する場を作り出している。新しく生成された空間に対して、「居住スペース」「イベントスペース」「菜園」とゾーニングをし、南東側を賑わいの核とすることで、“農”を通じた人々の交流や活動が生まれる、また各要素が相互に関わりあっていくことを狙っている。



■設計プロセス

改修前の FSH 篠原は一般的な木造住宅であった。元々あった天井や壁を取り払い、玄関部分（写真左上）は梁の見える広くて開放的なダイニングキッチンに（写真右上）、物置だった家の外の北側にあたる部分（写真左下）は廊下を設けて玄関へのアプローチに生まれ変わった。

天井は第一弾物件の糸家と同様に小屋組みを表し、床は杉の無垢材を使用した。壁は漆喰仕上げとし、温かみのある空間を演出した。壁は漆喰と白塗料を用い白色で統一している。



■施工

初秋から始まった改修工事。まずは構造部だけを残して壁や天井などを取り払い、外壁と構造体以外何も無くなったところから、天井・フローリング・壁張り、漆喰塗り、部材ペイントと、地元住民らを巻き込んだWS等を行いながら少しずつ完成を目指した。元々あったキッチンの代わりに、新たに対面式のアイランドキッチンも導入した（写真右上）。

天井張りや外壁塗りの期間は足場を組んだ上で行うことが多く、特に天井張りでは、間近で構造を見て触ることができるという、とても貴重な体験となった。



報道にみる伊都キャンパスづくり + 空き家プロジェクト

20150312

坂井 猛

大学広報

No.750

平成 3 年 11 月 6 日発行
(編集)
九州大学広報委員会

大 学 広 報 (No. 750)

学長退任にあたって

九州大学長 高橋 良平



昭和61年11月7日、田中健蔵前学長の後を受けて、正式に学長室の椅子に座らせていただいた時、大きな部屋の中に落す己の影の小ささと、大物学長の重さにたえた2人用かと思われる椅子の大きさに圧倒されて、“俺でもやれるのかな”と一瞬強い不安がよぎったことを今改めて思い起している。早いものであれから5年、あっという間の任期であった。大方の皆さんからは、“御苦労さんでした。大変なお仕事でしたでしょう”と労いの言葉をいただくのであるが、“あつと言う間”と前記した様に、毎日楽しく、気ぜわしく走り廻った記憶だけしか残っていない。猪突猛進の性は年を経ても弱まるどころか篤じる一方で、部局長、評議員の先生方をずいぶんと不安がらせたと思うし、特に、歴代の事務局長を始め本部職員各位を大いに悩ませたに違いない。改めてこれらの方々へ心からのお礼とお詫びを申し上げたい思いである。また、多くの学生諸君や全学の教職員各位とは七次戦を始め数々の行事を通して親しく対話する機会をもたせていただき、楽しい思い出を残させていただいた。これらは何れも忘れ難い思い出である。

やれA日程だ！いや分離・分割だ！と罵声をあげ、机を叩いた大学入試は、学長就任以来最も胸の痛み問題であったが、経時のヴェールがかかると強いスイッチな路に変わるらしく、学長就任の途端に始まり、まる3年間続いた入試の苦労もやはり懐かしい思い出の一つになってしまった。

国大協がようやく本来の活動を始められるようになったのは、この分離・分割がどうやら軌道にのった年からである。

入試ボケ(?)から醒めて国内外を眺め廻すと、国立大学の施設・設備は話に

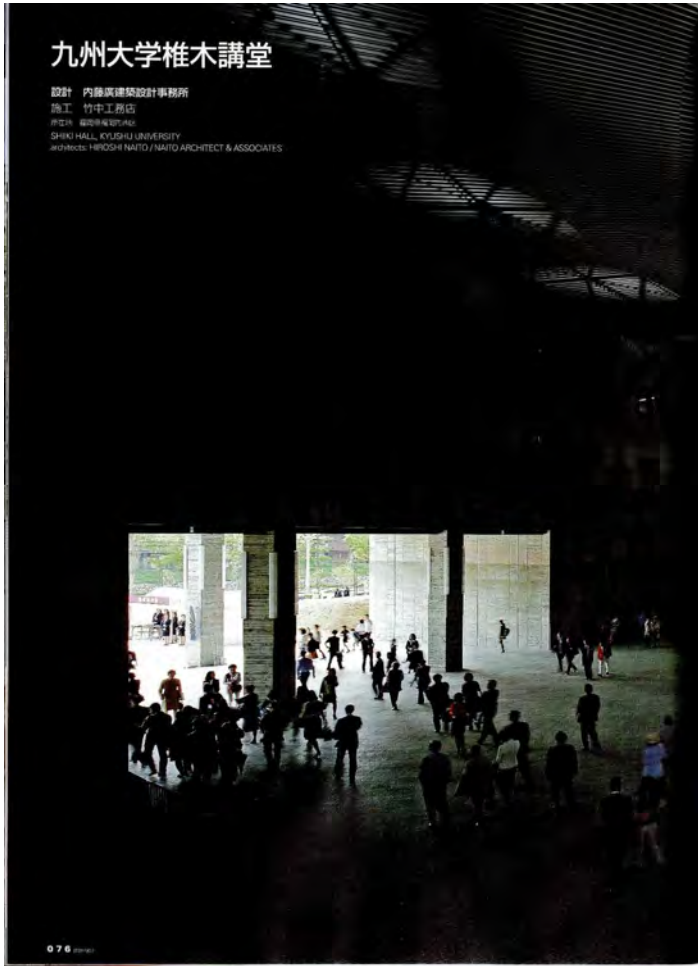
ならぬ程老朽化している事を思い知らされ、“国立大学の危機”をいかに声高に主張するようになった。そこで、“授業料値上げ反対、入学科、入試検定料値上げ反対”などとむなしい陳情の繰り返しを続けてきた国大協第6常置委員会は、科学研究費の配分をうけて文教予算の基盤調査を行いながら国立大学特別会計予算枠拡大のための提案を模索中である。近々最終報告を出す予定であるが、調査結果の中間報告を記者会見で発表したところ、多大の反響を呼んで今なお施設・設備の老朽化をキャンペーンしていただいていることは、第6常置の責任者として深く感謝している。

ところで、施設・設備の老朽化よりも更に根強い本学のキャンパス問題は歴代学長の苦労してこられた懸案であったが、今回、全学各位の御理解をえてようやく“移転”への全学意志統一をはかることができ、21世紀の九州大学の構想の第一歩が踏み出されるようになった。文部省との協議、福岡市、地元との交渉など、なおクリアしなければならぬ高いハードルは幾つもあって、意志統一ができたからといって、そう簡単に進む移転ダイメーションとは思わない。然し、九州のリード校、アジアの拠点大学としての九大の責任はきわめて重いものであり、21世紀の大学院大学として備えておかなければならぬあらゆるソフト・ハードをもつためには広い新しいキャンパスが必要なのである。そして、このキャンパスを手に入れるチャンスは今をおいてはないと確信している。幸い九大創立80周年記念事業の募金も学内外各位の御支援、御尽力によってようやく軌道にのり出したが、これも新キャンパス構想の中で大きな役割を果たすに違いない。

さて、あれや、これやと盛りだくさんに画いた夢も、振り返ってみると、何れも未熟で、荒削りの未完成ばかりに終わり、心中忸怩たる思いである。然し、幸いなことに、私よりも何倍も能力があり且つ遠謀、深慮にたけた和田先生が名前も新たに総長として登板された。荒削りの私のデッサンを補正し、且事な九州大学像を完成されるに違いない。

新総長の御活躍と九州大学の一層の発展を願ひ、また各位への感謝を再度申し上げ、御健勝を願って退官の言葉と致したい。

グリュック・アーフ!!!



九州大学椎木講堂 (本文76頁)

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk1407_map

所在地 福岡県福岡市西区元岡744 九州大学伊都キャンパス構内

主要用途 大学
 建主 国立大学法人九州大学

設計 内藤廣建築設計事務所
 担当/内藤廣 神林哲也 古野洋美
 原章史* 小坂泉 増崎陽介 清野孝子*
 有木陽一* 時田海士郎* (*元所員)

構造 川口衛構造設計事務所
 担当/川口衛 阿藤有士 松井稔
 岸本貴博

設備 森村設計
 担当/林達也 湯澤健

建築音響・舞台音響 唐澤誠建築音響設計事務所
 担当/唐澤誠 鎌倉貴志

音響設計協力 竹中技術研究所
 担当/日高孝之 中川武彦

舞台設備 シアターワークショップ
 担当/伊東正示 松木優

サイン・色彩計画指導 九州大学
 担当/佐藤優 (副学長・パブリックスペースWG長・芸術工学研究院教授)

施設計画指導 九州大学
 担当/坂井猛 (本部新キャンパス計画推進室教授)

音響設計指導 九州大学
 担当/尾本章 (芸術工学研究院准教授)

監理 内藤廣建築設計事務所
 担当/内藤廣 神林哲也 古野洋美
 原章史* 小坂泉 増崎陽介 有木陽一*

構造 川口衛構造設計事務所
 担当/川口衛 阿藤有士 松井稔
 岸本貴博

設備 森村設計

担当/林達也 湯澤健
 建築音響・舞台音響 唐澤誠建築音響設計事務所

担当/唐澤誠 鎌倉貴志
 舞台設備 シアターワークショップ

担当/伊東正示 松木優

施工 竹中工務店
 担当/原田敏雄 菊一大輔 中島誠

松葉真一朗 三浦宏行 稲葉直己
 見澤大介 植山文治 中島伸明
 木村康彦

電気・機械 九電工
 担当/渡久地和彦 太田俊明

外構 西部建設
 担当/竹浦太蔵 徳重明敏

舞台 サンケン・エンジニアリング
 担当/林幸夫 林克也

ヤマハサウンドシステム
 担当/座間達也
 松村電機製作所
 担当/楠田秀雄

規模

敷地面積 422,315.88m²
 建築面積 8,013.27m²

延床面積 12,969.77m²

1階 5,722.22m² / 2階 3,593.08m²
 3階 2,382.83m² / 4階 1,271.64m²

建築率 2.28% (許容: 60%)
 容積率 4.86% (許容: 104.97%)

階数 地上4階

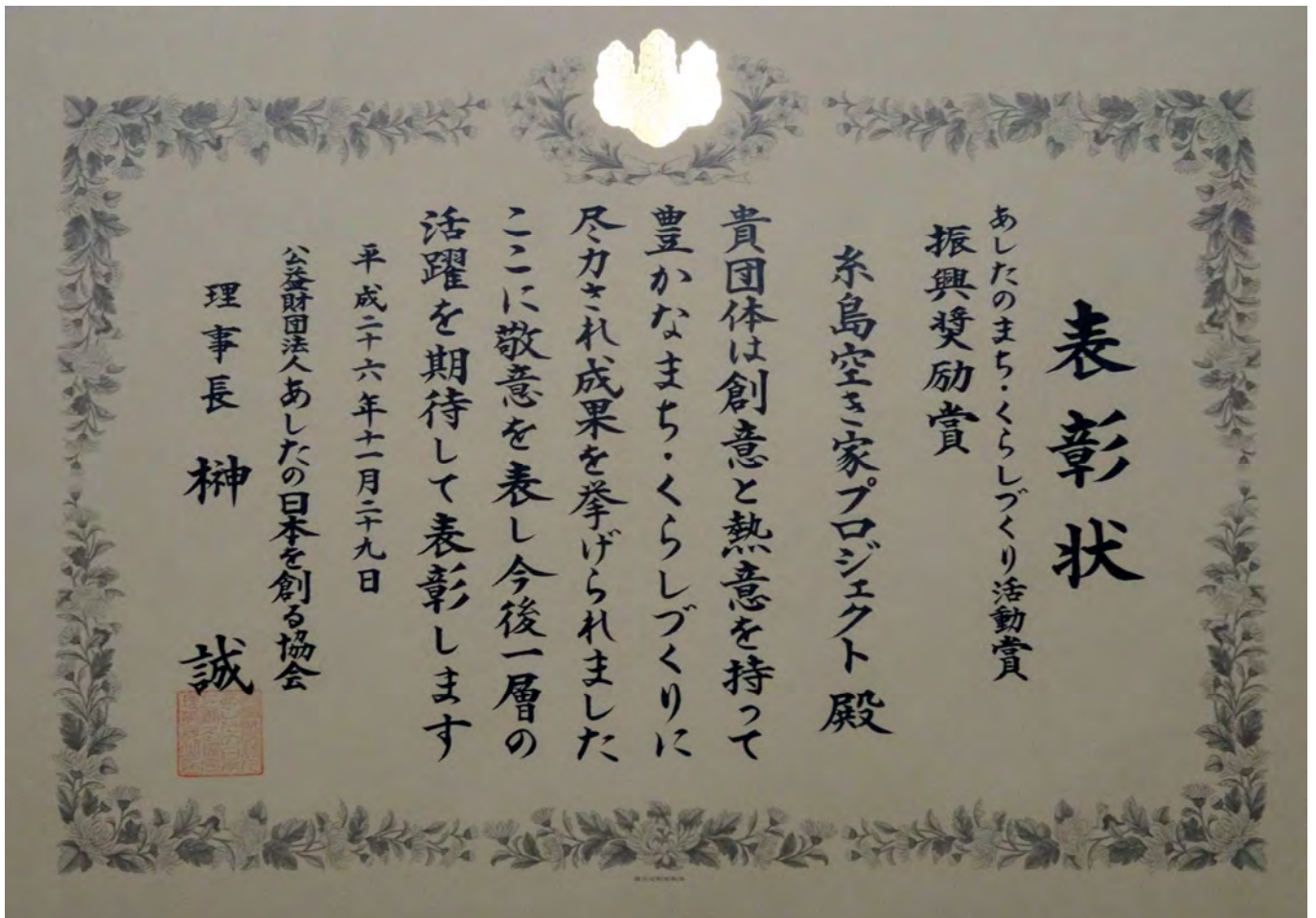
寸法

最高高 20,250mm
 軒高 19,850mm

階高 事務室: 4,000mm 4,700mm
 天井高 事務室: 2,600~3,650mm

主なスパン 6,000mm×12,000mm

敷地条件
 地域地区 第一種住居地域 第一種中高層住居専用地域
 道路幅員 東10m 西36m



持続可能な開発に向けた 建築構造・材料のあり方

山口謙太郎

1. 持続可能な開発 (Sustainable Development) とは

持続可能性 (Sustainability) については、今日、これを取り扱う分野によって様々なとらえ方がなされているが、ここでは地球環境とその開発という視点から、ここで取り上げる定義を明らかにし、認識の共有を図る。

米国フロリダ大学の Charles J. Kibert 教授は、その「持続可能性」について、自身の著書 “SUSTAINABLE CONSTRUCTION” の中で以下のように説明している^[1]。

持続可能性は 1981 年に、環境に関するアメリカの著名な専門家であり、何年間も Worldwatch Institute の長であった Lester Brown によって定義された。彼は “Building a Sustainable Society” の中で、持続可能な社会を「将来の世代の可能性を減らすことなく、そのニーズを満たすことができるもの」と定義している。

その後、1987 年に、当時のノルウェーの首相、Gro Brundtland によって行なわれた委員会では、Lester Brown の定義を利用して、Sustainable Development を「将来の世代がそのニーズを満たす能力を損なうことなく、現在のニーズを満たすこと」と言い表した。

持続可能な開発や持続可能性は「現代人は単に将来の世代から資源や環境を借りているだけ」という世代間の正義と認識のための呼びかけを強く提案している。

持続可能性について議論すると、原始時代のような自然との共生が最も望ましいという意見が出ることもあるが、ここでは先述の Lester Brown や Gro Brundtland によって提案された「現在の世代と将来の世代が共にニーズを満たす」という考え方に基づいて、建築構造や建築材料の分野での取り組みを考える。

2. 持続可能な建築生産に向けた手段

前節で述べた「持続可能な開発」を建築関連分野で遂行していくにあたり、有効な手段にはどのようなものがあるだろうか。一般に、「地球環境に優しい社会」を実現していくために、自然エネルギーの利用や 3R (スリーアール) と呼ばれる活動が有効であることは初等教育や中等教育でも学ぶ。建築生産活動においてもそれらが有効であること

には変わらないが、例えば 3R は「ゴミを減らすための 3 つの取り組み^[2]」などと紹介されることもあるので、ここでは改めて、現在実施や検討が進められている「持続可能な建築生産に向けた手段」をまとめる。

(1) リデュース (Reduce)

「持続可能な建築」を考えると、「減らす」という意味のリデュースは省資源、省エネルギーの観点から非常に重要で優先順位が高く、かつ様々な「減らす取り組み」に幅広く適用されている。代表的なものに以下のような取り組みがある。

- (a) 建築を運用する際の冷暖房等に要するエネルギーを節約できる熱環境・設備計画を行う。
- (b) 建築構造材料や構造部材を高強度化・高靱性化することで部材断面を小さくし、材料の使用量を減らす。
- (c) 建築構造材料や構造部材の耐久性を高めることで建築物の寿命を延ばし、建て替え回数を減らす。
- (d) 建築物の運用期間に応じた適切な補修・改修を計画的に行うことで建築物の寿命を延ばし、建て替え回数を減らす。
- (e) 既存建築物のリノベーションを行ってその必要性を回復させ、建て替え回数を減らす。

建築物のライフサイクルエネルギーやライフサイクルコストを考えると、建築物の運用時に消費するエネルギーや必要なコストは建設時を大きく上回ると言われている。このことから、(a)~(e)の取り組みの中で最優先されているのは(a)であり、前述の「自然エネルギーの利用」などもその中で検討されることが多いが、この(a)は主に建築環境分野で取り込まれる事項であるので、その詳述は他章に譲る。

(a)以外で目立つのは、(c)~(e)に共通する「建築物の建て替え回数を減らす」という取り組みである。これらの取り組みは、数年前までは建築生産活動、特に新築の生産活動の縮小化を指向するものとして歓迎されてこなかった。しかし、近年では、経済の停滞や増大する建築ストック、しかもそれらの躯体(構造体)の多くが必要な耐力や耐久性をまだ有しているという事実などが相まって、ボトムアップのかたちで徐々に重視されてきている。

(2) リユース (Reuse)

現在、アメリカ カトリック大学で助教授をしている Bradley Guy 氏は、本稿著者の山口らと 2008 年にまとめた著書「循環型の建築構造」の中で、建築の Design for Disassembly (DfD) について詳述している^[3]。Design for Disassembly は「解体を考慮した設計」と訳すことができる。建築物を建てる段階から解体するときのことを考え、建築材料のリユースやリサイクルがしやすいように設計することを指す。DfD は、いわゆる「スケルトン・インフィル」を行いやすくすることで建築物の長寿命化にも寄与す

る。同書の中で、Guy 氏は以下のような建築物資源管理目標のヒエラルキー（優先順位）を紹介している。

建築物資源管理目標のヒエラルキー^[4]

- 1) DfD を取り入れた既存建築物の適応性のあるリユース
- 2) 新築建物の適応性と長寿命を実現する DfD
- 3) 組立建材 (building assemblies) のリユース
- 4) 建築用部材 (building components) のリユース
- 5) 建築用部材の再製造
- 6) 建築材料のリユース
- 7) 材料のリサイクル
- 8) 建築物の要素、部材、材料から回収したエネルギーの再利用
- 9) 建築材料の生物分解
- 10) 資源やエネルギーの将来的な回収を前提とした埋め立て確保



写真1 海外の廃棄物集積場（左：米国、右：スリランカ）

このヒエラルキーには 1)以外に「リデュース」の取り組みは含まれていない。1)は既存建築物のリノベーションを行う際に DfD を行うことを意味しており、かなり高度である。ここで注目したいのは 3), 4), 6), 7)あたりで、リユースはリサイクルより優先順位が高い。これはリサイクルが 1 回の循環を行う度に材料の再製造工程を経る必要があるため、3R の優先順位（リデュース、リユース、リサイクル）とも一致している。また、1), 3), 4), 6)の順序から、一度組み立てたものをなるべく解体せずにリユースできるほうがより望ましいといえる。

とはいえ、現在、日本において実際に建築材料やそれを組み立てたものをそのままリユースすることはかなり難しく、仮設建築物以外で建築材料のリユースを推進するには、さまざまな工夫や配慮が必要である。

(3) リサイクル (Recycle)

先述の建築物資源管理目標のヒエラルキーにおいて、材料のリサイクルの優先順位は 7)とあまり高くないが、比較的取り組みやすいことも事実であり、今日さまざまな建築材料がリサイクルによって作られたり、次の用途に使われたりしている。例えば、建築物の解体で得られた木材はチップ化され、パーティクルボードなどにリサイクルされる。また、鋼材をスクラップ化して電気炉で溶解し、新たな鋼材等を製造する鉄のリサイクルはかなり以前から行われており、その技術も成熟して

いる。

前項のリユースや本項のリサイクルは「持続可能な開発」を遂行する上で有効な「資源循環」のための技術として、国内外で推進されている。また、先述のヒエラルキーの 8)はサーマルリサイクル、サーマルリカバリー、熱回収、バイオマス熱利用などと言われるものに相当する。同ヒエラルキーの 9)は自然界へのリターンサイクルとして、優先順位は低いが「資源循環」に寄与するものである。なお、同ヒエラルキーの 10)のように、多くの国では廃棄物は可燃物でも焼却ではなく集積場（写真 1）に埋め立てて処理されることが一般的である。

3. 持続可能な建築生産に向けたいくつかの対応

持続可能な建築生産に寄与する建築物の総合的な環境性能評価手法として、日本では CASBEE (Comprehensive Assessment System for Built Environment Efficiency) が開発・提案され、開発後も継続的にメンテナンスが行われている^[5]。米国では U.S. Green Building Council が運営する LEED (Leadership in Energy & Environmental Design) が普及している^[6]。LEED には、2014 年現在、

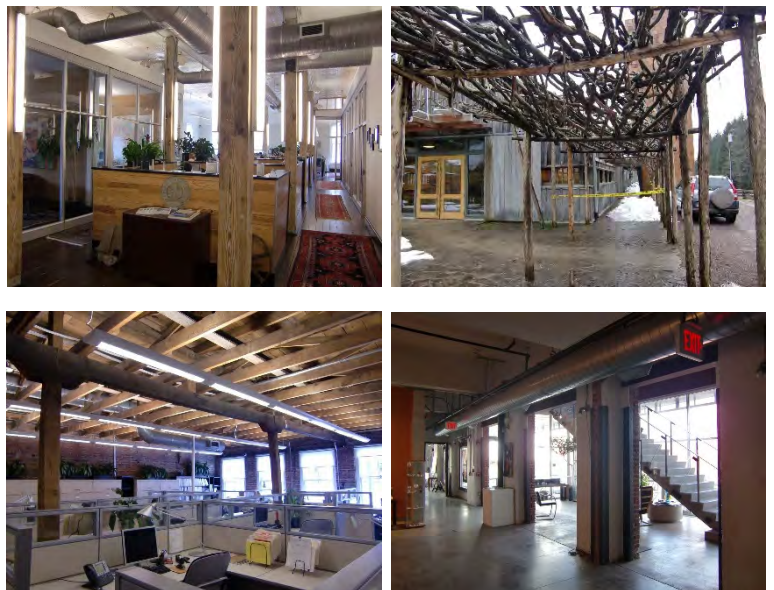


写真2 LEED の認証を受けた事例（米国）

Building Design and Construction / 建築設計および建設(BD+C)、Interior Design and Construction / インテリア設計および建設(ID+C)、Building Operations and Maintenance / 既存ビルの運用とメンテナンス(O+M)、Neighborhood Development / 近隣開発(ND)、Homes / ホームの5種類の認証システムがある^[7]。2000年から2013年までにLEED for Homesを除いて世界で19,000件以上がLEEDの認証を受けており(写真2)、日本でLEED認証を受けた建築物も徐々に増えつつある^[8]。

4. 現時点での課題、取り組みと今後の展望

前節までに述べてきたように、近年、日本国内でも持続可能な開発に有効な建築構造、材料、生産が以前より明確に指向されるようになり、さまざまな取り組みが盛んになりつつある。

3Rで最も優先されるリデュースの取り組みでは、近年はリノベーションへの関心が高い。リノベーションは程度がさまざまで、耐震補強を含む大規模な改修を行って、確認申請を行い、新築と同等の法的権利を取得するものを、首都大学東京特任教授で建築家の青木茂氏は「リファイニング建築」と呼んでいる^[9]。青木氏は団地等のリファイニングで多くの実績と知見を有している。

一般的なリノベーションは、前述のリファイニングほどの明確な定義はないが、例えば集合住宅で間取りの変更を伴うような比較的大規模な改修を指すことが多い^[10]。また、用途の変更が伴うようなリノベーションはコンバージョンと言われることがある。一方、室内の壁、床、キッチンなどの比較的小規模な改修工事はリフォームと呼ばれる。加えて、近年、不動産業界では建築に設備や什器備品、家具などが付いたままで売買または賃貸借される物件が増加している。これらは「居抜き」と呼ばれ^[11]、例えば飲食店などでは居抜きにより最小限の改修で次の利用者による運用が可能になっている。

また、あまり大規模でないリノベーションやリフォームは、専門性の高い工事のみを大工などの専門家に依頼し、その指導や助言を受けながら使用者自身がいわゆるDIYで工事を行うことも増えつつある。愛好者たちはSNSなどで情報を共有しながら活動し、全国各地でDIYやリノベーションのワークショップなども行われている。イラストレーターのアラタ・クールハンド氏は米軍ハウスや戦後の文化住宅を自らリノベーションして住んだり、カフェに再生したりしながら、その魅力を数編の著書に表現している^[12]。また、九州大学の学生サークル「糸島空き家プロジェクト」



写真3 糸島空き家プロジェクトの改修事例



写真4 建築物の解体と解体材の金物撤去作業（米国 HfH）

は、福岡県の糸島地区に存在する空き家をDIYでリノベーションし、学生シェアハウスや古民家カフェ等へと再生している(写真3)^[13]。

このような活動はリデュースだけでなく、リユースの取り組みとしても非常に有意義である。2節で述べた著書「循環型の建築構造」の中で、国際NGOのHabitat for Humanity(HfH)が米国ノースカロライナ州の支部での活動において、建築物の解体で回収された建築材料を一般の人に販売し、低所得者の住宅を建設する活動の資金にしていることを紹介した(写真4、写真5)^[3]。米国には日本の寄付金控除に似た寄付控除制度があり、非営利団体へ現金、建材、奉仕事業、製品を寄付すると控除の対象となる。そのため、

解体する建築物をHabitat for Humanityに寄付すると、建材を寄付したものととして税控除の対象になる。このことは寄付を行う側の助けに

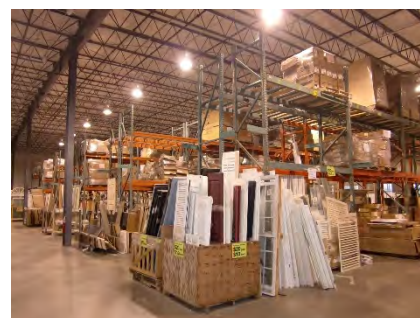


写真5 HfH of Wake Countyの解体建材販売所（米国）

なっている。

また、米国で木造といえば枠組壁工法（2×4工法）が主流であるが、2×4工法に用いられる木材は規格化されているため、部材の寸法にばらつきが少なく、再利用に適している。加えて、米国では若い世代が住宅を購入する際に、資金が十分でないことから古い戸建住宅を購入し、週末毎にDIYでリノベーションやリフォームを



写真6 自宅や別棟のDIYによる改修（米国）

少しずつ行って魅力ある住まいに改修していく人が少なくない（写真6）。その住民が転居するときには改修によって住宅の不動産価値が上がっていることもある。また、Habitat for Humanityの住宅建設には現場周辺の住民がボランティアで集まり、趣味感覚で工事に参加している（写真7）。このように米国ではDIYが盛んで、Habitat for Humanityが販売する中古建材は比較的良好に売れ、中古建材市場が活発である。

専門業者に工事を依頼すると、その出来映えを確認する発注者の目は厳しくなりがちだが、自分で改修を行うと仕上がりは実力次第になり、それを想定して使用する材料も実物を見ながら選択できることが多いので、価格を重視して質の妥協点が下がることも珍しくない。このことが、DIYが盛んになると中古建材市場も活発になる一因と考えられる。

図1は築49年~74年の3棟の建築物の解体で発生した木材について、平面が出るまでその1面を切削した際の切削厚さと、切削前後の色差を測定した結果である^[14]。切削加工前後の木材の表面を併せて写真8に示す。色差とは明度のL*軸と色相のa*軸、b*軸を持つ3次元色空間上の移動距離で、色の違いを表す。色差 ΔE^* が13~25を超えると別の色名のイメージになるといわれている^[15]。図1より、木材は表面から5mm程度切削するうちに色味が大きく変わり、写真8に見られる新材のような表面が現れる。同研究^[14]では解体材から抽出した無欠点試験体の曲げ試験や圧縮試験を行い、ほとんどの試験体の強度が無等級材の基準強度を上回った。

筆者らはこれらの研究成果を受けて、建築解体材のリユースによる木造耐震要素などの開発研究を行っている。2節の(3)で述べたように、建築解体材をチップ化し、ボード等に再生するリサイクルは実用化されているが、筆者らは木材を必要以上に細かく裁断せず、自然が育んだ木材の強い組織を活かす再利用法の提案を目指している。解体で得られる材の断面寸法や長さ、腐食や欠損の除去、使用時に受けていた応力などを考慮してまとめた「解体材をカスケード利用するときの流れ」を図2に示す^[16]。カスケードは多段階的に流れ落ちる小さな滝を意味する言葉で、無理して同じ用途でリサイクルするのではなく、用途を変えながら可能なリユースやリサイクルを行うことをカスケード利用と呼んでいる。また、筆者らは解体材を筋交いや中間材

にカスケード利用して構成する筋交い架構の開発研究を行っており^[17]、写真9はその水平載荷実験の状況を示している。建築解体材には、ほぞ穴・ボルト穴・釘穴等が存在し、外力・乾燥による変形や、腐朽・虫害による欠陥部等の存在が想定される。解体材を再利用する場合、そのような欠陥を除去しながら製材すると、長さ



写真7 ボランティア参加型の住宅建設工事（米国 HfH）

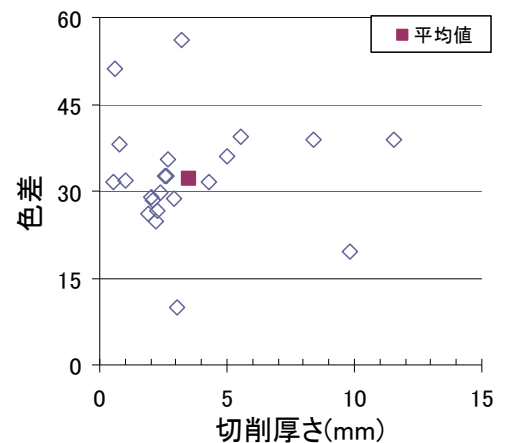


図1 切削厚さと色差の関係

さが短く、断面が小さい材となる。そのような寸法の小さい材を有効利用する方法として、写真9のような筋交い架構を検討・開発している。

建築解体材の再利用を推進するには、利用者の意識改革と材の加工・供給体制の構築が不可欠である。前者には「中古材は汚いから避けたい」という意識（先述のアラタ・クールハンド氏はこれをストコーマという心理学用語で説明



写真8 切削加工前後の木材表面（上：加工前、下：加工後）

していた)の転換と、本当に材料として強度や耐久性に問題がないかを示して安心を得る試験方法の開発が必要である。後者には、現在、建築用木材の流通の軸となっているプレカット工場が、解体材には釘などの金物が材の中に残存している可能性があるため、加工を引き受けてくれないという問題がある。これを解決するには残存する金物を確実に見つける検査方法の開発が欠かせない。

Sustainable Development は「持続可能な発展」と訳されることも少なくない。持続可能な発展に向けて建築構造や建築材料の分野で取り組めることは、本章で取り上げたもの以外にも沢山ある。例えば 2 節の(1)の(d)には建築物の耐震診断や耐震改修を行うことも含まれるが、それらは近年、日本国内において、学校建築などを中心に盛んに実施され、膨大な知見が集積している。今や、建築の計画、環境のみならず、構造、材料、生産に関する職業に就く場合も地球環境負荷や持続可能性への配慮は欠かせない。次世代をリードする本稿の読者には、継続的な情報収集と的

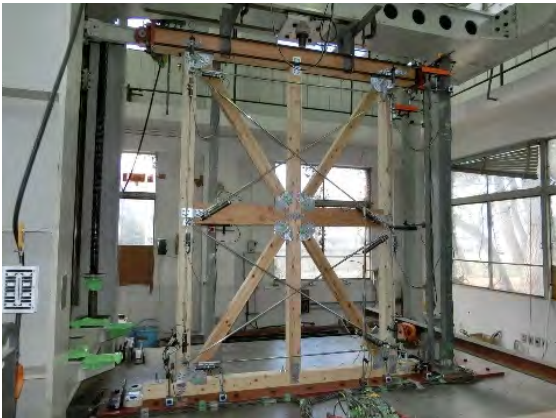


写真 9 解体材を筋交い等に再利用できる架構の水平載荷実験

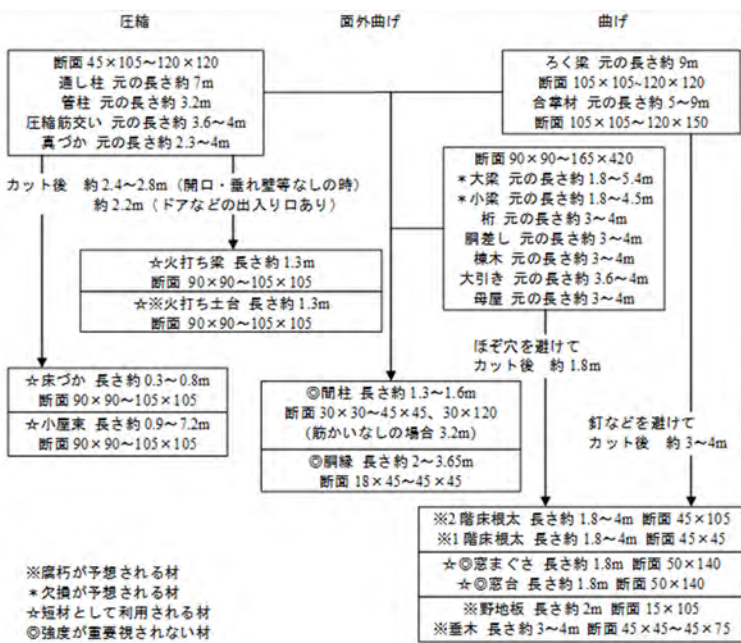


図 2 解体材をカスケード利用するときの流れ(提案)

確な状況判断を行う能力を研いていくことが期待されている。

参考文献

[1] Charles J. Kibert: Sustainable Construction: Green Building Design and Delivery, John Wiley & Sons, 2005
 [2] 学研教育出版：環境なぜなぜ 110 番, <http://kids.gakken.co.jp/kagaku/eco110/answer/a0119.html>
 [3] 山口謙太郎, 川瀬 博, Bradley Guy: 循環型の建築構造 - 凌震構造のすすめ -, 技報堂出版, 2008 年
 [4] Morgan, C., and Stevenson, F.: Design and Detailing for Deconstruction - SEDA Design Guides for Scotland: No. 1, Edinburgh, Scotland: Scottish Ecological Design Association (SEDA), 2005
 [5] 建築環境・省エネルギー機構：CASBEE 建築環境総合性能評価システム, <http://www.ibec.or.jp/CASBEE/index.htm>
 [6] U.S. Green Building Council: LEED, <http://www.usgbc.org/leed>
 [7] グリーンビルディングジャパン：LEED 認証システム, <http://www.gbj.or.jp/leed/ratingsystems/>
 [8] 大林組：技術研究所本館テクノステーションが LEED-EBOM のプラチナ認証を国内最高得点で取得, 2013 年, http://www.obayashi.co.jp/press/news20131030_01
 [9] 青木 茂：住む人のための建てもの再生 - 集合住宅 / 団地をよみがえらせる, 総合資格, 2012 年
 [10] OKUTA：リノベーションとリフォームの違い, <http://www.okuta.com/renovation/difference.html>
 [11] HOME'S：不動産用語集, <http://www.homes.co.jp/words/a2/525001379/>
 [12] アラタ・クールハンド：FLAT HOUSE LIFE, 中央公論新社, 2009 年
 [13] 糸島空家プロジェクト：<https://ja-jp.facebook.com/itoyaproject>
 [14] 山口謙太郎, 小山智幸, 田中隼斗：一般的な木造建築の建設・改修・解体で生じる環境負荷の低減に向けた基礎的研究 その 1 築 49 年~74 年の木造建築物の解体で発生した木材の劣化状況調査, 日本建築学会大会学術講演梗概集, C-1, pp.279-280, 2011 年
 [15] 日本電色工業：色の許容差の事例, https://www.nippondenshoku.co.jp/web/japanese/colorstory/08_allowance_by_color.htm
 [16] 山口謙太郎, 小山智幸：一般的木造建築の長寿命化と材料再利用による環境負荷の低減に向けた基礎的研究 その 1 築 50 年を超える教会堂建築の構造解析と材料のカスケード利用に関する検討, 日本建築学会九州支部研究報告, 第 51 号・1, pp.625-628, 2012 年
 [17] 桑田将弘, 山口謙太郎, 小山智幸, 川瀬 博, 吉田雅穂：建築解体材の再利用を想定した木造耐震要素の開発に関する研究 その 1 K 型筋交いを対称に挿入した木造軸組の面内水平載荷実験, 日本建築学会大会学術講演梗概集, C-1, pp.93-94, 2014 年

2014年度 人間環境学府ファカルティカップリング
2015年3月12日 合同ゼミ

木造建築の改修と有効利用に関する 現状と今後のあり方を考える

空き家の改修に関する取り組みを中心に

参加予定者

公共空間計画学研究室

| | |
|-------|----------------|
| 坂井 猛 | 教授 |
| 森 直子 | 都市共生デザイン専攻修士2年 |
| 高橋 昂平 | 建築学科4年 |
| 金 星民 | 日本経済大学4年 |

循環建築構造学研究室

| | |
|---------------|------------------|
| 山口 謙太郎 | 准教授 |
| 崔 星 | 空間システム専攻修士2年 |
| 吉永 哲大 | 空間システム専攻修士2年 |
| 緒方 智 | 空間システム専攻修士1年 |
| 桑田 将弘 | 空間システム専攻修士1年 |
| 村上 公志 | 空間システム専攻修士1年 |
| 神里 侑志 | 建築学科4年 |
| Yana Kancheva | 特別聴講学生 (AUSMIP+) |

糸島空き家プロジェクト

| | |
|--------|--------------|
| 山田 泰輝 | 空間システム専攻修士2年 |
| 境 祥平 | 空間システム専攻修士2年 |
| 深澤 尚仁 | 空間システム専攻修士1年 |
| 森 隆太 | 建築学科4年 |
| 土井谷 亮 | 建築学科4年 |
| 遠藤 由貴 | 建築学科3年 |
| 青柳 光 | 建築学科3年 |
| 藪井 翔太郎 | 建築学科3年 |
| 北村 晃一 | 建築学科3年 |
| 春山 詩菜 | 建築学科2年 |
| 福本 七海 | 建築学科2年 |
| 中村 勇介 | 建築学科1年 |
| 東 大貴 | 建築学科1年 |
| 田中 文城 | 建築学科1年 |
| 崎元 誠 | 建築学科1年 |
| 金井 里佳 | 建築学科1年 |
| 廣澤 舞諭 | 建築学科1年 |

ゲスト

| | |
|------------|----------|
| アラタ・クールハンド | イラストレーター |
| 大塚 けんじ | 千建築設計 |



4. シンポジウム

人環シンポジウム 2011 学際的展開とコーディネータの取組

2011年3月23日(水) 10:00-15:30 九州大学箱崎文系キャンパス中講義室

出席者：64名

司会 山口謙太郎(空間システム専攻)

◇学府長挨拶 10:00-10:05

河野昭彦(空間システム専攻)

人間環境学府と、学際的取組の重要性の解説が行われました。

◇教育の質向上支援プログラム(EEP)紹介 10:05-10:20

光藤宏行(行動システム専攻)

2009年度より発足したEEPの概要、コーディネータ委員会の運営や多分野連携プログラムの実施といった学際企画室を含めた活動の実際についての説明が行われました。

◇多分野連携プログラム成果報告 10:20-12:00

人間諸科学における『進化心理学』の位置

浜本 満(人間共生システム専攻)

進化心理学をテーマとして各担当教員が授業を連携させたこと、また外部からも講師を招いて研究会を開催したことが報告されました。また、授業を連携させることのメリットデメリットについての考察が述べられました。

人間環境学実践知の構築

野々村淑子(教育システム専攻)

関連教員および学生が福祉社会学会に参加し、レポートをまとめ、さらにレポートについて討論するという活動を行ったことが報告されました。プログラム全体としての反省と成果についても述べられました。

建築災害と生理・心理

小山智幸(空間システム専攻)

プログラムのテーマのどの部分に各担当教員がどのように関わっているかの紹介が行われました。また、博多駅の建築現場の見学、日本建築学会との合同シンポジウムが行われたことも報告されました。

人環の叡智で学校の危機を管理する

元兼正浩(教育システム専攻)

コーディネータ教員(元兼)の授業において交替で各分野のゲストスピーカー教員が講義を行い、その都度レポートがまとめられた実践の状況が、プログラム終了後に作成された報告書に沿って紹介されました。

異分野交流・学際教育研究の促進される大学キャンパス

佐々木玲仁(実践臨床心理学専攻)

「庭」にテーマをしばり、各担当教員の授業でブレインストーミングを行ってアイデアを集めたこと、実際に文系キャンパス中庭を使用して「学際コネクティブミーティング」を実験的に開催したことが報告されました。

◇萌芽的学際研究助成成果報告 13:30-14:00

学際教育研究の社会への還元に関する最新動向に関する研究

Jeffrey Gayman(教育システム専攻)

海外の文献より、学際的定義、学際的研究のプロセス、学際的学習のモデル等が紹介されました。また、学際教育研究の社会への還元に関しての、アメリカの大学への訪問調査や電話での聞き取り調査、および国内の学際的研究への助成を行っている団体等への訪問調査の報告が行われました。

◇人間環境学府同窓会連携企画

人環の学際性を考える ―在校生の視点・修了生の視点― 14:00-15:30

司会 田上哲(教育システム専攻)

2010 年度人間環境学コロキウムの報告

小牧誉和(人間共生システム専攻)

コロキウム第一部「人間環境学×フィールドワーク ―「人間環境学」を歩く、発見する、映し出す―」の概要の報告が行われました。また、その経験を通して学んだこと、および学際についての考察も述べられました。

原田進也(行動システム専攻)

コロキウム第二部「人間環境学のこれまでと、これから」の概要の報告が行われました。また、その経験を通して得られた、学際への新しいアプローチのありかたの案が提示されました。

領域横断の協同はいつどのように始まるか

富田英司(愛媛大学教育学部講師)

「協同」や「ディスカッション」に関する研究テーマを扱ってきた経験、協同研究を行った経験のお話から始めて、協同がはじまるきっかけの類型や、研究が成功するための公式などが提示されました。また、学際についてのご自身の見解も述べられました。

人間環境学という教育環境からの学びとその応用

西田順一(群馬大学教育学部准教授)

人間環境学府でどのようなことを学んだか、現在それがどのように活きているか、将来どのように活かされると思うかということについて、ご自身の学際的な経験を軸にして述べられました。人環の学生のスタンスはどうあるべきかというご意見も提示されました。

森鷗外研究に人環的視点

出口 隆(同窓会会長・元北九州市助役)

森鷗外が北九州の文学的風土に及ぼした影響について述べられました。また、森鷗外の小倉での住居について、従来の調査手法ではなく人環的視点を取り入れ、古地図等を比較検討して調査を行ったところ、従来の知見をくつがえす結果を得たというご自身の経験が紹介されました。



人間環境学府 学際シンポジウム 2013

2013年3月19日 13:00-17:30 九州大学箱崎キャンパス国際ホール

出席者：40名

◇人間環境学府における学際的取組の紹介 13:00-14:00

司会：古賀聡（人間共生システム専攻）

***学府長挨拶**

箱田裕司（行動システム専攻）

本シンポジウム開催の意義について述べました。

***翻訳書籍「学際研究」紹介**

光藤宏行（行動システム専攻）

人間環境学府コーディネータ委員会主導で翻訳した書籍「学際研究」（レプロ著・九州大学出版会）について、翻訳の経緯や内容の特色、2013年度から教科書として採用されることなどを紹介しました。

***「人間環境学リファレンス」紹介**

山口謙太郎（空間システム専攻）

人間環境学府の教員プロフィール集である冊子「人間環境学リファレンス」について、学生の取材によってほとんどの部分が作成されたことや教員をマトリクス上に配置して研究の特色を示したことなどを説明しました。

***多分野連携プログラム活動報告**

子どもの育ちを支える協同関係の構築に向けて

田北雅裕（教育学部門）

プログラムのメンバーが話題提供をしたり、外部の実践家の方を招いたりという形で研究会や講演会を行ってきたことを報告しました。

建築災害と生理・心理

清家規（都市共生デザイン専攻）

工学院大学から村上先生を招いて講演会を開いたことを報告しました。また、工学院大学を中心とした取組について紹介しました。

子どもや地域を犯罪から守るための異分野連携研究

有馬隆文（都市共生デザイン専攻）

プログラムメンバーや院生の研究紹介という形での勉強会、外部講師を招いての講演会などを開いたことを報告しました。

学校トイレで多分野連携アプローチの可能性をさぐる

波多江俊介（教育システム専攻・院生）

学校のトイレ研究会から講師を招いての講演会を行ったことを報告しました。また、小学校での実地調査を行ったことやその内容について説明しました。

異分野交流・学際教育研究の促進される大学キャンパス

佐々木玲仁（実践臨床心理学専攻）

「中庭プロジェクト」を実施したこと、伊都キャンパスを題材とした研究会などを実施したことを報告しました。

◇教えるということ：その起源を考える 14:00-17:30

企画・司会：橋彌和秀（行動システム専攻）

※多分野連携プログラム人間諸科学における『進化心理学』の位置の一環としての開催

*講演

教示行動の進化的位置づけ

安藤寿康先生（慶應大学文学部）

教育による学習は、個体学習、模倣学習につづく第三の学習方略として進化的に出現したものであるという *Homo educans* 仮説を紹介され、その進化上の妥当性や意味合いなどについてご自身の研究をもとに考察を述べられました。

「教育」の歴史的起源

野々村淑子（九州大学大学院人間環境学研究院）

普遍的とされがちな「教育」という概念、価値観、言葉を歴史的な文脈の中で捉えることで、その独立主題化と人間化の過程から、教育にとっての西欧近代的価値観を再考し、「教育」なるものへのとらわれから私たちを解放する視点を提示しました。

グイ／ガナにおける環境知識の伝達と生成

高田明先生（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

南部アフリカの狩猟採集民グイ／ガナを対象としたご自身のフィールドワークの内容を紹介することで、自然や文化と関連する知識が生成され伝達されるメカニズムについての示唆を述べられました。

チンパンジーからみる教育と文化の起源

山本真也先生（京都大学霊長類研究所）


霊長類で観察されるチンパンジーの模倣行動、教示行動の例を示すことで、チンパンジーの情報伝達の特徴を概観され、それらが文化の起源とどのようなつながりを持ち得るかについての考察を示されました。

*コメント

藤田雄飛（九州大学大学院人間環境学研究院）

専門である教育哲学と上記各講演とを結びつけた感想を述べた後、知識の累積および一般化についてどう考えるべきかという問いを提示しました。



九州大学  大学院人間環境学府 学際シンポジウム 2014

教育・福祉・コミュニティー： 「若者」からせめぎあうその境界を考える



排除と格差の只中に揺れる若者の現在。彼らに寄り添うユースワークの実践と理論を日・英・北欧にまたがってみつめるところから、「教育」の新たな領域を開拓しようとしている平塚眞樹さん。

一方路上生活支援の現場では昨今、当事者が若者層へ確実に広がりを見せ、福祉現場から「教育」そして「地域」への深いまなざしが生まれつつあります。当問題随一の論者、奥田知志さんは「生活困窮問題は、若者の問題」とも指摘します。

このように「若者の現在」を焦点に「教育」「福祉」の双方からおこる交錯の動きは、「コミュニティー」像の再構築にむかうところにおいても共通しています。お二人の講演と議論から「教育」「福祉」「コミュニティー」の境界上に何が生まれようとしているのか考えていきたいと思います。

平塚眞樹氏

(法政大学教授)

×

奥田知志氏

(NPO法人北九州

ホームレス支援機構
理事長)

協賛：九州大学大学院人間環境学府
同窓会

13:30～ 平塚眞樹氏講演

「ユースワークから教育学の外延を拓くー教育・福祉・コミュニティー」

14:30～ 奥田知志氏講演

「若年生活困窮者に対する伴走型支援とは」

15:40～16:30 トーク&議論

「教育・福祉・コミュニティーの交錯点をめぐって」

申し込み・問い合わせ：

会場の関係上、ご希望の方は事前にメールでお申し込みください。

oka.sachie.094@m.kyushu-u.ac.jp
(担当岡/教育学部門)

2014年2月21日 13:30～16:30

九州大学文・教・人環研究棟2号館会議室(2F)

(箱崎キャンパス文系地区・心理棟並びのプレハブ棟)

編集後記

当学府の学際研究・教育コーディネータ委員会が2009年に発足して以来6年が経ちました。その間、いろいろな取組を策定し実施して参りました。発足期の取組内容は、『学際白書2009—コーディネータ取組の記録—』（九州大学大学院人間環境学府学際企画室2009）として発行されました。2010年から2014年までの5年間の取組内容は本報告書をもって、皆様の目に届くよう編纂いたしました。

前書きに記しましたように、本電子報告書は、これまで実施してきた主な4つの取組ごとに章分けし、掲載しております。どの章の内容も読み物として興味を持っていただけるものになっていると思います。

「多分野連携プログラム」についての章にありますように、専攻を超えて教員が集まった各プログラムは、未踏の研究領域を探検することに主眼を置いており、新しい学問分野に取り組み、新たな研究を試みております。このために、他大学、他機構から講師を招いて研究会を開催したり、院生中心の研究発表会を催したりいたしました。本取組は、まさに学際的な取組であり、新しい教育体制の試みといえましょう。

そして、「マンスリー学際サロン」では、ご覧の通り、本学府の担当教員が各自の研究を披露しております。この取組が、本学府の教員が互いの研究を知る貴重な機会となりました。教員同士の意見交換なども活発に行われており、互いの研究に新たな課題を展開するきっかけになったこともあるかと思われます。

以上の取り組みと比べると、「ファカルティ・カップリング」は新しい取組であり、これまでの取組のさらなる展開を示すものでもありました。受講院生らの感想を読んでいたくと分かるように、異なる分野の授業に参加したことで、自身の研究に刺激をもらったという声が多く寄せられております。この取組も単なる交流にとどまることなく、まさに院生に学際的な研究へのきっかけをもたらす試みでありました。

シンポジウムも3回開催され、いずれも外部から複数の先生を招いて行われ、参加者から好評を得られました。

これらの取組に関する資料はこれまで学内（<http://www.hes.kyushu-u.ac.jp/~coordinator/working/index.html>）および外部向け（<http://www.hes.kyushu-u.ac.jp/~coordinator/index.html>）のwebページに蓄積されてきました。本電子報告書はそのweb上の資料をもとに編集しました。本書が、教員の皆様のみならず、学生の皆様にも、人間環境学府とその学際性への理解を深めてもらうきっかけとなることを願ってやみません。

学際研究・教育コーディネータ委員会

学際白書 2016

学際研究・教育コーディネータによる取組

編集 九州大学大学院人間環境学府学際企画室

発行 九州大学大学院人間環境学府

2016年2月 発行